Arabah Valley , Jordan

地平線の彼方へ

Life has more imagination than We carry in our dreams.

Bun

ベングリオン空港のエルアル・イスラエル航空 B787

第1章　安全な空の旅？

שתהיה לך טיסה אווירית בטוחה

Israel,Tel Aviv　ישראל, תל אביב　　イスラエル　テルアビブ

第１章　安全な空の旅？

【1】イスラエルの空港にて

常にテロの危険性があるイスラエル･ベングリオン空港

「もう一度、なぜこの国に来たのか話してもらえますか？」

　目つきの厳しい 50 歳ぐらいの男性係官は、真剣な表情で同じ質問を始めた。

「またか････」

　と一瞬思ったが、僕は再度丁寧に説明を始めた・・・。

　ここはイスラエル、ベン・グレオン空港。事実上の首都、テルアビブ近郊の空港である。今からイスラエルを発って、隣国ヨルダン行きの飛行機に乗ろうとした、その受付カウンターのわずか数メートル手前の「検問所」に僕はいた。出入国審査官から１時間以上は質問攻めにあっていた。

　審査官は次々に代わり、今、目の前にいるのは３人目である。精悍な顔つきの男性で、小柄で言葉は丁寧だが、鋭い眼でこちらを凝視しながら、矢継ぎ早に様々な質問を放った。

「なぜイスラエルに来たのですか？」
「あなたの日程を全て話してください」
「テルアビブに泊ったといいましたが、あなたが実際に泊ったホテルの所在地は空港に隣接するイェハド Yehud 村ですよね。どうしてテルアビブ市内に宿泊しなかったのですか？」
「レンタカーで移動したといいましたが、ずいぶん長距離を走ったんですね。どこに行ったのですか？」
「宿泊したホテルはわかりました。それらのホテルを選んだ理由は？」
「家族はいますか？」
「なぜ一人で来ているのですか？」
「仕事は何をしていますか？」
「職場での立場は？具体的な業務内容はなんですか？」
「職務上の証明はなにかありますか？」
「勤務先が発行しているクレジットカードはありますか？」
「2回マレーシアへの渡航歴がありますね。だれと行ったのですが？その理由は？」
「休暇目的なら、どうしてロンドン･パリのようなところに行かないのですか？」

イスラエル･テルアビブ近郊にあるベングリオン空港の出発階

・・・様々な話題を次々に聞いてくる。同じ内容であっても微妙な表現を変え、何度も何度も聞き、様々な観点から、僕が本当に安全な客なのかを徹底的に見極めようとしていた。

　自分は一人大きなバックパックを抱え、２週間にわたる旅に出ていた。日本を発ち、ロシアを経由し、イスラエルに入ったあと、これから次の目的国ヨルダンに行こうと飛行機に乗ろうとしていたところである。

この出入国管理官に質問攻めにあう前にすでに２人の別の職員から全く同じ質問攻めにあっていた。一人目は40 歳くらいの経験豊かそうな女性。二人目は 20 代と思われる若い女性。この二人から、それぞれ 30 分くらいずつ、旅の目的とイスラエルでの動き、そしてこれからの予定と、自分の日本でのことを、根掘り葉掘り聞かれたばかりである。

自分はすべての質問に、丁寧に誠実に答えたつもりである。ただし、だからと言って、この変な東洋人が「安全な旅客」とは判断できず、彼女たちはより強力な上司を連れてきた・・・というわけである。

自分はただ単に、イスラエルの実態を見たかっただけである。中東紛争の焦点になっているこの地が、実際にはどんなところなのか見てみたかった。そして、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地になっているエルサレムとはどんなところなのか、この目で見てみたかっただけである。よって、イスラエルに入国してから３日間。車で各地を走り回った。

内部はいたって普通の空港ロビー

しかし、状況的には非常に不利だった。

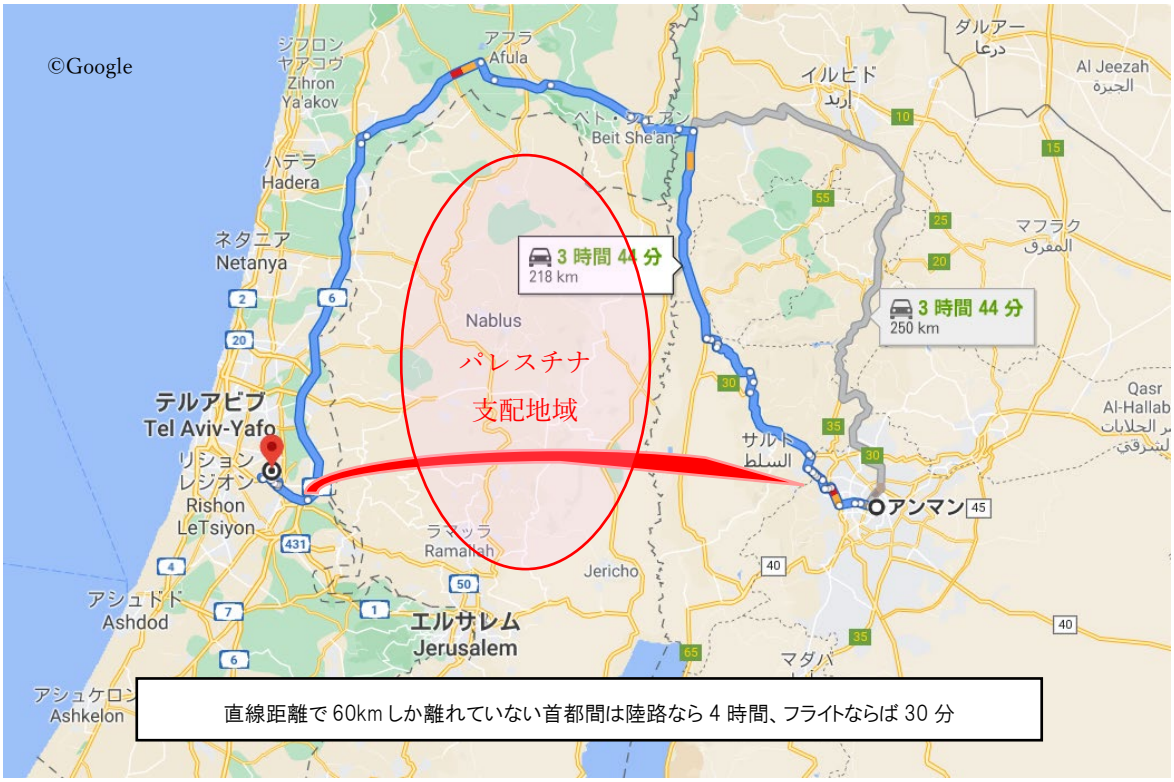
「家族がいるとおっしゃいましたが、何か写真はありますか？
スマホとか」

すぐにスマホを見せたが、残念ながら常時多様なカメラを持参している自分は、スマホであまり写真を撮らない。スマホ内の写真で家族に関係するのは、うちで飼っているミニチュアダックスぐらいしかない。こんな緊張している場面で、我が家の少々おバカなワンコの写真を出したら場が和むかなと一瞬思ったが、彼の鋭い視線を感じ、すぐに緊張モードに戻った。

10 分、15 分と時間はどんどん過ぎていく。「ベングリオンから出るときは少なくとも３時間前、できれば４時間前に来ていたほうがいい」という噂は本当だった。自分は一生懸命説明したが、どんなに話しても、新しい疑問点が生まれるらしく、状況は一向に改善しなかった。

たとえば目的地も問題だった。次に行きたいのは隣の国ヨルダンの首都アンマン。隣国の首都に飛行機で行くのは当たり前に感じるが、実はここから直線距離でわずか 60km しか離れていない。しかし両国の真ん中にパレスチナ支配地域があるので、それを大きく迂回するルートをバスでいけば、200km 以上４時間かってしまう。中東戦争で何度も戦い、領土紛争が続いている宿敵の首都へ陸路で移動することは、それなりの困難が伴うので、時間と手間を考え、安くはないこの区間のフライトをとったのだ。しかし近すぎるこの両国。わざわざフライトをとることへの不信感も覚えたらしい。加えて、足元見れば履いている靴は、飛行機に乗るというのに毒々しい赤と黒のクロックス風の安物サンダル。審査官氏から「そのサンダルを脱いで見せてくれ」と言われたからには、やはり怪しく見えるのであろう。自分も怪しい配色でこんな下品で派手なものは履きたくなかったのだが、どうしても履きものが必要だった時、店にはこれしか売っていなかったのだから仕方がなく買ったものである。また審査官はパスポートに残る他国への入国履歴にもこだわっていた。特に数年前のマレーシアの記録に過剰反応をしていた。この時はスリランカに行くために、安かったマレーシア経由の格安航空会社（エア・アジア）を使っただけだが、「イスラム諸国への入国履歴」は彼らに無用な警戒感を与えるに十分だった。

怪しまれた毒々しい色の偽クロックスのサンダル



そして、なんといっても若くない男の一人旅。家族がいるというが、写真もなくそれも怪しい。

スマホを普通に使っているのに、家族の写真一枚ないとは奇異に感じるのは当然といえば当然である。

でも、自分は、何一つ嘘は言っていない。イスラエルの今の様子や過去の歴史を、この目で見たくて来ているだけで、やましいことも何もない。怪しいサンダルにしても、パレスチナ自治区で急な大雨の中、汚れた深い水たまりにどっぷり浸かってしまい、一足しかない靴が悪臭の塊となってしまったのが洗うこともできず、たまたま立ち寄った死海の売店で、これだけ売っていたものを嫌々選んだだけである。

だから、相手の質問に一つ一つ丁寧に答えていった。ホテルの予約記録、メールでのやりとりなど、データとして証拠があれば全て見せた。同じことを何度聞かれても、正確に、誠実に、丁寧に答えた。

質問時間は 1 時間半を超えた。相手の質問も完全に同じ内容が増えてきた。

「では、あなたは単に観光のために来たということですね？」
「‥ハイ、そうです。本当に、単に、歴史や文化を知りたくて来たのです」

審査官氏は、ここでしばし無言になった。

そして数分後。しばしの沈黙の後

「‥‥‥‥わかりました。 ‥‥‥では、安全なフライトを。 （OK、Understand. Safe Flight）」

そう短く言って、パスポートを返してくれた。
気が付くと、空港に到着してから 10m進むのにまる 2 時間半が過ぎていた。

世界最高のセキュリティを誇るこの空港の検問はこの後も続いたが、さすがにこれ以上大変なものはなかった。形式的な書類チェックと受け答え、一般的な荷物チェックを何度も何度も経て、ようやく、ロイヤルヨルダン航空、アンマン行きの搭乗ゲートに辿り着いたころには、身も心も疲れ果てていた。

・・・でも。

本当のことを言うと、自分は質問には誠実に答えたが、不利になりそうなことはあえて言わなかった。

「イスラエル国内を、まる3日間、縦横無尽に 3000km 程度、車で爆走してしまいました。」
「敵対しているパレスチナ自治区のベツレヘムへも行ってしまいました。国境の検問は無事通過しましたよ」
「死海沿いの国道 90 号線を北上していたら、意図せずヨルダン川西岸のパレスチナ勢力支配地域の微妙なエリア入ってしまい、しかもそこを 200km 以上爆走してしまいました。」
「周りには建物が一切なく、ただ道がまっすぐあるのみで『イスラエル国民は決して横道に入ってはいけない！』と厳重な警告が何度も出てくるヤバい道でした。でも、警告地域には入らなかったので何も起こりませんでした。」
「厳重な検問も何度も受けてしまいました。でも丁寧に事情を話して通してもらいました。ライフルを持っている軍の方も話せば、みんないい人たちでしたよ」
「隣国なのに『イスラエルと国交がない』『イスラエル存在自体を絶対認めない』という緊張状態が続くレバノンとの国境まであと数キロ、というところにも行ってみました。第 1 次大戦以後国境が封鎖されているので隣国との行き来もなく、静かな雰囲気でした」
「常に戦闘が絶えないパレスチナのガザ地区の近く、40km ほどの町にも泊ってみました。いたって穏やかな雰囲気の街でした」
「地下にウラン鉱山があり、地下に秘密の核兵器製造工場があると世界中の公然の秘密になっていてイスラエル軍の秘密核基地があるという、噂のネゲブ砂漠のディモナדימונה という街にも行ってしまいました。まぁ通過しただけなので軍事基地は見ていませんよ」
「ちなみに全行程をほぼ 4K 画質で動画記録してあります。車の走行は GPS 付きのドライブレコーダーで。街歩きの様子は GoPro というアクションカムで。膨大なデータ量になりますが、すべて HDD に移し替えて保存してあります」

ロイヤルヨルダン航空の搭乗券

・・・なんてことは絶対に言わなかった。もちろん、今も軍事的に本当に危険なガザ地区や、反イスラエル勢力軍が本格的に展開しているゴラン高原などは行かなかったが、それでも一般的に考えて、日本の四国の一回り大きい程度のイスラエル国内を 3000km 走ったということは、それなりにマズイ場所にもかなり絡んでいる。

加えて、今回の荷物の大部分を占める多種多様なカメラなどの撮影機材・情報通信機器の話題も触れなかった。購入総額 100 万円以上の多量の機材が目に触れたら、スパイに疑われ、確実にもっと強い詰問に遭っていたことだろう。

ちなみに後日、いろいろな方に話を聞くとイスラエルを出国する個人旅行者にとってこの程度の尋問はまだ軽い方だったようである。自分が止められた最初のゲートでの質問で少しでも怪しいと感じれば、すぐに別室に連行され全所持品から行動歴を詳細に調べ上げられるらしい、とのこと。つまりこれでも自分は軽い方だったようである。しかし、自分にとっては、この尋問であっても非常に長い時間に感じたことは確かだった。

搭乗ゲート前の椅子に座り、心が落ち着いたところで、時差を確認した後、日本の家族に電話をする。

「今、イスラエルを出るところなんだけど、出国まで空港で大変だったんだ・・・」
「ふふふっ。 確かに。パパー人だと、どう考えても怪しいもんね。家族の写真でも送ってあげようか？」

電話の向こうの妻と子どもはいつもの明るい声で言った。
当たり前だが、日本では相変わらずの日常が広がっていることが、なんだかうれしかった。

「･･･確かに･･･どう考えても、怪しいと思うよな」
「･･･行動も、行先も、そして機材を考えると、どう考えても怪しい人間に見えるよな。」

確かに・・・。
冷静に考えれば考えるほど自分の姿が客観的に見えてきた。
審査官たちの立場に立ってみると、自分のような動きをする人間は疑うのは当然だろう。スパイとまではいわなくても、アラブ側の協力者かもしれない。そう考えれば、あの詰問も常識の範囲内であろう。

「そうか、オレは怪しいやつなんだ！」
「そうだよな、そもそも怪しいような旅に出ているんだもんな。正当に評価してもらったということかも」
「でも、こうやって、オロオロ･ドキドキする体験って、自分が自分らしく生きている証拠かもな」
「そもそも、そういう非日常的な体験を求めて、旅に来ているんじゃないのかい？」
そんなことを考えていると、不思議と心が軽くなってきた。むしろ、未知なるものへのあこがれと新しい冒険に出ているという前向きの強い感情が生まれてきたといった方が正確であろうか。

学生時代から世界各地を旅してきた自分。しかし、年齢を重ね、家庭を持ち、仕事でも責任あるものを任されることも増えてきた。社会的にも家庭的にも仕事的に抱えているものが大きく・重くなると同時に、どこかで安定を求め、「常識から外れる行動」をするには、その気も心も失っている自分に気づいた。
でも。自分は生来、新しいもの、未知なるものへのあこがれが人一倍強かったはずである。それは年齢を重ねても、家庭を持っても、社会的な役割が増えても、冒険する気持ち・新しいものに向かっていく気持ちは変わらないはず。しかし、いつしかそれに「常識」なるベールをかけて、見えないようにしていることに気づいた。

だからイスラエルの出国係員の方のきつい審査は
「お前、怪しいなぁ。普通の旅行者じゃねぇな。」
「でもまぁ。ホントにいろいろ見たいだけなんだな。まぁ気を付けていってきな」
という、彼らなりのエールかもしれない、とそんな気がしてきた。

そんなことを考えていると突然、
「ロイヤルヨルダン航空　アンマン行き、間もなく搭乗を開始します」
アラビア語の英語のアナウンスが降ってきた。

「よし行こう！　まだ見ぬ国々へ！」
気持ちを切り替え、すっかり元気になった僕は足取りも軽く、次なる未知の国、ヨルダン行きの搭乗口に向かっていった。

いざアラブの地へ！アンマン行き RJ343 便に搭乗

成田で出発準備中のアエロフロートロシア航空機

第2章　旅立ち　日本からの脱出

Departure, Escape from Japan

Japan　日本

第2章　旅立ち　　日常からの脱出

【1】旅立ち

2019 年の年末から 2020 年の年始にかけて 2 週間ほど海外一人旅に出た。いわゆるコロナ騒動の直前で、中国で流行り始めた謎のウイルスの話がニュースにはなっていたが、まさか全世界を揺るがす大疫病になるとはだれも考えておらず、世界中がまだ、コロナ前の動きをしていたその最後の時期である。

自分は未知なる世界を歩くのが何よりも好きで、見たことがない場所を歩いてみたいと、常にそして心から思っている大バカである。良い言い方をすれば「知的好奇心の塊」・・・なんていう言い方も許されるかもしれないが、単に“放浪癖が抑えられない病人”である。

いい年になっても、まだ夢を持ち「見知らぬ街」「本で読んだあの場所・あの遺跡」「ニュースになったあの町」「地図でしか知らないあの土地」を自分の目で見てみたい、自分の足で歩いてみたい、できればそこに住んでいる様々な人とたくさん触れ合って、文化や、言語や、食を体験してみたい、と心から願ってしまうのである。

振り返れば、既に幼少期よりこの病気の症状は出ていて、例えば高校 2 年時には沖縄を除く全国を制覇していた。最初から全国制覇を目論んでいたわけではないが（隠れ鉄オタということもあり）鉄道路線に乗るのも大好きで JR 線の 5 割、私鉄線の 4 割には乗っていた。そして運転免許を取得してからは、車で全国津々浦々各地を走り回った。本州に住んでいるくせに車で九州へ行ったり（ちなみに 2 回)、北海道も周回したり（これも 2 周）している。気が付けば自分で走破済みの道路は、全国の高速道路の 7 割、一般国道ですら（特に 1 級国道に限れば）4 割程度は走破していると思う。

自分の海外放浪の原点、カナダの某国立大学構内と学生寮

そして学生時代。カナダの大学に少しお世話になったことが発端となり、気持ちは海外へ。カナダ・オンタリオ州で出会った優しくも強き人々と、雄大で巨大なあまりにも偉大過ぎる自然との出会いは、世の中は自分の知らないことであふれており、自分は完全に「井の中の蛙」であったことを心から知らしめる衝撃的な体験だった。

そして。いつしか一人でリュックを背負い、安宿を転々としながら旅に出るようになっていた。いわゆるバックパッカーというスタイルである。何かを予約するわけではなく、大きなリュックを背負い、バスや列車を使って、ドミトリー（ユースホステルのような簡易宿）を使って、費用を抑えて、行きたい場所に、ふらふらとあるくスタイルで、ヨーロッパ各地やアジア、南米、アフリカなどを歩いた。

結婚してからは妻と共に旅をした。アジア、太平洋の島、北欧、南米やアフリカまで、伴侶の都合も聞かず、世界各地を共に歩いてもらった。子どもができてからも自分の「出かけたい病」が治るわけでもなく、子連れで動ける方法を模索して旅をした。さらに仕事の関係で、南米ブラジルに 3 年間駐在することになっても、小学校低学年と幼稚園児を連れてサンパウロで生活をし、休暇には南米や中米、アフリカなどを家族 4 人で訪れた。

ではなぜ、今回は一人旅だったかというと、今年度から自分の勤務体系が変わったことにより妻や子どもたちと休日が合わなくなってしまったのである。そんな経緯もあり、妻に「冬になら、休みがとれそうなんだけど、一人で行ってきてもいい？」と言い出した時、家族全員が意外なほどすんなり「いいよ」と言ってくれた。（ちなみにこんなことを書くと我が家の人間関係のヒエラルキーがばれてしまうが、ご想像通り、妻が最上位、子ども達がその次、そしてペットのわんこが次で、自分は最下位である）

【2】激変した予約環境

海外に出かける際、最初の関門はフライトチケットを取ることである。以前は H.I.S.や JTB などの旅行会社に電話をし、ようやく航空券を手に入れていた。またホテルは、現地で見つけた宿泊先に直接行って部屋の有無を聞いたりしていた。

しかし今は全く違う。“インターネット”の存在である。宿や交通機関、イベントなど、ほぼすべての動きがネットで事前に確認・購入できる今、当然ながらフル活用をしている。

航空券の購入に関しても劇的に簡単になった。すべての予約はインターネットで完結してしまう。以前ならば大変だった外国内の国内線まで簡単に購入できる。加えて、ネットではチケットの購入だけでなく、様々な設定やチェックインもできる。画面上で機内座席配置を選択できることはもちろん、web で搭乗券を発券し、ゲートではスマホ画面をかざすだけで OK、ということもかなり一般化している。本当にすごい。

ただし・・・。やはりネットは、あくまでもネットの世界。発信者に取捨選択されたデジタル情報は手に入るが、現地の人たちの息遣い、風の香りを感じるにはやはり行くしかない。異国の言葉、異国の通貨、異国の文化、異国の食べ物の中でしか感じない何かを体験したいと、ネット全盛の今だからこそ、感じたい私である。

【3】旅のスタイルと今回のルート

自分の旅のスタイルは旅行会社などを介さず、自分が行きたい場所へ、自分の考えた方法で移動し、泊まりたい場所に泊る形である。行きたいルートをどこでも好き放題に行ける限りない自由があるが、同時に「すべてのトラブルの責任を自分で背負う」という覚悟も必要になる。いうまでもなく異国に自分だけで旅をするとなると、言語、文化、通貨、食べ物、政治体制などの相違により様々なトラブルは頻発する。今までもピンチは数限りなくあった。特に盗難や事件、そしてけがや病気の時などは、本当に命の危険を感じた。三日三晩高熱と嘔吐に苦しんだエジプトでは本当に遺書も書いた。でもそれでも毎回、困難を何とか超えていくことができ、そして、その“乗り越える経験”がたまらなく充実した時間に感じ、結果的に今も旅を続けている。

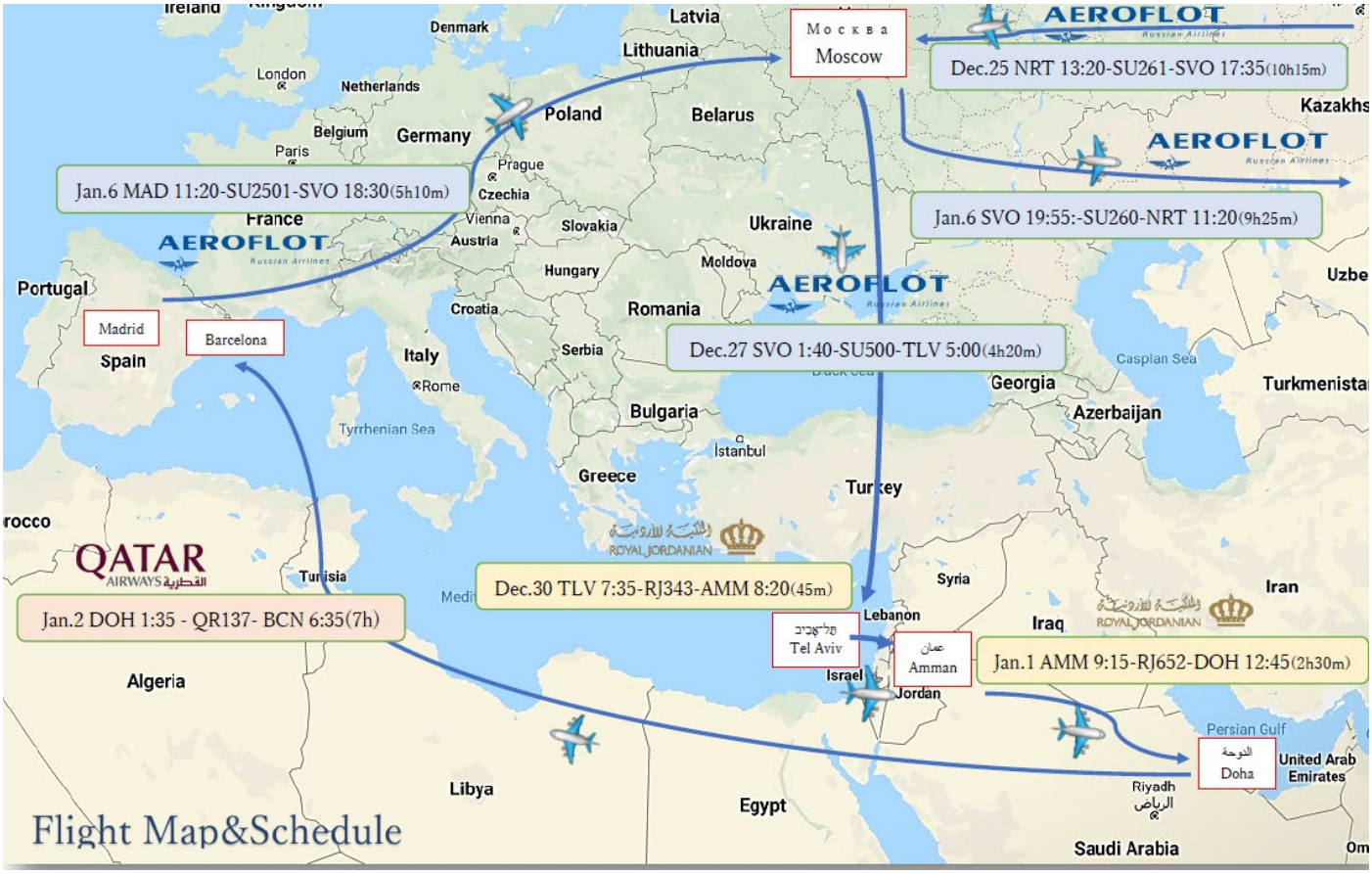
今回の旅は、家族連れでは行きにくかった場所、つまり少々危ない場所に行ってみたいと思っていた。ターゲットは「中東」。特に「エルサレム」を抱えるイスラエルへ行きたかった。ユダヤとアラブ諸国との対立の実際の様子、パレスチナ問題の現場の様子、そしてキリスト教、イスラム教、そしてユダヤ教の聖地である「エルサレム」をどうしてもこの目で見てきたかったからである。今回の興味の中心は「宗教」への疑問である。歴史を知れば知るほど、そして世界を歩けば歩くほど、人々の心の支えとなってきた宗教は、歴史や文化の表面も裏面も支配してきたと感じている。だから「聖地」をどうしても見たいと思っていた。

フライトを探すと一番安く効率の良いフライトはモスクワ経由のアエロフロート・ロシア航空だった。

「ロシアかあ・・・・」

目的地は中東、と書いたばかりだが、ここで「ロシア」が出てくるだけでも、熱い胸騒ぎがしてしまう。ここもぜひ行ってみたい国である。かつてのソ連時代の暗いイメージと共に、謎多き未知なる国は、言葉にできないほどの魅力を感じる。しかし、今回は中東が本命。ロシアに寄るのは最低限にしておこう。

そんなことを考えながら、様々なパターンを試行錯誤した結果、フライトは以下のようにした。日本発―中東・欧州の往復として、4 フライト。そして中東から欧州への中継として 3 フライトの計 7 フライトをとることにした。図にすると次のようになる。



（出発地）	（到着国、到着地）	（運航航空会社）
① 成田発	― ロシアのモスクワ着	アエロフロート・ロシア航空 261 便
② モスクワ着	― イスラエルのテルアビブ着	アエロフロート・ロシア航空 500 便
③テルアビブ発	― ヨルダンのアンマン着	ロイヤルヨルダン航空 343 便
④アンマン発	― カタールのドーハ着	ロイヤルヨルダン航空 652 便
⑤ドーハ発	― スペインのバルセロナ着	カタール航空 137 便
⑥スペインのマドリード発	― モスクワ着	アエロフロート・ロシア航空 2501 便
⑦モスクワ発	― 成田着	アエロフロート・ロシア航空 260 便

一見複雑に見えるが、このチケット形態は簡単で「日本―中東（欧州）①②⑥⑦」の往復はアエロフロート、「中東―欧州③④⑤」の移動はアラブ系、という 2 セットの航空券を購入した形である。約 2 週間の日程で 7 フライトというのは、おそらく多くの方からすればかなりハードな日程だが、以前 3 週間で 14 フライトを入れる旅行などをしてきた自分にとっては、比較的余裕のある日程ではある。

なお、よく聞かれる値段だが、アエロフロートが 10 万円強、ヨルダン・カタールが 5 万円強である。これが高いか安いかはそれぞれの価値判断だと思うが、アエロフロートならば 4 フライトでこの値段なので、片道 3 万円程度でロシアまで飛べることになる。JR の新幹線のぞみで東京-博多間でも片道 23,390 円かかることを思えば決して高くない、と自分は感じる。

ついでながら、航空業界にいる友人某は「**航空料金は高いっていうけど、その距離をバスで移動したバス代として換算すれば、同じかバスの方が高いくらい。実は全然高くないんだよ。**」と言っていた。たしかに距離を考えれば、交通機関として決して暴利をむさぼっているわけではないと思う。ちなみに東京-博多間は 1174.9km、成田-モスクワ間は 7,449km。仮にモスクワまで新幹線で行くとすれば費用は 148,000 円となり、実際のフライト料金がいかに安いかを感じる。

【4】航空券のしくみ

自分のように個人で海外を動きたい人間は、航空券・航空業界の仕組みについても知っておく必要がある。よって、航空券の仕組みを簡単に紹介したい。実は様々な種類や方法があり、使い方によっては効率的な利用ができるからである。まずはストップオーバー stop over:途中降機の紹介をしよう。直行便でなく、どこかの経由便を使用する際、経由地で一度「降機」してしまうことである。すると、次便までの間、経由地の都市を見られることになる。ポイントは空港内で数時間待って乗り継いでも、数日間、街で過ごして乗り継いでも料金は変わらない、ということ。つまり自分のように「どうせ経由するならその土地も見たい」人間にとっては、料金がかからず散策できるありがたい仕組みである。先述のイスラエルの空港で引っかかったマレーシアへの渡航歴というのも、経由地クアラルンプールで「空港で時間をつぶすより外に出よう」と市内散策をしてきた記録である。

もう一点、大手航空会社が発行する「航空券」は片道単体で販売されることより、複数路線がセットを基本としていることが多い。例えば日本と欧州を結ぶ便は「4 フライト」が基本セットである。例えばエールフランスならば「日本－パリ」の往復に加え、「パリ―欧州の任意の都市」の往復がセットである。よって、日本からエールフランスを使ってウイーンに行きたい場合は「日本―パリ、パリ―ウイーン」で発券される。しかしこの「ウイーン」を別の都市に変えても料金は変わらないことが多いのである。これを航空業界ではオープンジョウ（open jaw:口を開けたアゴ）という表現をするが、陸路や別ルートも使って旅をしたい人間にとってはとても便利な仕組みである。

世界の空港で普通に使われるようになった自動チェックイン機

今回のフライトもこのオープンジョウの形をとり、日本―（モスクワ）―テルアビブ　や、日本―（モスクワ）―マドリードの往復と同じ料金で、日本―（モスクワ）―テルアビブ着、マドリード発―（モスクワ）-日本というフライトが組めている。

中東から欧州へ移動するフライトは、なかなか希望の便が見つからなかったが、経由地、そして値段と時間を考え、非常に様々なパターンを検索した結果、ロイヤルヨルダン航空が発券する３フライトを取ることにした。

以上のようなわけで今回の訪問国が固まってきた。「ロシア」「イスラエル」「ヨルダン」「カタール」そして「スペイン」の５か国である。そしてもしかしたら行ける国として、「パレスチナ暫定自治区」、それにスペインとフランスの間の小国「アンドラ公国」や、イベリア半島の先の「ポルトガル」なども、行けたら行きたいと考えた。

加えて、「絶対に宿泊する都市」、つまり飛行機に乗る前日の夜のホテルと、レンタカーの予約をした。ほかホテルなどは、現地に到着してから旅をしながら考えることにした。すべての日程を決定し、宿を予約してしまうより旅をしながら決めていった方がはるかに自由に動ける。行き当たりばったりの危険性はあるが、それでもかつてのバックパッカーの良さを生かす「かなり自由な旅」は最大限に生かしつつも、飛行機やレンタカーもフル活用するというのがこのスタイルである。

① フライト、②レンタカー、③最低限の宿。
この３つの予約が完了したということは日本で行える準備は整ったということである。

そしてあとは、出発当日を待つのみ、となった。

Web から印刷した搭乗券。事前に搭乗券を確認できるメリットはかなり大きい

アエロフロート機内にて

第3章　いざ出発。近くも遠い隣国へ

Departure to a neighboring country near and far

Japan,Narita　日本,成田　―　Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第3章 いざ出発 近くも遠い隣国へ

【1】成田にて

2019 年の 12 月下旬。世の中が年末に向かって大忙しの中、成田空港に向かって車を走らせていた。年末年始の休みにはまだまだ間があり、会社も学校も正常運転している中、遊びに行く自分がとても申し訳ない気持ちでいっぱいになりながらも、大好きな成田空港に向かっていた。一人なので鉄道で行くのが一番経済的だが、荷物などのことも考え、手軽な自家用車で行くことにし、ネットで一番安かった民営駐車場に予約を入れておいた。車が成田市に入ったとき、直接空港へ向かわず、市内へ向けて高速を降りた。家をかなり早く出たため時間があることに加え、できれば買い物をしたいと思い立ったからである。

成田は大好きな町である。それは自分にとって「外国への玄関口そのもの」だから。初めての海外もここから飛び立ち、それ以降何十回となくここから海外へ飛び立った。フライトによっては羽田や中部(セントレア)も利用するが、なんだかんだ言ってやはり成田が圧倒的に多く、それゆえ思い入れも深い場所である。特に家族が一緒の際は、子どもの体調なども考え前泊・後泊することも多く、気が付けば成田市内のホテルは 10 数件以上も利用した。よって主な施設やホテルの位置、抜け道なども含めて、地図なしで動ける町である。

「バックパックを買いたい・・・・・。とりあえず・・イオンモールかな」

買いたかったものは「バックパック」。荷物を全て収納する一番大切なものであるが、出発時になってバックの一部が破損していたことに気づいたためである。

とりあえずイオンモールへ向かう。かつて成田のイオンと言えば JR 成田駅そばの小さな(現)イオンモール成田富里店のみだったが、2000 年ごろに新イオンモールができた。JR 成田線が大きくカーブし、京成成田空港線と交差する国道 408 号線沿いの農地あたりである。ここはその後のいわゆるインバウンド需要も取り込み、ドンキホーテやら家電店やらが次々に開店していった一大開発エリアとなった。

しかし、店舗内をくまなく探したがやはりバックはなかった。正確にはあるにはあるけど、どれも非常に小型で、自分の旅に耐えられるサイズではない。やはり専門店でないと置いてないらしい。

「・・仕方がない・・・・まぁ。なんとかこれでがんばるか・・・」

と、改めてバックをよく見ると、ベルトの部分やファスナーの部分などもかなり怪しい状態になっていたが、今からではどうすることもできない。僕は覚悟を決めて、だましだまし使っていくことにした。

車を空港近くの「ABC パーキング」という民間駐車場で車を預けた。14 日間で 7250 円。年末年始の繁忙期なのに一日 500 円程度と、価格競争が激しくなった成田の民間駐車場の中でもかなり安い店である。あまりに安くて心配になりネットをのぞくと口コミに「従業員さんの態度がちょっと心配・・・」などの負の話もあったが、行ってみるとシンプルで余計なことを言わない係員さんがテキパキと働いているだけで、何の問題もなかった。むしろ他の民間駐車場と違い、空港送迎用のバスが、路線バスの中古で、ゆったりとしていてとても快適だった。

ABC パーキングの送迎車は巨大な中古路線バス

見ているだけで心躍る気分になる成田空港の出発案内板

何度訪れても興奮してしまう　成田空港第１ターミナル

【2】ロシアへのビザ

「ええと‥。
　帰りはモスクワ市内に寄らないってことでいいですね？」

成田空港第１ターミナル E カウンター。アエロフロート・ロシア航空のチェックインカウンターの日本人のお姉さんはそう一言だけ言うと、パスポートに貼られたロシアビザを一瞥し、無表情なまま端末をカタカタと叩き、フライトの搭乗手続きを進めていった。

「それでは搭乗券はこちら。25 番ゲートに 12:30 までにお集まりください。12:55 にはドアが閉まりますのでお気を付けください。何かご質問は？　では、お気をつけていってらっしゃい」。

非常にビジネスライクで、少々冷たい印象の受付嬢だったが、不愉快な態度でではなかった。しかも、必要なことは要点的に全部伝えていたので、業務としては全く問題のない。このとき、自分はお姉さんの少々冷たい態度よりも、とにかく手元のロシアビザが有効であることに安堵していた。そうなのだ。ロシアはビザが必要な国なのである。

ビザ（査証）について少し書こう。日本のパスポートが強すぎて、最近ではビザの意義すら不明な方も多いと聞くがパスポート（旅券）は単なる身分証明書。「私は日本人です」と証明する公文書である。
外国人が別の国に入国するためには、その国への許可がないと入国できないのが一般的である。その入国許可証がビザである。だから本来は、事前に渡航先に国に「入国したい」と申請をし、ビザを取得する必要があるのだ。しかし国家間の取り決めで「あなたの国民は信頼できますから事前申請しなくても入国を許可しますよ」というビザ免除の国もでてくる。今、日本はその「ビザ免除」をしてくれる国が 191 か国(2020 年現在)でダントツの世界一位。つまり日本の国際信用は非常に高いので、多くの国でビザなし渡航ができるが、本来は必ずビザを取得する必要があるのである。そして、ロシアは日本人にさえもビザ取得を求める数少ない国の一つである。

あるサイトにはロシアビザについてこんな感じのことが書いてある。
「ロシアに入国する外国人は全員、ロシアのビザを取得しなければなりません。ロシアの入国ビザはロシア大使館・領事館で取得することができます。ロシアのビザを申請する場合、受け入れ側からの招待状が必ず必要になります。招待者はロシア居住権を有する個人やビジネスパートナー、学校法人、医療機関、ロシア外務省からの旅行業許可証を有する旅行社でなければなりません。」
つまり、自分のような個人旅行者が、「単に観光したいだけです」「行き先を特に決めず、気に入った街に泊まる、ぶらぶら歩きたいです」といっても、そんな無計画な旅にはビザの申請が許されない。1991 年 12 月のソビエト崩壊以来、この厳格なビザ申請も少しずつ緩和され、極東ウラジオストックなどは、簡単な電子申請だけでビザが取れるようになったが、それでもビザ取得困難な国の筆頭レベルである。
それでも今はモスクワなどへの訪問も、まず自分で web 上の電子申請をし、ロシア大使館へパスポートと共に申請に行き、自ら受取に行けば高額な費用もかからずビザがとれるらしい、という話もきいた。過去に比べればかなり楽だが、簡単になったとはいえ、この方法では少なくとも 2 回、平日に港区のロシア大使館まで出向かなくてはならない。

もっと楽な方法はないか・・と、思案していると、パスポートと写真を送付し、料金だけ払えばビザを代行取得してくれる業者がいることが分かった。赤坂にある「ロシアビザセンター」という業者だが、お金さえ払えば全てやってくれるとのこと。フライトもホテルも全くとっていない状態でも OK、という申請方法に半信半疑ではあったが、依頼すると本当にあっさりとビザが取れてしまっていた。

お値段は¥14,500。高いか安いかはその人の価値判断だが、かつて様々な書類を完備して申請しないと取れなかったロシアビザが、何の予約もなしで、お金だけで取得できる、ということだけでもありがたいと感じた。

ロシア大使館を追い出されたラトビアのリガの街並み

自分には、ロシアのビザに関わって苦い記憶がある。

旧ソビエト連邦に併合されていたバルト三国のラトビアの首都リガを旅していた時のことである。ふとロシア大使館を見かけ、だめもとでロシアビザの申請をお願いに行ったのだ。予備知識として、そんな飛び入りでロシアビザが取れないことは薄々知っていたが、旧ソビエト内であるラトビアのロシア大使館なら少しは対応が違うかも、と期待して在ラトビアロシア大使館の扉を叩いたのである。

しかし・・・。「けんもほろろ」という言葉がまさにぴったりの門前払いをされてしまった。

「ロシア語も話せないアジア人が来るところではない！」

係員にそんな人種差別的な暴言も受けてしまい、大きなトラウマになっているロシアのビザが、今回はいとも簡単に取れてしまったことが驚きである。

「あんなに文句を言われて取れなかったのに‥
‥時の流れというやつかもしれない・・・」

ビザ(査証)とは、たかが一枚の紙きれではあるが、国境を超える人間にとってあまりにも重いものである。杉原千畝がリトアニアでユダヤ人に発行したビザを持ち出すまでもなく、そんな紙切れに翻弄された数多くの人々のことが脳裏をよぎり、感慨というか、一種のやるせなさというか、とにかく複雑な感情とともに、手元のロシアビザを、じっと見つめてしまった・・・。

今回取得したロシアのビザと入国書類

【3】いざロシアへ

アエロフロート機は、その機内に入ったときからロシアだった。

「Привет（プリビエット：こんにちは)」。CA さんの美しくも軽やかな挨拶だけでなく、機内のあちらこちらに見えるキリル文字がすでにロシアである。搭乗率は 90%。年末年始の繁忙期、というところだろうか。僕の席は機体最後部付近の窓際。乗降には時間がかかるが、機内全体を見渡すことができるうえ、主翼の姿も、そして下界も良く見える位置なので、お気に入りの位置である。

隣の席は空席だった。

しかしすぐに

「エクスキューズミー」と、若い白人女性が座った。

「･･･そっか。今日は一人なんだ････」

アエロフロート SU261 の機内

当たり前だが、今回は一人である。
「家族連れでない、気楽な一人旅」
「妻や子どもの行動の安全を確認しなくてもいい楽な旅」
「自分の都合だけで全てを決められる気ままな旅」
ついさっきまで、その状態を謳歌していたはずなのに、いつもは妻か子どもが隣にいるはずの位置に、他の人が座るという当たり前の現実に自分の心は動揺していた。

「･･･ちょっと寂しいかも？」
「･･･ちょっと、やめればよかったかな？」
なんて、全く思ってもいなかった感情が沸き上がってきた。
夢までに見たあこがれの外国旅行に行くというのに、自分にそんな否定的感情がでてきたことに、一番驚いていたのはやはり自分だった。

13 時 20 分。定刻に動き出したアエロフロート・ロシア航空 SU261 便は、そんな自分の気持ちを断ち切るかのように一路、モスクワに向け加速を始めた・・・。

【4】アエロフロート・ロシア航空

モスクワ到着は、今日の 17 時 35 分。13 時 20 分が出発なので、わずか 4 時間のフライト・・・。と言いたいところだが、ここに時差を 6 時間含むので、実質所要時間は 10 時間 15 分である。

それにしても、アメリカ製アエロフロート機に乗っている自分の姿がなんだか信じられなかった。かつて、アエロフロートと言えば恐ろしく、そしてボロボロの古い機体のイメージしかなかった。物心ついたときから東西冷戦の話は、なんとなくニュースの端々で聞いていて、とにかくソ連は謎深く、そして恐ろしい国、というイメージがずっと付きまとっていたからである。物事がわかってきた年になってからも、大韓航空機撃墜事件、日ソ不可侵条約を破っての北方領土侵攻、アフガニスタン侵攻など、情勢を多少理解したからこそ、情け容赦なく西側諸国を攻撃する恐ろしい国、という印象をもってしまっていた。実際問題として、冷戦時代、アエロフロートはソビエト連邦の重要な諜報機関として動いていたこともあったようである。西側諸国のあえて軍事的に重要なエリア上空を「民間機」と主張しながら飛び、軍事情報を収集していたという例もよくあった、と伝え聞いている。加えて、ソビエト連邦と言えば、西側諸国とは違った航空機を独自につくっており、その技術も侮れない、ということも恐怖を増す要因であった。飛行機製造会社としても、ツポレフ Tupolev、イリューシン Ilyushin、アントノフ Antonov、ヤコブレフ Yakovlev、スホーイ Sukhoi など、様々なものがあり、なんとか YS-11 という中型機を 1 機種作っただけの戦後日本とはポテンシャルが全然違うと思ったものである。

今回の搭乗機 Boeing777-3M0(ER)（VQ-BQD）

そして気ままな海外旅に出かけるようになってからも「アエロフロート」は安く、ボロい機体のくせにロシアビザが取りにくく、自由度の利かない使えないエアライン、という印象しかなかった。

そんなアエロフロート・ロシア航空だが、日本とのかかわりは非常に古く 1967 年にはツポレフ Tu-114 という 4 発プロペラ機で日本航空と共同運航を始めている。新潟-ハバロフスク線も 1973 年と冷戦の最中に開設している。成田に来る機体も、ソ連製のツポレフやイリューシンだったが、ソ連崩壊後はすぐに西側の機材を投入し、現在はほとんどがヨーロッパのエアバスか、アメリカのボーイング製になるなど少しずつ進化していた。アエロフロートは日本とヨーロッパを結ぶ重要な路線として確かな歴史を築いてきたエアラインであった。

【5】Boeing 777-3M0(ER)

今回の機体はボーイング 777（トリプルセブン）型。より正確に言えば 777 の 300 型の航続距離延長 ER 型(Extension Range)。完全なる正式名称でいえば、Boeing 777-3M0(ER)である。

そうそう、言い忘れたが、自分はソコソコの飛行機オタクで、飛行機の話をすると話が止まらなくなってしまう。ただしそればかり書いていると間違いなく読者の方が飽きるので、要点的にしたいが、多少はお付き合い願いたい。

このボーイング 777-300ER 型は、新しい日本政府の政府専用機に選定されたことでもわかるように、航続距離は長く、信頼性もあり、かつ容量も巨大でしかも経済的という優れた機体である。全長 73.9m、全幅 64.8m。エンジンは高信頼の GE90-115B を搭載し、最大航続距離は 14,594 km という超巨大・超長距離機である。かつてのジャンボ機ボーイング 747、またはエアバスの 4 発機 A340 に置き換わる機体として世界を席巻した大型機で、1000 機以上が製造され、フラッグシップ機のひとつとして活躍している。強力なライバルとしてエアバス A350 もデビューしたり、使用年数が進み、引退機も出てきたりしているが 777 の安定性は評価が高い。そうそう飛行機話ついでにもう一点。飛行機についてあるものを見れば、機体の詳細を全て調べることができることをご存じだろうか。それが登録番号（レジストレーション）。唯一無二の記号として個体ごとふられていて主に機体後部に記されている文字列である。今回の機体は VQ-BQD という番号がふられており、これは日本路線によく就航している機体であった。

この記号が機体固有の登録番号　VP はロシアの国籍記号

さて、SU261 便は厳冬のシベリア上空をガンガン進んでいく。

「10 時間のフライト」と聞くと「長い」「飽きる」「やることない」という方がほとんどかと思うが、自分の場合は非常に忙しい時間である。空港から市内への行き方を調べたり、入国審査時の注意点を確認したり、ロシア通貨への両替の方法を確認したり、時差を修正したり、明日の行先を検討したり、そして何より簡単なロシア語を覚えたりと、忙しいことこの上ない。もちろん、この後のハードスケジュールを考えると少しでも睡眠をとっておいた方がいいが、２回の機内食などもあり、10 時間のフライト時間はあっという間に過ぎていく・・・。

30000ftから見下ろす新潟上空。温暖前線が美しい

「ポーン」

気が付くと機内アナウンスが、モスクワへの着陸体制へ入ったことを告げていた。
窓外はすでに真っ暗。17 時だというのに、この暗さは？と考えて、モスクワは日本より緯度が高いことを思い出した。東京が北緯 35 度とすると、モスクワは北緯 55 度。しかも今は冬。調べてみると、日の出は 9 時。日没は 16 時ごろらしい。そりゃ真っ暗なはずである。

機内のナビゲーション画面。北極を飛んでいく

ふと眼下に光が見えてきた。そしてそれが大きくなり、都市の様相を形作ってきたところで、わが 261 便は、軽い衝撃ともに着陸をした。
静かな着陸である。

「そういえば、アエロフロートに乗ると、ガタガタ、ボロボロの機体でびっくりするよ。
でも、だから着陸するとみんなで無事を祝して拍手をするんだよね」

なんて誰かが言っていたことを思い出したが、別にそんなイベントは何もなかった。
乗客はさも当然のように静かに降機準備を始めただけである。

モスクワ･シェレメチェボ空港に到着！ 午後 5 時半なのにすでに真夜中の雰囲気

いずれにしてもあの、あこがれと、そして恐怖のシェレメチェボ空港に、あの神秘と、秘密のベールに包まれたロシア共和国に着いた事実に僕はかなり興奮していた。

ただし。世界地図でいえば、隣国の首都へ着いただけ。

そう、つい忘れかけているが、ロシアは日本の隣国。
イデオロギーも文化も違うが、7500km 離れ、10 時間かかる隣国の首都に着いただけのことであった。

深夜のベラルーシスカヤ駅前

第4章　モスクワは恐ろしい街ではなかった

Москва не был ужасающим городом

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第 4 章　モスクワは恐ろしい街ではなかった

【1】シェレメチェボ空港

「さあ。着いた！」

僕は元気よくタラップを降りて、シェレメチェボ空港の地面に降り立った。日本の空港の多くがボーディングブリッジと呼ばれる搭乗橋を利用するのに対し、海外の空港はこういった旅客ターミナルから離れた場所でタラップを使って降り、バス移動することも多い。

飛行機オタクの自分にとって、飛行機から階段で降りてきて、自分が乗ってきた機体を間近で見られるこの降機方法は最高だが、直接屋外に出るので雨天時や寒暖の差がある空港では嫌がられる傾向がある。

シェレメチェボ空港に到着！

空港の略号 SVO がお出迎え

生まれて初めて踏むロシアの地は何とも言えない雰囲気だった。空港特有の燃料の香りがほのかに漂う中、吹き抜ける風がとても心地よい。

「ああ、これがモスクワの風かぁ・・・・」

そしてふと思った。

「あれ・・・寒くない・・・」

そうなのだ、全然寒くない。冷たさを全く感じない空気である。しかも地面に雪が全くない。成田よりも寒くないかも、とすら感じる。後で調べると、この 2019-2020 年の年末年始の平均気温は過去最高を記録していた。本当に寒くない冬だったのである。

モスクワには主な国際空港が 3 つある。

ドモジェドヴォ空港　Международный аэропорт Москва́-Домоде́дово(IATA 略号: DME,ICAO 略号:UUDD)

ヴヌーコヴォ空港　Международный аэропорт Внуково　(IATA:VKO, ICAO:UUWW)

シェレメチェヴォ空港 Международный аэропорт Шереметьево（IATA:SVO, ICAO:UUEE）である。

このうち、ここシェレメチェボ空港は、モスクワ随一の空港だったにも関わらず「汚い」「治安が悪い」「係員の態度が悪い」と悪評だらけの空港だった。加えて空港内で写真でも撮ろうものなら係員にカメラを取り上げられ、賄賂を請求される、なんて噂もよく聞いた。しかし、実際に到着してみると噂とは全く違う、普通のきちんとした、小綺麗な空港だった。カメラを出していても、特段注意されるわけでもなく、いかつい警備員がいるわけでもない。一時、ここの評判の悪さにドモジェドボ空港に避難していた日本航空も 2019 年からシェレメチェボに帰ってきたという話も納得である。

【2】ロシア共和国の概略

ではここで「ロシア」という国の概略に触れたいと思う。地図上で日本の隣国であり、距離的には近い国であるはずなのに、多くの日本人が「遠い国」「よくわからない国」に感じるのはなぜだろうか？　おそらくこの国の歴史・実情を実はよく知らない人がほとんどだからではないだろうか。よって簡単に説明したい。

【ロシア国旗】 白は高貴と率直、青は名誉と純潔性

赤は愛と勇気の「スラブ 3 原色」と呼ばれる

まず人口だが 1 億 4 千万人。もっと多いと誤解されるが、実際は日本と似たようなものである。しかも首都のモスクワの人口は約 1200 万人。これも東京と類似している。

最大の相違は国土の広さ。日本の国土面積が約 38 万平方キロメートルに対しロシアは約 1,707 万平方キロメートル。つまり 45 倍も大きい。その大きさは時差を考えてもわかりやすい。日本に住んでいれば国内のタイムゾーンという概念を感じることがないが、国土が広い国は複数の国内標準時を持つことも多い。例えばアメリカ合衆国ならば、東部・中部・山岳部・太平洋・アラスカ・ハワイの 6 つのタイムゾーンがあり、ブラジルでも 4 つの標準時を持っている。しかしロシアはその比ではなく 11 種類もあるのだ。羅列してしまうと、カリーニングラード時間、モスクワ時間、サマラ時間、エカテリンブルク時間、　オムスク時間、クラスノヤルスク時間、イルクーツク時間、ヤクーツク時間、ウラジオストク時間、マガダン時間、カムチャツカ時間である。

広大な面積は強みを生む。特に豊富な資源の存在はロシア最大の強みである。よってかつては豊饒な農業国、そして現在のロシアは資源の輸出が主産業である。特に石油・天然ガスのエネルギーの輸出で経済が回っている側面が強い。だからこそ、プーチン大統領の最初の任期時、ちょうどインドや中国の工業生産増大期に重なって原油価格が高騰したことに伴って、ロシア財政も回復し、まるで「プーチンが大統領になったら経済が良くなった」と見える現象が起きたのも、「ロシア＝原油産油国」という構造によるのである。

しかしその「広さ」は同時に弱さも生む。日本とほぼ同じような人口しかいないのに、面積は 45 倍。しかも多くの国と接しているということは、国境が長すぎて防衛しきれない、つまり「他国に侵略されるかもしれない」という怖さを持ってしまっている国、ともいえよう。

それゆえに、かつてのロシア帝国、そしてソビエト連邦は常に国境線について“ある考え”を持っていた。それは「国境付近には緩衝国が欲しい」という政策である。つまり、敵対する国と直接国境を接するのではなく、ソビエトと直接接している国は自分の友好国、または支配下にある国にしたい、という「緩衝国願望」が強かった。だから「ワルシャワ条約機構」のように国の周辺には自分の友好国ばかりを配置していたのである。もちろんこれがうまく作用していれば何も問題ない。実際にかつてのソビエト連邦時代はほとんどうまくいっていたと言って良いだろう。

しかし例外が出てきた。アフガニスタンである。ソビエトと直接接している国なのに、東西冷戦のさなかの 1978 年、アフガニスタン人民民主党政権が反ソビエト的な動きをとり始めた。そこで「オイ、お前は俺の支配下の国だよな？」と政権に圧力をかけようと武力侵攻したのである。つまり「ソビエトと国境を接しているアフガニスタンが、反共産主義になったらいやだ」という動機からこの動乱が始まったのだ。（このアフガン侵攻が後にソ連崩壊、そして対アラブの衝突構造を生み出す重要なカギになるのだがそれはまた後述・・）

そしてもう一つ別の重要な特徴が「寒い」ことである。緯度から考え、当たり前と言えば当たり前だが、この寒さもこの国の歴史に大きくかかわってきた。歴史上、寒さが有利になることもなかったわけではない。ナポレオン軍の撃退、第一次世界大戦の対ドイツ戦など、冬将軍を武器に戦局を有利に進めたこともあった。しかし、日常生活・そして海路確保ではどうしても不利になることが多い。極端な例だが、ロシア連邦サハ共和国のヤクーツク Якутск などは、夏は 30 度、冬はマイナス 70 度と年間の気温差が 100 度になるという。やはり快適に過ごせる環境とは言えないだろう。

よって常にある願望が出てくることになる。それが「不凍港願望」である。この「冬でも凍らない港が欲しい」＝「少しでも南へ行きたい」といういわゆる「南下政策」も、結果的には欧州諸国と戦火を交えてしまう大きな要因だった。「不凍港願望」は今も世界情勢に影を落としている。例えば「シリア」。なぜシリアがイスラム国(IS)の巣窟になってしまっているのか、内戦が激化したままなのか、詳しくは別の項で書きたいと思うが、この混乱の要因の一つがロシアの「不凍港願望」にもあるといわれている。シリアのアサド現政権はややロシア寄りなのである。そしてシリアといえば、ロシアが欲しくてたまらない地中海に面した不凍港がある。それを使わせてもらうために（シリアにロシアの軍事基地を置かせてもらいたいために）、ロシアはアサド政権を裏で支持しているのだが、対する反体制派を支持しているのがアメリカとイギリスである。シリアがあそこまで混乱してしまっ

ているのは、シーア派とスンニ派のイスラム宗派争い、ジャスミン革命に端を発する民主化運動の流れ、イラク戦争後の混乱に乗じたスンナ派武装化に伴うイスラム国の成立とアルカイダの共謀などイスラム過激派組織の存在に加えて、ロシアの不凍港願望とそれを阻止したいアメリカの代理戦争、という側面もあるのである。

以上のように、この「国境が広すぎるから緩衝地帯が欲しいようという『緩衝国願望』」「凍らない港が欲しいようという『不凍港願望』」は、ロシアの歴史と動きを理解する重要なキーワードである。

とにかく、この国は争いが絶えなかった。例えば第一次世界大戦、第二次世界大戦ともに一応「戦勝国」となっているのだが、いずれも完全に勝った、というにはほど遠く、非常に多くの戦死者を出してしまっている。第二次世界大戦（太平洋戦争）で亡くなってしまった日本人は約 310 万人といわれている。しかしソビエトの戦死者は、なんと 2700 万人！ソビエトは第二次世界大戦の最大の戦死者を出した国だったのである。

日本から見るとソ連は、「日ソ不可侵条約の一方的な破棄」「ソビエト抑留」「北方領土問題」など常に強く・そして悪く攻めてくる国の印象があるが、その裏には欧州で大惨事を経験していた国であったのである。

よって、第二次大戦で多くの方が亡くなってしまった恐怖があったからこそ、「緩衝国願望」があり、アフガン侵攻をしてしまったともいえるが、結果的にそれらが更なる国家衝突を生み、ロシア・ソビエトの国力を衰退させ、結果的にソビエトという国家を崩壊させた事実は、歴史の皮肉と言えるかもしれない。

【3】入国審査と両替

さて、話をモスクワの空港に戻そう。外国から来た人間が、別の国に入国する際必要なのが入国審査である。一般的には、CIQ と呼ばれる次の 3 つの審査が入国手続きになる。

① 関税に関わる税関（Customs）
② パスポートやビザを確認し、入国する資格がある人物か審査をする出入国管理（Immigration）
③ 持ち込む動植物の病原菌の有無を管理する検疫（Quarantine）

英語も併記してあるシェレメチェボ空港の案内板

基本的にどこの国境でも、この 3 行程があるのだが、審査の厳密さや所要時間は全く違う。ビザがあれだけ厳しいロシアの場合は…と、ドキドキしていたが、実際はものすごく簡単だった。

入国審査官の若い女性は無言で、自分のパスポートをけだるそうに受け取ると事務的にスキャンし、登録データと確認していく。一瞬、顔写真とこちらの顔を一瞥しただけで、何言も発さず、淡々と作業を進めていた。そしてその場で印刷された出入国カードにサインをするよう手で促し、半券とパスポートを無造作に投げ返した。以上終了である。待ち時間だけは長かったが、なんともあっけない入国だった。

「さて‥」と歩き出しながら、手元にロシア通貨がないことに気づく。そうなのだ。外国歩きで留意すべき事柄に「両替」がある。すべての国で VISA や Master クレジットカードが普通に使えることが当たり前で、電子決済も始まっている国も多いが、やはり現金も必要なのでどこかで両替する必要がある。市内の両替所のレートの方が良いことも多いが、ここで両替しないと何もできないので両替所を探した。

ロシアの通貨単位はルーブル。補助通貨単位はカペイカ(k)で、1RUB（ロシアルーブル）＝1.4JPY である。「つまり 1.4 倍すればいいな」と頭で計算する。今はスマホの為替換算アプリがあり、簡単に計算できるのだが、やはりある程度の換算レートを頭に入れておかないと何かと都合が悪いためである。

10 ロシアルーブル札。つまりわずか 14 円札

それにしても空港内の各種案内がロシア語のキリル文字だけでなく、英語の併記してくれているのが、さすが国際空港というべきか。そうしたロシアらしからぬ心配りが、この空港の印象を良くしているのは確かである。ちなみに市内各地にも英語表記があふれていたが、それは、１年前のワールドカップが契機だったという。つまりこんなに英語表記が増えたのはごく最近、とのことだった。

【4】キリル文字の表記

そうだ、ここでロシア語の表記について書きたい。ロシアの言語は当然ロシア語だが、ほかのラテン語アルファベット表記とは、似ているがかなり違っているいわゆるキリル文字、と呼ばれるものを使用している。私たち日本人から見ると読めない字がかなり入っている文字である。

大文字…АБВГДЕЁЖЗИЙКЛМНОПРСТУФХЦЧШЩЪЫЬЭЮЯ

小文字…абвгдеёжзийклмнопрстуфхцчшщъыьэюя

ルーツとすれば、ブルガリアの僧侶キリルたちがキリスト教を広めるためにギリシア文字を元にして作ったもので、ギリシア正教とともに東ヨーロッパに広まった文字らしいとのこと。観光ガイド付きのツアーならば、ロシア語が読めなくても問題ないが、自分のようにぶらぶら好きに歩いている人間は、話せなくても、せめて読めなければ致命的である。特に地名がわからないと、駅でも、道路でも行き先が分からなくなる。

難しそうに見えるキリル文字。でもルールと読み方さえ理解できれば、ラテン文字に変換でき、自分たちにも発音できる代物である。文字自体が全く見当もつかないアラビア語(اللغة العربية)　や、タイ語(ภาษาไทย)、スリランカのシンハラ語(සිංහල)、そしてイスラエルのヘブライ語(עברית)などに比べるとはるかに読める気にさせられる、少なくとも何となくは読めそうな気になる文字である。

ここのポイントは「文字の読み替え」、つまりキリル文字の何が、ラテン文字に何になるかを覚えてしまえば、読むことは読めると思う。具体的には以下のようになる。

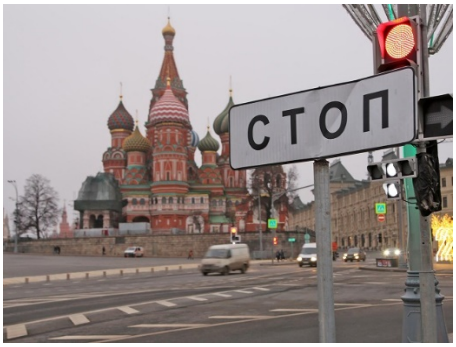
まず、ラテン語表記でもキリル文字でも変わらないものは A,M,O,T,X　の５つ。
あとは変換してから読む必要がある。ちょっと長いがまとめてしまうとこうなる。

Б は B、В は V、Г は G、Д は D、Е は Je、Ё は Jo、Ж は Zh、З は Z、И は I、Й は J、К は K、Л は L、Н は N、П は P、Р は R、С は S、У は U、Ф は F、Ц は C、Ч は Ch、Ш は Sh、Щ は Q、Ы は Y、Э は E、Ю は Ju、Я は Ja となる（正確には加えて、分離記号（硬音記号）のЪと、軟音記号のЬがある）

紙面の都合上、大文字だけをあげた。一見、とても分かりにくいが、それでも「C は F,P は R」などとよく出てくるものから覚えていくと、何となくは読めるようになってくると思う。
よって、例えば　　「ロシア」はラテン語表記　Russia　　、キリル文字表記　**Россия**

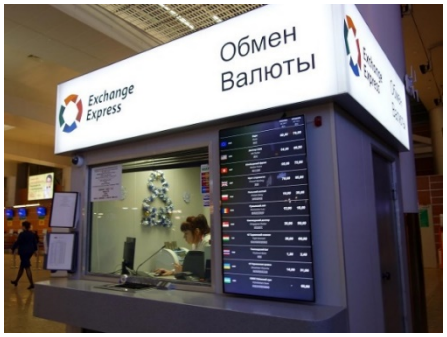
航空会社「アエロフロート」はラテン語表記　Aeroflot　、キリル文字表記　**Аэрофлот**　となる。

なお、この稿の中での話だが、固有名詞などには現地語も併記させてもらっている。やはりその国の言語は国の文化の根幹を成すものであるし、日本語表記では表現のブレが多く、自分の書き方が果たして正解なのか自身が持てないからである。特に固有名詞に関しては、表記や発音が微妙に異なり、様々な表記法が存在してしまう。よって、少々お見苦しいが、私のメモとして現地語やラテン語表記を併記させていただければ、と思う。



モスクワ中心部の聖ワシリイ聖堂前の道路標識

стоп は **stop** の意味。発音も「ストップ」と英語と完全に同じ



シェレメチェボ空港の両替所にて

Обмен は両替(英語で Exchange)　**валюта** は通貨(Currency)

あたり前だが発音できてもロシア語単語を知らないと意味が分からない‥

【5】 市内へ

わかりやすい切符購入の操作

シェレメチェボ空港のアエロエクスプレス乗り場

空港からモスクワ市内へ向かうには、2009 年に開通したアエロエクスプレス Аэроэкспресс がいいと聞いたので、乗車口を探すと、そこには窓口とともに、端末も並んでいた。機械があるとつい気になってしまう機械オタクの自分。画面を触るとロシア語だけでなく英語表示になったので、クレジット決済で簡単に切符を購入。値段は片道 500RUB(ロシアルーブル)。日本円で 720 円ほど。この列車は約 30km を 35 分で結ぶとのこと。成田ならば 60km を 1 時間で結ぶ成田エクスプレスがあるが片道 4000 円近いことを考えると明らかに安価である。

大きなバックを背負い、最新式の自動改札を抜けホームに行くと間もなく赤い 2 階建てのスタイリッシュな電車が入ってきた。2 階建て高速列車 ES h 2 型「ユーラシア」だった。ロシアの旅、いよいよスタートである。

【6】 列車の中で

現代風の車内にはカラフルな広告付きの椅子が並び、とても元共産圏の列車とは思えない。2 階建ての長い列車ではあるが利用客は多いらしく、すぐに満席に近くなった。

女性アナウンスがロシア語で、男性アナウンスが英語で行先を告げる。でもこの路線全てモスクワ市内中心部のベラルースキー駅方面行きしかないのだから、行先案内も何もあったものではないが、やはり案内はありがたい。

近代的なアエロエクスプレス車内

「コトッ　コトッ」

静かな走行音に、近くの乗客のロシア語会話が混ざる。車窓の街の風景はすでに夜のとばりが下りていたが、人々はまだまだ活気に満ちて活動していた。

「あーあ。本当に来てしまった‥‥」　「これがモスクワかぁ‥‥」　「意外と普通じゃん‥‥」

やはり、かつて見たソ連のスパイ映画の影響があり、頭のどこかで「モスクワは監視社会で、トカレフやカラシニコフを携えた KGB がいたるところに潜んでいて・・」なんて思っているから、当たり前に夕暮れの家路を急ぐ普通の人々の姿を見て、なんだか不思議な、穏やかな気持ちになってくる。

それは異国へ無事着いたという安心感と、どこか恐れていたロシアがごく普通の一般的な国であるという事実からの安心感から来ていることに自分でもわかっていた。

【7】 列車の中で判断。ロシアの運転の可否判断。

「異国の首都に潜入している」という軽い興奮のまま、流れゆく街の明かりを見ながら、ふと我に返った。

そうだ、この車内でやりたいことがあったのだ。

それは

「ロシアで車を借りて運転しても大丈夫だろうか？」

2 階建て高速電車 ESh2 型<Eurasia>に乗車！

という判断である。
唐突だが、実は自分には「ロシアの道を車を借りて運転したい」という願望があったのだ。
　おそらく一般常識を持つ人にとって「ロシアを車を借りて運転したい」と言えば、
「外国で車を運転？　そりゃ無理だろ」
「しかも、ロシアだろ？　事故率だってすげー高いって話じゃん」
「ロシアでは飲酒運転 OK なんだろ？」
「しかも今は真冬でしょ？　知らない国の雪道、氷雪路の運転なんて自殺行為だよ」というであろう。

そうなのである。
「運転マナーが最悪と言われるモスクワを」「外国人が車を借りて」「雪の降る厳冬期に車を運転する」
なんてのは、正気の沙汰でないことは十分十分理解している。

でも自分には「もし現地で少しでも可能性があるならば、どうしても車を借りたい」という欲求があったのだ。

モスクワに行ったら、できれば、いやぜひ行きたい場所があった。それはモスクワ市郊外にある博物館である。モスクワ中心部から 50ｋｍ。モニノという小さな村にある博物館をどうしても訪れてみたかったのだ。

調べてみると公共交通機関でもなんとか行けそうな場所で、めったに来ない電車を３～４本乗り継いでから１時間歩けばいいらしいが、もし本当に行くとすれば確実に１日使ってしまう。でもそれでは、自分のモスクワ滞在時間がこの博物館だけになってしまう。博物館も超重要だが、せっかくモスクワにいるのだからせめて「赤の広場やクレムリン」だって見てみたい。
そういろいろ考えて、自分の贅沢な悩みを解決するベストな方法として「赤の広場は電車で行って、郊外の博物館は
　車を借りていけばいいんじゃない？」という結論を出していた。
ここまでのことを考えて、日本を出る前に「ロシアで車を運転できる場合」「できない場合」のどちらの準備もしてきておいた。つまり「どちらでも大丈夫な用意はしておき、最終判断は現地でする」という状態である。

夜のモスクワ市内の道路

「どうしよう」

・・・・流れゆく車窓を眺めながら小声でつぶやく自分がいた。
「外国の運転」「しかもロシア」「しかもモスクワ」「しかも真冬」・・・。おそらくレンタカーを運転するのにこれ以上過酷な条件はあまりないであろう。実をいうと自分は車の運転が大好きで、既に世界各国で運転している。よって、ほかの人よりも少しは経験値があるが、ロシア訪問も初めてであるし、当然ロシアを運転したこともない。日本の免許証はずっとゴールドの無事故無違反で過ごしており、無事故の大切さ、安心・安全の大切さ、ありがたさは何物にも代えがたいこともよくわかっている。
誰に聞いても、そして自分の心の中に問うても「絶対やめといたほうがいい」というと思う。

「でも･･･」

でも･･なのである。それを押し切っても運転したい欲求を抑えきれず、どうしようもないバカな自分がいた。
日程はもちろんだが、かつてのバックパッカー時代と同じく「ロシアで車を運転する」という少々危険な香り

の行為自体をやってみたいという困った気持ちもあり、悩みに悩んだ。

判断基準は「運転のマナー」と「雪の有無」と考えていた。
「運転マナーがあまりにもひどかったらやめよう」「雪が降っていたり、路面が凍結していたら潔くあきらめよう」
そう考えていた。

・・・今、車窓を見る。

「運転マナーが悪い」と言われていても、郊外を走るアエロエクスプレス沿いの車はいたって普通に走っている。どの車も思ったよりも普通の、安全運転をしていた。
そして心配の「雪」。見渡す限りどこにも雪がない。当然、路面は乾いている。そもそも空港に降り立った時も寒くなかった。つまり「雪はない」状態、とみるべきであろう。スマホで明日のモスクワの天気予報を調べと「明日は晴れ」。ちなみに「あさっても晴れ」だった。

2017 年に登場したばかりの新しいアエロエクスプレス車両

こうなれば、もう、ためらうものはなかった。

「よし、車を借りてしまおう！」
と、流れゆく車窓を背に、スマホでかねてから目をつけていたレンタカーサイトで、明日のレンタカーの予約を完了してしまった。
「もし、明日、様子が激変しているようだったら、キャンセルさせてもらおう」
「キャンセルはキャンセル料を払えば OK って書いてあるし」と急な予定変更も含め柔軟に考えることにした。

それにしても、レンタカーの有無を悩むなんて、自分の旅のスタイルもずいぶん変わったもんだ、と思う。かつての貧乏個人旅行バックパッカー時代には車を使うなど夢にも考えなかった。
しかし、よく考えると結局「当日ぎりぎりで判断」「現地に行って考える」「リスクを含んだハラハラ・ドキドキ感が好き」は何も変わっていないことに気づいた。

「・・・・なーーんだ。結局、やっていることは変わらないんだ・・・・」

そう気づくと、思わず苦笑してしまう。
それは、旅の本質が少しも変わっていないことを少しうれしく思う気持ちもあった。

「まもなくベラルースキー駅に到着します。乗り換えは・・・」
車内アナウンスが響く。
気が付くと列車は終着駅に近づいていた。
僕は破れかけたバックパックをそっと抱き上げ、下車準備を始めた・・。

【8】 九か所のモスクワ駅

列車は、静かにベラルースキー駅に滑り込んだ。帰宅時間にも重なるホームだったが、空港特急専用ホームは人気が少なくガランとした雰囲気。ホームの横の階段を上がっていくと目の前に古く立派な駅舎が見えた。

そこに堂々と書いてある文字は、「Москва́」そう「モスクワ」と書いてあったのである。

ベラルースキー駅建物の上には“モスクワ Москва́”の文字

「わお。モスクワって書いてある･･･」

しばらくその看板に見とれていたが、あることを思い出し、ちょっと笑顔になって歩き出した。

思い出したのは、モスクワの駅名ルールである。

モスクワ市は人口約 1200 万。つまり東京と同じ規模の都市である。旧ソビエト連邦の首都であり、旧共産圏、東側諸国の中心国家であり、現在のロシア連邦の首都でもある。

これだけの大都市なので、周辺諸国へ向かう鉄道駅が多数ある。その駅ルールが独自で面白い。

まず、列車発着の中心となるターミナル駅が 9 つもある。

ヤロスラフスキー駅（Ярославский вокзал）　カザンスキー駅（Казанский вокзал）
サヴォロフスキー駅（Савёловский вокзал）　リーシスキー駅（Рижский вокзал
クールスキー駅（Курский вокзал）　パヴェレツキー駅（Павеле́цкий вокзал）
レニングラーツキー駅（ Ленингра́дский вокзал）　キエフスキー駅（ Ки́евский вокзал）
そして、ベラルースキー駅（Белорусский вокзал）　の 9 つである。

これらを見ただけで東欧諸国に詳しい方は何か感じるかもしれない。そう、これらは全て行先の都市名の駅名になっている。キエフ行きならばキエフスキー駅、リガ行ならばリーシスキー駅という具合である。もしこれを日本に当てはめると、青森駅行は、上野駅でなく「東京の青森駅」から出発する「青森発、青森行の列車」に乗ることになる。同じく大阪行きならば「東京の大阪駅」を出発する「大阪発　大阪行き」になるわけだ。

この命名法、メリットもありそうだが、慣れないと混乱すること間違いなし。本数が少ない昔ならばなんとかなったが、多数の列車が行きかう現在は、駅名と行先がずれてしまっていることも多く混乱する、とも聞いた。でも、そんな奇妙な駅名ルールがあるのもロシアらしい、と愛らしく感じてしまう。

脱線次いでにもう少し書いてしまおう。ロシアの地名は「都市名」+「規模」からできていることが多い。具体的には、集落：スカヤ(ская)、村：スコエ(ское)、町：スキー(ский)、市：スク(ск)、大都市(城塞都市)：グラード(град)が語尾につく地名が多い。よってレニングラードやユジノサハリンスクなど聞いただけで町の規模がわかる仕組みになっている。ただし、日本人にもなじみ深い極東のウラジオストク(Владивосток)は「東(восток)」と「支配する(владеть)」からできているので、生半可な知識ですべてを語ることはできない。

【9】 セキュリティチェック

閑話休題。駅の構造は簡単なようでいて、何度も同じところをぐるぐる回ってしまった。戸惑った原因は「セキュリティチェック」の存在である。そうなのだ、ロシアの駅には、必ずセキュリティチェックがあるのである。駅だけではない。公共施設や大きなスーパー、名のある公園などへ入るときは必ずセキュリティチェックがある。しかも人の流れを一方通行にしているところも多く、最初はその存在や意味が分からず、まごまご、うろうろしていたら強面の係員のおじさんから声をかけられてしまった。

「うわっヤバッ」と思ったが、意外なほどやさしい声だった。
どうやら「外へ行くの？」と聞いている。要するに駅構内から外に出たいかときいていたのである。
「そうです！」と答えると、機械の横をわざわざ開けて通してくれた。どうやら駅構内へ入る人専用のチェックポイントで困っていたようである。
「Спасибо（スパシーバ：ありがとう）」と、機内で覚えたばかりのロシア語であいさつすると、強面のおじさんは「あいよ」という感じに笑顔で返してくれた。
ほんの一瞬のことだが、旅先でのこうしたやり取りがうれしい。おそらく人生で二度と合わない人かもしれない。でも、こうした心の会話は、どんな暖房でもかなわないくらい自分の心を温めてくれるのを感じた。

そうそうセキュリティチェックだが、そういえば、先ほどアエロエクスプレスに乗車するときもやはりチェックを受けた。日本ならば「何事か？？」と思うが、すべての人が淡々と通過しているのを見て、「ああ、これが日常なんだ」と悟った。一瞬、何か怖いものに感じるが、よく考えると「これらは自分たちのような旅行者をドキドキさせるものではなく、地元民に紛れている悪い奴を探すため」のものにも感じた。
「こちらの方が、むしろ安全かも･･･」とさえ感じる。
そうやっていつもとは逆転の発想をしている自分に驚く。テロやデモなど社会的衝突の危険性がある世界では、むしろチェックしてもらった方がありがたいとさえ感じた。結局、実体験が柔軟な思考の変化も生む・・ということかも知れない。

【10】ホテルへ

さて、夜のモスクワにいきなり放り出されても困るので、この日の宿は予約しておいた。そうそう「基本は宿を予約せず」と前述してしまったが、正確には「泊るとわかっている都市の宿は予約する」ことをしている。夕方になって都市のどこに向かえばいいのか困るし、何より時間の無駄だからである。
宿の予約はネットサイトをフル活用している。ロケーション、設備、アクセス、そして値段・・。詳細な地図を含めて、今やネット上で全て検索できるので、その時点のあらゆる要素を考慮し予約をしている。使うサイトも多種多様だが、最近よく使うのは、Booking.com、Agoda、Expedia あたりだろうか？　必要に応じて Trivago のような比較サイトやホテル直営サイトも使うが自分にとっては Booking.com が一番使いやすく、かなりの数のホテル予約をこのサイトから行っている。
今回、モスクワの宿は、アエロエクスプレスの下車駅の近く、そしてその後の移動もしやすい場所で検索した。このベラルーシスカヤ駅は、各所につながっている地下鉄駅もあり、つまりこの駅に近いホテルであればいい、ということで、解説に 「ブティルスキー・ヴァル・ウーリツァ通りとトヴェルスカヤ・ウーリツァ通りが交差するモスクワ旧市街にあります。地下鉄環状線のベラルーシスカヤ駅と、シェレメチェボ空港からの空港特急が停車するベラルースキー駅から徒歩２分にあります」と書かれていた 「グランドホテル ベラルースキー」を予約した。

暗い駅を出て、スマホをそっと出してみる。Booking.com のアプリは google map と連動しているので、予約画面を追っていくだけで、目指す場所が地図上に出るのでものすごく便利なのだ。

「よし、駅を出て左側だな」

そういって、歩き出した。道行く人はみな急いで歩いている。タクシーや車の流れもひっきりなしである。でも、やはり特別な恐怖は感じなかった。一部途上国で感じる、「身の危険を感じる治安の悪さ」も感じなかった。

そこには単に、師走の忙しい一日を終え、家路を急ぐ、ごく一般のモスクヴィッチ(Москвич:モスクワっ子)の姿があるだけだった。

5 分ほど歩き、google map が示す建物についた。しかし、どこにも入り口がない。大きなビルはあるが、1 階部分は閉店している洋装店らしい店があるだけ。

「あれれ？」

大量の機材が入った重さ 30kg 近い荷物を背負いながら、何度もスマホを確認する。地図上のホテルの位置は確かにこの建物らしい。念のためホテルの住所から地図を検索してもやはり結果は同じ。つまり、この暗くて巨大な建物がホテルらしいのである。しかし、入り口がない。

仕方がないので別の入り口がないか探す。別の壁面もやはり真っ暗で何もない。ただし小さな商店や食堂が並んでいるような小さな入り口だけが開いていた。

「あれ、おかしいな」

再度、いろいろな方法で検索してみた。でも出てくる全ての情報は、入り口がないこの真っ暗な建築物が「グランドホテル　ベラルースキー」であることを指し示していた。

しばし悩むが、ここで悩んでいても仕方がない。唯一、光が指していて営業中らしいあの商店に入って、中の人に聞いてみよう思った。入り口に検問はなかったが、警備兼案内のおじさんがいた。

「Добрый день（ドーブライ　ヂェン：こんにちは）」と、これも機内で覚えたばかりのロシア語であいさつをする。夜なので「こんにちは」はおかしいが、他に知らないのである。そして続く言い方も全くわからないが、

「ホテルをさがしているんだけど？」と聞くと

「アップステアーズ（二階だよ)」と、明確な発音の普通の英語で返ってきた。

「なーんだ」･･･。

「ここが入り口なんだ」「二階に行けばいいんだ」「英語が通じるじゃん」という様々な思いを一言に詰め、そうつぶやきながらエスカレーターを上がるとそこには確かにホテルらしい受付があった。

やっと着いた　グランドホテル　ベラルースキーのフロント

受付氏は笑顔が素敵なおばさま。本当にここが目指すホテルなのか心配だったが、声をかけると

「ハイ、あなたの予約はありますよ。一泊ですね」とまた笑顔。そして施設や周辺のことを丁寧に解説してくれた。案内された部屋は小奇麗でそれなりの広さがあり RUB5.500 約 7700 円。朝食付きシングルでこの値段なら日本なら格安である。ただし節約旅行を是とする自分としてはかなり奮発したホテルである。でも部屋も素敵だが、フロントのおばさまの笑顔だけでも十分に価値があるホテルだった。

ただし、入り口だけはわかりにくかったが。

【11】夜の街歩き

荷物を解いた後、明日の動きを軽く確認する。

実はモスクワの夜は一日しか確保していない。明日の深夜にはイスラエル行きの飛行機に乗るためである。

「明日の朝は、できるだけ早く起きて、ここの朝食を食べる」

「そのあと、クレムリンと赤の広場へ」

「そのあと、モスクワ市内にあるおもしろそうな場所へ」

「レンタカーの予約は午後１時からにしてあるから、それまでに空港へ戻る」

「空港で車を借りて郊外の博物館へ」

「そして空港へ戻る」

と、ラフな案を組む。時間がある旅ならば、すべてがもっとゆっくりできるだろう。しかし、なんとか時間を作って出てきている旅である。しかもできることならば、やりたいことを全て詰め込みたいと考える。だから効率的に動くために「プランを立てる」「実施をする」「現状をみて修正する」を常に行っていくことは必須なのだ。

時間を見るとまだ夜８時。機内食が２回出たので空腹ではないが、せっかくなので街をあるいてみたい、ちょっとした軽いものがあれば食べたい、と外に出ることにした。ちなみに日本は６時間進んで午前２時である。家を出てからほとんど休まず徹夜で活動している計算になるが、憧れの海外に出ているという興奮で、疲れは全く感じていなかった。

夜のモスクワは素敵な街だった。気温は低いが我慢できないほどではない。街にはクリスマスのイルミネーションが光り、カフェは優雅な時間を過ごすカップルでにぎわっていた。

今いるベラルースキー駅、というのは東京でいえば新宿のような、モスクワのど真ん中の一つである。よって夜にも営業している店もそれなりにあるが、大人っぽいバーだったり、ワインが似合う大人のカフェだったりして、自分のような「ちょっとなにかを食べたい」という人間が気軽に入れる店は見つからなかった。

そうそう、書き忘れていたが、自分はアルコールが飲めない。苦手というレベルではなく、体がアルコールを完全拒否する体質で、ブランデーが入っているロシアンティーや、ウイスキーボンボンといった類のみならず奈良漬けも駄目である。そしてタバコも吸えない。この２点に関して言えば健康優良体で、いつでも車の運転ができるメリットはあるが、こういった夜の飲食店というとかなり苦手な分野になる。だからこういった大人の雰囲気がある街を歩いても、入りたい店、いや入れる店がないのだ。

しばらく行くとある店があった。最近「もし、海外でこの店を見かけたら、一国で一回は行ってみよう」という店の一つである。丸い緑色の円に人魚がいるシアトル発祥のコーヒーチェーン店、そうスターバックスである。

日本でもおなじみのスタバだが、実は自分、身近な店舗にほとんど行ったことがない。「コーヒーは・・ウチで飲めばいいや」と、自宅近くにおしゃれな新店舗が開店し、ドライブスルーに車が連なっているのを見ても、一度も行っていない。もちろん何かの出先や友人とのちょっとした会合に使うこともないわけではないが、日本国内で自分から進んで、しかも一人で行くことは決してない店である。

しかし、海外は別。今やスターバックスもいろいろな国に出店し、北京の紫禁城の内部にさえ店舗があるが、機会さえあれば「一国で一回は行ってみよう」と思うようになった。ご当地マグカップやタンブラーを集めてみたこともあり、すでに２０か国ぐらいの店舗は回っていると思う。

モスクワの主要ターミナルであるベラルースキー駅

ロシア最初の夜の食事がスタバでいいのか？との思いはあったが、それよりも「ロシアのスタバはどんなものか見てみたい」という気持ちが強く、入ってみた。

「いらっしゃい」

と、若い男性店員が笑顔で迎える。店内にはおしゃれな若い女性がスマホを片手に二人で話に花を咲かせていた。メニューは、詳細な比較はできないが、コーヒー系のものは大筋一緒。ただしサイドメニューはかなり異なっていた。ロシア語のメニューに戸惑っているとさきほどの若い店員が、丁寧に教えてくれた。

サイドメニュー豊富なスターバックス店内

テーブルに着き、改めて店内を眺めると、いつものおしゃれなスターバックスである。

「･･･なんか、ロシアって感じがしないな」

先客の二人が続ける明るい会話を聞きながら、おいしいコーヒーと優しい味のパイやトーストを食べているとここがあのロシア、あのモスクワであるということが信じられなかった。レーニン、スターリンの銅像が立ち並ぶ、独裁と抑圧の恐ろしい共産圏の心臓部であり、厳密な監視下にある人民の集まりであるはずの、僕の思い描いていたあの旧ソビエト、ロシアとは思えなかった。

BGM はブリテッシュロックのスタバ店内

「･･･結局、自分もそういった『ステレオタイプのロシア』ってものを信じ込まされていたんだな」

・・・ふと。謎が瞬時に解けた気がした。

「だれか･何かの偏向的な意見に偏りたくない」と、できるだけ多くの書物を読み、情報を自分で調べ、できるだけ公正・公平に状況を判断しようとしてきた自分なのに、いつのまにか、やはり誰かが作ったストーリーを信じていた、ということが理解できたのである。町の様子、車の動き、そしてたくさんの人々の笑顔を見ていると、かつての恐ろしかった「ソビエト連邦」はここに存在しないことを、ここにきてようやくわかったのである。

「Спасибо（スパシーバ：ありがとう)」自分が知っている最大限のロシア語でそういうと、若い店員は笑顔で、「Добро пожаловать(パジャールスタ：どういたしまして」と返してくれた。

ホテルに戻るとき、ふとホテルのビルを見上げた。さっきは気づかなかったが、その上部に大きく Гранд Отель Белорусская （グラント・オテリ・ベラルースカヤ）とホテル名が光っていた。

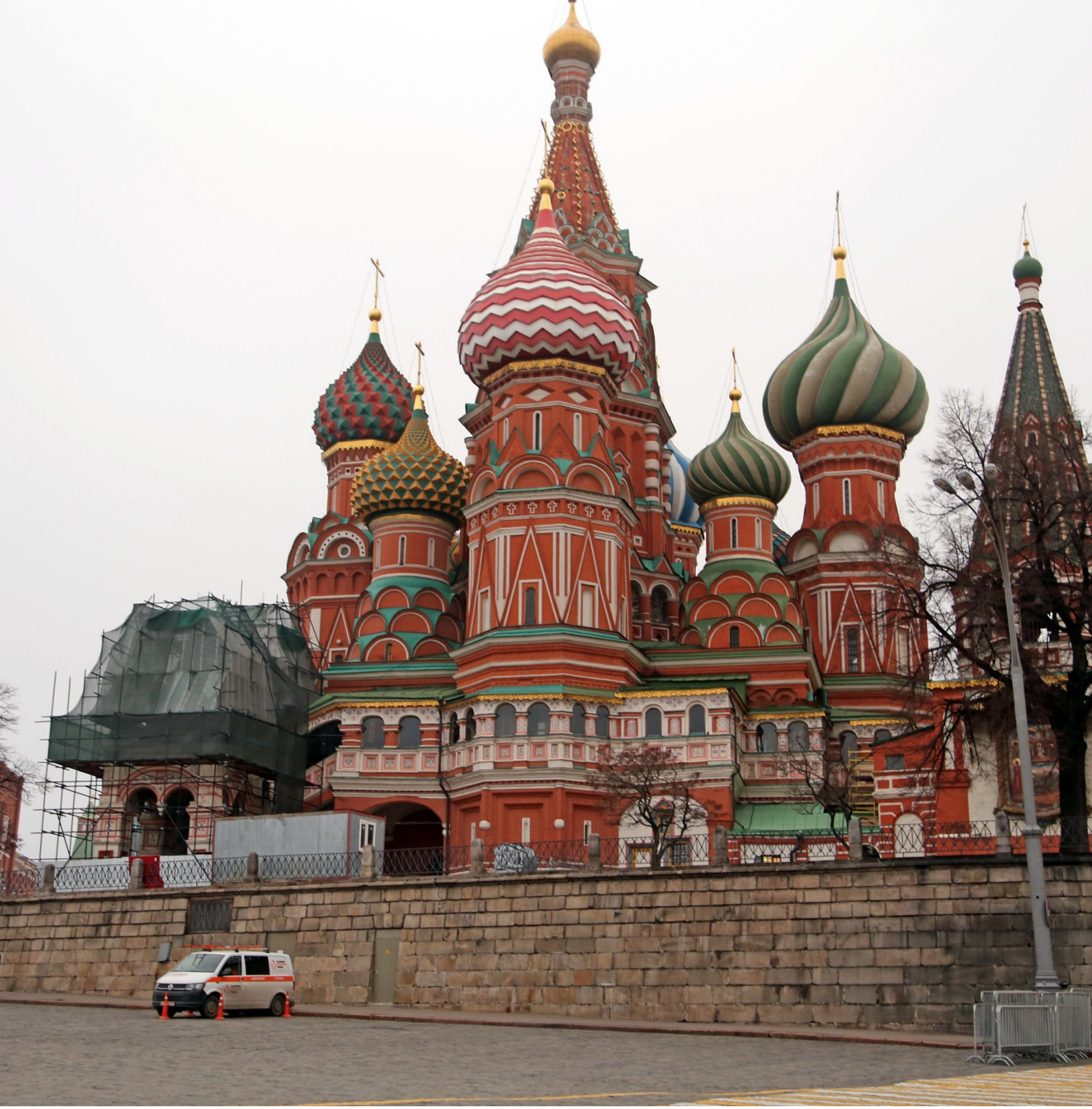
「･･･そうか。悪いのはホテルじゃなかったんだ」

何のことはない。ホテルは何も悪くなかった。大書してある表示が見えなかった自分が悪いだけだった。

「･･･モスクワって･･･素敵な街だな」

厳寒の冬のロシア。

でもたくさんの温かいものに出会って、温かい人に出会って、ロシアの温かさを感じたモスクワの夜だった。



赤の広場のシンボル　聖ワリシイ大聖堂

第5章　赤の広場

Красная площадь

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第 5 章　赤の広場

【1】 出発

ホテル　グラント･オテリ･ベラルースカヤ外観

朝、予定していた時間に目覚めた。普段の不摂生な生活が幸いして、時差なるものは全く感じないのがありがたい。素早く朝食へ向かった。「ドゥブレーウートラ(Доброе утро：おはようございます)」と覚えたばかりのロシア語であいさつをすると、受付嬢はわずかに微笑んで同じ言葉を繰り返した。朝食には赤い野菜スープもあった。ボルシチである。ロシアの一般的な家庭料理で、いわば味噌汁のようなものらしく味付けは千差万別らしいが、ここのボルシチはやや酸っぱく、でも優しい味付けだった。

そしてチェックアウトをした。市内を大きな荷物で歩くのは大変なので「バックパックを預かってもらいたいんだけど」頼むと、窓口氏はにっこりと「もちろん」と笑顔で答えてくれた。そして「Спасибо（スパシーバ：ありがとう)」と大きな声でいうとまたもにっこりと笑顔で返してくれた。考えてみればこの言葉、ロシア滞在中に一つ覚えのように乱発･濫用してしまったが、出会った人は皆笑顔で返してくれた。世界中どこでも感じるが「ありがとう」と言われて嫌な気持ちになる人はいない。まして外国人がその国の言葉で発する「ありがとう」は、たどたどしい発音も含めて、プラスに捉えてくれる人が多いことをいつも感じる。

【2】 モスクワ地下鉄

冬のモスクワ朝 8 時は夜中のような暗さ

ドアの外は、午前 8 時というのに真っ暗な夜の世界だった。そういえば緯度の高い地方では、冬の朝が遅くなる。この日のモスクワの日の出の時刻は午前 8 時 50 分とのこと。道理で暗いわけである。

地下鉄駅へ向かいながら、簡単に今日の予定を確認する。

「まずは、クレムリンと赤の広場にいこう。その後、地下鉄で行ける範囲に有名な修道院が2つある。そのどちらかに行き、ホテルに帰って荷物をピックアップ。アエロエキスプレスでシェレメチェボ空港に戻り、そこでレンタカーを借りる。そして車でモニノ村の博物館まで。そのあとゆっくり市内見学をしながら空港に戻り、深夜発のイスラエル行の飛行機に乗る･･」。

まずは地下鉄でクレムリンと赤の広場に向かうことにした。ホテルの窓口氏にクレムリンへの行き方を聞きたところ、やはり地下鉄で行くのが一番、と言っていたからである。

地下鉄券売機と 1 日パス

地下鉄の入り口は、すぐの場所にあった。入口は「вход（フホード)」、出口は「выход（ヴィハド)」と分かれているが人の流れを見ていればそんな言葉知らなくても問題なし。

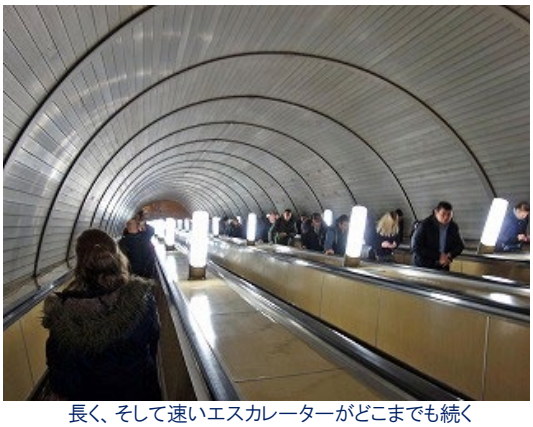
外国で公共交通機関に乗る場合の最初の関門が切符の購入だが、今回は悩む暇もなかった。すぐに立派な自販機が目に入ったからである。画面上の「EN」を押して英語にすると、操作は拍子抜けするほど簡単だった。これも 2018 年のサッカーワールドカップ開催を契機にできるだけ英語も使えるようになったとのこと。画面には、1 PASS 55RUB、2 PASSES 110RUB、RECHARGE CARD　<TROIKA>と出てくる。それぞれ 1 回券 55 ルーブル(¥77)、2 回券　110 ルーブル(¥150)、IC カード＜トロイカ＞、になる。日本に比べかなりお安いが、さらに便利な 1 日券、3 日券もある。自分は一番手軽な一日券を選んだ。230 ルーブル(¥350)。これでモスクワの地下鉄を一日乗り放題。ニューヨークの地下鉄の一回券が今 3 ドル(320 円)のことを考えてもかなり安価な値段である。

モスクワ地下鉄(Московское метро)は、世界の鉄道好きならば一度は乗ってみたいと思う路線である。少し長くなるが、モスクワの文化と考え書かせていただいてしまおう。

モスクワ地下鉄は、現在 12 路線（230 駅 346.5km）で運行している。一日あたりの平均利用者数は 800 万人

でモスクワ全交通量の 57% のシェアを誇っている。特筆すべきは使い勝手の良さである。まず路線がわかりやすい。中心になっているのは、5 号線という環状線で、直径 5km、一周 19.3km の環状路線で、カホーフスカヤ線（ 11A ）とブートフスカヤ線（ 12 ）を除く全ての路線と接続していて、どこに行くのも便利である。また世界でも有数の高頻度運行のスケジュールを持ち、列車を待つ待ち時間が少ない。ピーク時の運行間隔は 90 秒（40 本／時間）で運行という、非常に高密度な運転をしている。東京・山手線の運行頻度が 2 分 40 秒だと聞けば、モスクワ地下鉄のすごさがわかっていただけるだろうか。また、駅間の平均距離が 1.8kmと長いので、列車の平均速度（駅停車時間含む）も 41km/h とかなり速い。またアナウンスも工夫されていて、郊外から市中心部に向かう列車は男性の声。市の中心部から郊外に向かう列車は女性の声（環状線では右回りが男性の声、左回りは女性の声）でアナウンスしているので声を聴くだけで路線の方向が分かるようになっている。（ちなみに山ノ手線も駅の自動放送は「男性の声が外回り」「女性の声が内回り」である）

モスクワ地下鉄路線図　https://stroi.mos.ru/metro


長く、そして速いエスカレーターがどこまでも続く

また、路線の特徴として、非常に深い場所を走っているため、エスカレーターは毎分 60m と日本の約 2 倍の速度がある。あまりに深く、核シェルターを兼ねているとの話もあるが、手すり部分で事故がないようにわざと電灯があったり、転落事故防止かつ治安維持のため、監視員がついているエスカレーターもある。同じホームで違う路線に乗り換えができる場所も 5 か所（6・7 号線の Kitaj-Gorod 駅、2・11 号線の Kashirskaya 駅、6・8 号線の Tretjyakovskaya 駅、3・4 号線の Kuntsevskaya 駅、3・8 号線の Park Pobedy 駅）あり利用者の便宜を図っている。技術的なことを言えば、モスクワ地下鉄のレールの幅はロシア標準規格の 1520mm なので、日本の新幹線（世界でいう標準軌）の 1435mm よりも幅広く、トンネル容積が増して、工事などは大変だが、車両容積は大きくカーブも安定して走れる。また第三軌条方式という線路横の電線からの集電方式なので、架線+パンタグラフの空間が不要でトンネル工事のコストが多少下がる、というしくみを取っている。

この地下鉄は旧ソ連時代の「国家 5 ヵ年計画」により建設が進められ、1935 年 5 月に開業した。ロンドン、ニューヨーク、パリ、ベルリンの各地下鉄からの技術支援を得たが、設計と建設は旧ソ連の技術者により行われた。最初の路線は、ソコリニキ駅 - パールク・クリトゥールイ駅間にスモレンスカヤ駅への分岐線付きで 1935 年 5 月 15 日に開業した。（ちなみに日本の地下鉄は 1927 年の現東京メトロ銀座線　上野-浅草間が最初といわれているので、日本の方が少し早いことになる。）

またそれぞれの駅が「地下宮殿」と呼ばれるほど、社会主義リアリズムの様式に沿った豪華な装飾が施されていることも有名。48 駅が文化遺産、また 40 駅以上がランドマークとされているとのこと。こんなに見どころいっぱいの地下鉄だが以前は写真撮影すら禁止だった。しかしロシアの民主化に伴い徐々に緩和。写真撮影の正式な解禁は 2018 年だが、今は「写真おすすめスポット」マークまであるなど大きな変化をしている。

美術館のような地下鉄駅構内

4 号線を走る新型車両(81-765/766/767 型)

話ついでに世界の地下鉄のデータを列挙したい。
まずは 2019 年度の総延長比較である。
1 位 上海(中国)632.1km、2 位 北京(中国)572.0km、3 位 ロンドン(イギリス)402.0km、4 位 広州(中国)386.0km、5 位 ニューヨーク(アメリカ) 380.0km、6 位モスクワ(ロシア)346.2km、7 位 ソウル(韓国)326.5km、8 位 東京(日本)304.5km、 9 位 マドリード(スペイン)293.0km、10 位 深圳(中国)285.9km である。

もう一点、2019 年の輸送人員比較をすると
1 位 北京(中国) 37 億 7790 万人、2 位 東京(日本)37 億 1360 万人、3 位 上海(中国)35 億 3760 万人、4 位 ソウル(韓国)32 億 5210 万人、5 位 広州(中国) 28 億人、6 位 モスクワ(ロシア) 24 億 4240 万人、7 位 香港(中国)17 億 6710 万人、8 位 ニューヨーク(アメリカ) 17 億 2730 万人、9 位 深圳(中国) 16 億 5440 万人、10 位 メキシコシティ(メキシコ)16 億 500 万人 となる。

ロシア、そして東京もかなりのものだが、こうしてみると中国の躍進が目立つ。こんなところにも近年のチャイナパワーの威力を感じる。

さてベラルーシスカヤ駅から赤の広場へ行くのは 2 号線を使って、ノヴォクズネツカヤ駅 Novokuznetskaya あたりに行けばいいらしい。ものすごく深い、そして速いエスカレーター。華麗な装飾の天井などいろいろに圧倒され、通勤途中の人々の中でもまれながら、目指すノヴォクズネツカヤについた。

【3】 赤の広場へ

時計を見ると朝の 9 時。しかし目の前の風景はやはり夜である。日本ならば、朝日が出かかった夏の 4 時ごろだろうか。気持ち的には 1 分 1 秒でも早く明るくなって欲しいのに、こればかりは 12 月に旅している自分の都合なので仕方がない。

クレムリンまでは距離があるのでモスクワの早朝の雰囲気を楽しみながら歩くとモスクワ川のかかる巨大な橋と、その向こうに巨大なクレムリンの建物群が見えてきた。

それにしても、道路が広い。

クレムリンの横を流れるモスクワ川の朝 9 時半の風景

世界各地を歩いていると、日本とはあまりにも違う風景に驚愕することが多いが、特に共産圏の首都の造形はその圧倒的なインパクトに言葉を失う。このあまりにも広い作りのモスクワ中心部と同じ雰囲気を感じるのは、やはり「共産圏の首都の広場」である。一例をあげれば、中国・北京の天安門広場、キューバのハバナの革命広場、そしてルーマニア・ブカレストの革命広場など、そこに立つとあまりの広さに、何かただならぬものを感じる。ただしどれも「革命」「事件」など政変の大事件で有名になってしまっている場所ばかりであるが。

1959 年のキューバ革命の中心地
キューバ･ハバナの革命広場

1989 年 12 月のルーマニア革命の現場
ルーマニア･ブカレストの「国民の家」の広場

1989 年 6 月 4 日の天安門事件の現場
中国･北京の天安門広場

時間は午前９時３０分。日本ならばもっとも活動的な朝の時間帯だが、師走のモスクワは、薄暮の朝もやの中にようやく太陽が出てきた時間だった。

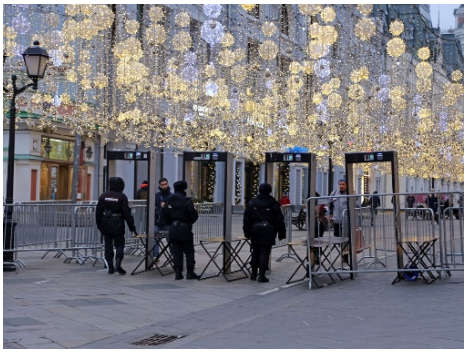
僕はその薄明りの巨大な道路をテクテクと進んでいった。

赤の広場につくと、セキュリティチェックがあり門は閉まったままだった。

そこにいた若い警備員氏に

「入ってもいいですか？」と尋ねると

「10 時からな。もうちょっと待ってて」というので周辺を歩くことにした。



セキュリティチェックとクリスマス装飾

近くにあるものといえば赤の広場に隣接したグム百貨店であろう。この一見美術館にも見える建物は、それ自身がロシアを代表する建築物に指定されているほど立派である。もともと民営の小店舗からなるショッピングモールで、1917 年のロシア革命の時点で 1200 店舗ほどが営業をしていたという。しかしソビエト時代に国に接収され、国営のショーケースと化し、「豊富な商品・豊かな食料品を販売しているソビエト連邦」を演出させられるために使われた。そもそも、グムとは、国営百貨店 **Государственный Универсальный Магазин** の頭文字（ロシア語: **ГУМ** 、ラテン文字表記 GUM）に由来するので、ロシア国内の他の場所にもグムはあるが、これがあまりにも有名なので、多くはここを指すものらしい。ソビエト崩壊後は、再び民間に戻され、現在はロシア有数の流通会社が経営する、いわば普通の百貨店になっており 200 店舗ほど入っているそうだ。

©Google

赤の広場に隣接するグム百貨店

グムの周りをゆっくりと歩く。先ほどとは別の入り口を見つけ、警備員さんと雑談をする。10 時までは間があったが、話ついでに「入ってもいいですか？」と尋ねたら「‥え？‥‥まぁ、いいか」と入れてくれた。厳密なようでいて、意外と適当でありがたい。

【4】赤の広場

赤の広場のことは、たくさんの書籍で読んできたし、映像で何度も眺めてきた。世界史に疎い自分だが、やはり死ぬまでに絶対来てみたかった場所の一つである。

モスクワの、いやロシア、ソビエト連邦の象徴的な場所であるこの広場について簡単に言及したい。

現在の「ロシア共和国」の前が「ソビエト連邦」、そしてその前が「ロシア帝国」であったこの国において、モスクワが首都になったのは実はソビエト時代からである。ロシア帝国時代の首都はサンクトペテルブルクであった。しかし、ソビエト共産党一党独裁政権樹立以降は、隣接するクレムリンとともにこの場所は国家の象徴になっていた。ここが赤の広場（クラスナヤ広場）**Красная площадь** クラースナヤ・プローシシャチ)」という名で呼ばれ始めたのは 17 世紀後半である。最初の名称は「赤の広場」ではなく「トルグ広場」（トルグとは交易や商

赤の広場(クラスナヤ広場)

売の意味)、広場の隅に立つトロイツカヤ聖堂から「トロイツカヤ広場」、1571 年のタタール人襲撃で起きた大火による「ポジャール広場（火事広場)」等様々な呼び方をされた。現在の「クラスナヤ Красный」は、ロシア語で「赤い」の意味だが、語源をたどると古代スラヴ語で「美しい」を意味する事から「美しい広場」が本来の意味らしい。とにかく(自分も誤解していたが）決してソビエト共産党の「赤」が由来ではないとのこと。

この場所の起源は 1493 年にモスクワ大公国の統治者イヴァン 3 世の居城であるクレムリンの前の市街地を、広場として整理させたのが起源とされている。それ以来、重要な国家行事がここで行われるようになった。長さ 695m、道幅 130m、面積は 7 万 3,000 ㎡。ただしこんなに大きくなったのはロシア革命後で、それ以前は半分の面積だったという。しかしソビエト成立とともに、ここは最高権力者の富と力を象徴する場となっていった。

赤の広場で営業するグム百貨店の移動遊園地

・・こんなことを考えながら、赤の広場をゆっくり歩いた。巨大すぎるクレムリンの城壁を横目に、あまりにも広い石畳の広場は、今まで映像の中で見てきた、あの広場と同じだった。違うのは清掃をする作業員さんたちがサボリながら談笑する姿、観光客がにこやかにスマホで自撮りする姿、警備員さんたちが暇そうに無駄話をしている姿。そしてグム百貨店が設置した移動遊園地の原色できらびやかな遊具たち・・・。

今の赤の広場には「平穏」という雰囲気しかない。

「こんなに平和な、普通の広場なんだなぁ･･･」

ソビエト時代には考えもつかない雰囲気に驚きながらも、僕はゆっくり広場を歩いて行った。

しかし、中ほどのある建物で、あるものを見つけて歩みを止めてしまった。それは年間 2000 万円以上ものお金をかけて、ほぼ 100 年間、ある人物を冷凍保存している場所。そう「レーニン廟」である。

そうだ、ここで歴史の話をしたい。

自慢ではないが自分は世界史が大の苦手である。高校時代、あまりの出来の悪さに嫌気が差し、センター科目を途中から世界史から地理に変えたという超世界史オンチであるが、やはり触れたいと思う。

【5】ロシア帝国

この地の歴史は長く深いが、ここでは 18 世紀のロシア帝国の時代から始めたい。ロシア帝国の定義は諸説あるが、一般的にはピョートル 1 世が即位した 1721 年に成立したロマノフ朝のことを指すだろう。初代皇帝ピョートル 1 世は、近代化が遅れていたこの国を、強大な国家に育て上げた名君として今のロシアでも人気がある人物である。当時のロシア帝国は、現アメリカ領のアラスカも含む、非常に広大な領地を有しており、当時の覇権国イギリス帝国とも並ぶ勢力を誇っていた。そしてロシア帝国の歴代皇帝の多くは戦いも上手でプロイセンを破滅寸前まで追い込んだり、オスマン帝国に勝利し、クリミア半島を手に入れたり、ナポレオン軍を撃退したりもした。しかし、その後、ドイツ、イギリスなどとも戦火を交え、日露戦争の敗戦後に徐々に勢力が衰えていった。そして 1914 年に第一次世界大戦が勃発。ロシアも参戦した結果、膨大な戦費は国民の生活を圧迫し帝政への不満が高まるきっかけとなっていった。そしてそれに呼応する形で、1917 年、革命が起きる。首都ペトログラードで労働者が蜂起する二月革命が起き、その結果ニコライ 2 世が退位し、ここに 200 年近く続いたロシア帝国が消滅した・・・。

これがロシア帝国の概略である。話題が少しずれるが、こうしたロシア帝国の歴史の中で、僕が個人的に好きなのはやはりピョートル 1 世である。ピョートル大帝とも称され、大北方戦争などに勝利し、ロシアを東方の辺境国家から西欧諸国にも負けない近代国家に脱皮させたロシア帝国の初代皇帝。プーチン大統領の最も尊敬する人物で、大統領執務室の背後にはピョートル大帝の巨大な肖像画が掲げられているといわれている。

ピョートル１世の白眉は、25 歳のヨーロッパ遊学だと思う。すでに皇帝の立場にあったにも関わらず、「ロシアをより強くするため」と、１年半もの間、偽名を使い自ら他国の様子を勉強しに行ったという。中でもオランダでのエピソードは変わったものも多く、「船大工の一人として働いた」、「歯科医に学び、実際に患者の歯を抜いた」などの経験もしたとのこと。そして軍事施設や病院、博物館、動物園や植物園、天文台まで訪れ、それをもとにロシアの近代化・西欧化を図ったとのことである。

この話に、私たちの毎日生きている社会組織の中にも生かせるヒントがあるような気がする。つまり、トップたるものは実際に動いている部下の様子を知れば課題も見え、改善に生かせるのでは？ということである。“皇帝”という地位に甘んずるのではなく、時にはプライドを捨て、一人の労働者として社会を見て、その中から課題と改善点を見つけ、そしてそれを生かし組織をより強固にしていくことの素晴らしさ。リーダーが現場の実際の様子を知り、時には柔軟に、時には強いリーダーシップで組織を率いることは、強固で柔軟な組織を作っていくことに非常に有効であると、ピョートル大帝は教えてくれている気がする。

【ソビエト社会主義共和国連邦の国旗】
鎌と槌で農民と労働者の団結を表している

【6】ソビエト誕生

では帝国の崩壊からソビエト社会主義共和国連邦 Союз Советских Социалистических Республик(СССР)の成立までを見ていこう。ロシア帝国の最後の皇帝はニコライ２世。ロシア革命の直接の引き金は 1917 年の２月、生活の改善を求める民衆への軍事弾圧に端を発したものだが、それ以前にもすでに民衆の不満はたまりにたまっていた。そんな中、再び 10 月に革命が起き、ここに完全にロシアの帝政が終焉を迎えた。結果的にこれが 1918 年の世界初の社会主義国家ソビエトの成立につながった、というわけである。

この「帝政ロシア」から、「ソビエト連邦」への移行がポイントである。かつて自分は勝手に**「ロシア国民は自分たちで帝政から共産主義を選んでいったんだな」「国民の意思で社会主義国家にうまく移行できたんだな」**とも思っていた。「国民は自ら喜んで共産主義を選んだ」と思っていたのである。でも、いろいろな文献を読んでいくうちに、それが大きな間違いであることが分かった。ロシアの人々は“改革”を求めてはいたが“共産主義化”“社会主義の世の中”は求めていなかったのである。

正確に言うと「共産主義」の内容を理解していたのはレーニンの周辺にいたごく一部であって、社会主義、共産主義の仕組みがどんなものなのかは、ほとんどの人は知らなかったという。ほとんどのロシアの人々は単に**「少しでも暮らしが楽になりますように」**と願い、**「現在の貧困はロシア皇帝、ロマノフ家のせいだ」「ロマノフ家が皇帝から退位すれば暮らし向きはよくなる」**と考えていただけである。

そんな時、ロシア皇帝ニコライ二世は、第一次世界大戦への参入を決めてしまう。結果的にはこれがロシア国民を蜂起させる直接的な原因となっていくのだが、皇帝としても参戦せざるを得ない事情も読み取れる。

当時ロシア帝国は 1904 年の日露戦争で実質的な敗退をしたことをきっかけとして、東アジア進出をあきらめ、バルカン半島方面への関与を深めていた。当時のバルカン半島はオスマン帝国の後退により列強が覇権を争う「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれている非常に不安定な地域であったが、オーストリアとの対立、不凍港確保の願いなどから、第一世界大戦に参戦してしまったのである。

しかし、最初こそそれなりに国民の支持を得た参戦だが、長期化・泥沼化していく戦況に加え、そもそも度重なる戦争に辟易していたことなども重なり、皇帝から民心は離れていく。そして起こったのが**「(戦争よりも)パンをよこせ」**という主婦の声から始まった民主化運動である。やがてその声は大きくなり、1905 年 1 月 9 日（日）には首都サンクトペテルブルクで、大規模な抗議デモが行われた。ただしこれは暴力的なものではなく、労働者が平和的に行った請願行進であった。しかし、あまりの群衆の多さに驚いた軍部は民衆に向かって発砲し、多数の死傷者を出してしまう。これがいわゆる「血の日曜日事件」で、ロシア第一革命の直接の引き金とされる事件で

ある。もともとロシアの国民は、皇帝に関してはそれなりの敬意を抱き、それほど憎悪していなかったという。しかし、この件をきっかけに、皇帝への信頼は地に落ち、結果的に皇帝は退位、監禁、処刑という流れになっていった。ちなみに、このニコライ２世にはかわいらしい皇女４姉妹がいた。長女オリガ、二女タチアナ、三女マリア、四女アナスタシアで、頭文字をとって OTMA と称され、当時のロシア国民に大変愛されていたという。しかし、ロシア革命後、皇帝とともに幽閉され、1918 年 7 月 17 日全員処刑されてしまった。このとき 4 女のアナスタシアは 17 歳。写真技術が生まれ始めた時期で、この 4 姉妹の愛らしい姿の画像が今も多数残っている。これらの資料を見ていると「革命」という名のもと、皇帝一家を含め非常に多くの悲劇があったという事実に胸が痛くなってしまう。私たちが歴史を学ぶ意味は、こうした悲劇を繰り返さないようこれから何ができるのか真剣に考えろ、という多くの人からのメッセージなのだと強く思う。

さて、こうして、皇帝は退位し、ロマノフ王朝は終焉したが、すぐに共産党政権が成立したわけではなかった。ここからも泥沼の内戦が待っていたのである。

皇帝なき混乱は２つの政治権力を生んだ。一つは形式上ロマノフ王朝からの政権を移譲された形となった「臨時政府」。そしてもう一つはレーニン率いる「ボリシェヴィキ」 большевики という左派の一派である。臨時政府は新しいロシアを議会制を基礎とした共和制国家にしようと、資本主義を擁護する姿勢を明確にしていた。つまり現在のフランスやドイツのような国家体制を目指した政府だったが、対するボリシェヴィキは、今までにない全く新しい国を作ろうと考えていた。マルクスの「資本論」にある社会主義・共産主義の国を作ろうとしていたのである。

「臨時政府」と「ボリシェヴィキ」が存在する状態は「二重権力」とも呼ばれ、ドロドロの内戦を繰り広げた。ボリシェヴィキは全市的な労働者の代表機関を各地に作り、その代表機関は“会議”、つまりロシア語で Советский（ソビエト）と呼ばれる組織だった。そう、ソビエトとは、“会議“という意味である。各地にソビエトを作ったボリシェヴィキは、徐々に勢力を拡大していったが、軍隊は臨時政府が持っていたため内戦は深刻化。

しかし転換点があった。それは「今、行われている第一次世界大戦に継続参戦するか」の判断である。臨時政府はイギリス・フランスとの経済協力を失うことを恐れ、戦争を継続することを表明。しかしボリシェヴィキは戦争からの撤退を表明。既に戦争に辟易していた国民の多くは戦争撤退論、つまりボリシェヴィキの支持に動き、1917 年の 2 月革命を経て、正式にボリシェヴィキ、つまり「ソビエト」がロシア帝国の後継となったのである。

つまり国民は「共産主義」を理解して支持したわけではなかった。毎日の生活は苦しく、そして「今やっている戦争から撤退する！」と言ってくれたリーダーを支持しただけということになる。

歴史に“もし”と問いかけることはナンセンスだが、もしこの時、臨時政府が、第一次世界大戦戦争からの脱却を表明していたら・・・もしかするとソビエトは存在せず、ドイツのような立憲君主国家ができていたかもしれない。共産主義国は存在せず、冷戦もなく、東欧諸国も、いや世界も全く違ったものになっていたかもしれない。

【7】ソビエト建国の父 レーニン

ソビエト成立を語るためには、やはりこの人の話題に触れないわけにはいかない。ウラジミール・イリイチ・レーニン Влади́мир Ильи́ч Ле́нин である。彼は 1870 年に良家の子としてロシア・シンビルスクに生まれた。幼少時から非常に賢い子どもだったようだ。しかし 17 歳の時、兄がある事件により絞首刑にされたことをきっかけに、帝国主義に疑問を感じ、学生活動に身を投じるようになった。その後、政治活動は本格化。逮捕やシベリアへの流刑、スイスへの亡命などを経て、1917 年の二月革命後にドイツの協力を得て帰国。そしてここでロシア社会民主労働党の多数派、ボリシェヴィキを率いて、臨時政府との権力闘争に勝ち、十月革命を成功させ、ソビエトを成立さ

地下鉄駅のレーニンと労働者の姿

せた。もとから様々な書籍を読み漁っていたレーニンだが、流刑地でも多数の書物から活動構想を練っていたという。そんな中で彼が傾倒していったのが、カール・マルクス Karl Marx の『資本論』による共産主義である。「ブルジョワジーに搾取されている労働者階級によって社会主義革命が起こる」と考える思想に共鳴し、レーニンは「帝国主義論」「国家と革命」など多数の書物を記し体系化していった（ちなみにレーニンとはペンネームであり、本姓はウリヤノフ Улья́нов という）。そしてその理論をロシアに適用し、労農同盟による革命で、帝国主義からプロレタリア独裁への大転換ができると考え、様々な活動を行っていった。ソビエト成立後は第一次世界大戦からの離脱と産業の国有化や土地の分配を行い、労働者と農民が国の中心となる社会主義国家を樹立していった。ソビエト崩壊後に公開された資料によると、成立当初のソビエト共産党は、後からは考えられないくらい自由に意見が飛び交い、様々な論戦が行われていたという。時には最高実力者のレーニンすら論破され、彼が自説を曲げることもよくあったという。しかし、こんな状態も長くは続かなかった。1918 年 8 月にレーニン暗殺事件が起き、銃弾 2 発が彼の肩と肺に命中。そしてこの負傷により健康状態が悪化し、1922 年には脳出血で倒れてしまう。そして 1924 年、脳梗塞のため死亡してしまったのである。つまり 1918 年のソビエト成立からわずか数年で政治の第一線から退いてしまったことになる。

赤の広場にある、今もレーニンが眠るレーニン廟

【8】「恐ろしいソビエト連邦」はスターリンが作った

レーニンの死後政権を握ったのはヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリン Ио́сиф Виссарио́нович Ста́лин。スターリンとは「鋼鉄の(男)」という意味のあだ名であり本姓はジュガシヴィリという彼こそ、ソビエトを社会主義の独裁国家として確固たるものにしていく首謀者である。よって私たちが描いている「怖いイメージのソビエト」はスターリンが政治体制を強固にするために作ったものといえよう。スターリンはレーニンを神格化し、「マルクス・レーニン主義」を絶対的なものとしつつ、その正当な後継者が自分だと主張することにより、自分自身を神格化し、絶対的な権力を握っていった。

マルクスは「資本論」で、農民と労働者階級による共産主義を唱えたが、実際の国づくりの運営方法までは記していなかった。またレーニンも新しい国づくりを始めたばかりで、その改革を最後まで完遂することはできなかった。しかしその状況を利用し、自分の権力をより強固に、そして絶大なものにしていったのがスターリンである。レーニンの死後、国内各地にレーニンの像を建て、レーニンを崇拝させた真の目的は、その後継者である自身を崇拝させ、神格化させることに他ならなかった。レーニン自身は、神格化はもちろん、自身の銅像を作らせることは反対だったという。実際、彼の妻はスターリンに反対意見を言ったらしいが、当の本人が亡くなっているため黙殺されたという。

スターリンは 1879 年にグルジア(現在のジョージア）の貧しい職人の家に生まれた。貧困の中にも教育熱心だった母の希望で神学校に進み、そこでジョージア語だけでなくロシア語を学んだ。当時、学校へ行けるのは裕福な家庭の子のみであり、貧困家庭出身で体も小さく、手足に軽い障害を持っていた彼は、そこで差別を受けたという。ここでの差別が、後のブルジョワ撃退の原動力になったらしい。ここで語学の才能に目覚めた彼は様々な本を読み漁る。そうしてグルジア人の苦難の歴史を知り、帝政を敵とする民族主義者となる。そして同じ志を持つレーニンの著書に感銘を受け、労働活動をも開始。結果的に激しい労働活動が原因で神学校を追放され、逮捕もされるが民族主義運動への彼の思いは熱くなるばかりだった。何度逮捕やシベリア流刑を受けても脱走し、結果的に労働活動界で頭角を現していった。このころのレーニンの活動は決して合法的なものばかりではなかった。仲間とともに、銀行強盗、麻薬販売、売春宿経営など、他の仲間が嫌がる暴力行為、犯罪行為もかなり行ったという。こうした汚れ仕事の中で彼の名前は広がり、仲間の中での地位があがっていく。彼の非合法行為は直接レ

ーニンと知り合ってからは一応止まったが、その後も仲間がやりたがらない汚れ仕事をスターリンは喜んで引き受けたという。

田舎者で小柄な彼は演説も上手でなかったが、語学力や人心掌握力に加え、並外れた行動力と資金集めの能力で、確実に権力の座に近づいていった。事態が大きく動いたのはレーニンが病に倒れた 1922 年。レーニンの部下たちの中でも粗暴で教養もなく、はじめは後継者とは決してみなされてこなかったスターリンだが、トロツキーなど優秀な仲間を蹴落とす狡猾な策を講じ「レーニンの後継者は自分」という位置を占めることに成功した。

スターリンは思想統制・言論統制も上手だった。レーニンが亡くなってすぐ、スターリンはレーニンの手紙・メモに至るまで全ての著作・書物を集めさせた。そして自身の不利になる部分を削除し、賛美する言葉に修正させたあと、「レーニン全集」として発表、国の根幹として据えた。いわゆる「マルクス・レーニン主義」の完成である。そして工業・農業の集団化を五ケ年計画として進め、社会としての基盤を固めていった。「人々はみんな平等で同じ賃金をもらう。ただしそのために、資産はすべて国の所有となり、土地や企業の私有は認めない。農地もすべてみんなのものであり、集団で農業を行っていく。国家がすべて管理するので、人々の職業選択の自由、そして移住はもちろん往来すらも国家が管理を行う」とした農業改革は、国営で開拓も行うソビエト式農業「ソフホーズ совхо́з」、半官半民で農業組合に近い形の「コルホーズ колхоз」など、国家が農地と農民を管理する仕組みを持ち、結果的に農民を農地に縛りつけ「新奴隷制」ともいえる独裁国家運営にとって大変都合の良いものだった。

しかしその後の歴史が証明しているように、結果的には社会主義による国づくりは失敗、と言っていいだろう。「全国民が平等」「みんなで作り、みんなで平等に分け与える」ことは理念として非常に優秀だが、そこに最低限度の競争や、勤労意欲向上の仕組みがなければうまくいかない。例えば農業を集団化してしまえば、「一生懸命働いても、少しさぼっていても収入は変わらない」となり、全員が少しずつ怠けるようになる。その怠惰な態度は一人一人でみれば小さなものだが、それが集まってしまうと、圧倒的な生産性の低下、という結果を生んでしまった。しかも農業を集団化してしまえば、どんなに不作であっても収穫物を強制的に搾取し、輸出用に回すことができる。仮に餓死者が出るほどであっても、である。

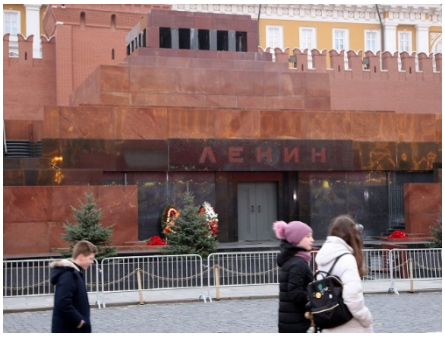
工業生産にしても同様で、予定された消費者へ予定したものを生産するだけでは、「品質改良」とか「生産性の向上」「経費の削減」などの原理や意識も働かない。結果的に社会主義国の工業製品の競争力は極端に低いものになっていった。しかし、それはのちに振りかえってみれば、の話。一党独裁、個人崇拝の強権・恐怖政治で社会主義国家を強引に作っていったスターリン政権は、結果的に 29 年間も長く続いたのである。

そしてスターリンといえば、大粛清 Большой террор と呼ばれる史上最悪の政治弾圧を忘れてはならない。揺るぎない権力を持っていたはずのスターリンが、自分に歯向かうものを徹底的に弾圧していたのである。『自分を追い落とそうとしている者が多数いる』と秘密警察を動員し、仲間の指導者たちを逮捕、処刑させたのが始まりのようで、例えば 1937 年から 1938 年にわたって、3 万 4301 人の将校が逮捕され、うち 2 万 2705 人が銃殺されるか、行方不明になっているとの記録がある。つまり政敵を徹底的に弾圧、処刑してしまったのだが、これはほんの序章に過ぎなかった。彼は国内すべてにおいて徹底的な監視体制を敷き、少しでも体制に不満を言うものがいれば即逮捕した。逮捕されたものは処刑されるか、国内に 500 か所以上あったといわれる強制収容所に送られ、過酷な労役を課せられた。密告制度も奨励し、家族であっても不穏な行動をしたものを密告せよと命令し、徹底させた。各地方の地区委員会には、月ごとの「逮捕者目標人数」「処刑者目標人数」を割り当て厳密に執行させていた。まさに粛清の嵐といえよう。あのヒットラーでさえも「正気の沙汰とは思えない」と言わしめた大粛清。犠牲者の正確な数は不明だが、一説によると 1500 万人以上、いや 2000 万人とも 3000 万人とも言われている。

スターリンはレーニン廟横で眠っている

加えて、農業の集団化により農作物の管理が容易になった結果、どんなに不作であっても農産物を輸出に回し、外貨獲得に充て重工業の発展の資金源にした。結果的に農村部では餓死者が続出。特にウクライナ地方で最大1500万人が死亡したといわれる大飢饉ホロドモール **Голодомо́р** は、アルメニア人虐殺、ホロコースト、中国共産党による文化大革命、ポル・ポト派による虐殺、ルワンダ虐殺等と並んで20世紀の最大の悲劇の一つと言われている。（ちなみにピロシキもボルシチもウクライナ料理。ウクライナはロシアにとって重要な農業生産地であることを現している気がする）

問題はスターリンが大粛清を行った理由である。これについて多くの歴史家は「スターリンの猜疑心」を挙げている。つまり「自分を追いやるのではないか」「権力の座から降ろすのではないか」「暗殺されるのではないか」という不安、「農業失策の責任を取らされるのではないか」「過去の犯罪を表に出されるのではないか」という不安が、大粛清の原動力ではないか・・・。そう類推する歴史家が多い。レーニンは遺書に「スターリンは危険な人物である。彼に権力を持たせてはいけない」と書いていたという。しかし、その文書の存在が明らかになったのはかなり後になってからである。



レーニン廟正面には Ле́нин（レーニン）とあるが
一時期スターリンも、安置され名前も併記されていた

・・・・・

しかし、猜疑心だけで、こんな大惨劇を説明できるとは思わない。でも、それ以外に説明のしようがないことも確かである。そして既に亡くなってしまった方に私たちができることは何もない。しかし、せめて、現代を生きる私たちができることは、「こんな悲劇が実際にあった」という事実を忘れないことだけかもしれない。こうした悲劇は決して繰り返してはならないと誓いながら。

なお、このスターリンの大粛清に関し、スターリンが言った言葉として次の言葉を紹介している文献もある。

「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計上の数字に過ぎない」

実際のところ、これはナチスドイツ、ゲシュタポのユダヤ人移送局長官アドルフ・アイヒマンの言葉らしい。戦後アルゼンチンで隠遁生活を送っていたが、1960年に正体が発覚して逮捕。イスラエルのエルサレムにて絞首刑にされた人物である。さらに

「一人殺せば殺人者、100万人殺せば英雄になる」

とスターリンが言ったという説もあるが、これはチャールズ・チャップリンが映画「殺人狂時代」の中で殺人犯の言葉として語ったものである（原文は One murder makes a villain, millions a hero. Numbers sanctify）。
こんな恐ろしい言葉が多数あるということは、虐殺を行う独裁者はいつの世にもいる、ということかもしれない。

【9】ソビエトと戦争

ここでソビエトと戦争の関わりについて書きたい。・・・・そもそも、この稿は旅行記のはずであり、ソビエトの解説書ではない。「ちっとも先に進まないじゃないか」と言われそうだが、ロシアは日本の隣国であり、過去に直接戦争をしている国である。そして21世紀の現代であっても、北方領土問題など直接的な懸案事項を抱えている国である。つまり日本人にとって決して遠い国であってはいけないと思う。まぁ、本音を言うと、ロシア関連の本を読み始めたら奥深さに思わずハマってしまい、思わず大量にソレ系ばかり読んでしまった、その受け売りを書きたいだけである（笑）。もう少しお付き合い願いたい。

別の視点で考えよう。ソビエトと戦争について考えたい。この国はまさに争いに次ぐ争いを繰り返してきた国だからである。第一次世界大戦前後の話から始めたい。

ソ連製 SU-100 型戦車（キューバにて）

1914 年 7 月。サラエボにおいてセルビアの皇太子殺害から始まった第一世界大戦はいわゆる三国協商の連合国（ロシア、フランス、イギリス）といわゆる三国同盟の中央同盟国（ドイツとオーストリア＝ハンガリー）の両陣営に分かれ戦った。加えて同盟関係により他国も参入（日本とアメリカは連合国側に、オスマン帝国とブルガリアは中央同盟国側について参戦）し、ヨーロッパ全土のみならず、世界約 50 か国を巻き込んだ大戦争であった。産業革命による兵器の技術革新もあり、それ以前の戦争に比べ死亡率は非常に高く、全世界で戦闘員 900 万人、非戦闘員 700 万人以上が亡くなったとされる。そして、あまりの被害に多くの参戦国において革命や帝国の解体といった政治変革を引き起こしてしまった。

ロシアは前述のとおり、この参戦がロシア革命のきっかけとなったが、戦場となったヨーロッパ各地においても大きな変革が待っていた。大戦終結後、戦勝国であるイギリスやフランスにおいても財政は破綻寸前だった。そこで敗戦国ドイツに多額な賠償金を課すことを決定。いわゆるベルサイユ条約である。その額 1320 億金マルク（純金ベースで 4 万 7256t）。途方もない金額で当時のドイツの GNP の 20 倍、国家予算の 30 倍、現在の貨幣価値で 200 兆円を超える金額だった。ドイツは仕方なしにこれを受け入れるものの、すぐに支払いが滞ってしまった。ここで動いたのがフランス。賠償金支払い遅延を理由に、ドイツ西北部にあるヨーロッパ最大の炭鉱を有するルール工業地帯をベルギーとともに占領してしまったのである。この暴挙に対しドイツは労働者が生産を停止するといった「消極的抵抗」を敢行。すると工業生産高自体が低下したことで「大インフレーション」が発生。こうしてドイツ経済は崩壊しかかってしまった。

ここでドイツを救ったのが、アメリカである。アメリカはヨーロッパと異なり大戦の直接被害も受けず、経済も絶好調で“この世の春”を謳歌していた。ロックンロールが流れ、コカ・コーラやディズニーが生まれ・・という、日本人が描く華やかで豊かなアメリカ、のイメージはこのころの印象が強いそうだ。

ドイツやヨーロッパの窮状を見て、アメリカの銀行家ドーズは、ドイツの賠償金支払いの方法や期限についての新しいプラン「ドーズ案」を考案した。これはアメリカがドイツにお金を貸し、これを使ってドイツは復興を進め、英仏に賠償金を払う。英仏はそのお金で経済を復興し、第一次世界大戦でアメリカから借りていたお金を返す、という関係である。こうしてドイツが賠償金を支払う体制が整ったことで、フランスはルールから撤兵。その後ドーズ案に続いて、ドイツの賠償金は減額される「ヤング案」も出て一応、賠償金問題は解決に向かった。

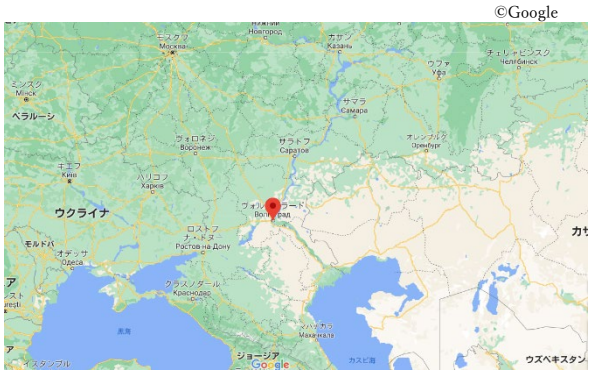
しかし、ここで歴史の歯車は予期せぬ方向に進みだす。1929 年アメリカの株価が一気に下落してしまう、いわゆる「世界恐慌」が起こってしまったのである。アメリカの経済がどん底まで落ちたことにより、ドイツ、イギリス、フランスと連鎖的が窮地に陥り、世界中の経済が大混乱してしまった。

しかし、ロシアだけは世界恐慌の影響を受けなかった。むしろ他の国が沈んだことにより、相対的に地位が上がったといった方が正確だろう。つまり資本主義国が世界恐慌により危機に陥った相対的効果として、ロシアが大国としての地位を確保する足掛かりとなったのである。ちなみに、ドイツがこの賠償金を払い終えたのは、なんと 2010 年 10 月。終戦後 92 年後のことだった。

さて、この世界恐慌を経て、歴史の大きな流れは次のストーリーを生み出してしまう。つまり、あまりにも重い賠償金にドイツ国内に不満がたまってきたのだ。その不満を利用し生まれた独裁政権がご存じナチスのアドルフ・ヒトラー。そこに加え、第一次世界大戦戦勝国となったにも関わらず恩恵が得られなかったイタリア不満がたまり、結果的に強いイタリアを標榜するファシスト党党首ベニート・ムッソリーニが独裁政権を樹立した。こうして各国それぞれの事情が重なり不穏な空気がヨーロッパ中を覆い始めていた。

そして 1939 年 9 月、ヒトラーの命によりドイツ軍のポーランド侵攻を行い第二次世界大戦が勃発してしまう。第一世界大戦終結からわずか２１年後のことであった。

クレムリン横にある無名戦士の墓
今も鎮魂の炎が燃やされていた



スターリングラード（現ヴォルゴグラード）の位置

スターリンは開戦の１年前、英仏に反発してナチス=ドイツと不可侵条約を締結していた。ともに帝国主義、国土拡大を目指す国家として、とりあえず利害が一致したためである。しかも「東ヨーロッパをドイツとソ連の勢力圏に分割する」という密約まで含まれていた。そして第二次大戦勃発とともにポーランド、フィンランドに侵攻した。しかし 1941 年 6 月に事態は急変する。ドイツが一方的に条約を破棄し 300 万人の兵でソ連に侵攻してきたのである。不意をつかれスターリンは大いに狼狽したが、やがてスターリン自身が兵を率い、ドイツと対峙した。なぜ彼が自ら軍を率いたかというと、有能なリーダー達はスターリンにより既に粛清されてしまっていたため、軍を率いることができる人物がほかにいなかったためである。そしてこれが、ソビエトでいう大祖国戦争 Великая Отечественная война と呼ばれる凄惨な戦いの始まりであった。非常に激しく、凄惨な戦いとして後世に残る激戦で、甚大な被害を双方にもたらしたが、特筆すべきは「スターリングラード攻防戦」と呼ばれる 1942 年 6 月からの戦いであろう。ヴォルガ川西岸に広がる工業都市スターリングラード（現ヴォルゴグラード）での戦いである。スターリンの名を冠した街を陥落させてはならないと、ソビエト軍も徹底的に抗戦したが、最新鋭機を投入してくるドイツ軍の勢いは止まらず、攻防は 8 か月も続いた。100 万人近いドイツ軍は周りすべてをソ連軍に囲まれ、わずか 20 万人になってもヒトラーからは「絶対に降伏することは許さない」と厳命され、徹底抗戦をしていくしかなかった。しかし対するソビエト軍も苦戦に次ぐ苦戦で劣勢を強いられていた。そこでソビエト軍は、兵士が投降しないよう、恐ろしい作戦も使った。自軍の背後にもう一つ部隊を配備するのである。その部隊が狙うのは「後退した自軍の兵士」。つまり投降したり、降伏したりするのを防ぐため、一歩でも後退すると背後の自軍に撃たれる、という恐ろしい仕組みである。こうして血を血で洗う恐ろしい殺戮の結果、物資の補給にやや余裕があったソビエト軍がもり返してきた。加えて季節は冬。寒さはソビエト軍に有利になり辛うじて勝利。ドイツ軍は敗退した。ドイツにとっては、ここで負けたことがその後の敗退・崩壊へのきっかけになったとも伝えられるが、すさまじいのがこの戦いで亡くなった方の数。なんと枢軸軍が 85 万人、ソビエト軍 120 万人、一般市民 20 万人、合計 200 万人以上の犠牲者が出たと伝えられている。（余談だがこのヴォルゴグラード、2018 年 FIFA ロシア W 杯の会場になっている。しかも日本対ポーランドの試合会場として。個人的に「この地でロシア vs ドイツだったらどうしよう」と危惧したが、その組み合わせでのここでの試合は回避されていた。）・・・序段でも書いたが、ソビエトは第二次世界大戦で一般人も含め 3000 万人近い方が亡くなっていると言われている。その直接の相手というのがドイツである。直接戦闘で亡くなった方も甚大だが、捕虜になってから亡くなった方も非常に多いといわれている。というのは、ヒトラーはユダヤ人同様スラヴ人への強烈な差別意識があったという。よってソ連兵捕虜は人間として扱ってもらず、食料も充分に配給されず、重労働に駆り出された結果、大量の兵士たちが飢餓や凍傷、伝染病で死んでいったという。570 万人のソ連軍捕虜のうち 300 万人が死亡したとも言われている。あのアウシュビッツ強制収容所のガス室の最初の犠牲となったのはユダヤ人ではなくソ連軍捕虜 600 人だったといわれる話さえ残っている。そしてこの大祖国戦争でドイツに勝利したソビエト軍は、イギリスのチャーチル、アメリカのローズヴェルトともに連合国の一翼として戦い、1945 年 5 月ドイツを降伏に追いこんだ。そして大戦終結後も、国連の常任理事国として力を誇示するとともに、東欧諸国の支配を強め、中国共産党や北朝鮮の朝鮮労働党の支持・援助を重ね、共産勢力の拡大に尽力していった・・というのが、第二次世界大戦までのソビエトと戦争の関係である。・・・本当はこの後、アフガニスタン侵攻や、朝鮮戦争・ベトナム戦争・キューバ危機を含む東西冷戦、そして民主化運動とソビエト崩壊・・とこの国の地殻変動は続いていくのだが、まともに書き続けていくとすぐに一冊の書籍になってしまうので、それはまた別の機会に書きたい。

クレムリン壁面の兵士のレリーフ

【10】今のロシアにおけるレーニン、そしてゴルバチョフ

今のロシアの人々にとってレーニンはどんな存在なのか気になって色々調べた。なんと嫌悪感はほとんどない、とのこと。実際今も地方都市の中心部はレーニン広場、一番の目抜き通りはレーニン通り、行政府庁舎の前にはレーニン像が立っているのが基本である。ソビエト時代にレニングラードと改名され、ソ連崩壊後、戻された「サンクトペテルブルク」も、いまだ、レニングラード州 Ленинградская область の州都である。よくソビエト崩壊の映像として「レーニン像」が引き倒される映像が流されるが、それはあくまでも「ロシア以外」でのこと。例えば隣国ウクライナでは 2014 年の政変の際、ほぼすべてのレーニン像が倒されたらしい。

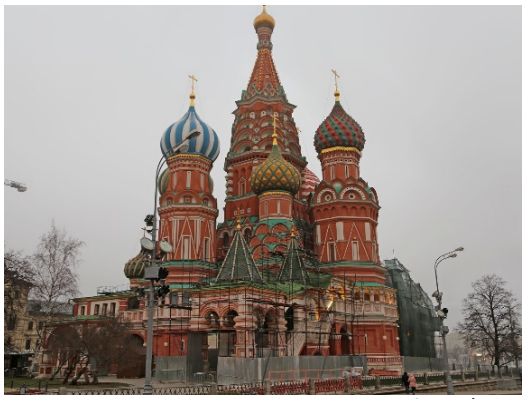
しかし、だからと言って、今のロシア人が、マルクス・レーニン主義の共産主義社会が良いかというとそうではない、というのだから複雑である。まとめにくい内容なのだが、簡単に言えば「あの、巨大で強かったソビエト連邦」への郷愁・・のような感情に近いらしい。

歴代ソビエトの指導者についても簡単に触れたい。29 年間のスターリンの死後、ソ連を引き継いだのはニキータ・フルシチョフ。彼は 11 年間最高指導者であったが、この時点ですでにソビエト連邦の様々な制度は疲弊していた。その後、高齢なレオニード・ブレジネフ(75 歳)、ユーリ・アンドロポフ(69 歳)、コンスタンティン・チェルネンコ(73 歳)と 3 代の老人支配が続き、国内はさらに混乱していった。そしてその混乱を収めるための期待を一身に背負って政権を握ったのが 1985 年 3 月に 54 歳で最高指導者となった若きミハイル・セルゲーエヴィチ・ゴルバチョフ。彼はすぐに改革に乗り出す。有名なのがペレストロイカ（перестройка：再構築、再革命の意味だが「改革」と称されることが多い）とグラスノスチ（ гласность：英語でいう publicity つまり宣伝の意味だが「情報公開」と訳される）であろう。そして外交では「新思考外交 Новое мышление」と称し、東欧の民主化革命を支持し、結果的に冷戦を終結させた立役者である。1990 年にはソ連の最初で最後となる大統領に就任し、同年にはノーベル平和賞を受賞した。しかし、ソ連国内の民族主義を抑えることができず、保守派と改革派に国内の政治勢力が分裂する中、1991 年の「ソ連 8 月クーデター」を招き、新連邦条約締結に失敗した。結果として、ソビエト共産党の一党独裁体制、そしてソビエト連邦そのものを終結・崩壊へと導くこととなった。

当時、日本を含む西側諸国で非常に人気の高かったゴルバチョフ。「ゴルビー」の愛称で親しまれて、日本でも人形が発売され、ゴルビーが活躍するファミコンソフトまで発売されたほど。しかし彼はロシア国内では驚くほど不人気で非常に評価が低く、彼の出身地でさえも市庁舎前の銅像はレーニン像だという。嫌われてしまった原因は「あの偉大なソビエト連邦を壊した張本人」という意識が強いためだそうだ。また急激に改革を進めたため、人々がそれについていけなかったということもある。有名なのはウォッカ禁止令である。「ロシアの平均寿命が非常に低い原因はウォッカの飲み過ぎである。よってウォッカの製造・販売を削減する」と制限をかけたが、国民は反発し、密造をはじめ、酒税収入も減り、民心の離反が起こっただけだったらしい。しかし国民は「共産主義が良い」と言っているわけではない。「中身はともかくとして、超大国だった我が国が良かった・・」という郷愁の思いがあるとのことである。人心を掌握した国家運営とは、いかに難しいものかを感じる

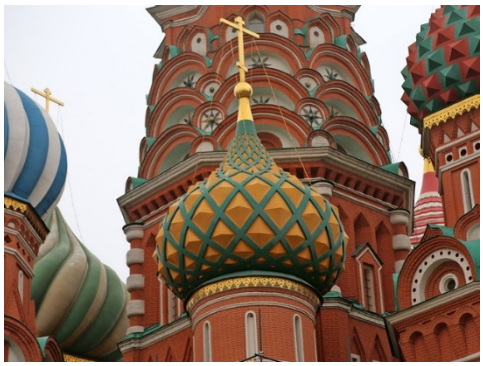
【11】聖ワリシイ大聖堂とクレムリン

ようやく、本来の話に戻ろう。赤の広場に建つ、とりわけ印象的な聖堂がある。聖ワシリイ大聖堂 Собор Василия Блаженного、正式には「堀の生神女庇護大聖堂」というロシア正教の大聖堂である。1560 年ごろ、イヴァン 4 世（雷帝）がカザンとの戦いに勝利したことを記念して建立したと伝えられる。ロシアを代表する建築物であり、ロシアのパンフレットや文献はもちろん、大昔、大ヒットしたゲーム「テトリス」の背景画もこの聖堂がモチーフとされる。設計したポストニクとバルマは、聖ワシリイ大聖堂の美しさに驚いたイワン


9 つのドームをもつ聖ワシリイ大聖堂

聖堂入り口の説明版

雷帝に、同じような美しい建物を他に作られては困ると、目玉をくり抜かれてしまったという伝説もあるなど話題には事欠かない聖堂である。建物の構成として、中央の主聖堂を、それぞれが玉ねぎのようなドームを戴く 8 つの小聖堂が取り囲む形をとっており、合計 9 つのドームがある。玉ねぎのようなものは、大きなものを”クーポル **купол**:丸屋根” 、小さなものを”ルーコヴィツァ **луковица**：球根”というロウソクの炎、精霊の炎をかたどったもので、祈りが神に届く、神が空へと昇っていく様子を表したものだといわれている。ちなみに、冬期間、天井に雪が積もらないようにするため工夫、という実務的な意味も兼ねているとのこと。そしてこのクーポルが大事で、ロシア正教ではこのクーポルの数によって何を意味しているかが分かるそうだ。

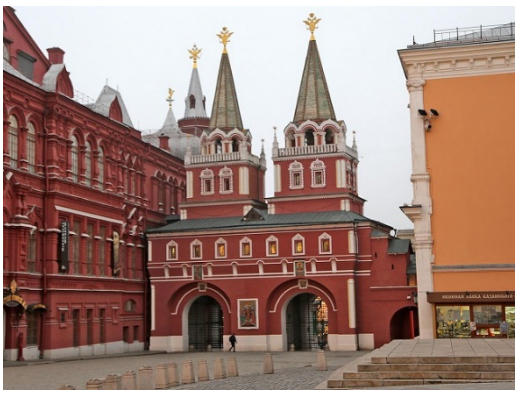

クーポルは一つ一つ表情が違う

まず、クーポルが 1 つの教会は、教会の唯一の主、フリストス（キリスト）を意味する。2 つの場合は「神性と人性」、3 つの場合は「父と子と聖なる神」、5 つの場合は「中心となるクーポルをフリストス（キリスト）、他の 4 つのクーポルは福音書を書 いた 4 人の福音記者、マタイ・マルコ、ルカ、ヨハネ」を表すそうだ。7 つの場合は「七つの機密」、 9 つの場合は「天使の 9 つの階級や聖人の 9 種あるシンボル」を表す。そして 13 個の場合は「キリストと十二使徒」を表しているとのこと。

つまり、聖ワシリイ聖堂の場合、天使の 9 つの階級や聖人の 9 種あるシンボルを現すらしいのだが、詳細はよくわからなかった。なお、「ワリシイ」とは、本来の聖堂に、佯狂者ワシリイを記憶する小聖堂が加えられたことでこの通称で親しまれることとなったとのこと。ワリシイは 16 世紀にロシアで活躍した放浪無宿の聖人（ロシア正教で言う佯狂者）で、若いころから身に一糸もまとわず「裸のワシリイ」とも呼ばれた人物である。幼いころから預言をし、寒いロシアで 100 歳まで生きたなど、様々な逸話をもつ人物。イワン雷帝が唯一畏怖した人物と伝えられる。また、ワリシリ聖堂前にはミーニンとポジャルスキーの像がある。ロシアの宿敵だったポーランドに 1612 年に勝利したことを記念して、建てられたものである。設置された場所は、当初は広場中央に鎮座しておりかつてこの広場の代表たる像だったが、時は流れ様々な紆余曲折の後ここにあるのだろう。まるで「窓際族」のようでもある。

ミーニンとポジャルスキーの像

赤の広場は北西から南東にかけて広がっている広場である。南東端が聖ワシリイ大聖堂とするならば、北西端にはヴァスクレセンスキー門 **Воскресенские ворота** がある。17 世紀に建設されたもので「復活門」との意味がある。左側には国立歴史博物館、右側には旧モスクワ市庁舎という位置にあるが、ソビエト時代の 1931 年、軍事パレードの邪魔になるという理由で取り壊されてしまった。取り壊しを命じたのは、例によってスターリン。しかし、ソビエト崩壊後の 1993 年にもとの姿に再建された。なお、この「復活」という意味は、イエスキリストの復活を描いたイコン（絵画など）がこの門の前に設置されたことにちなんでおり、決して門の復活を現したものではないが、歴史的経緯を考えると意味深な名称でもある。


ヴァスクレセンスキー門（復活門）

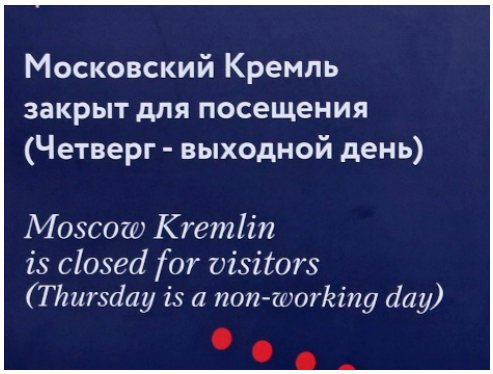
隣にはロシア国立歴史博物館 **Государственный исторический музей**。石器時代から 20 世紀までの膨大な収蔵物があるとの話だが、時間が気になり、その壮麗な赤い外観を眺めるだけにした。

さて、読者の方は「オマエさぁ、赤の広場はもういいよ。それより隣に大きなものがあるだろ？「クレムリン」だよ。かつての城で、ソビエト共産党の中心だろ？そっちはどうなったんだ？」としびれをきらしているかもしれない。

冷戦時、西側諸国にとっては悪の巣窟、敵の総本山とも言える謎に満ちた巨大要塞本部、クレムリンも現在は「博物館」として公開されている。だからその内部を見られることをとても楽しみにしていたのだが、・・・・実は行けなかった。

クレムリン見学のためのチケット売り場

「定休日」だったのである。



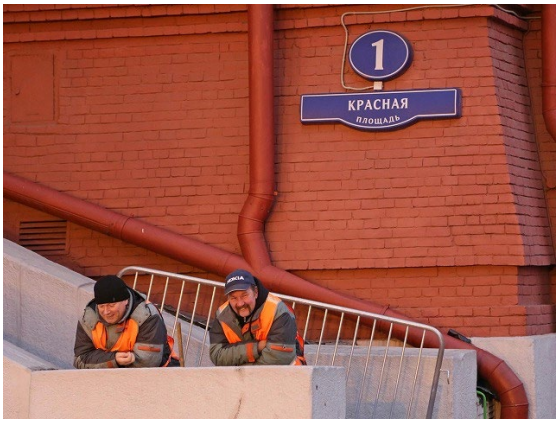
「クレムリンは休み（木曜日は定休日）」の表示

現代アートのような斬新的なデザインの切符売り場前には、「木曜日は定休日だよ」という案内書きが掲げてあった。

正直、かなり気落ちしたが、ここで何を言っても仕方ない。

「いつか‥またおいで、と言っているのかもしれない」
と気持ちを切りかえた。

とにかく、あの恐ろしいイメージしかなかったソビエトの中心部。怖い映像でしか見たことがなかった赤の広場、そしてクレムリンの城壁前を生で歩くことができ、それだけでも幸せだった。



赤の広場を見ながら談笑している作業員さん

立派なロシア国立歴史博物館

クレムリン北西のアレクサンドロフスキー公園

もともとは城の堀だったが 19 世紀初めに埋められて市民の憩いの公園に

ノヴォデヴィチ女子修道院入り口

第6章　ノヴォデヴィチ女子修道院と湖

Новодевичий монастырь и озеро

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第 6 章　ノヴォデヴィチ女子修道院と湖

【1】地下鉄で

気が付けば、すでにかなり時間はかかっていた。今回の目的地は「中東」でロシアはストップオーバー（途中降機）をしているだけ。「成田発-イスラエル行きの飛行機に乗っているが、途中のモスクワで次の飛行機を待つ間、空港ではなく、少し市街へ出ているだけ」である。幸いにもイスラエル行は夜中の 1 時 40 分発なので、遅くとも夜 11 時に空港についていれば大丈夫、と時間の余裕はあった。

とはいっても昼が短い冬のモスクワ。速足で地下鉄に向かった。

椅子は硬いプラスチックだが　いたって普通の地下鉄車内

「えっと･･･。次の目的地は･･･。あの修道院に行こう･･･。」
次の目的地の位置、地下鉄路線と乗換・降車駅をざっくり把握し電車に飛び乗った。

車内アナウンスや、表示の看板も少しずつ意味が分かってくると、違うものが見えてくる。車内の人々の様子も見えるようになる。

無表情な通勤途中のお姉さん。職場の同僚と華を咲かせるビジネスマン。疲れてぐったりしているおじさん。ゲームに夢中の若者・・・。いずれも日本の地下鉄で見る光景と同じ。誰もがみんな黙ってスマホ片手に音楽を聴いたり、ニュースを見ていたりするのも同じだった。スマホ機種の多くが android 系の見たこともないものだったのが相違といえば相違である。
そんな車内を眺めていると、何とも言えない感情がわいてくる。

「ロシアってかなり普通の国なんだな」
「モスクワもなかなかいい街だなぁ」
「ロシア語が話せるようになりたいな」
いい歳になっているのにも関わらず、相変わらず、夢のような思いが出てくる。
でも、旅に出るといつもこんな感情が湧き上がってくる。
「もっと知りたい、もっと学びたい、もっと違う世界に触れてみたい･･･」と。

日本で日々の業務に忙殺されて封印されていた、心の中の好奇心、向上心がうずいてくる。

まるで少年時代にもどったかのように・・・。

心だけの若返り。でもそんな感情を引き出してくれるのが、こうした外国でのちょっとした経験である。だからこそ、自分は外国に出てみたいと強く思ってしまうのだ・・・・。

そんなことを考えているうちに、列車は目的地　フンゼンズカヤ駅 Фрунзенская についた。

【2】 ロシアと宗教、ロシアの宗教

ここで宗教について書きたい。やはり宗教の理解なくして異文化理解は難しいと感じるからである。

自分が述べるまでもなく、宗教は人々の心の支えのみならず、生活習慣そのものであり、人々の文化や考え方に深く根ざしている。世の中に多くの民族、文化があるからこそ、様々な宗教・宗派が存在しているわけで、それを気軽に論じられるとは思わない。しかし世界の人間社会を語るためには、避けては通れない“宗教”についてここでは簡単に触れておきたい。

ロシアにおける主な宗教は「ロシア正教」。いわゆるキリスト教の一つである。キリスト教の起源や経緯については詳しくは中東の稿で述べるが、ここでは主に「ロシア正教」「東方正教会」に関わって述べたい。

キリスト教の宗派というと多くの人は「カトリック」と「プロテスタント」を思い浮かべるであろう。確かにバチカンのローマ教皇を頂点としたカトリックと、宗教改革を行ったルターのプロテスタント（ルター派、ルー

テル教会）の二大勢力がキリスト教にあるのは多くの方がご存じの通り。マルティン・ルターが運動を起こしたのが 1517 年、16 世紀のことである。しかし、大きな分岐点はその前にもあった。実は宗教改革のはるか以前、11 世紀ごろに大きく 2 つに分かれている。それがいわゆるキリスト教の東西分裂、西方の「カトリック」と東方の「正教会」への分裂である。その経緯を超要約しよう。

約 2000 年前、カナンの地、現在のパレスチナ・イスラエルにあるエルサレムで、イエス・キリストが処刑されてから弟子たちが彼の教えを説いていったのがキリスト教である。ユダヤ教に端を発する一神教の一種で、最初は迫害を受けたこの教えも、徐々に信者を増やし、やがてその勢力は当時最強だったローマ帝国に浸透し、やがてローマ帝国の国教として認められるまでに成長した。そしてローマ帝国の勢力拡大とともに信者も増大し、非常に大きな勢力となっていったが、ローマ帝国の終焉とともに大きな転機が訪れる。それが東西の分裂である。弱体化したローマ帝国は西ローマ帝国、東ローマ帝国に分割してしまったのだが、その際、布教の方法で双方は大きく対立してしまったのだ。偶像崇拝を禁じたアブラハム以来の教えを守りたい東方教会と、異教徒の蛮族・ゲルマン民族に布教するため、偶像崇拝を認めたい西方教会で主張が異なったからである。結果的に東方教会は、東方正教会（ギリシャ正教会）としてコンスタンティノープルを中心にして広がり、西方教会はローマカトリックとして、ローマ教皇を抱える首位権をもつ勢力としてそれぞれ発展していった。

そして、ここロシアは「ロシア正教」の国である。つまり、偶像崇拝を禁じた東方正教会、ギリシア正教の流れを汲んだ「正教：英語 Orthodox Church」が主流の国である（厳密には「ロシア正教」と言っても独自の協議があるわけでもなく、あくまでもロシア国家の中の正教なのだが、便宜上「ロシア正教」とする）。

各所に聖堂を構え、信者も多いロシア正教だが必ずしも順風満帆ではなく、むしろ存亡の危機にあったといっても過言でない。原因は「共産主義は宗教を完全否定」していること。マルクスは資本論の中で「宗教は麻薬と同じ」と明言しているのである。だからロシア正教はソビエト時代に大変な迫害を受け、歴史ある教会は爆破され、修道院は他施設に改修された。ロシア正教の完全な活動が再び認められたのはソビエト崩壊後なのである。

ここら辺の事情は中国でも同じで、中国共産党の創立党員である毛沢東も宗教を徹底的に否定した。わかりやすい例を挙げると日本の仏教は中国を経てきたはずなのに、現在の中国で、大きな力を持つ仏教寺院が見当たらなかったり、チベット仏教やイスラム教徒であるウイグル自治区などが弾圧を受け続けていたりするのはこういった背景があると言えよう。

ロシア正教がロシアの中心宗教であることは間違いないが、広大な領土をもつロシアは他の宗教の存在感もある。例えば領土帰属問題で紛争が続くチェチェンはタタール人というイスラム教徒のエリアであるし、2018 年平昌オリンピック金メダリスト、アリーナ・ザギトワはムスリムであることを誇りにしているという。ザギトワはウドムルト共和国イジェフスク出身のタタール系の出身である。タタール Tatar とは、モンゴル系、テュルク系、ツングース系（シベリア）などの広い地域の民族を指す言葉で韃靼（だったん）とも称される。・・と宗教を見ていくだけでも、ロシア領土の広大さ、過去の歴史が垣間見えてくるのは興味深い。

【3】ノヴォデヴィチ女子修道院

ノヴォデヴィチ女子修道院 **Новоде́вичий монасты́рь** は、世界遺産にも指定されている有名なロシア正教の修道院。クレムリンから地下鉄で 20 分程度のところにある。今回、やはりモスクワ市内で世界遺産に指定されている「コローメンスコエの主の昇天教会」の訪問も考えていたが、今回はここを訪れることにした。

ここは 1524 年にスモレンスクがモスクワ大公国に併合されたことを記念して建てられた修道院。モスクワ川の湾曲部にあり、クレムリンの出城（ロシアの要所に設けた城）としての役割を持っているため、城壁に囲まれているのが特徴である。

©Google

クレムリンから直線距離でわずか 5km 南西へ

スレモンスクとはモスクワから西南に 400km ほど行った都市で、リトアニアとモスクワの中間点に位置しているため、大きな勢力に翻弄されてきた歴史を持つ都市。敵対しているリトアニア大公国が支配していたが、モスクワ大公･ヴァシーリー3 世が 1514 年にモスクワ大公国に併合した記念してここを建てたというわけである。

そして設立以来この修道院は発展を遂げ、多くの建物が建てられ、修道女も各地からここに集まりつづけていたが、その発展が断ち切られる大事件が起こる。1917 年のロシア革命である。前述のとおり共産主義は宗教を完全否定しており、徹底的な宗教弾圧が起こった。この場所も 1922 年には政府により閉鎖が決まり、その後、女性解放博物館などに改修。そしてその後、多くの建物がアパートとして利用されるようになってしまった。

クレムリンの出城、との役割もあり強固な城壁で囲まれている

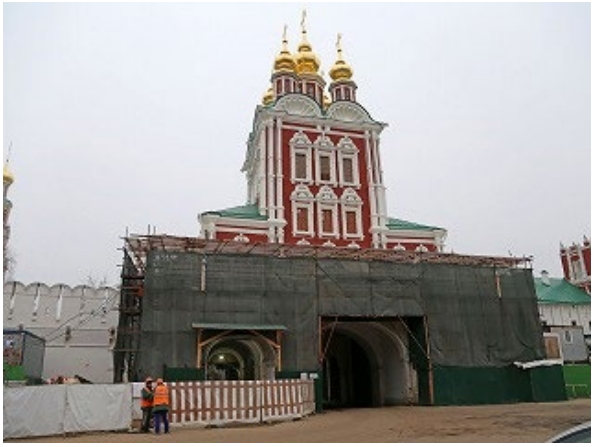
そしてソビエト崩壊後。宗教活動が再開され、かつての姿を取り戻しつつあるのが今・・・というわけである。

波乱万丈の歴史の中、ソ連時代に「アパートにされた」とはひどい話に感じるが、実はだからこそその後の破壊を免れた、との話を聞くと、いろいろ考えてしまう。

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」とは、ご存じ平家物語の一説であるが「この諸行無常という考え方は仏教のみの思想」、と何かで読んだ気がする。でもこの修道院の営みはまさに平家物語のようだと思った。遥かかなたの宗教施設で、仏教の考えを思い出してしまうとは不思議な感じがした。

そんな数奇な運命をたどってきた修道院であるがもう一点、ここを有名にしているのが隣接する墓地の存在。モスクワ市内随一といってもよいほど、有名人が埋葬されているのだ。開設は 1898 年。修道院に比べればやや新しいが 1930 年代のモスクワの都市整備に伴い、移転されてきたものも多くソビエトを支えてきた錚々たる面々が眠っている。一例をあげると、

ニキータ・フルシチョフ夫妻（共産党書記長）
アンドレイ・グロムイコ（ソ連時代の外相）
ボリス・エリツィン（ロシア連邦初代大統領）
ニコライ・ブルガーニン（日ソ共同宣言に署名した戦後のソ連首相）
ライサ・ゴルバチョワ（ミハイル・ゴルバチョフ元ソビエト連邦書記長夫人）
ドミートリイ・ショスタコーヴィチ（作曲家）
セルゲイ・プロコフィエフ（作曲家）　など。加えて
セルゲイ・イリューシン（飛行機設計局イリューシン創設者）
アンドレーイ・ツポレフ（航空機設計局ツポレフ創設者）
などまさにソビエトの著名人が葬られている。


工事中だった修道院正面入り口。この門の上にも「生神女庇護教会」「救世主顕栄教会」という教会がある

さて、実際の様子を書いていこう。地下鉄駅を降り、10 分ほど歩くとすぐに修道院が見えてきた。

いかにも工事中という気合の入った配管！

ただし、近づくにつれ何かの違和感を覚えた。

「ん？」と思って近づいてみるとその原因が分かった。大規模改修工事中だったのである。外壁には大きなシートが被せてあり、修道院内への門も工事用足場に囲まれていた。

しかし、入り口は開いていそうなので、とりあえず入ってみる。チケット売り場で「今は工事中だから、こことここは閉鎖中。ここは開いているよ。入場料は工事中ディスカウントで 200 ルーブル（340 円）。普段は写真撮影有料だけ

ど、今は無料だよ」と教えてもらい歩き始めた。まず目につくのが巨大な温水配管。工事現場真っ盛り、という感じの銀色の太い配管が敷地内を縦横無尽に走っていたが、その奥には古き建物類が静かに鎮座していた。ロシア帝国そしてソビエト時代を生き抜いてきた修道院だけあって、古きロシアの佇まいを醸し出していた。

修道院敷地は決して広くない。いやむしろ狭いといった方が正確だろう。京都でいうならば、清水寺や鹿苑寺金閣のような敷地の起伏もなく、平安神宮のような広さもなく、あえて言うなら「東寺」のような、比較的コンパクトな敷地の中にきらり光る建物群がある、という感じだろうか。

スモレンスキー聖堂

見学者はほとんどいなかった。聞こえてくるのは、どこかで小規模で動いている工事の音だけ。そういえば、モスクワってあまり雑音が聞こえない街だと思った。全体が、ゆったりと作られているからなのか、それとも音を出すものが禁止されていたのか定かではないが、少なくともアジア諸国のような雑踏の喧騒は感じない街である。そして修道院内はそれに輪をかけて静かな場所だった。

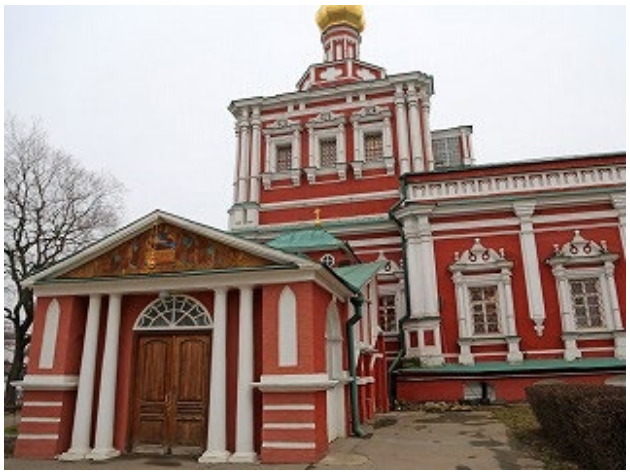
500 年の歴史を持つ修道院はこの静けさが信じられないほどの激動の時代変化を見続けたのだろう。この平和な時代が続きますように、と願わずにはいられなかった。

全体が工事中だったが、いくつかは静かで荘厳な内部にも立ち入ることができた。正教の教会はカトリック系の壮麗な教会と違い、華麗な装飾はないものの、質素な中にも純粋な祈りの空間があることが多いが、ここの聖堂はまた違った魅力があった。

ウスペンスカヤ教会の内部に入った。木造で作られた教会は、いわゆる西洋の石造りのそれとは全く印象を持った。

それは・・いわば・・「温度」のようなものだろうか？木を材料にして建立された寺社に慣れている日本人には、石造りの西洋の大聖堂は、壮麗だが冷たさを感じなくはないと思う。それに対して木材でできている教会は、どこか懐かしい、なにか人の営みの暖かさのようなものを感じる。きしむ床、少しずつ形がちがう柱・・・。例えるなら田舎の古い木造校舎の雰囲気だろうか？

そんな空間に、純粋な祈りの姿を体現したイコン（宗教画）が並ぶ聖堂。それは、素朴だが、荘厳で真摯な祈りを感じる場であった。


ウスペンスカヤ教会。木造の内部も素晴らしい

歴史ある墓標も修道院内に多数。静かで厳粛な雰囲気

僕はしばし立ち止まって、その場の雰囲気を感じた。

人々が長年大切にしてきた空間は、やはり何か心に訴えかけるものがある。ロシア正教の教えを十分に理解しているわけではないが、500 年前から続く人々の心のよりどころとなった空間の暖かさを感じた。

【4】あこがれの、あの湖

聖堂の外には、湖がある。実はこの修道院を訪れた大きな理由がこの湖である。

実はこの湖。ある名曲にちなんだものと言われている。

修道院横にあるボリショイ・ノヴォデヴィチ・プルド（池）

突然、話は変わる。

自分は音楽が大好き。それも様々な音楽が好きで、高校時代の一時期などは、クラシックと洋楽しか聴かないという偏った音楽生活をしていた。アメリカンロックの底抜けの明るさや、ブリティッシュビート、ブリティッシュロックの魂の叫びを「メチャメチャカッコいい」と崇拝すると同時に、バッハ、モーツアルト、ベートーベン、ワーグナーなどいわゆる「クラッシク」と呼ばれる曲も好んで聴いてきた。作曲家毎に深みや趣向、曲にかける思いなどが違い、どれもいいな、と思うのだが、特に好きなのはロシアの作曲家たちだった。

交響曲の大家で、第５番、第７番などが有名なショスタコーヴィチ、「火の鳥」のストラヴィンスキー　、「展覧会の絵」のムソルグスキー、ロシア民謡のモチーフが有名なリムスキー＝コルサコフ、「ピーターと狼」のプロコフィエフ、ピアノの名手でありながら天才作曲家であるラフマニノフ。そしてチャイコフスキー。

どの作曲家の作品もそれぞれの個性があり、本当に好きだった。

特にピョートル・イリイチ・チャイコフスキー　**Пётр Ильич Чайковский** は、大好きな作曲家である。1840 年に生まれ、1893 年に 53 歳で没した彼は、最初は父の勧めで法律の道に進み、21 歳の時に改めて音楽を学びなおし、そこから作曲活動を始めた遅咲きの天才である。

第６番まである交響曲、ピアノやバイオリンで著名な協奏曲、「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」などに代表されるバレエ音楽など、心を揺さぶる流麗な旋律や、「大序曲 1812 年」では本物の大砲を使うなど絢爛豪華ともいえるオーケストレーションが素晴らしい作曲家である。

そんな大作曲家にあこがれ、思わず「自分でも作ってみたい」と思っていた時もある。学生時代「自分で音楽をどうしても作ってみたい」と思いたち、沢山の書籍を買い込み、楽典や多種多彩な楽譜を読みながら、鍵盤楽器を買い、独学で曲を作りはじめた。やがて部屋には棺桶のような 76 鍵や 61 鍵のシンセサイザーが並びはじめ、そのうちに詩も作りはじめ、合唱曲を作ってみたりした。そんな中で「作曲より編曲の方が難しい」「作詞はもっと難しい」と感じながらも、ミニコンサートを開いたりと音楽の世界で遊んでいたが、そんな自分の音楽的基礎を支えたのがかつて聞いていたクラッシクと洋楽の響きだった。やがて、時が流れ自分の生活が変わり、音楽が必須の環境から離れていっても、あの繰り返し聞いたメロディーたちが消え去ることはない。

かつて曲作りにハマっていた時代・・・

そして、今。あのチャイコフスキーが「白鳥の湖」を着想したといわれる場所が、近くにあると聞いて心踊らないはずがない。そうなのだ、実はこの修道院の隣の湖、ボリショイ・ノヴォデヴィチ池は、**チャイコフスキーが「白鳥の湖」を着想した湖**といわれる場所なのだ。自分はそれをどうしても見たかったのである。

湖は修道院のすぐわきにあった。

厳冬のモスクワであるが、異常なまでの暖冬ということで、雪はなく、その湖面が見えるはずである。

そして、あこがれの湖は・・・・。

「やっぱりな」

正直、あまりきれいな湖ではなかった。濁った深い緑と茶色が混ざったような水が静かに湛えてあった。そもそも湖ではなく、「池」である。水たまり、とまではいかないが、少なくとも、あの旋律の中の美しい湖とは大きく違う。わかりやすく言えば上野の「不忍の池」である。不忍の池よりもやや小さく、上野のようにハスの葉があるわけではないが、弁天堂のかわりに修道院があり、そして修道院の崖の下に池があるという位置関係は、恩賜上野動物公園、いわゆる上野動物園と不忍の池の位置関係と言えなくもない。

確か池の 100m向こうにはモスクワ川が流れているはず。詳しいことはわからないがおそらくそのモスクワ川の水を一部引き込み、池としているのだろう。大都会を流れるモスクワ川の水ならば澄んだ美しい水ではない。

薄く凍った上に鳥が羽を休めていた。そしてきちんと整備された池の周囲が、ここが大切にされていることを感じる。

あこがれの「白鳥の湖」はあまり美しくなかった

「確かに、青く、美しい湖ではないかも」

「でも、この地のほとりにチャイコフスキーが立ったことは確かなんだよな」

「彼は、この街の息遣いを感じて曲を書いたんだ」

「白鳥の湖」の物語は、ヨーロッパ各地に伝わる白鳥伝説をもとに、魔法によって白鳥の姿に変えられた王女と王子の運命を描いたもので、悪魔の魔法で夜だけ人間の姿にかえる王女オデットを救おうという王子の愛の物語である。結末は原典のように全員が亡くなってしまうものや、ハッピーエンドのもの、洪水が起こってしまうものまでさまざまであるが、『眠れる森の美女』、『くるみ割り人形』と共に 3 大バレエと言われ世界中の人を魅了し続けている作品である。

湖を眺めながら、頭の中でチャイコフスキーの名曲を聴いていた。あの流れるような、繊細で美しい旋律。しなやかで、でも哀愁を帯びた、心を震わせる名曲を脳内で聴いていた。

作曲家として名声を得たチャイコフスキーだが、LGBT いわゆる同性愛者として迫害を受けていた。結婚したがその妻との関係は非常に悪く、モスクワ川に投身自殺を図ったこともある。彼の死因として当初はコレラ説が流付されたが、ソビエト崩壊後に出てきた資料からは「高名になったチャイコフスキーが同性愛者ではその周辺の人間にとっては不都合である、と判断され名誉の自殺を強要された」との説が非常に有力とされている・・・。

「どんな思いで、この池のほとりに立っていたのだろう」

「何を思って曲をかいたのだろう」

「天賦の才能で名声を得た裏で、多くの苦悩も抱えていたのかもしれない」

湖のほとりで、周りの音や風に耳を澄ませる。作曲当時と環境は変わっていても、この湖面を吹き抜ける風は同じに違いない。彼の苦悩の深さや痛みを感じることはできなかった。でも僕は、あの大作曲家が感じたであろう風を受けられただけでも十分に幸せだった。

ふと時計を見た。まずい。思っていたよりもかなり時間が過ぎていた。隣接されている有名人墓地にも行っていないが、いろいろ考えるとその余裕はなかった。有名人墓地もいいが、チャイコフスキーと同じ視線で、白鳥の湖に立てただけでも十分満足した僕は、なぜか湖に一礼したくなり、軽く頭を下げた後、急ぎ足で地下鉄駅に向かった。

【5】空港へ向かって

「ピッ」。改札でトロイカカードを suica のように接触させ、急ぎ気味にエスカレーターに乗る。ホームで列車を待っていると、大柄な電車が風のように入ってきたので、すぐに飛び乗った。

地下鉄車内で「次は〇〇駅です」のアナウンスを聞きながら、ドア上部に電光表示される駅名を見ていると、「このつづりはこうやって読むのか」とスペルと発音の関係が、なんとなくつながってくる気がしてすごく楽しい。ロシア語をマスターするのは多分無理だろうけど、なんなく読める気分を味わえただけでも幸せだった。

「次の列車は 51 秒後」の表示

賑やかなベラルーシスカヤ駅前

地下鉄を乗り継ぎ、ホテルのあるベラルーシスカヤ駅につくと、昨夜とは全く違った表情の宮殿のような駅舎が目に飛び込んでくる。人々は活発に行きかい、交通の往来も激しいなど昼と夜の街の表情は全く違っていた。

空を見上げると、どんよりと曇ったまま。雪や雨が降るわけでもないが、厚い雲に覆われて、どことなく陰気な天気は、歴史ある駅を暗い雰囲気にしていた。

「もし、夏に来れば印象は全く変わるんだろうな」

「いつかは･･･夏に来たいな」

本来は晴天の青空の風景が見たい。しかし、冬のロシアである。寒さが和らぎ、雪が降っていないだけでもありがたいと考えなければ･･などと思いながら、ホテルで荷物を受け取り、再びベラルーシスカヤ駅に向かった。

主要ターミナルであるベラルーシスカヤ駅はそれなりに混雑していた。空港行きアエロエクスプレスを待っていると何本も通勤列車がやってくる。そしてそれを乗り降りするモスクワの人々をみているだけでも楽しい。

ロシア鉄道 EP2D 形近郊型電車

そんなに寒くないのにものすごい厚着をしてゆっくり歩くおばあさん。反対に夏のような非常に薄いシャツ一枚で、大きなヘッドフォンをして歩く青年。右手に食べ物、左手にスマホを持ち、話に花を咲かせながら元気に笑って歩く若い女の子たち・・・。言語や文化、歴史やイデオロギーは違っても、自分たち庶民は、実はあまり変わらないんだ、と感じる。

ФРАНЦУЗКИЙ ЯЗЫК ХОТ-ДОГ とは FRENCH　HOT-DOG の意味

向かいホームを見ると、キオスクがあった。パンやサンドウィッチなど、豊富な品ぞろえに「そうだ、お昼ご飯を食べていないや」と気づいたが、ちょうど目指すアエロエクスプレスが入ってきてしまったため、すぐに列車に乗る。

あまり遅くなると日程にも響くし、なによりレンタカー屋さんにも悪い。まずは空港へ向かおう。

【6】旅とインターネット

ガラガラの車内に入り椅子に座る。つい思い出して、スマホを取り出した。まずメール・メッセージ類をチェ

ックする。個人アカウントをいくつか、そして仕事メールもチェック。そしてついでにノート PC も出し、仕事で管理しているサーバー類、自宅のサーバーの状態もチェックした。・・・言い忘れていたが、自分は業務として、ちょっとしたコンピューターネットワークシステムのマネジメントもしているので、ついネットワーク機器の状態が気になってしまったのである。今はインターネットがさえ通じれば、かなりのことが遠隔で確認できる。遠くの場所の機器類たちが元気に動いていることが確認できて安堵した。

それにしても、異国を動いている列車の中で、はるか彼方の機器類と通信ができるなんて、すごいと思う。これもインターネットが通じる環境を構築しているおかげ。そう、この旅の最中、いつでもどこでも常時ネットに接続できる環境を持ち歩いていたのである。

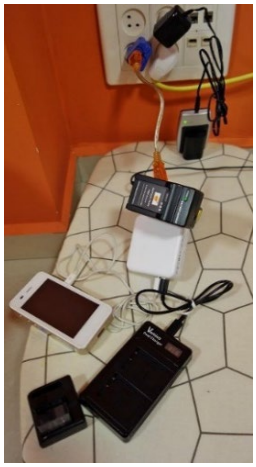
【7】外国でインターネットを常時接続するために

持参した小型ノート PC とモバイルルーター

外国歩きをしながら、インターネットの接続環境を構築する方法、つまりスマホや PC でネットを使う方法として、今は主に 3 つの方法があると思う。

① 日本のいつものスマホで、海外で使えるサービスを現地で追加する。
② 現地で SIM を購入し、SIM フリーの機器（スマホやモバイルルーター）に入れて使う。
③ 海外対応の SIM+モバイルルーター自体をレンタルする。

この中で一番簡単なのは①。例えば「ドコモの海外ローミング」であれば何の準備もいらない。外国に到着しスマホが電波を拾った時点で SMS に「この国でスマホを使うためにはこう操作してください」と説明メールが来るので、操作をするだけ。それでスマホは普通に使えるし PC だってテザリングすれば使える。料金の支払いは通話料金に上乗せされるだけ。とにかく簡単だが、しかし大きな問題がある。それは「非常に高額」なのだ。3 千～4 千円/日という高額な接続料がかかるので、今回なら 4 万円以上の追加出費になる。


充電風景(イスラエルのホテルにて)

②の「現地で SIM を買う」方法は、国によっては有効である。例えば東南アジアなどではコンビニなどでも非常に安く SIM が売られているので、それを購入し対応機器に入れればそれでネットが使えるようになる。自分も以前、タイでこの方法を使った。ただし今回のように、様々な国を周遊する場合には向かない。

よって今回は「③モバイルルーターのレンタル」をした。これ 1 台をレンタルすれば、海外で使えるモバイル回線と機器を使えるようになる。今回は「Jetfi」という会社の全世界 500MB/日、2 週間利用で返送料等全て込み 9520 円のプランにした。出発前に成田空港で受け取り、帰宅後、郵便で送り返せばいいことになっている。500MB と容量は少ないが、動画を見るために使うのではなく、地図とメールチェック、簡単な情報検索ができればいいので、これで十分。これさえあればどこでもスマホ・ノート P C でさえもネット接続できる。移動中でも Skype や Line 電話で格安で音声電話も掛けられる。車でも徒歩でもナビが使える状態になるというわけである。個人旅行者にとって情報は命。だからこの安心感は何物にも代えがたい。

ついでながらなぜ荷物が 30kg もあるのか説明したい。それは機材が多いからである。例えば情報機器は以下のものを持参している。

① いつものスマートフォン（少し前の iPhone）　＋　大きなモバイルバッテリー
② ノートパソコン　i5、128GB の SSD、Windows10 の小型ノート PC　＋　2TB の外付けハードディスク
③ タブレット Android　予備に
④ レンタルした全世界対応モバイルルーター　（全世界対応の SIM 付）

情報系の業務もしているから・・というわけではないが自宅にはサーバーを含め、ICT 機器類が多数（稼働している PC は常に 10 台以上）ある。今回は厳選に厳選を重ね荷物を選んだ。選択のポイントは「いつでもネットにつ

ながる環境」「どんな国・場所であっても、情報検索や画像整理、メール送受信、ネットの地図が使えること」「何かに不具合あっても補完できる機器構成。ケーブル類」だろうか。ただし、機器が多いということは、充電器・接続コード・変換プラグ類、そして様々なアダプターなども必要になる。そして機器の多さは別の問題も生む。「充電」「機器の整理」が煩雑なのである。ホテルに着いたら、コンセントを超タコ足分岐して、各種充電器を接続する必要があり、その準備も撤収もそれなりに時間がかかってしまう。

毎回「持ってきすぎたか？」と思うが、しかし旅にはトラブルがつきもの。事故防止を優先するためかなり多めの荷物になってしまっている。傍から見ていて決してスマートではないことは自覚しているが仕方がない。

【8】 点と線、点と点

空港行き特急は一路空港へ向かって進んでいた。

「･･･これで･･･モスクワ中心部はお別れだな･･･」

メールやメッセージチェックが終わり、そう呟きながら車窓を眺めていた。

窓外は真っ暗だった往路とは違い、昼間は町の表情が生き生きと伝わってくる。賑やかな駅周辺、商店街、大きな道路、住宅街。そして貧しい生活を余儀なくされている人たちの住居群・・・。正直、どの国、どの都市でもある風景ではあるが、そんなモスクワの光と影の移ろいを漫然と眺めていた。

車窓から。モスクワは豊かさも、そして貧しさも感じる街だった

「そうか、モスクワにもスラム街があるんだ･･」

「社会主義国だったのに、スラム街もあるんだ･･･」

しかしそう口に出した瞬間、なんとも言えない強烈な虚無感に襲われた。

「オレは何をしているんだろう？」「何をしたいんだろう？」という疑問である。もっと言えば「ロシアに入国し、モスクワに到着し、赤の広場にも行ったけど、それだけでロシアの何が分かったというんだね？」「モスクワに住んでいる人と、深く心を通わせた会話もできていないのに、この国をわかったような気でいるのかい？」「そんな短い滞在で、ロシアの現実が分かった気になっていたのかい？」と、自分の行動を否定する強い感情が湧き上がってきた。庶民の人々の生活について何もわかっていない。ロシアが民主国家になってすでに 30 年近くたっているのに、そのことも全然理解できていないのに、ロシアをわかった気になっていた自分がとても滑稽だった。

「これは････そうか、点と線かも･･･」

ふと松本清張の小説「点と線」を思い出した。この作品は西村京太郎が確立したと言っても良い「トラベルミステリー分野」の先陣ともいえる推理小説で、中学生ごろに読んで深く感動した記憶がある。九州で起きた心中事件の、列車を使ったアリバイを少しずつ崩していく様子を描いた作品で「ある事象だけを見ていても、実は裏で別の事象とつながっている。それを紐解いてこそ真実が見える」。そんなメッセージを持った作品だったと記憶している。

点と線。その両方を考えないと本質は見えてこないのに、自分は点でしかロシアを見えていない。しかも本当に小さな点なので、それをつなぐ線も見えていない。当然「面」という全体も。果たしてそれでいいのだろうか･･･。

・・・・そう自問自答する僕を乗せ、アエロエクスプレスは静かに走り続けていた。

列車の奏でる単調なリズムは「点」のように聞こえた。

「点・・・」と、思った瞬間、スティーブ・ジョブズの「点をつなぐ」という言葉を思い出した。

「将来をあらかじめ見据えて、点と点をつなぎあわせることなどできません。できるのは、後からつなぎ合わせることだけです。だから、我々はいまやっていることがいずれ人生のどこかでつながって実を結ぶだろうと信じるしかないのです。」

（You can't connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards. So you have to trust that the dots will somehow connect in your future）。

ICT 業界にそれなりに携わっているものとして、アップル社の創業者の一人、ジョブズの言動はアップル社の黎明期（モトローラ 680 x 0 系 CPU の初代 Macintosh のころ）から常に気になっていた。ウォズニアックと共に Macintosh で成功した彼が、ペプシコから招いたジョン・スカリーにアップルを追われ、Next をつくり PIXAR をつくり、再度アップルに戻り、すい臓がん手術をした後、スタンフォード大学卒業生を前にした時の名演説の一説が上記である。

「コネクト　ザ　ドット　かぁ‥」
「点を繋がないと見えないものは多いけど、そもそも点がなければ、繋ぎようがないんだな」
結果的にジョブズの死の直前の演説となってしまったこの言葉を頭で繰り返しているうち、たとえ小さな点であっても、それを自分の中に打っていくことは、それなりの意味があるのかも、とも思い始めた。

自分はロシアに着いてわずか半日。電車に乗って、ホテルに泊まって、数か所を回ってきたにすぎない。ロシア語も話せない。直接言葉を交わした人は数十人足らずであろう。でも、日本を離れ、日本とは違う文化の中で、僅かだけどロシアの風を感じ、ロシアの香りを嗅ぎ、ロシアの人々とそれなりに言葉を交わすことができた。

小さな「点」でしかない行為だけど、日本で普通の生活を持ち、家族や社会的責任を背負っている中では、そんな「点」ですら、ないよりましなのかもしれない。
数学的に言うと、点にも線にも面積はない。点は位置を、線は点と点を結ぶという位置情報だけを現している。しかし、面積はなくとも、「そこにある」というだけでも、意味はあるのではないか・・・。

短時間の訪問、限られた場所だけの訪問。仮に見えない部分、知らない部分があったとしても、それをきっかけとして、自分が自分らしく生きていけるのであれば、その行為自体は、十分意味があるのではないか・・・。そんな気がしてきたのである。

気が付くと列車は終点の空港駅に差し掛かっていた。時計を見ると 1 時 50 分。レンタカーの予約時間を 1 時間近く過ぎていた。半日しか借りない客なのに 1 時間も遅れるとは・・・と心配しているかもしれない。

シェレメチェボ空港駅に到着すると同時に一斉に動く乗客

（Шереметьево は Ш は Sh、P は R と読めばシェレメチェボと読める）

「レンタカー屋の人は心配しているかもしれない」
「あまり待たせちゃいけない」
「よし、走ろう！」
いろいろ考えていたら、元気をもらった気がしてきた。

「この旅が、仮に「点」でしかないとしても「無」よりはまし。
　点しか増やせなくても点は線への、そして面へのスタートだからね」

そう感じた僕は荷物を抱え、列車のドアが開くのと同時に空港ターミナルに向けて力強く走り始めていた。

夕暮れのヒュンダイ　ソラリス

第7章　ロシアをドライブ

Драйв россия

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第7章　ロシアをドライブ

【1】ロシアの菩薩さま

「おお、やっと来たね」

僕が目の前に着いた時彼はそんな目で僕を見つめた。

「予約してあるものですが･･･」と言い、スマホと書類を出そうとすると

「ハイハイ。お待ちしていたよ」と彼は言った。

シェレメチェボ空港 SIXT オフィスの菩薩さまのような窓口氏

シェレメチェボ空港 D ターミナル到着ロビー 1 階の SXIT レンタカーオフィス。そこの窓口にいたのは、大柄で、何か言うと「ふふっ」と静かに笑う、見るからに人の好さが染み出る菩薩様のようなおじさんだった。

予約では午後 1 時からレンタル開始となっていたが、モスクワ市内出発が遅くなった上、空港特急の速度が遅く、かなり時間がかかってしまった。時計を見ると 2 時を過ぎている。

パスポート、国際運転免許、クレジットカードを出しながら「遅れてごめんなさい」というと、「大丈夫だよ、気にしないで」と優しい声が返ってきた。

経験上、海外のレンタカーの乗り出し手続きは 30 分から 1 時間弱はかかる。書類の確認、顧客情報の登録、保険の締結、返却方法や場所の確認、そして移動して現車確認・・と手続きが多数あるからである。

高価な車を借りるからには借りる人間の身元、資格そして支払い能力も確認したい。何の車をどこで返すか、どうやって支払うか、そして保険の種類選択とその締結までの各種“契約”には手間がかかってしまう。

今回はスマホ上の予約なので、予約用紙の印刷もできなかったが、菩薩様は上記 3 点だけで、淡々と登録手続きをつづけた。

「保険はどうしますか？」

「えっと。フル･プロテクションってできますか？」

「あぁ、ハイハイ。できますよ」と、保険にも加入した。

車を運転する際、絶対に必要なのが保険の加入。海外での契約はやや難易度が高いが、内容は日本のそれと大差ない。必須となるのは以下の 3 種類。

① LDW/CDW(損害賠償保険)、②TP(盗難保険)、③PAI(搭乗者保険)である

解説しよう。

① LDW/CDW とは、自車輌損害補償制度 Loss Damage Waiver (LDW)または車両損害補償制度 Collision Damage Waiver (CDW) と称されるもので、いわば日本の任意自動車保険と同じ。表現が二つあるのは、アメリカでは LDW、 その他の国 CDW と称することが多いだけで基本的には同種である。

② TP とは車両盗難保険 Theft Protection 。その名の通り、車両が盗難に遭った際、補償を行う保険。

③ PAI とは搭乗者障害保険 Personal Accident Insurance。これも日本と同じで搭乗している人員に対する保険。

つまり盗難保険以外、日本となんら変わらないが、やはり外国語での契約。日常会話では使わない文語も多く難易度はやや高い。実際には契約内容や保険の種類はどこの会社も同じようなものであるし、最近の大手レンタカー会社は英語での契約が可能なことも多いので、英語が分かれば問題なしのことがほとんどである。

また「海外で運転するのは危険だから入れる保険には全部入りたい」「面倒なことは簡単に済ませたい」という

自分のようにズボラな人間にぴったりな加入方法もある。「フル・プロテクション」つまり「全部入り」というパッケージである。これだと上記３種類に加え、免責金額ゼロ、タイヤやワイパー補償、携行品補償などが付く場合もあるセットである。ただし詳細は会社で異なるため、実際の借り出しの際は、その内容を丁寧に確認し、追加補償をかける必要が出てくるので、やはり保険の知識や言語力は必須になってしまうことは変わらない。

今回の SIXT ロシアのフル・プロテクションは、事故の際の免責金額がかなり高かったので、追加料金を払ってそれをゼロにしてもらった。

菩薩さまはテキパキと仕事を進めていた。周りを見ると、客は誰もいない。ここはレンタカー会社が並んでいるエリアで、他ブランドの会社もズラリ並んでいる一角だが、自分の他はどこにも客がいなかった。もしかすると、冬のモスクワで車を借りようとする人間はあまりいないのかもしれない。

ロシアの警察。車を運転する以上、事故への対応と覚悟は必須

「えっと、返却は何時ごろ？予定は夜 11 時って書いてあるけど」
「多分、そんなに遅くはならないと思います。夜 9 時ごろかな」
「なるほど。でも、その時にはここに誰もいないけど良いかい？」
「え？　じゃあどうすればいいですか？」
「駐車場の同じ場所に停めて、鍵はこの箱の中に入れておけばいいよ」
「わかりました。　・・・えっと。あなたはいてもらえないんですね」
「ごめんね。家に帰らなくちゃ。」
「・・・そうですね。こちらこそ変なこと聞いてすみません」
窓口の菩薩さまはそんな会話にも人の好さが染み出ていた。またこんな会話もした。

「あのさ、モスクワ市内のどこに泊まっているの？」
「ベラルーシスカヤ駅近くのホテルに泊まっていましたが、チェックアウトしてしまいました。深夜に飛行機に乗るんです」
「どちらに行くの？」
「テルアビブです」
「テルアビブ？　えっとあの、イスラエルの？」
「ハイ」
「そっか・・・。困ったな。じゃあロシア国内の連絡先住所をどうしよう。ええっと、まぁ、ここに『モスクワ』って書いておいて。」
「・・・ここ（ロシア国内連絡先住所欄）ですね・・・モスクワ、だけでいいんですか？」
「いいよ。大丈夫だから」

そんな感じで、こちらに都合の良いよう配慮をしてもらった。車はターミナル横立体駐車場にあるとのことなので、一緒に徒歩移動しながら他の話もした。

「モスクワの冬ってこんなに暖かいんですか？　もっと寒いと思っていました」
「今年は異常だよ。こんなに暖かかった年はないな」
「雪は降っていないのですか？」
「モスクワ市内では、しばらく降ってないね。一週間ほど前に降ったけど、溶けちゃったんだ」
　異常気象は不都合もあるのかもしれないが、運転をしようとする旅行者にとってはありがたかった。

駐車場に着くと、「この車ね」
「予約はゴルフだったけど、ヒュンダイのソラリスだよ」と白い車を指さされた。

彼は、車自体は新しいが、しばらく動かしていないらしく薄くほこりがたまっている白いセダンを指さした。

「オプションで「冬の装備」とあったからタイヤはスパイクタイヤね」と彼はタイヤを指さした。それから帰りはこの駐車場の同じあたりに戻してくれればいいこと、ガソリンは満タンで返すことを再度確認し、手を振って去っていった。

ロシア製韓国車　ヒュンダイ･ソラリス　空港駐車場にて

「さて･･･」

荷物から車載セットを出す。電源分岐ソケットを出し、スマホとルーター、ドライブレコーダーに 12V を供給。スマホホルダーもセット。印刷してきた地図類を手元に置き、ミラーとシートを調整した。

エンジンをかける。早く出発したい逸る気持ちを抑えながらスマホに目的地をセット。

準備は整った。さあロシアの運転に出発である

【2】ロシアでの運転　安全確保のために

「ヤバイ。本当に借りてしまった････」

理解はしていたが、リスクだらけのロシアでの運転を本当に始めてしまったことに興奮しながらもどこかで戸惑う自分がいた。机上の空論ならばなんとでもなるが、実車が動き出してしまった今、もうあとには引けない。改めて自分の無謀さと、そのくせ臆病な思い切りの弱さを感じたが、こうなったらとにかく進むしかない。ドキドキしながらそっとアクセルを踏んだ。

車はシェレメチェボ空港を出て、高速道路 M11 に入った。

走りはじめると、それほどリスクを感じない高速道路での運転

「･･なんだか、大丈夫かも･･･」

久しぶりの左ハンドル、右側通行の道だが、実は左ハンドル車、右側通行の道路もかなり走っている自分である。数分走れば、かつての感覚が蘇り、大きな違和感はなかった。ヒュンダイのハンドルをしっかり握り、高速道路を他車の流れに乗り、周りの車とも良い間隔で走っていると、最初の不安がどんどん消え去っていくのを感じた。

というのも実は、「ロシアで運転するかも」と考えた時点から、とれる限りの安全策を考えて施してきたからである。前述のとおり、冬のロシアを、ズブの素人外国人がレンタカーで運転するのは無謀。でも無謀な行動だからこそ、それを乗り越えるには何をどうすればいいのか、何が必要なのか、自分が模索・構築してきた安全確保策を紹介したい。

題して「冬のロシアを素人が運転するための安全確保9か条」

①　自分の走るであろうルートを確認する

今回は出発地と目的地が決まっていたので走行予定ルートを、ネット上で何度もトレースしてみた。単に調べるのではなく、車線や道幅、交通量の感覚から、走れそうな道なのかをストリートビューで簡単に確認した。

② リスクが高いルートは最初から行かない

今回はシェレメチェボ空港から、50km ほど離れたモニノの街に行くのが目的だったので、郊外から郊外へ移動のみ。よって事故率が高くなる中心部には近寄りもしなかった。車の運転が心配なモスクワ中心部は、地下

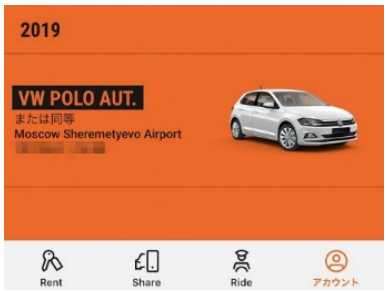
鉄中心で移動する計画を立てた。

③　時間的余裕を取る

急いで目的地に向かうとろくなことがない。また返却まで時間敵余裕がなく、ぎりぎりで動いていると、道を間違えたり、渋滞したりしただけでも致命的な事態になる。また返却も、ガソリンを入れて、返却地に無事にたどり着き、係員のお兄さんを呼んで、車の状態を確認してもらって・・・なんてやっていると、かなりの時間がかかる。よって今回は午後から深夜のすべてをこのドライブにあて、時間の余裕をとった。

④　レンタカー会社は大手で借りる

地元の中小会社で借りると割安になることも多いが、料金のトラブルがあったり、車が古かったりする。大手は料金がやや割高だが、支店も多く、事故の時も連絡先が多くある。車も新しいことが多く、故障も少ない。日本の常識からすると「車が壊れるなんてよほどのこと」と思うが、外国車はよく壊れる。ましてレンタカーの故障率は実はかなり高い気がする。今回借りた SIXT（シクスト）はドイツが本社の国際レンタカーブランド。南米などでは全く見かけないが、ヨーロッパを中心に存在感があるブランドである。スマホで検索していた時、モスクワに関する情報が一番多かったのでここを選んだ。



SIXT レンタカーのスマホサイト画面

⑤ 借りるとき、保険にはすべて加入しておく

前述のとおり、レンタル開始時に保険加入の有無を聞かれる。このとき保険に加入しなければ驚くほど安く借りられるのだが、やはり保険加入は必要だと思う。特にその国に慣れていない旅行者にとって保険は命綱である。

⑥ ナビを用意しておく

道の間違えのみならず、車線のミスすら、大変な事故や時間ロスにつながることがある。もちろん道がわからなくてうろうろすることはそれだけで不安である。以前は自分も大きな 1 枚の道路地図だけで外国を走っていたが、現在のようにスマホがナビとして使える時代、これを使わない手はない。車内で電源に接続し、常時モバイルルーターなどの回線確保ができればこんなに役立つものはない。

Google map が使えればナビは十分

⑦ お金の準備

自動車運転で、いざという時に必要なのが現金である。場合によっては交通違反切符を切られたり、警官に賄賂を要求されたりするかもしれない。ガソリンスタンドは現金しか受け付けないかもしれない。事故の初期対応にしてもクレジットカードで支払えるとは思えない。よって自分はいつも多めに現地通貨を持参している。今回もそれなりのルーブル現金を確保した。さらに念のため US ドル、およびユーロの現金も用意してある。大金を現金で持ち歩く危険性、そして再両替の非効率性は十分承知しているが、それ以上に緊急事態に対応できないリスクの方が心配だからである。またクレジットカードも常時複数ブランド、複数枚ある。具体的には VISA4 枚、Master と JCB と AMEX を各 1 枚、各所に分散してある。米 CITI BANK の国際キャッシュカードもある。こんなに持参していると「ありすぎ」と思われると思うが、外国でのトラブルの多くはお金で解決できることが多い。これは世界中を旅して学んだ自分なりのリスク回避の極意である。

⑧ 無理をしない

旅先で体調が悪くなることもある。寝不足でフラフラになることもある。また気象条件が悪かったり、大きなイベントで交通がマヒしていたりすることも想定される。そういった場合は無理せず、潔くあきらめる気持ちをいつも意識している。特に何かの予約があると、予約金の没収が嫌で無理をしてしまうが、「事故に遭うよりよほど良い」と考え無理をせず、時には中断する勇気、余裕を持つことを忘れないようにしている。

⑨ その他、最悪の事態を想定し、いざというときの手を打てるだけ打っておく

そして「交通事故にあってしまったらどうしたらよいか」と必ずシミュレーションしている。考えたくないが

やはりその覚悟と準備がなければ運転してはいけないと思う。まずはレンタカー会社で緊急連絡先をしっかり確認し、明記している。そして同時に「言葉の確保」も重要である。スマホなどの機械翻訳が使えればいいが、ダメな場合の現地語は　Пожалуйста, позвоните кому-нибудь, кто может говорить по-английски（英語が話せる人を呼んでください）などは必ずメモすることにしている。

また、もっと他のトラブルも想定する。例えばスマホのナビが使えなくなった場合の対応である。ナビが動かなくなった場合、スマホの不具合か、モバイルルーターの不具合か、車の電源系統の不具合か、それとも通信会社の不具合か原因を調べると思うが、仮に原因が特定されたところで、即トラブル解決にはならない。よって「もしナビが使えなくても無事、車を返す方法」の保険として、自分は返却地を「空港」にしている。空港ならば、幹線道路に標識が出ているかもしれないし、何よりも道端の人に聞いたとしても教えてくれる可能性が高い、と考えるからである。加えて念のために目的地までのルートをあえてプリントアウトした地図や、名称や写真を印刷したものも持参している。路傍の現地の方に道を聞くのに必要だからである。

・・・・・・・・・・というように、いろいろな手を打っている。本当を言うと、ここに、

⑩　現地の言葉、ロシア語をきちんと話せるように勉強しておく

というのが加わると思うが、言語が苦手な自分はとても無理。もちろん、最低限の会話は何とかしようと思って挑戦するが、やはり短時間に習得はできない。せめても地名ぐらいは・・・と思って挑戦するが、能力が足らず、ちっとも覚えない・・・。しかも年々記憶力は劣化している・・・。ふぅ・・困ったものである。

【3】ロシア製　韓国車に乗る

今回借りた車は韓国の車である。

「韓国車、ヒュンダイの車の話をしたい」、というだけで、日本人には敬遠されてしまいそうなほど、今は日韓関係が大変な状況だが、でもここで政治的話題を論じる気はない。ここでは純粋に”車”として韓国車を考えたい。

日本では見かけなくなってきた小型セダンである　ヒュンダイ･ソラリス

最近のヒュンダイの車は、初期のものに比べてかなり良くなっている。今から数十年前、世界に進出しだした頃のヒュンダイの品質やデザインはかなり心配だったが、最近のものは非常によくできていると感じる。考えてみればいまや日産マーチだってタイ製。スズキもハンガリー製の車種も増えてきた。つまり、いろいろな意味で自動車会社の国籍、製造国の差異は少なくなってきているように思う。それどころか車種によっては、韓国車は日本車にない、奇抜で先進的なデザインをしていることもあり、日本以外のかなりの国でそれなりのシェアを持っているのも事実である。

さて、今回の車は、ヒュンダイ（現代）のソラリス SOLARIS　1.6。

ほとんどの方が「ソラリス？　なんだ？その車」と感じると思うが、2010 年に 初のヒュンダイのロシア生産車として作られた小型セダンである。わかりやすい言い方をすると小型セダン アクセント(Accent/엑센트)のロシア版である。アクセントはカナダでは 1994 年 9 月の登場以来 46 万台以上を売り上げており、同国ではサブコンパクトカーのベストセラーになっている。中国では「悦納/Verna/ヴェルナ」、 メキシコでは、「ダッジ・アティテュード/Dodge Attitude」など、OEM も含め世界中で販売されている。

そんなアクセントのロシア版、ソラリス　SOLARIS だが、この社名は 2 万 7000 以上の中から一般公募で選ばれた名前とのこと。しかもこの 2017 年に登場したこの 5 代目、HC 型のロシア販売車は、ロシアのサンクトペテルブルク工場で生産されており、いろいろな意味でロシアに根付いた車種である。

この車、ヒュンダイがかなり前から作り続けている小型セダン　アクセントの５代目、ということで、かなり洗練された印象がある。まず外観のデザインだが、1.6L の小型セダンとしてはパッケージングも良く、前後のまとまりも上手。このクラスのセダンとしては十分美しいデザインだと思う。このクラスのセダン、以前はよく見かけたが最近の日本では人気がなく車種も激減している。日本でも需要はある気がするが、軽のハイトールワゴンの方が人も荷物も多く詰めることを考えると仕方ないかもしれない。

なかなか洗練されているリアデザイン

運転した印象だが、このクラスとしては十分な動力性能と、適度な運動性能を感じた。エンジンは 1.6L Gamma II MPi という直列横置き 4 気筒。最大出力 123 PS (90 kW; 121 hp) at 6,300 rpm 最大トルク 15.4 kg·m (151 N·m; 111 lbf·ft) at 4,850 rpm。強力ではないが、車重が軽く、小さめボディに 6 速 AT を組み合わせてあるので街中を流す分には全く問題は感じなかった。少し出足がゆっくりだが、速度を求める車ではないので、こんなセッティングで十分であろう。

220km/hまで刻んであるスピードメーター

エンジン音は回転を上げるとややうるさいものの、それほど気にない。音でいうならば、今回気になったのはロードノイズ。ただし今回は乾燥舗装面をスパイクタイヤで疾走させており、その音が邪魔していると思うので、本当はもっと静かなのかもしれない。

内装もかつてのヒュンダイ車のように、全部同一の安価なグレーのプラスチックでできているなどと言うことはなく、いろいろな材質を適材適所に配置し、それなりの質感もあり、このクラスとしては十分良いものである。インパネはメーターに 220km/h まで刻んであるのが日本車とは根本的に違う印象だ。中央のディスプレイも必要にして十分な情報が表示される。電子機器が得意な韓国だから、欧州車に比べ光り物の数がやや多い気がするが、嫌味な印象は受けない。

個人的に少し気になったのは、このクラスの一般的な日本車よりも剛性が低い気がした。ロシアの舗装はあまりよくない場所も多く、路上の凹凸も多いのだが、その際の衝撃の減衰が良くない気がする。高速で急カーブを曲がろうとするときの挙動や踏ん張りも少々心もとない。加えて、ドアの開閉やトランクの開け閉めの時の軽すぎる音と手ごたえにも物足りなさを感じた。具体的には日本の普通車の「バタン」という重量感のある開け閉めの感覚ではなく、軽自動車の「パタンッ」という、軽い開け閉めの感覚に近い気がした。でも、それ以外は非常によくできた車だと思う。価格がわからないが、ヒュンダイの戦略からすると決して高い金額ではないはず。それなりの商品競争力をもった車になっていると思う。

それなりにデザイン性の高いインパネとインテリアデザイン

ついでにロシアのナンバープレートについても触れておきたい。ロシアのナンバープレートは、アルファベット 3 文字+数字 3 文字。そこに地域コード 3 文字で構成されている。799 はモスクワを表すが、以前は 77 とか、79 とか、197 とか 777 などもあったそうだ。中でも 777 は高値で売買されることもあるらしい。アルファベットは外国人でも読めるようにキリル文字の特有文字（Б とか Φ とか）を除く１２文字だけが使われているとのこと。地域を数字で表すのはトルコなども採用している方式で、意味が分かれば日本よりも使いやすいと思う。キリル文字を使わず、

ロシアのナンバープレート　799 はモスクワをあらわす

ラテン文字だけで表現しているのも、ロシアらしからぬ外国人や外国への配慮を感じる。

そして今回の極めつけは「スパイクタイヤ」装着車であったこと。車を予約するときのオプションに「冬のタイヤ」の項目があったので注文しておいたら、スパイクタイヤを履いていた。日本では 1980 年代まで冬の定番だったが、粉塵公害が問題となり、1990 年～1992 年に法律が整備され原則禁止になったものである。

でも北欧をはじめいくつかの国ではまだ現役。そしてここロシアでも **шипованная шина**（ショポーバネーシナ）といい、現役で使えるタイヤである。ここでふと心配になったのは、以前何かで読んだロシアの記事。スパイクタイヤとそれ以外では、運転の感覚が違うのでスパイクタイヤ装着の場合は、**шипы**（とげ、スパイクの意味）の頭文字「**ш**」（シャーと発音。英語なら「W」）のマークを車体後部に表示しなくてはいけなかったような気がした。でも、レンタカー屋のおじさんは何も言っていなかったので、まぁ、いいかと気にしないこととした。

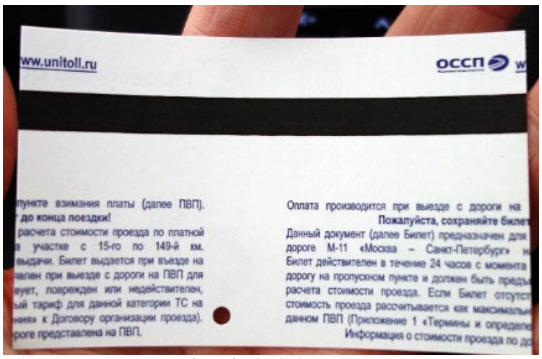
人生初体験のスパイクタイヤ。フィンランド製

・・とエラそうに書いているが、正直言ってスパイクタイヤの運転は人生初体験！　子ども時代、親の車がスパイクタイヤを履いていたのは覚えているが、自分自身はすでに禁止された後の時代しか知らないからである。そして肝心の運転フィールだが・・・。乾燥路を普通に走るには違和感がない。やはり制動距離は気持ち長いように感じ、ロードノイズも多少気になったが、それが車によるものなのか、タイヤのせいなのかよくわからないままだった。ちなみにタイヤはフィンランド　NOKIAN 社の NORDMAN 7 (185/60/15)。スパイクタイヤとしてはメジャーな製品のようである。

【4】ロシアの高速道路事情、モスクワの道路事情

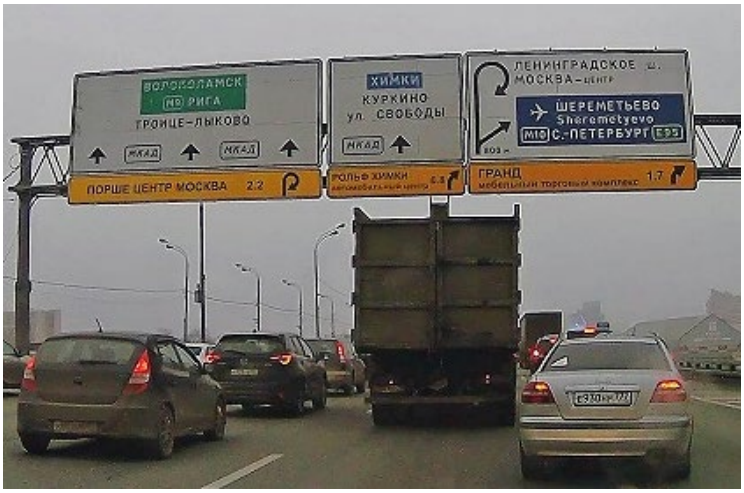
では、ここでロシアの高速道路事情についてみていきたい。広大なロシアには長大な道路網が整備されている。主なものは M で表される連邦道路 Federal Highway /**шоссе** で 120 本以上の路線がある。以前はこのような“M”で始まる路線しかなかったが、現在は“P”や“A”の道路もあるという。今回は M11 号と M7 号を通ってみた。　この“M”。一見単なる記号に見えるが、少し深読みするとここにもロシアの中央集権的な国づくりが垣間見える。実はこの M というのは **Москва**：モスクワの頭文字。つまりモスクワから地方に向かっている道路、ということを示している。ソビエト崩壊後、増えてきた“P”は **Регион**：地方、“A”は **Автомагистраль**：自動車幹線道路となり、その傾向が多少薄まってきていることもうかがえる。前述したモスクワの鉄道駅名と同じ理屈だが、こんなところにもモスクワを国の中心に据える中央集権主義の意思が表れていると思う。

連邦高速道路 M11 の料金所



連邦高速道路 M11 のチケット

モスクワ圏の高速道路事情についても触れたい。モスクワの都市計画は「環状」が基本になっている。前述した通り地下鉄もぐるりと環状線が基本なっているが、道路も環状が基本になっている。これは人々の便宜を図って都市計画を・・・と書きたいが、そうでない事情がある。古くから争いの地であった故、これは外敵から街を守る要塞的な都市計画から来ているのである。つまり完全に戦闘態勢からきている都市計画

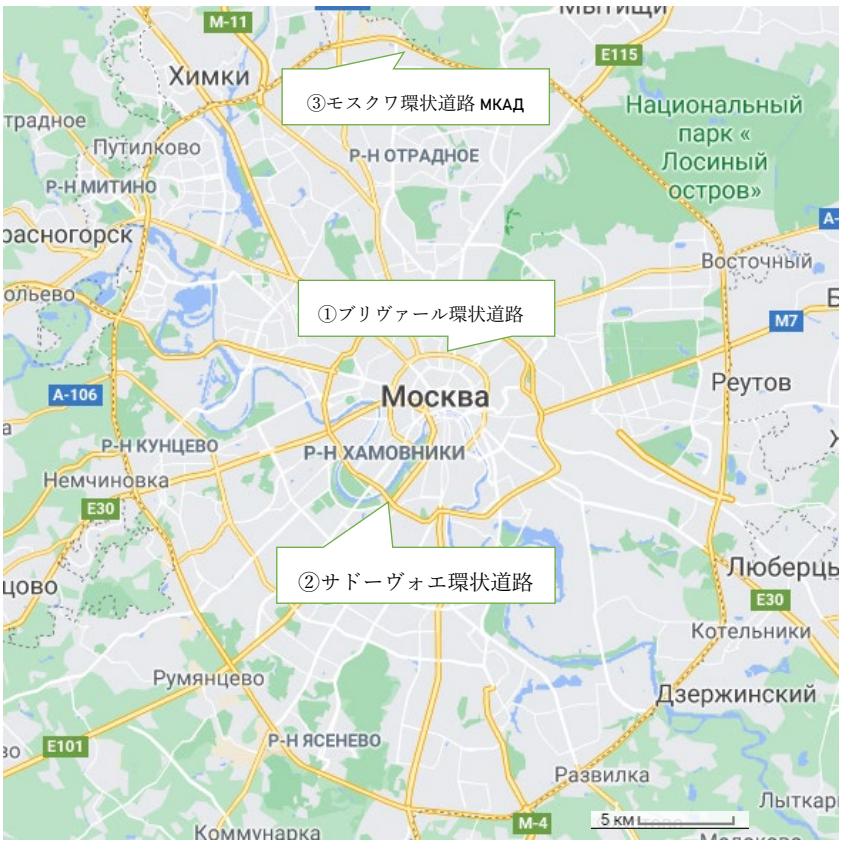


渋滞中のモスクワ環状道路 МКАД

の結果、環状になっているものができているだけである。

同様な成り立ちを持っている都市は意外に多く、オーストリアの首都ウイーンの環状道路リングシュトラーセ Ringstraße も同様に、他国からの侵略に対する堀を埋め立てたものである。

成立は軍事的理由ではあるが、現在の都市工学からすれば環状路線があるということは有利に働く。唐の長安を模した平城京・平安京、つまり奈良・京都よりも、関東大震災後に環状 1 号から 8 号まで計画した東京の方が現代の交通事情に合致しているのは言うまでもない。これは大航海時代のスペイン同様の街並みを持つ中米・南米の都市（例えばメキシコシティなど）でも同じで、碁盤の目の街は整然とした良さはあるが、自動車などの都市交通を考えると渋滞が避けられない作りになってしまっている。



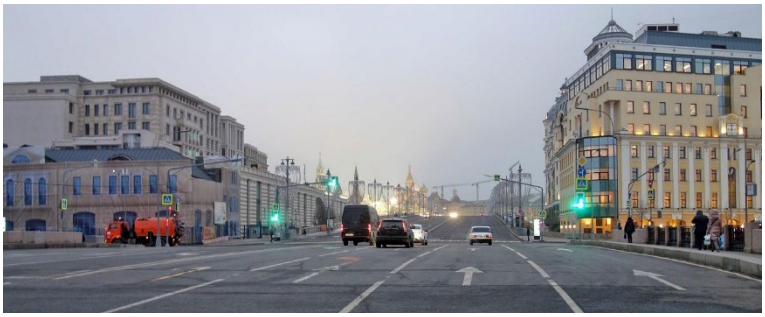
モスクワの3重の環状道路

モスクワの環状道路は、主に 3 つある。最内周はブリヴァール環状道路 **Бульварное кольцо**（長さ 9 km）、2 番目はサドーヴォエ環状道路 **Садóвое кольцó**（長さ 15,6 km）、そしてその外側をぐるりと大きく一周しているのが、長さが 108,9 km もあるモスクワ環状道路 **Московская кольцевая автомобильная дорога**。略称として **МКАД**、あるいはそのラテン文字 MKAD として有名である。

東京の高速道路網をと対比すればわかりやすいかもしれないので例にとってみよう。

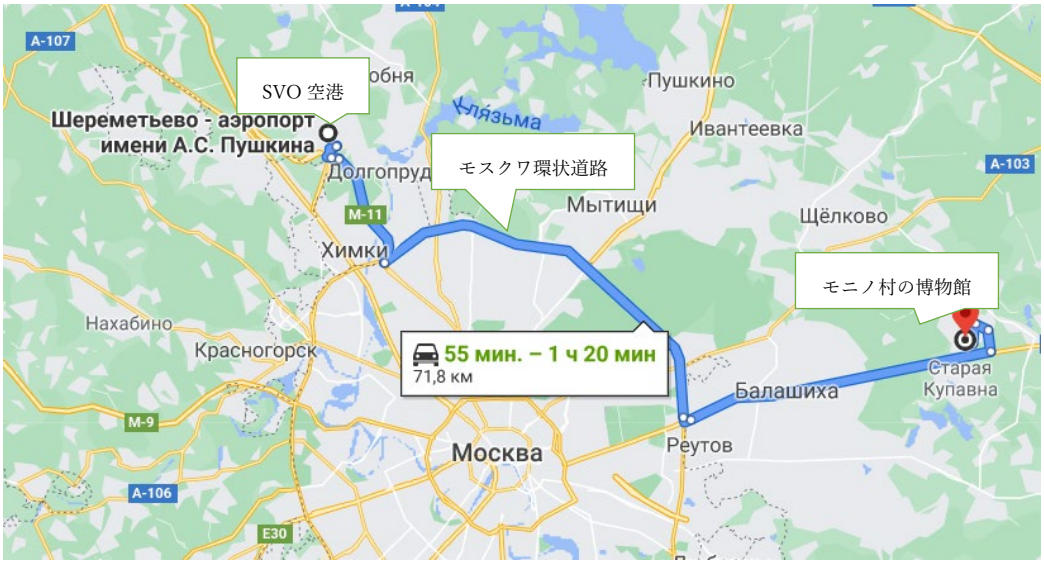
① 首都高速 都心環状線(C1) 長さ 14.7km
② 首都高速 中央環状線(C2) 長さ 47km
③ 外環（東京外かく環状道路）(C3) 85km
④ 圏央道(首都圏中央連絡道)(C4)300km

東京は都心環状と中央環状以外は未開通区間があったり、そもそも東京湾があり完全な環状にできなかったりという差はあるが、モスクワ環状道路 **МКАД** の位置は「外環と圏央道の間か」「環状 **8** 号の開通部分(大田区羽田空港から北区赤羽まで)で **44km** だから、それより少し外側のイメージだね」と思っていただければ少しはわかりやすいだろうか？ただしそこは“全ての土地は国家のもの”だった元共産圏。モスクワ都心の広い道路を見ていると、都市計画・都市交通は資本主義圏とは全く異なる哲学を感じ、単純比較は絶対できないと思うが。


早朝のモスクワ市内の道路

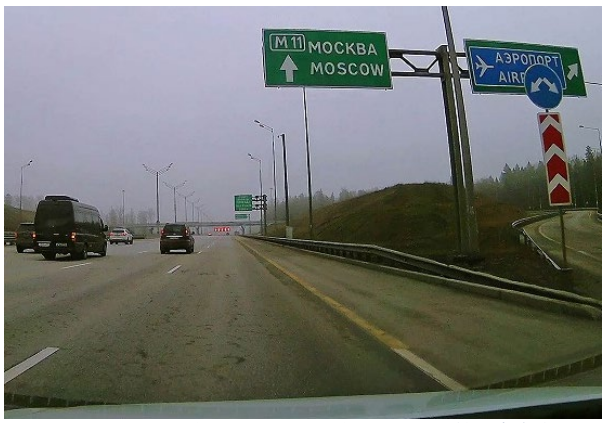
【5】今回のルート

では今回の走るルートを説明しよう。前述した通りモスクワ郊外の村にある博物館に行くために車を借りている。そのためのルートは簡単で、主に 3 つの道路を通るだけ。右の地図のように、①空港から高速道路 M11 号線で南下し、②モスクワ環状道路を通って、③高速道路 M7 に乗り東に向かうだけ、である。



空港からモニノ村の博物館までのルート

少し詳しく書こう。まずシェレメチェボ空港を出て、①連邦高速道路 M11 号線に乗ってモスクワ市内に向かう。M11 は 2018 年に開通したばかりの新しい有料高速道路で首都とロシア第二の都市サンクトペテルブルクまで 684km を結ぶ大動脈である。日本でいえば東名高速に対する「新東名」という感じだろうか。ここの開通前は M10 という無料道路を使ったが、所要 10 時間もかかり無駄が多かった。これに対し M11 は車線が 4 車線、6 車線、8 車線、10 車線と広く、最高速度も 130km/h（冬季は 110ｋｍ/ｈ）なので、所要 5～6 時間、事故率も半減したという。



サンクトペテルブルクとモスクワを結ぶ M11 号線を疾走中

そして M11 から、②モスクワ環状道路 **МКАД** に乗り換える。この道が前述の大きな環状道路でモスクワの大動脈である。かなり渋滞するらしいが、他に方法がないのでここを通っていく。そして **МКАД** から③**M7** に乗り換え **30km** ほど走ると目的地の村に着く。今回、わずかしか走らない **M7** だが、その総延長は **1,351km** もあり、ロシアの母なる川、ヴォルガ流域を通っていくため、連邦道路ヴォルガ **Федеральная автомобильная дорога M7 «Вóлга»**の名もある。通過するのはヴラジーミル州、ニジニ・ノヴゴロド州、チュヴァシ共和国、タタールスタン共和国と続き、バシコルトスタン共和国の首都ウファまで結んでいる。いつかはそういった村々まで走ってみたい気持ちがうずくが、現実には厳しいこともよく分かっている。

【6】「私が感じたロシアのでの交通事故率が高い理由　8種類　」

前述したが、実は世界各地の道を運転している自分。左ハンドルの車、右側通行の国を走るのもそれほど違和感を感じず運転できる人間だと思っている。よって、走り出してしまうとロシアの道にもそれなりに順応し、それほど危険、という感じは持たなかった。しかし、実際に走ってみたからこそ、なぜ「ロシアの運転が危険と言われるか」が分かった気がした。

車線を気にせず、みんなでグイグイと詰めてくるのが普通

ネット上でも「ロシアの事故率はハンパない」とよく聞くが、実際はどうかと調べてみると・・・やはりその通りだった（笑）。2017 年の世界の交通事故死亡率、国別ランキングでは 2 位のブラジルを抑えて堂々の 1 位。10 万人当たり 19.2 人の死者が出ている。ちなみに日本は 3.1 人で 36 位。人口が日本とほぼ同じなのに死亡率が 7

倍というのはただ事ではないだろう。そして実際に走っていても、感覚的に 1 時間に 1 回は生の事故現場に遭遇した。つまり半日走っていると、6 回は事故を見てしまった気がする。

「なぜここまで事故が多いのか・・・」

せっかくなので自分のように、ズブの素人だからこそ見えたロシアの事故率が高い理由をまとめてみたい。

題して「私が感じたロシアでの交通事故率が高い原因　全 8 項目」

理由①『交通量に対して道路の容量が少ない！』

まず、絶対的な理由として都市人口、そして車の所持率に対して道路の許容量が少ない。モスクワの幹線道路は非常に広いが、それでも収容できないほどの車の量があると思われる。その原因は車以外の交通機関が乏しいのだ。モスクワ市内は地下鉄網が発達しているが、近郊となると途端にローカルな鉄道しかない。もちろん高速鉄道などもない。だから少し郊外に出るためにも車が必要になり、需要は増えるばかり。

市内各所で常態化している渋滞

理由②『社会的インフラの弱さ』

ロシアでは目の前に突然工事区間が現れて、車線がなくなることがよくある。それも日本のように事前に、丁寧に、あちらこちらで告知があるわけでもない。本当に突然、車線がなくなってしまう。こうなるとその車線はもちろん、隣の車線も突然混雑し、車の流れが極端に変化する。そしてその変化についていけなくなった車が事故にあう・・・。そんな感じを受ける。

突然渋滞していたのは、この先の突然の工事が原因だった

理由③『車の性能差が激しい』

ソビエト崩壊後、着実に民主化を進めてきたロシア。その中で富裕層も生まれ車も西側の高性能車や韓国のアジアンカーなども増えてきた。いまや西欧と変わらない道路風景になってきているが、それでもソビエト時代の古い車も走っている。写真右側の赤い LADA のような 40 年前の車も見かける。大型車にも相当古いものがあり、ほぼ「停止しているの？」と思うような速度で喘ぎ喘ぎ荷物を運んでいる車もある。これがポルシェやメルセデスと一緒に走っているのだから車の流れが不均衡になるのは当然で、突然の低速車に驚き、事故にあう・・・という状態になる。ちなみにロシアは「超格差社会」として知られている。ちょっと古いが 2013 年のクレディスイスのレポートによると、ロシアの富の 35%はわずか 110 人の大富豪によって所持されておりその総資産額は 4200 億ドル(約 43 兆円で連邦予算の 3 倍以上）とのこと。こんな社会であるので超高級車から、旧ソビエト生産車まで同時に存在してしまうことになる。

数は少ないが必ず走っている旧ソビエト時代の古い車

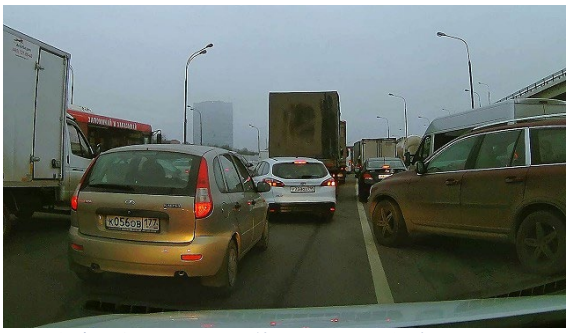
理由④『飲酒運転』

ロシアのお酒といえば、やはりウォッカ **водка**。「命の水」という意味のこの酒の消費量が半端ない国である。

そしてこの国は飲酒に関してかなり寛容、というか放任の国だった。街中では「飲酒運転禁止」の標識も見たが、そんなことお構いなしでいまだに飲酒運転がはびこっていると聞く。仮に見つかっても、警官にわいろを渡せばなんとかなることも多いらしい。ちなみにロシアで飲酒運転が法律で禁止されたのは2010年。加えるならば2011年までロシアの法律ではビールは酒ではなく「食品」扱いだったという。日本では考えられない「飲酒運転寛容大国」である。

理由⑤『ドライバーのとにかく前に進みたい気持ちが強い』

右の写真とその下の写真は、何かの支線とモスクワ環状道路 МКАД への合流点なのだが、何らかの理由により、目の前の МКАД 本線が大渋滞を起こしていても、みんながとにかく前に進みたいので、車線がぐちゃぐちゃになっている状態。目の前の白いフォードモンデオは車線を変更し左に行っているが、右側の赤い VOLVO もこちらの車線、さらには隣の車線も狙っているところである。ついでながら、自分このままでは進めないので左に入れてもらっている。ロシアではこんなせめぎあいが合流地点で延々と続く。とにかく「前へ前へ」「入れて入れて」の気持ちが出まくっているが、こうでもしないといつまでも進めないので、結果的に全員で「前へ前へ」「入れて入れて」という動きになる。



合流地点ではみんなで絶妙なタイミングで割り込んでいく

理由⑥『都市部は渋滞するくせに、少し郊外に出ると 100km以上で快走できる』

例えば、この写真の左車線はなんらかの原因でずーーーっと渋滞しているが、自分の走っている車線は快適に 100km/h オーバーで疾走できている。この緩急の差が激しすぎて、いざ渋滞、いざ交差点となると、心と車が対処できず、ぶつかってしまうような気がする。

となり車線は渋滞。こちら車線は 100km/h で爆走

理由⑦『高い巡航速度』

道に表示されている最高速度は 100km/h が多かったが、実質的な巡航速度は 120km/h 程度だろうか？実際問題、追い越し車線は 130km/h でも「どけどけ」とされた。日本でいうならば、すべての道が新東名の御殿場 JCT－浜松いなさ(日本なのに最高速度 120km/h 区間)を深夜にぶっ飛ばしている感じ・・だろうか。感覚的に日本よりも速度平均は数割～倍ほどあったように思う。

理由⑧『過酷な自然環境』

冬が厳しいロシア。寒いということは氷結があり、積雪がある。雪国の生活を考えればわかるが、極度な寒暖の差はインフラを激しく痛める。コンクリート内部の鉄骨が寒暖の差によって大きく収縮・膨張を繰り返した結果、亀裂を生じ、その隙間に水分が入り込み冬の間に膨張しさらに隙間を広げる・・という自然環境によるインフラ劣化が常に生じてしまう。結果的に工事が必要になり、渋滞が起こって・・・と悪循環が生まれてくる。

以上、「私が感じたロシアでの交通事故率が高い原因　全 8 項目」である。

「ロシアは交通事故が多い」。
それは事実ではあるが、その背景にあるのは国の仕組みだったり、過去からの経緯だったりすることを、実際に運転をしてみて感じた。そしてやはり人々はそれを絶対に避けたいと思っていることも感じた。

かなり強引な運転はするものの、本当に無理な割込みや路線変更はしてはこない。「これ以上やったら確実にぶつかる」というところまでは絶対に攻めてこない。

そしてなんとロシアにも「サンキューハザード」が存在していた。少し無理な割込みをしても、ほとんどの人が「ありがとう！」とハザードを出すことが多く、上手にコミュニケーションをとろうとしている気持ちも伝わってきた。もっと言うと、ちょっと手をあげたり、アイコンタクトをしてきたりと、実際のコミュニケーションは日本よりも濃密で、車と車で意思を交換し合っていた。

モスクワ市内の LED で動くアニメと残り時間を表示する信号

一般の人々は世の中の状況に合わせて上手に生き抜いているだけだった。

それを「ロシアの運転は危険」の一言で片づけてしまえば、それ以上のものが見えなくなる。
まるで自分が「共産圏は危険」という過去のイメージを引きずってしまっていたように。

やはり自分で体験し、考えてみることは、何物にも代えがたい思考変革のためのプロセスなのだと強く感じた。

しっかり作ってあるヒュンダイ　ソラリスの車内

ベラルーシスカヤ駅の「とまれ」の標識とタクシー

モスクワ市内でよく見かける韓国車。左は KIA　CERATO　、右は KIA　OPTIMA。ヒュンダイと合併した起亜自動車の小型・中型セダンである。ちなみにナンバーを見ると、左のセラートの“750”はモスクワ市のすぐ北西にある”ヒムキ”という街のナンバー。
右のオプティマの“190”はロシア第二の都市、サンクトペテルブルクのナンバー。700km の距離だが有料の M11 号線を使えば 5 時間程度で走ってこられるので、それほど珍しくないのかもしれない。

世界初の超音速旅客機ツポレフ 144 とスホーイ Su-25

第8章　あこがれの博物館

Музей тоскио

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第 8 章　あこがれの博物館

【1】日本でいうなれば‥

今回の目的地は「博物館」に行くことである。

博物館や水族館などが大好きな私。日本にあるこれらにもつい足を運んでしまう自分だが、小規模で、辺鄙な場所の施設にも魅力的なものも多い。今回もまさにそんな感じで、大都市に近い割に田舎でかつ知名度もない、「どこに？　なにがあるの？」という博物館を目指していた。

分かりやすいように、東京圏に当てはめるとこんな感じかもしれない。

例えば・・・「天然記念物の淡水魚ミヤコタナゴを見に『さいたま水族館』へ行きたい」という場合。

埼玉県羽生市にあるさいたま水族館

東京都心から直線距離で 60km。埼玉県羽生市にある「さいたま水族館」は東北自動車道羽生 IC から 3km、広い無料駐車場完備で車でのアクセスは簡単だが、公共交通機関となると東武伊勢崎線 加須駅が最寄り駅とかなり大変。しかも駅から 7km ありタクシーで 15 分、徒歩なら 2 時間もかかってしまう。もし自分が日本語がわからない外国人ならば、東京都心から自力でたどり着く自信がない。

富士山のふもとにある山梨県の「森の中の水族館」

もう一つ別の例をあげよう。「幻の淡水魚イトウの泳いでいる姿を見たい」と富士山の麓、忍野八海の山梨県立「富士湧水の里水族館」に行く場合、公共交通機関ならば、新宿から JR 中央線で大月まで行き、富士急行線に乗り換えて、富士山駅（かつての富士吉田駅）で下車し 6km ほどバスに乗ることになる。しかし自動車ならば東富士五湖道路山中湖 IC から 5 分で着いてしまう。

共通しているのは「苦労して行っても、一部の愛好家にしか喜ばれない」「アクセスが悪い上に知名度は低い」こと。これから紹介する場所もマイナーな場所にある、マイナーな博物館ではあるが、そもそも人の興味関心というのは千差万別、ということで気楽にお付き合い願いたい。

【2】どうしても行きたかった博物館

「そこまでしていきたかった博物館」それは「ソビエト時代の飛行機が展示してある博物館」。

簡単に言えば、古い飛行機が転がっている場所である。

前述の通り、飛行機が大好きな自分。物理、特に機械好き理系として昔から「空を飛ぶこと、宇宙へ行くこと」「航空宇宙技術」に強烈な憧憬の念を抱いていた。その後、多くの飛行機に乗るようになってからは尚更、機体やエンジンの仕組みはもちろん、航空業界の裏の裏まで気になるようになっていた。（ちなみに飛行機好きには「旅客機好き」「戦闘機好き」「ヘリ好き」などがいるが、自分は人が乗れる「旅客機」が大好き。さらに加えるとアニメの巨匠、宮崎駿も飛行機好きで有名だが彼は「戦闘機派」。ラピュタ・紅の豚などの作品には、戦闘機ファンならではの視点も多いと感じる）。

現在、空を駆ける機体の多くはアメリカのボーイング製か、ヨーロッパ共同のエアバス製のどちらかばかり。しかし、東西冷戦の最中の 40 年ほど前は状況が全く違い、アメリカにはダグラス、ロッキード・マーティン、イギリスにはデ・ハビランド、ホーカー・シドレー、オランダにはフォッカーなど様々なメーカーが乱立、そしてソビエト連邦にもアントノフ、イリューシン、ツポレフ、スホーイ、ヤコブレフなどがあった。ソ連機は西側の模倣機も多かったが、それでも実機を作り上げる技術力と生産力は驚異としか言いようがない。

そして、時が流れ機体が大型化・高性能化し、航空機メーカーも大規模な合併・統合が行われていく中、多くの会社が消えていった。加えてソ連崩壊を経て旧ソ連機の退役も加速度的に進んだ。それでもしばらくは旧共産

圏を中心に残っていたが、もはやほぼ全廃。現在も主力として使っている国といえば、キューバと北朝鮮ぐらい。つまりまともな航空産業がある国では、完全に廃棄済みの生きた化石ともいえるのが旧ソ連の旅客機たちである。

しかし・・・・。

しかし、そんな「ロスト・テクノロジー」な旧ソ連時代の航空機が、今も展示してある博物館が、世界で唯一、モスクワ近郊にあるという。

それがここ、モニノ空軍博物館である。

正式には空軍中央博物館 Центральный музей Военно-воздушных сил РФ といい、ロシア最大の航空博物館。ロシアの航空機に関する展示施設として世界最大であり、173 機の航空機と 127 基の航空機エンジンが展示され、兵器、機材、制服、その他航空に関係する物が多く収蔵されているという。軍事施設の敷地内にあり、ソビエト時代、一般市民は立ち入り禁止だったが、年月と緩くなり「外国人であっても事前申請があれば、職員付き添いのもと、見学を許可」するようになったらしい。さらに現在は「どうやら許可申請がなくても大丈夫らしい」との噂も聞いた。本当に入れるのか疑問ではあったが、とにかく、とりあえず現地に行ってみよう、と車を走らせていた次第である。

【3】まさかの時間切れ？

そんな憧れを持って、車を走らせていたが、ふと途中で

「予定よりも時間ロスが大きくて、開館時間に間に合わないかも？」と気づいた。

「空港からモニノまではわずか 70km。渋滞もあるかもしれないが、午後 2 時に出られれば十分間に会うはず」と考えていたが、実際にはまさかの渋滞の連続。渋滞を抜けてもまた渋滞でかなりの時間をロスしてしまっていた。

気が付くと閉館時間まで 1 時間もない。しかも緯度が高いモスクワなので、すでに暗くなり始めている。

「ここまで来たのにまさかの時間切れ？」と焦ったが、ここで事故を起こしては元も子もない。心では焦りながらも、しかし慎重に車を進めた。

モニノ村に入ったが、既にかなり暗い・・・

国道M７号線を降り、モニノ村に入る。はやる気持ちを抑えて、かなり暗くなってきた村の中を進んでいった。

そしてナビの示す場所についた。

「あれ？」

ナビはここが目的地と指しているが、どう見ても博物館ではない。

目の前は、人気のない古びた鉄の門と、大きな草が絡んでいる汚れた倉庫入り口が硬く閉まっているだけだった。

時計を見ると 16 時 20 分。すでにかなり暗くなっている。

「16 時 30 分が入場終了ならあと10分しかない・・・・」

ドキドキしながらも必死にスマホの地図と周りの状況を確認した。

ナビの示す「目的地」に到着したが・・・ここはどこなんだ・・・

地図を眺めているうちに、状況が分かってきた。ここら辺の施設の敷地が広すぎて、ナビの設定として博物館入り口が正確に指定できなかったのだ。

しかし、画面を探しても、どこが博物館の入り口なのかわからないが、近くに来ていることには間違いない。これらの施設群のどこかに目的地があるはずと考え、誰かに聞いてみようと周辺を探すことにした。

「おお、これは何かの入り口らしい！！」
しばらく走ると、何か、大きな施設らしい入り口を見つけた。
「‥‥あれ？、あれれ？？」と
しかし、何か違う雰囲気を感じた。
その時不意に、ライフルを携えた若い兵士が近づいてくるのが見えた。

「そうだ、ここは軍事基地の敷地だった！！」
「外国人は許可が必要って場所だった！！」
いろいろマズイことが思い出され、サッと体中の血の気が引いた。でも、急に逃げ出したらもっと怪しい。
とにかく丁寧に説明をしようと、声をかけた。

「‥‥あの‥‥すみません‥‥」
「航空博物館を探しているんですけど‥」

きちんとした表現ができずうまく伝えられないが、とにかく一生懸命、自分の意図を伝えた。

最初は「？？」という顔をしていた若い兵士だったが、すぐに「ああ、それはね」という顔になり「この先をまっすぐ行って、そのあと曲がって‥‥」と身振り手振りで丁寧に説明をしてくれた。それは不法エリアに侵入した外国人を追及する兵士ではなく、道に迷っている人を助けようとしてくれている親切なロシアの青年の姿だった。

「ありがとう！」と、大きな声で言って、再び車を動かす。

「捕まらなくてよかった」
「優しい人だったな」
「すごく若かったなぁ。少年兵かな？」・・・
様々な感情が湧き出してくる中、彼の教えてくれた道を走ると、無事に博物館入り口にたどり着くことができた。

【4】あこがれの博物館にて

すでにあたりはかなり暗く、時計は 16 時 30 分を過ぎていた。ドキドキしながらまだ空いていた入り口に走りこみ、受付のお姉さんに声をかけた。
「‥‥あの‥‥。まだ大丈夫ですか？　入れますか？」との問いに
「もちろん、大丈夫ですよ」と彼女は、ほほ笑んだ。

「空軍中央博物館」の看板

世界でここにしかないものばかりの展示物

「ようこそ。」
「‥‥えっとね、まず、ここを左に行って順路に沿って、この建物内の屋内展示室を見てね。それから、左側のドアから外に出られるから、道路を渡って反対側の左手に進んでいくと、屋外の‥‥‥」
安堵でいっぱいの中で聴く、優しいお姉さんの声は、まるで天使のささやきのようにも聞こえた。

「すごい。まさに宝物庫だ！」

指示された展示室に一歩、踏み入れた途端、その雰囲気に圧倒される。きれいに整備された展示室にはソビエトの航空宇宙技術の歩みが実物とともに丁寧に、誇らしく並んでいた。

ロシアとは思えない丁寧な展示解説

西側諸国のものとは形もアイディアも違うが、ソビエトの科学者・技術者が、知恵と努力で作り上げてきたものだと一目で感じた。

よく整備された機体とともにエンジンも並ぶ

今まで見たこともないエンジン、機体ばかり。ソビエトでもこんなにすごいものが作られていたことに驚くとともに、こちら側の世界を知らなかった自分の知見の狭さも痛感する。

飛行船や気球の説明も

屋内展示を順に進むと外に出る。

そう、ここには巨大な屋外展示場がある。受付嬢に**「室内展示を見終わったら、道路を渡って左側の屋外展示場に行ってね」**と言われた場所である。お姉さんに案内されなくても、この存在は知っていた。というより、この場所に立ちたくてここまで来たのだから当然である。

そう、その屋外展示場こそ、ソビエト時代のガラクタ、いや間違えた“逸品”が展示されている場所なのだ。

「おおお、やっと会える、世界最初の超音速旅客機たちに！！！」

僕は湧き上がる感動で身震いをしていた。そうここは世界初の超音速旅客機、ツポレフ 144 をはじめ、もはや唯一無二のソビエト独自の飛行機が大量に展示されている場所なのだ。

NY の JFK 空港にて　コンコルドの真後姿

【5】 まず、コンコルドについて

ツポレフ 144 を説明する前に、コンコルドの紹介をした方がわかりやすいと思う。

コンコルド Concorde は、イギリスとフランスが国の威信をかけて開発した超音速旅客機(SST: Supersonic transport)。幾多の困難を乗り越え 1969 年に初飛行、1973 年に路線就航した“夢の旅客機“である。高度 55000～60000 フィートという通常の倍の高さをマッハ 2.0 で航行するこの機体は、航空関係者はもちろん、ヨーロッパの人々の誇りだった。開発時には日本航空をはじめとして世界各社から発注があったが、立ちはだかる技術的困難の前に、開発は遅れに遅れ、加えて高騰しすぎた開発費により結局、試作機 4 機、量産期 16 機を生産しただけで生産中止になってしまった。それでも英仏では大切に運行されていたが、2000 年 7 月 25 日、パリの CDG 空港で起こってしまった AF4590 便の墜落事故が引退の機運を一気に高めてしまう。原因は滑走路に落ちていたタイヤ片が主翼下の燃料タンクを直撃し、引火、制御不能、墜落につながったと言われている。加えて翌年の同時多発テロによる航空不況もからんで、ついに 2003 年 11 月には営業運転終了、全機引退という結末を迎えてしまった。

しかし、自分にとって美しいコンコルドは子供の頃からの夢とあこがれで、絵本や図鑑の中で颯爽と離陸する美しい姿は今でも脳裏に焼き付いている。初めて実物を見たのは、世界を放浪し始めたころニューヨークの JFK 空港でメキシコへのフライトを待っていた時だった。流れるような美しい主翼、大きな垂直尾翼、想像以上に小さい窓など、図鑑とおなじその姿に興奮したことを今でも覚えている。燃料を大量に浪費するくせに 144 席しかなく、オールファーストクラス設定（しかもアメリカーロンドン・パリ線のみ）で実際に乗るは時間的にも金銭的にも大変なのだが、でもやはり乗ってみたかった・・・と今でも思う。

【6】そしてツポレフ144

世界初の超音速旅客機、ツポレフ(Tu)-144 の雄姿

コンコルドとは全く別の機体で、ソビエト連邦のツポレフ設計局が作った超音速旅客機がツポレフ Tupolev-144。初飛行は 1968 年 12 月 31 日。コンコルドの初飛行は 1969 年 3 月 2 日なのでわずか 3 ヶ月前ではあるが「世界最初の超音速旅客機」の栄誉はこの機体が受けた。ご覧のように両機の外観はそっくりで、西側諸国からは「アイディアの盗用」、「コンコルドスキー」などと揶揄されていた。しかしカタログスペックでは Tu-144 の方が優秀で、全長も少し長く、胴体の幅も太く、乗客定員もやや多かった。巡航速度もコンコルドの 2145km/h に対して 2300km/h と速く、 最高速度もコンコルドの 2368km/h に対して 2430km/h と全ての面で優れていた。

コックピット付近。窓の後ろに補助翼が格納されている

外観上の最大の違いは離着陸時に機種付近から出る補助翼（カナード翼）だろう。まるで動物の耳のようにコックピット横から細く出る補助翼だが、低速安定性と、離陸時の安定度が高くなったとのこと。展示機の翼は閉じていたが形はよく観察できた。こんな素晴らしい性能を誇った Tu-144 だが、実用機というよりも「ソビエト連邦の技術力の誇示」の道具として開発された面が強く、実績は散々なものだった。最大の問題はエンジンの貧弱さである。SST は非常に強大なエンジン出力を必要し、莫大な燃料を消費する。しかし、Tu-144 は搭載しているクズネツォフ NK-144 エンジンが絶対的な出力不足で、マッハ 1.6 以上にしようとするとアフターバーナーを常時必要とした。（アフターバーナーとは、出力を補強するため、高温の排気ガスの中に燃料をぶちまける補助装置で戦闘機の補助力として用いられる。簡単な構造で補助出力を得られるが、燃費効率からすれば最悪の使い方になる。コンコルドにもアフターバーナーはついていたが、通常の運行域での使用はなかった。）だから非常に燃費が悪い機体となり、航続距離はコンコルドの 6200km に対して、3000km 程度と約半分しかなかった。

そして、Tu-144 は致命的な事故を 2 回起こしている。

1 回目は 1973 年 6 月 3 日。パリ航空ショーで Tu-144S(SSSR-77102：量産型 2 号機）が、デモ中に郊外のル・ブルジェ空港北側の村落に墜落し、乗員 6 名と地上の住民 7 名が亡くなった。墜落原因は急激な旋回飛行によるカナード翼破損と言われている。

2 回目はその 5 年後の 1978 年 5 月 23 日。燃費向上を目指しエンジンをコゾレフ RD-36-51A に換装した Tu-144D（CCCP-77111：製造順でいえば 12 号機）が、モスクワ近郊で試験飛行中に火災が発生し、不時着。乗員 8 人中 2 人が死亡するという事故を起こした。この機体は 5 回目の飛行であり、総飛行時間はわずか 9 時間だったそうだ。その後イギリスの技術供与などもあったが、結局は時代の波に飲み込まれ、過去の機体となってしまった。結局、旅客運行を行ったのはわずか 102 便。最終な生産数は原型機 1 機、量産型の Tu-144S が 10 機、性能向上型の Tu-144D が 5 機の計 16 機。その中で現存が確認されているのはこれを含めて 3 機。しかもまともに見学できるのはドイツのジンスハイム自動車・技術博物館と、ここモニノ空軍博物館にある機体のみである。

Tu-114 の説明版 公式データよりも数値が盛ってあるのは気のせい

技術的にも商業的にも成功したものと言えない。むしろ典型的な失敗機と

なった機体は今、うらさびれた草むらに放置されているだけのように見える。

しかし。実機は、非常に美しい、均整の取れたラインを描いていた。近未来を感じさせる美しい直線と曲線が作り出す圧倒的な存在感・・・。ヨーロッパの人々が、コンコルドの存在を誇りに思ったように、きっとソビエトの技術者も、ソビエトの人々もこの機体の美しさに、憧れや希望といった熱い思いを抱いていたんだと感じる。

美しくない造形のアントノフ An-22 NATO 軍から蔑称がつけられていた

「これを創った人たちは、世界初の、すごいものを作ってやるぞという気概で作ったんだろうな」

「未来や希望を与えたんだろうな・・・」

説明版には「世界最初の超音速旅客機」とやや誇らしげに書かれていた。確かに、それは間違いない。旅客機としては完全に失敗だが、技術者がこの機体にかけた熱い思い、そしてソビエトの人が感じた誇りは今もそこにあるような気がした。

.かつて羽田にも飛来していた、巨大な二重反転プロペラが特徴のツポレフ Tu-114

第一次世界大戦時代の重爆撃機イリヤー・ムーロメッツ

この他にもここの博物館には、世界でここにしか残っていない機体・エンジン・部品がたくさんあり、とても紹介しきれない。加えて屋外展示場奥には別棟の屋内格納庫もあり、そこもまた、時が止まったようなガラクタ、いや失礼“逸品”だらけ。一般の人から見たら錆びついた不要物にしか見えない機体や航空部品がゴロゴロしているだけだが、自分にとってはかけがえのない宝物である。まるで 50 年以上前のソビエトにタイムスリップしている感覚の中、今まで見てきた欧米とは全く別の進化を遂げていた東側の世界観に心奪われ、至福の時を過ごした。

「うわ。真っ暗になってしまった」

普通に撮影すると真っ暗な景色が

格納庫から出ると、あたりは本当に真っ暗であった。ここに到着した時からすでに暗く、屋外展示場を見ている時は、さらにもう足元もおぼつかない暗さになっていた。もちろん、ロシアの田舎の博物館に屋外照明装置が付いているはずもない。

正確に言うと到着時からかなり暗く、いわゆる薄明りしかない状態だったが、それでも上記のような写真が撮れているのは、カメラ性能（フルサイズ一眼+明るいレンズ）のおかげである。今回、撮影機材だけで、かなりの質と量を持参しているが、費用をかけた道具は、やはり期待に応えてくれる。

高性能カメラだとこうなる

無理して車まで借りてやってきたこの博物館。でも様々な展示物、様々な技術者の気概に触れることができ心から満足できる時間を過ごすことができた。幼いころから見たかったものだらけの、この場所を訪れる機会を与えてくれたすべての人に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

これでも“絶賛営業中”の屋外展示場。奥に光っているのは格納庫展示室

【7】 ユーリ･ガガーリンの足跡

「ここまで来たら、
　あのガガーリンゆかりの街に行ってみたい･･･」
　博物館を去ろうとした時、そんな気持ちが湧いてきた。この場所に来たならば、あの人のことを考えてしまう。
「地球は青かった」の言葉で有名な世界初の宇宙飛行士。ユーリ・アレクセーエヴィチ・ガガーリン
Юрий Алексеевич Гагарин である。

数キロ以内に航空宇宙･空軍関連施設が密集しているエリアだった

　モニノの博物館は軍事施設に隣接している、と書いたが正確に言えば空軍指揮下にあるガガーリン士官学校に隣接していた。さらに言えば数キロ先には、ガガーリン宇宙飛行士訓練センターや、チカロフスキー空軍基地を含む、ロシア随一の宇宙施設、いわゆる「星の街 **Звёздный городок**」がある。そう、実はここモニノの村はロシア随一の航空宇宙産業の中心都市、星の街の隣町であり、今でもロシアの航空宇宙研究の最前線基地なのだ。よって、先ほど迷ったとき道を教えてくれた若い兵士はガガーリン士官学校の青年であった。

　ガガーリンは、モスクワから 200km ほど離れたスモレンスク州北東部にあるグジャーツクの労働者階級の家に生まれた。職業訓練学校を経て空軍に入り、26 歳で宇宙飛行士の候補生になった。その後モスクワ近郊の秘密基地で訓練を重ね、20 人の精鋭部隊の中から最初に宇宙に向かう栄誉を得た。1961 年 4 月 12 日、現カザフスタンのバイコヌール宇宙基地より、R7 ロケット上のボストーク 1 号に乗り、世界初の有人宇宙飛行に出発。大気圏外で地球を 1 周し、ソ連領内の牧場に無事帰還した。

　わずか 108 分間の飛行。しかしこれが航空宇宙界・国際政治に与えた影響は計り知れないほど大きかった。
　そもそもこの 4 年前、ソビエトの航空宇宙技術が世界に衝撃を与える大事件が発生した。1957 年 10 月の世界初の人工衛星スプートニク 1 号 **Спутник-1** の打ち上げである。スプートニク自体は、直径わずか 58cm のアルミの球体に 4 本のアンテナがついており、温度情報を 0.3 秒ごとに送るだけの衛星だったが、人工の物体を大気圏外の周回軌道に正確に乗せ、それが作動している事実は、特に西側陣営にとっては制空権、いや宇宙空間をソビエト側に支配されてしまうという危機感を抱かせるには十分で、「スプートニク・ショック」とも呼ばれるものすごい衝撃を与え、各国が全力で技術開発競争を始めるきっかけとなった。例えば NASA（アメリカ航空宇宙局）が設立されたのは、スプートニク打ち上げの翌 1958 年である。

　ガガーリンの宇宙飛行成功に最もショックを受けたのが冷戦真っ最中のアメリカ。当時の大統領、J.F.ケネディはガガーリンの成功を聞き、ソ連に負けじと、国家予算級の予算をぶち込んで、月面着陸を目指すアポロ計画を即座に開始させた。実はスプートニク・ショックの時、NASA 設立と同時に、人を地球周回軌道に乗せることを目指す「マーキュリー計画」を立ち上げたが、それですらガガーリンによってソビエトに先行されてしまったからである。アメリカが、アポロ 11 号で月面着陸に成功したのは 1969 年 7 月。ガガーリンの飛行から 8 年後のことである。

格納庫に展示されていた宇宙飛行試験用のゴンドラ USSR-1 と Volga

　これだけを聞くと、宇宙開発競争は米ソ連冷戦の大国の覇権争い･･だけのように聞こえるが、結局、最前線で努力し、悩み、苦しんだのは技術者、開拓者たちだった。

飛行機も、先端科学技術の塊だが、「宇宙」となると、技術的難易度は比較しようがないほど更に上がる。たとえば発射速度の問題。地球には重力があるためその重力から抜け出すために必要な速度がある。第一宇宙速度（ 7.9 km/s (= 28,400 km/h）と呼ばれ、これ以上の速度であれば、重力圏外つまり宇宙空間に出られるが、足りないと地球の重力圏から脱出できない。だからこの甚大な速度を生み出すためメインエンジンはとてつもない出力のものが必要になる。なお打ち上げは赤道に近い方が地球の自転速度も加算でき有利になる。だから各国は少しでも赤道に近い位置（ロシアはカザフスタン共和国バイコヌール、アメリカはフロリダ州ケープカナベラル、欧州宇宙機関は南米のフランス領ギアナ、そして日本は鹿児島県種子島）から打ち上げているのだ。

そしてもうひとつ。打ち上げ以上に大きな課題が大気圏再突入である。宇宙から大気圏に入る時、大気の分子が圧縮され、数千度以上という膨大な熱が発生する。例としてスペースシャトルの再突入開始時の速度はマッハ 25（30,000km/h）、はやぶさ 2 の帰還カプセルは 12km/h（43,200km/h）で大気圏に突入し、周辺温度は 1 万℃、カプセル表面では 3,000℃程度だったと推定されている。しかし耐熱性能を上げすぎると重量が増し、打ち上げ負担が大きくなる。また再突入の角度が深いと温度が上がりすぎて燃え尽きてしまうし、浅いと大気に跳ね返されて二度と地上に戻れなくなる。よって耐熱パネルの性能や、衛星の高度により、最適な角度を厳密に制御する技術が必須なのだ。（余談だが北朝鮮が ICBM（InterContinental Ballistic Missile:大陸間弾道ミサイル）の打ち上げだの、完成だのと報道されているが、実戦でも使えるレベルに完成させるためには、大気圏再突入技術の確保と実証実験が必須であり、本当の意味での ICBM は当分未完成ではないかと言われているのはこのためである）

前人未踏の友人宇宙飛行。もちろんソ連政府もいきなり人間を飛ばしたわけではなく、実験として犬を（少なくとも 57 回）飛ばしたり、実物大の人形を搭乗させたりしていたが、それでも本物の人間が宇宙空間でどうなるのか、当然何のデータもない。よってガガーリンの乗ったボストーク 1 号は「無重力状態で人間が操作できるかわからない」との判断より操作は自動、または遠隔操作を基本とし、ガガーリンが手動操縦することは緊急時以外想定されていなかった。しかし 1960 年初頭の技術力。機器の信頼性は低く周回軌道が高すぎて大気圏再突入が困難になったり、推進部の切り離しができなかったり、と航行は非常に不安定。飛行中、ガガーリンは自分が中尉から少佐に昇進（二階級特進）したという知らせを受けたが、政府がこれを伝えたのは、当時の技術ではガガーリンが生還できる可能性は低いと考えていたからだと言われている。

モニノ村の入り口の標識

そして帰還方法が恐ろしい。ボストークには、大気圏突入時の熱を防ぐ能力はあったが、機体が地上に戻る能力はなく、彼は高度 7000m で座席ごと射出され降下した後、最後には体一つでパラシュート降下するしかなかった。結果的にガガーリンは無傷で帰還できたものの、非常に危険な方法で、当時の技術レベルからして奇跡に近い出来事だった。

ガガーリンの宇宙飛行は、「大型ミサイルの先端に人が入った簡単な容器をつけ、それを思いっきり飛ばし、人だけがなんとか無事帰ってきた」といえば言い過ぎだろうか？そう考えれば、当時の宇宙旅行の凄さ、そして無謀さを感じていただけるのではないか。

というのも、乱暴な言い方が許されれば、ロケット技術というのはミサイル技術とほぼ同じで、用途が民間用なのか軍事用なのかの違いしかない。実際にスプートニクもボストークもソビエト製 R7 ロケットで打ち上げられたが、この R7 ロケットはソビエトの世界最初の ICBM（大陸間弾道ミサイル）そのものである。（なお、この R7 ロケットの技術は現在も生かされており、国際宇宙ステーション(ISS)の往復に使うロシアのソユーズロケットは、この R7 ロケット直系の後継機種である。アメリカのスペースシャトルが退役したあとも、ISS への往復手段の主役として、スプートニクやボストークのロケットが使われていると考えると感慨深いものがある。）

このころは、折しも東西冷戦の最盛期。帰還後に課せられた任務は「ソビエトの優位性を世界に知らしめること」だった。世界中をまわり、共産主義の優位性を説くソビエトの広告塔としての活躍を任されたのである。純粋に宇宙への憧れに燃え、明るくて温和、だれとでも友好的だった彼は、国家から与えられたその役目に、徐々

に精神的に追い詰められ、自傷行為をするなど自分を見失ったと言われている。そして宇宙飛行から6年後。ガガーリンはジェット戦闘機 MiG-15UTI に乗って訓練飛行を行っている際、墜落し亡くなってしまう。享年 34 歳。公式発表では「鳥とぶつかり錐もみ状態で墜落した」だったが、別の新型戦闘機(Su-15 と言われている)が非公式の超音速飛行をし、彼の乗機とニアミスをしてしまった・・・。

しかし、ガガーリンの名はソビエト宇宙開拓史の中で今も燦然と輝いている。スモレンスク州の彼の故郷の田舎の村は、彼の死と共にグジャーツクからガガーリン市へと名前を変えた。そしてもちろん現在の宇宙研究の中心地であるこの地が彼の名にちなんでつけられている。

・・・・そんなガガーリンにちなんだ星の街は、ここモニノの博物館からわずか数キロの地点である。というより、この周辺一帯すべてがそれにちなんだ基地のような場所である。

航空技術や宇宙開拓に関わる話を昔から読んでいた自分にとって、ガガーリンゆかりの「星の街」がすぐの場所にあって心が動かないはずはない。だから

博物館を出たところ。本当に光がない‥

「せっかくなので、星の街をみてみたい」と考えた。まだ午後 6 時半。時間的余裕はある。

ナビの画面を見ながら、ゆっくりと車を走らせた。

しかし、すぐに大切なことに気づいた。

真っ暗なのである。

日没を数時間過ぎているのだから当たり前ではあるが、それにしても暗い。日本で言えば夜 11 時くらいの雰囲気だろうか。

理由は簡単。光がほとんどないのである。(日本にいれば、想像しにくいが、多くの国の夜は本当に真っ暗である。それは街灯をはじめ、夜間に光を出すものが何もないから。日本のように、どんな道であっても、民家や、街灯、自動販売機など、何かの光がどこかにはあるという方がまれである。) 加えて、ここら辺は軍事施設のエリア。空軍基地、航空宇宙基地となれば、巨大な敷地を持ち、周辺に民家や商店がないのは当然だろう。

「真っ暗い中、星の街に行ったとしても、何も見えない。」
「というか、軍事施設周辺をうろうろしていたら、怪しまれるだけ」
「軍の人に捕まっても事情を説明できる語学力はないし・・・」

本当に暗い世界の中、うろうろしながら車を走らせていると、いかに無謀なことをしているのかに気づいた。

「よし、戻ろう！」

「真っ暗な中、軍事基地を見に行っても良いことは何もない」、という当たり前のことに気づいた僕は、車を停めモスクワ市内に戻ることにした。ガガーリンゆかりの星の街は見られなかったが、ソビエトの航空機たち、そして航空宇宙産業の発展の証をたくさん見ることができた。そして冷え切った大国の意地の張り合いの中で、技術者同士はお互いの技術を尊敬し、よきライバルとして切磋琢磨していったことを感じた。科学技術・航空宇宙技術といった一見、冷たい技術や計算だけの世界の中でも、人々が思い悩み、だれかを慮った、血の通った活動をしていたことを、改めて感じた。これらを見て来られただけでも十分だろう。

ガガーリンが宇宙に飛び立つ際に発した一言がある。この言葉は宇宙時代の幕開けを告げる言葉として、東側諸国では象徴的に使われた言葉である。彼とかなり状況が違うが、せっかくなので、その言葉でこの場所を離れることにしよう。

「さあ行こう」（Поехали! パイェーハリ）と。

夜のモスクワの高速道路にて

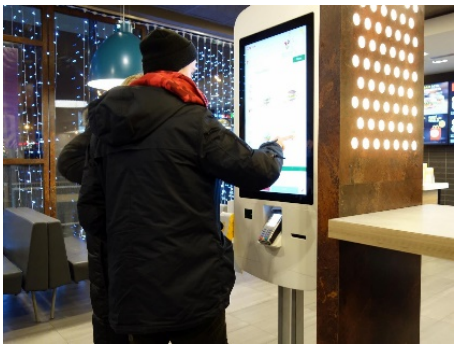
第9章　ロシアのナイトドライブ

Русская ночь драйв

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第 9 章　ロシアのナイトドライブ

【1】某有名ハンバーガーチェーンへ


マクドナルドの超大型タッチパネル式注文装置

「なるほど、この大きな画面で注文するんだな」

「日本より進んでいるかも」

巨大なタッチスクリーンの画面を操作しながら妙に感動をしていた。ここは赤の背景に黄色の M で有名なハンバーガーチェーン。そうマクドナルドの店内。一見、超巨大なスマホのようにも見える、大きな画面を操作しながら注文をしているところである。

夜の幹線道路をモスクワ市内に向けて走る

モニノ空軍博物館を出て、モスクワ市街に向けて車を進めながら、朝食以外まともなものを食べていないことに気づいた。一人で動くと、どうしても「食事」よりも「〇〇に行きたい！」を優先してしまうのは自分の悪い癖。旅先の土地のおいしい料理を堪能したい気持ちも確かにあるのだが、ついそんな余裕もないほどスケジュールを詰め込んでしまう。食べ物に好き嫌いはなく、何でもおいしく食べるが、その代わりこだわりもなく、しかも飲酒・喫煙習慣もないため、どこかに落ち着いて飲食をしなくても特に気にならず、一人旅では食事が抜けてしまうことがある。

世間並みに「食事もまともにしない旅ではダメだ」という当たり前のことを痛感したのは結婚をしてから。自分より遥かに常識的な感覚がある妻の「**え？ご飯を食べないってどういうこと？**」との問いに、「そうか世の中の人はご飯も旅の楽しみなんだな」と、初めて気づいた次第である。当然、その後、ちびっ子たちを連れて旅をする際は、食事や休憩・休息にもっと気を使い、食事時間や内容に配慮したスケジュールを組んでいた。

ところが、今回は一人旅。例の悪い癖が出てしまった。

しかも、やっと向かった夕食に選んでいるのがマクドナルド **Макдональдс**。旅の情緒的にも栄養的にも最悪な選択である。

ただし、マクドナルドに向かったのは２つ意味がある。

１つ目は、幹線道路沿いに適当な店が見つからなかったということ。本当はロシア料理のレストランなどに行ってみたいが、郊外を走る片道４車線もあるような幹線道路沿いにそんなものが見つかるはずがない。無料でいくつも横道に曲がれる単なる一般道だが、絶対的な交通量が多く、巡航速度も速く、雰囲気は完全に高速道路だった。日本で言えば、栃木県内の国道新４号線、または三重・奈良県内の名阪国道 25 号線のような感じ、といったらわかっていただけるだろうか？

こんな道路沿いにお洒落なレストランなどない

そしてもうひとつは、

「マクドナルドがある国を訪れたら、その国にいる間に一度は行く」という謎の自己ルールを設けているから。どこでも同じ「ビックマック+ポテト+コーラ」をオーダーし、国による差異を見つけて楽しんでいるからである。（前述のスターバックスも同じ論理になる）　「マックなんて、どこだってあるのでは？」と思われると思うが、どこにでもあるからこそ、定点観測の指標として行ってみたい、そう思わせる何かが、この世界的チェーンにはある。ちなみにビックマックで経済状況を知るということをまともに数値化している雑誌がある。英発行のエコノミスト（The Economist）が購買力の目安としてビッグマック指数 Big Mac Index と呼ばれる、世界中のマクドナルドのビッグ

“Макдональдс”でマクドナルドと発音する

マックの価格指標を発表している。さらに 2004 年 1 月からスターバックスのトールサイズのラテを基準にした「starbucks index トール・ラテ指数 Tall Latte Index」も加わった。「マックやスタバで世界を分析したい」と考えたのは、この雑誌より自分の方が先だと自負しているが、全く同じことを考えたこの担当者といつか会って、一緒に飲んでみたい（酒が飲めないので自分はコーラで）と密かに思っている。

日本の店舗と似た雰囲気

入店したマクドナルドは、大きなショッピングセンターの駐車場の一角だった。小規模だが、清潔な雰囲気でいつもの店と同じ雰囲気を漂わせていた。自分の知っている店舗と絶対的に違うのがオーダーの方法である。大型液晶 TV を縦にした巨大ディスプレイがタッチパネルになっていて、その機械でオーダーするらしい。支払いはクレジットカードを下部のリーダーに差し込み、暗証番号を押せばいいし、カードが嫌な人は手渡し時の現金決済も選べる。使ってみるとビジュアルで選べ、操作性も良く快適である。何よりいいのが多言語対応。英語が普通に使えるのはありがたい。

「28 番」で待てばいいらしい

決済を完了させるとレシートが出てくるのであとはその番号を待てばいいだけ。以上、非常に簡単である。

決済もほとんど必要ないので窓口は非常にすっきりと効率的。いずれ日本でもこれが普及していくのだろうか・・。

待つこと 5 分。あっという間に番号が呼ばれた。受付のお姉さんは差し出したレシートを確認し、「ありがとう」とだけ言ってすばやく商品を手渡し、すぐにまた作業に戻っていった。もしかすると窓口業務が減った分、少ない人数でシフトを回していて、一人当たりの作業量は多くなったのだろうか。業務の効率化が必ずしも労働環境の改善につながらない例かもしれない。

シンプルなレジ周り

ビックマックセットの価格は 20%の間接税を含んで RUB252(ロシアルーブル）、430 円ほどと日本よりやや安かった。肝心のビックマックだが、見た目も味も驚くほど日本と同じだった。ドリンクのサイズが大きいことと、ポテトの量は多かったことが相違といえば相違である。

【2】外国人の名前の話

マクドナルドにちなんで、少しそれたことを書いてもいいだろうか？。名前の話である。

マクドナルド McDonald's の「Mc マク」は、古ケルト語で「息子」を意味する。ケルトの流れを汲むスコットランド系の兄弟が、アメリカで創業したのがマクドナルドである。このように外国の人名には「〇〇の息子」というものが非常に多く、これを見ていくだけで、ちょっとおもしろい世界が広がっている。

「息子」をあらわすスコットランド・アイルランド系での表現は「Mc」だけでなく、「Mac マック」もある。戦後日本でのあの、マッカーサー（MacArthur）がそれで、正確にはスコットランド・ゲール語で息子を意味しており、意味的にはアーサーの息子、つまりアーサー王の子孫を意味しているという。

Биг Мак は“ビックマック“と発音

またアイルランド系の息子の名前として「O'」という表現もある。例えば「O'Hara オハラ」などはよくある名前で、『風と共に去りぬ』のヒロイン「スカーレット・オハラ」などがそうである。

北欧などの「～センsen」や「～ソンson」もやはり「～の息子」という意味を持つ。デンマークで非常に一般的なニールセンという名や、フィンランド人のムーミンの作者、トーベ・ヤンソンなどもここに当てはまる。この起源はギリシャらしいとのこと。

また、当然ながら英語での息子「son ソン」にちなんだ表現もあり、父親の名前＋son、という例も多い。例え

ばジョンソン Johnson は「John」というお父さんの名前+息子であるし、ジャクソン Jackson であれば、「Jack」+son になる。さらに言えば、ジョーンズ Jones だの、ウイリアムズ Williams なども、父親の名前＋s が由来とのこと。

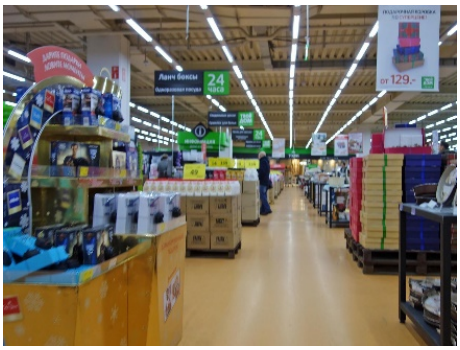
・・・などと書いていくと、すでにお腹一杯になるが、この話、まだまだ先がある。

アラブでは、「ビン」や「イブン」が「～の息子」を表している。テロ組織で有名なウサマ・ビン・ラディンや、大旅行家イブン・バットゥータなどがそれにあたる。そしてロシア。ここではミドルネームに「自分の父親の名前＋ヴィッチ or イェヴナ」というルールで名づけられる。男なら"ヴィッチ"、つまり「～の息子」という意味になり、女なら"イェヴナ"、「～の娘」という意味になる。つまりミドルネーム＝父親由来、とのことである。

本当は他の言語でもまだまだあるとのことだが、子どもが親の名前の一部をもらう、という例がいかに多いかがわかっていただけただろうか？　ここらへんは文化人類学？をあたりを追及していけばいいと思うが、とにかく人名をたどっていくと、世界各国の家族の在り方が垣間見えるようでとても面白い。日本でも「武士の子は先祖の一文字を取って・・・」などとやっていたが、同じことを世界各地で行っていた、ということであろう。

名前ついでにもう一つ。マクドナルドの「ドナルド」だが、これは、スコットランド人ではよくある名前で、由来はケルト語で、「世界」と「支配者」の意味を持つらしいとのこと。第 45 代アメリカ大統領ドナルド・トランプといい、マクドナルドといい、確かに世界の支配者といえるような気もする。

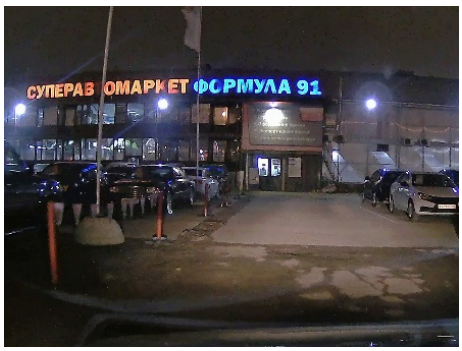
さらにおまけとして、マクドナルドのキャラクターといえば、「ドナルド」という名前の黄色と赤のピエロであるが、彼の本名は「Ronald McDonald」、そう「ロナルド・マクドナルド」というのだ。日本では別名を名乗っているが、日本以外の国ではちゃんとロナルドと呼ばれているという。


巨大な売り場が広がる

【3】ショッピングセンター

「大きなバックは売っていないのかなぁ･･･」

マクドナルドを出てから 20 分後。自分は大きなショッピングセンターの売り場通路でバックパックを探していた・・・。



「お店だ」と思って近づいたら中古車販売店だった

海外の楽しさは、観光地だけにあるのではない。個人的には、現地の生活を垣間見える場所が大好きである。特に地元の人が行くスーパーや商店、市場やショッピングセンターなどが大好きでよく行ってしまう。かつて大きなリュックを背負って歩いたバックパッカー時代は、安宿と公共交通機関だけを使い、地元の人たちと常に触れ合って旅をしていたので、それはそれで大満足だったが、でもよく考えると観光地（遺跡や名所）と宿泊地周辺、そしてそれに伴う移動機関が全てで、実は普通の人の生活は見ているようで見ていなかった。その点、車での旅は違った世界が見られる。普通の人々が行く、郊外のスーパーや大型ショッピングセンター、市場などに気軽に立ち寄れるからである。

やっと入国できたロシア。しかも自由に動かせる車に乗っていて、すべての荷物も手元にある。ナビが使えて、今自分がどこにいるかも確実に分かっている。空港までのおおよその距離も時間も方向も分かっている。しかもまだ時間的余裕もある。先ほどあきらめた軍事施設と違って、ウロウロしていても逮捕される心配もない。

既に真っ暗になっているということを除けば、こんな好条件は滅多にあるものではない。

僕は好奇心の向くままにいろいろな場所に行ってみることにした。夜なので営業しているところは限られていたが、それでもあちらの店、こっちの繁華街と、自由に車を走らせていた。

そのうち、幹線道路が重なる大きな交差点に、まだ営業しているらしい大きな店が目に入った。Твой дом と大きく書いてある。相変わらずロシア語はわからないが、「ｄｏｍａ（ドゥォーマ）は“家”だった気がするので、家に関係する店、つまりホームセンターのようなものかな？」と、ここに行ってみることにした。

24 時間営業の大きなショッピングセンターへ

近寄ってみると確かに大きなデパートである。

地下駐車場入り口

24 часа とある。

「ｃａｓａ チャサは　確か“時間“だったような‥」と思い出し、

「そっか24時間営業中ってことだ」と、より安心して興味をそそられた店に行ってみることにした（ちなみに店名の Твой дом(トゥボイドォン)は英語で Your Home、つまり「あなたの家」の意味である。）

ここは地下に大きな駐車場、その上に３階建ての巨大な売り場があるという、欧米でよく見かけるタイプのショッピングセンターだった。ロシア独特なのが入り口に警備員がいて、Ｘ線の荷物検査機が置いてある点。でも警備員はイスにまったりと座っていて、機械は動いていない。しかし、警備の人はこれでも不審者が入店しないか常に見定めているはず。ここの入口は、地下駐車場専用なのでホームレスが出入りする可能性は低い上、強盗がいたとしても脱出しにくい場所である。恐らく最も警備を緩くしているのだろう。その証拠に道路に面している入り口の警備員は、せわしく動いていた。

加えて「ロシアらしい」と思ったのが、「мыть（英語で wash）」と書かれた地下駐車場の洗車コーナー。ここだけ床が水浸しで、たくさんの車が順番待ちしていた。確かに雪国の冬道を走ると車はものすごく汚れるので、買い物中に洗車してくれるサービスがあれば人気なのも納得である。

市内は真っ黒(白？)な車が多数

駐車場内の洗車場

よく見ると 24 часа（24時間営業）って看板がずらっと掲げてあった

家庭用品、園芸用品、家具などやはりホームセンターだった。しかしよくみていくと衣類、書籍、食品コーナーもある総合ショッピングセンターになっていた。気が遠くなるほど広い店内には、色とりどりの様々な商品が並んでいる。

「おお･･･すごい、すごい････」

各種洗剤、キッチン用品、衣類などの種類にも圧倒されるが、キャンプなどのレジャー用品や電動工具などの修繕道具、多様なボール類などのスポーツ用品など、本当に様々な商品が並んでいた。

これだけのものを見せつけられると、やはりロシアは普通の民主国家として着実に歩んでいることを感じた。手近なものをいくつか取ってみると、表示はロシア語だが、原産国はロシア、EU、アジア諸国、そして中国・・・。まさに全世界から商品が入っているようである。

「そうだ。バックパックはあるかな？」と思い出し、バックパックを探すことにした。スポーツ用品コーナーや、服飾コーナー、そしてバック類のコーナーなど多くを回ってみたが、やはり欲しい超巨大サイズのバックは見つからない。確かに登山にでも出かけない限り、80Ｌを超える大型バックを欲しがる人は少ないのだろう。

「それにしても‥‥」

「ロシアにもこんなに商品があるんだなぁ‥‥」

南米最大都市・サンパウロの街並み

僕は、ブラジル生活のことを思い出していた。先述の通り、３年間赴任をしていたブラジル。渡航前ブラジルと聞けば、アマゾンの大自然やリオの海など、日本の生活とは全く違う世界を思い描いていたが、大都市サンパウロでの生活は、先進国のものとあまり変わらなかった。大きなスーパーでは世界各地の食材が並び、大きなショッピングセンターに行けば日用品・電化製品と（機種や値段にこだわらなければ）他国と同じ商品が手に入った。ネット通販を使って日本や他国から商品を購入することもできた。そして当然ながら、ブラジルでの日用品も、中国をはじめ、全世界からの輸入品も多かった。

つまり現代においては、物流さえ確保できていれば、ほとんどの国で似たようなものは流通できている、と言って良いだろう。もちろん、価格・品質・種類など、大きな差はあるのだが、例えば自分の経験で言えば、ナミビアやザンビアといったアフリカ諸国、ベトナム・ラオス・カンボジアといったアジア諸国、ボリビア・パラグアイといった南米諸国でも、このショッピングセンタークラスの品ぞろえは可能だと思う。だから例えば「良い香りの洗濯柔軟剤が欲しい」「新生児用の使い捨ておむつが欲しい」「焦げ付かないテフロン加工のフライパンが欲しい」と言っても、ほとんどの国で難なく手に入る・・・というのが現代の状況だと思う。

つまり、確実に世界は狭くなっている。生活必需品、日用品の類の輸出入はもちろん、エネルギー関係でも、原料でも、いや金融市場でも為替市場でも世界の国の動きがすぐに影響しあってしまう。政治的問題でも、市民運動でも同様。

そして、インフルエンザ、新型コロナのような感染症も、爆発的な勢いであっという間に広がる・・・。

結局、世界は思っている以上に相互につながってしまっている。自分にはそれが良いことか悪いことかはわからない。でも、少なくとも自分たちだけで、自分の国だけで生きていける時代ではない。

だからこそ、自分の国の姿や特徴をしっかり把握したうえで、他国の良さを認め、ともに繁栄していく道をみんなで探していくことは、現代を生きる私たちにとって必須である気がする。

自分がこの駄文を書き続けているのも、いつか誰かが、日本や世界を考えるきっかけの一つになってくれれば、と切に願うからである・・・。

【4】モスクワ市内へ

夜の道路は交通量が減る分、巡航速度が高い。モスクワの道路もそうだった。周りの車はみな 150km/h 以上で走っていたが、道路の照明はきちんとしており、危険な印象は受けなかった。道幅も広く、カーブも緩く、道路設計上その程度の速度は許容範囲に感じた。

モスクワ市内に入るにつれ、道路も複雑になり料金所なども通過したが、何が出てきても戸惑いはなかった。「何かしらの方法で料金を払えばいいだけだよね。もし困ったら誰かに聞けば教えてくれるだろうし」、と緩く考えられるだけの余裕が生まれていた。

市内には料金所も多い　そのゲートは→

оплата は payment、выезд は departure

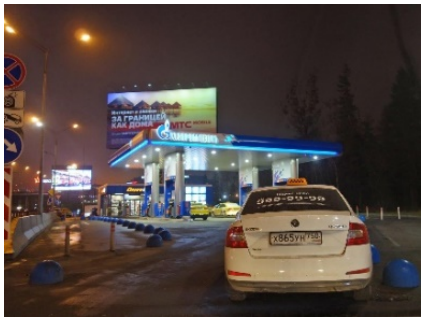
つまり「支払いは出発時に」とのこと

レンタカーは、返却前にどうしてもした方がいいことがある。それは燃料の給油。レンタカーは「満タン借り出し、満タン返し」が基本になっており、使用した分の給油をしておく必要がある。これを無事こなすポイントは、借り出し時に、返却場所と共に、返却場所周辺のスタンド情報を聞いておくことである。

今回、SIXT のおじさまに返却場所に一番近いスタンドと営業時間まで聞いておいたのでちょっと安心してい

た。ただしやはり実際に行ってみるまではわからない。休業しているかもしれないし、そもそも車線が入り組んでいるガソリンスタンドまで、たどり着けるのか行ってみるまで分からないからである。

でも、実際に行ってみると、シェレメチェボ空港近くのガソリンスタンドは非常に簡単だった。しかも２４時間営業の店が何軒も並び利用者の便宜を図っていた。


ガソリンスタンドへ

「えっと･･･。このタイプはセルフだな」

ガソリンスタンドの使い方というのも、海外レンタカー利用の小さなハードルである。国によってガソリンの名称も、入れ方も、支払い方も違うからである。しかもその国の人にとってみれば「毎回の当たり前のこと」なので、こちらが質問しようとしてもその意図すら通じないこともある。ただし「車があって、燃料を入れに来ている」という当たり前の図は変わらないので、人に聞けばなんとでもなる、とも言えた。

分かりやすい油種と給油機

今回立ち寄ったスタンドはセルフ式だった。周りの様子をみると、自分で給油機を操作し、あとで支払えばいいらしい。
表示されている油種表示は、海外での標準「オクタン値」表示で、100、95、95、92、そして軽油の５種類だった。(95 が二つあるのは添加剤の違いだと思う）日本で言えば 92 がレギュラー、95 と 100 がハイオク相当になる。オクタン値はガソリンの燃えにくさを表す単位で、高性能エンジンほど高出力にするため圧縮比を高くしているので、異常燃焼（ノッキング）をしにくいようにオクタン値の高い燃料を指定されている。なおヨーロッパ車は日本車よりも圧縮比を高く設定していることが多く、小型車でもハイオク指定のエンジンも多い。

それにしても、いつも思うが日本の自動車燃料表示名は、世界標準から見てすごくズレていると思う。「いつものやつ」が「レギュラー」は仕方ないとしても、オクタン値が高いものが、なぜいきなり「ハイオク」なのだろう。言葉だけで言えば「ハイオク」の対は「ローオク」になると思うし、「レギュラー」の対ならば「スーパー」や「プレミアム」あたりであろう。今から言葉を変えるのが難しいならば、せめてオクタン値を数値で「レギュラー（92)、ハイオク（95)」などと書き加えるだけで、理解ができる人はすごく増えると思う。

「軽油」「灯油」も分かりにくい。日本でこの言葉は、厳密にいえば**「消防法における分類で、第四類危険物、第二類石油類で引火点が４５度は軽油。４０度以上が灯油」**だと思うが、だからと言って、一般人が利用する普通のガソリンスタンドで「軽油」「灯油」だけを表示するのは不親切だと思う。せめて「軽油（ディーゼル用)」「灯油（暖房・ストーブ用)」などと表示すれば、軽自動車に軽油をいれてしまったり、石油ストーブ用にガソリンを販売してしまったりするミスは防げると思うのだが・・・。

レジ周りには各種軽食、飲み物、お菓子類がある

支払いは付属のコンビニのような店で行う。これはセキュリティと物販を兼ねる欧米の基本的な方法で、レジのお兄さんに「〇番のガソリンを・・」というと支払える。今回給油したのは 92 ガソリン。値段は 10.2L で 472.77 ロシアルーブル（日本円で 808 円)。ＩＬあたり 46.35 ルーブル（日本円で 79 円)。さすが産油国、日本の半額ぐらい。

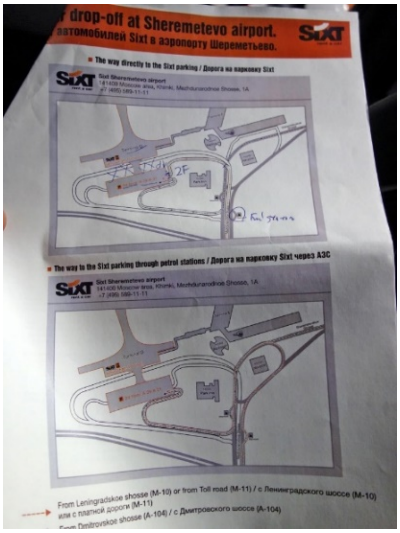
レジ周りにはおいしそうな食べ物も多かったが、眺めるだけでその場を去ることにした。

【5】車の返却

海外レンタカー利用で最後の障壁になるのが「返却場所」の問題。借り出し時は係の方が一緒なので問題ない

が、返却は自力でその場所を見つけ、所定の位置に駐車するので、戸惑うことも多い。

最近はナビが優秀なので、とりあえず空港までたどり着くのも簡単になった。例えば今回の SIXT のスマホアプリは、予約画面をタップすれば返却場所が Google map に反映され、そのままナビゲートしてくれる。しかし、やはり空港周辺のたくさんの施設内の指定位置に正確に返却するのは、難易度が高い。どの国際空港も施設が大きく・多く、警備も厳しく、付近に着いたとしても、実際の駐車場までは標識や案内表示を正確に見て、車線を丁寧に確認しないとたどり着くことは難しいことが多いからである。例えるならば成田空港を知らない人に「成田空港、第 1 ターミナル奥の第 5 駐車場の立体の 2 階に駐車しておいてね」と指示されても困惑するだろうな、いうのと同じである。



SIXT おじさまが書き込みしながら教えてくれた地図

ただし。今回は問題なく指定位置まで戻ることができた。あの SIXT の菩薩さまのようなおじさまが、借り出し時、「シェレメチェボの駐車場はあまり難しくないんだけど、念のため説明するね」「地図はこれだよ」と、プリントアウトした用紙を示して説明してくれたのである。これがあるとないとでは安心感が全く違う。改めて、彼の誠実さに感謝をした。

さて、荷物を整理し、飛行機に乗る準備をしよう。

自分には修復不可能なほど大きい破損部

「そうだ、あれをやりたかったんだ」

荷物整理をはじめた時、あることを思い出した。それはバックパックの修理。破れた部分が、出発前よりかなり大きくなっていたからである。

駐車場に停めた暗い車の中で、常時持参している 100 均製のソーイングセットを取り出し、針と糸でバックと格闘を始めた。そして 15 分後。

「・・・うう一ん。やっぱりダメかも」

生地が厚いこともあるが、慣れない針と糸を駆使しても、破裂している開口部が大きすぎうまくいかない。しばらく奮闘したが「これは無理」と判断し、あきらめることにした。幸い、破裂箇所は大きなポケットの一部であり、他の無事な部分だけでもなんとか使える。開いてしまっている部分には、盗まれても良い服を入れることにし、とりあえずひもで形が崩れないように処理した。

「・・・これは最後まで持たないな。どこかで買わなきゃ・・・」

長らく旅のお供をしてくれたバックを捨てるには忍びないが、破れたままでも困ってしまう。とにかく今は使っていくしかない。そんなバックを肩にかけ、無事にロシアドライブを経験させてくれたソラリスに感謝しつつ、その場を離れた。

「おお、帰ってきたよ シェレメチェボ！」

空港ターミナルに帰ってきた・・

見覚えのある空港ターミナルは出発時と同じ喧騒と暖かい光に包まれていた。しかし印象は全く違う。うまく表現できないが、懐かしいというか、出会った時とは別のものに感じるというか・・・そんな感覚。もしかして自分だけかもしれないが、例えば、自分が乗ろうとする長距離列車に乗車するときと下車するとき、飛行機に乗るときと降りた時、入国するときと出国するときなどに感じる「同じものを見ている、または同じ場所に立っているのに、全く違う印象を持つ」という感覚である。ここではシェレメチェボに降り立った時の緊張感の代わりに、ここに愛着というか安心感のようなものを感じていた。でも、自分はこの不思議な感覚が大好き。それはその感覚、その違和感こそ、目に見えない自分の変化の証であり、ここで過ごした経験が培った“何らかの力”、そのものの様な気がするからである。

24 時間、全世界へ飛んでいるシェレメチェボ空港の出発ゲート

第10章　ロシア出発

Выезд из России

Russia,Moscow Россия,Москва ロシア,モスクワ

第10章　ロシア出発

【1】　静かな SIXT カウンターにて

誰もいないオレンジ色の SIXT カウンター。看板の裏の小さな木箱に車の鍵をそうっと入れた。午後 9 時のターミナル D の到着ロビー周辺は穏やかな静寂に包まれていた。

「無事･･･行ってこられた･･･」

本当にできるとは思っていなかったロシアでの運転。わずかではあったが、見て、感じて、体験できて無事に帰ってこられただけでも、心の底から満足だった。

誰もいない SIXT カウンター

「よし、イスラエルに向かおう！」

この空港は 24 時間休むことない。電光掲示板には、世界各地へ向かう出発便が犇めいている。真夜中まで出発する便があるというのは、ロシア最大の空港という理由もあるが、国が広すぎて国内時差もあるので、時間帯については比較的柔軟なのかもしれない。

アエロフロートの巨大なカウンターで

このほとんどがアエロフロートのチェックインカウンター

「こんばんは」

元気よく書類を差し出すと、受付のお姉さんは頷いただけで無言で手続きを進めた。途中「荷物はこれだけ？」とだけ聞き、最後に「1時までに 20 番ゲートに行ってね」と言って書類を手渡した。

社交辞令の笑顔も見せない姿に、これまたロシアの姿だなぁ、と思いながらその場を離れた。

最後にロシアルーブルを再両替したら、残念ながらこの国とはお別れである。

もっと見たいもの、もっと行きたいところだらけだが、短い日程の中でそれなりの体験ができただけでも良しとしよう。

「いつか･･･。また来るよ。」

そう呟いて、「国際線出発」と書かれたゲートをくぐった。

このゲートをくぐると、ロシアを出国したことに･･･

【2】 今夜のホテル

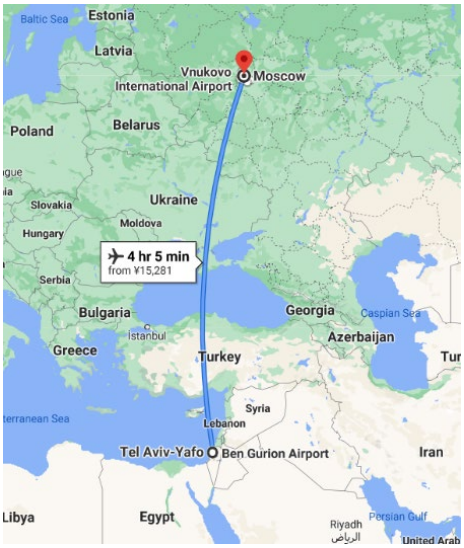
次の目的地はテルアビブ。イスラエルの実質的な首都の空港である。モスクワからまっすぐ 3500km ほど南下した場所にあり、時差もない。飛行機はロシアからウクライナを通り、黒海を縦断し、トルコを飛び越え、地中海に少し出てからイスラエルに向かうはずである。日程はモスクワ・シェレメチェボ(SVO)を深夜 1 時 40 分に出発し、テルアビブ・ベングリオン空港(TLV)に朝 5 時につく、所要 4 時間 20 分のＳＵ５００便である。

ここまで読んできていただいた方には、

「あれ？　お前、夜眠らなくていいのか？」と思うかもしれない。

そう、実はこの日の宿はとっていない。

この 4 時間 20 分のフライトが、今夜の宿である。



テルアビブまで 3500km.4 時間 20 分の飛行

普通ならば、夜は素敵なホテルにとまり、しっかりと休息と睡眠を確保するだろう。自分も家族連れならば間違いなくそうしたが、今回は一人。睡眠と移動を兼ねることで時間を生み出すことにした。もし、ここでもう一泊すると、フライトが昼間になる。空港での手続きを考えると、一日、少なくとも半日はつぶれてしまう。

それはもったいない・・・。そう考えてしまったのだ。

といいながら本音は、この日程には不安を感じていた。

「わずか4時間の睡眠で大丈夫だろうか？」

「翌日は動けるだろうか？」

「睡眠不足になると、(持病の)頭痛がひどくなる。耐えられるだろうか・・・」などなど。

だから妥協案として、「せめて可能ならば、仮眠を取りたい」と考えていた。

空港で仮眠を取る最善の方法は周辺または空港内ホテル・仮眠所を利用すればいい。アムステルダムのスキポール空港やシンガポールのチャンギ空港内ホテルはサービスも良く利用者も多い。しかしここにそんなものはない。ビジネスクラス以上の旅客ならラウンジを使うという手もある。安全も確保され、仮眠室やシャワーもあったりする。日本国内のラウンジならばコンシェルジュのお姉さんか顧客を覚えていて、乗り遅れないように声をかけてくれる場合もある。しかし、当然ながらエコノミーの旅客であるのでそこに入室する権利はない。よって、空港内の椅子にゴロンと寝るのが仮眠をとる唯一の方法である。しかし、やはり公共の場で本当に仮眠を取るのは無防備だろう。一人旅の外国人旅行者なら当然現金も持っていることはバレバレである。

テルアビブ行き SU500 便の搭乗券

「‥う～～ん‥‥」

「日程を節約したい」「安全を確保したい」「翌日から動ける体力を回復させたい」。そんな勝手なリクエストに応える都合の良い解はないことは承知だが、それでも妥協案を考えた。

そこで考えたのが「空港のできるだけ安全な場所で、可能な限り休息を取る方法」。具体的には待合ロビーではなく、出国審査後のゲート前に陣取り、まわりの様子を気にしながら体を休める方法である。

まだ人がまばらな 20 番搭乗口

時計はまだ 0 時前。出発まで 2 時間もあるテルアビブ行きの 20 番の搭乗口前には人はほとんどいなかった。

僕は「強盗に襲われにくい場所の法則」に従い、席を陣取った。この法則は長年の旅の経験から導き出したもので、いわば「安全に旅をするための知恵」のようなものである。

事件や犯罪に巻き込まれる場所は特徴がある。言い換えると安全な場所というも特徴がある。

まとめると以下の 6 視点になる。

① 背後に人が来られない場所・・・当たり前だが人は背後からの攻撃には弱い。よって後ろに人が入り込めない壁際は安全度が増す。
② 全体を見渡せる場所・・・どこから泥棒が近寄って行っても分かるように、全体が見渡せる席が良い。
③ 他人の目があるところ・・できれば売店とか、受付カウンターとか、他人の目が常にあるところが良い。
④ 死角がない場所・・・・複雑な形の空間よりシンプルな広い空間の方が、死角がなく犯罪者は隠れにくい。大きな壁の裏側などは極力避けるべき場所になる。
⑤ いざとなれば逃げられる場所・・・犯罪者はたいてい複数人で行動する。実行犯が悪さをする間、別の人間が見張りをしていることも多い。複数人で囲まれ逃げられなくなる可能性も。よって、「悪いやつに囲まれてもすぐに逃げることができる場所」つまり、出口が確保できている場所が良い。
⑥ 荷物が体から離れないように・・・場所ではなく荷物の置き方のヒントだが、ひったくり、置き引きを避けるために荷物の配置も注意が必要。具体的は荷物の持ち手は必ず手首を通し、荷物自体も必ず体に触れ、他人に動かされたらわかるようにする。またはカッターなどで切り裂かれないように、腕を置いたり、衣類を置いたり露出部分をできるだけ少なくする。

窃盗犯の多くはプロであり、これでは防げないことも多いが、ターゲットが「無防備」なのか「防犯を気にしているのか」は瞬時に見抜く。よって犯罪に遭う確率を少しでも減らすためにこれらの対応は必須だと思う。
ちなみに犯罪学によれば、犯罪対策、犯罪の原因追及の理論として２つあるという。犯罪者個人に原因を求める「犯罪原因論」と犯罪を行えるような環境に原因を求める「犯罪機会論」である。日本ではほとんど話題にならないが世界的には「犯罪を行える環境をつくらない」という後者の考えも広がってきているという。確かに公共施設の設計や都市計画に取り入れれば様々なメリットはあるように思う。

そんな感じで、少し安心できそうな席を確保し、座った。幸いにも周りに客は少なく、とりあえず怪しい人はいない雰囲気。荷物の持ち手を手首に巻き、身体に密着させたうえ、体をできるだけ休める。
体力が回復するよう、意識レベルを落として静かにするが、完全に眠ってはいけない。

「・・・・(ここで体力を回復しなきゃ)・・・・」
寝てはいないが、半分寝ているような、不思議な姿勢をとっていた。
「・・・(休まなきゃ)・・・・・・・」

「・・・うううん。・・・やっぱり無理だ」。
しばらく頑張っていたが、やはり起きてしまった。
空港の限定区域内ならば泥棒も少ないはずである。しかし、カバンの中には現金やパスポート、カード類をはじめ多数の機材が入っている。ここで万が一ひったくられたら帰ることすらできなくなる、と思うと完全に寝るわけにもいかない。
そもそも、「襲われないように荷物と自分を守りながら睡眠をとる」という設定自体無理がある。

しかたがない。「休養を取るのは機内で」と覚悟を決め、壁のコンセントを探し、パソコンを開いた。
その場でネットにつなぎ、依頼された業務をこなそうと思ったのだ。

【3】旅行中の仕事依頼
実はこの旅に出た時から何度も仕事がらみの電話が来ていた。仕事と言っても正規の業務とは別で、いわゆる

IT 系（PC,web やシステム関係）の依頼や相談を、友人やその周辺の人が持ち込んでくるもの。
「こんな時ってどうすればいいの？」「〇〇をしてもらえない？」そんな依頼を何度も受けていた。
普段ならどこかで時間を作り対応できるが、今は無理。だから

「ごめん、今、遠くにいて、すぐに対応できないんだ」
「え？どこ？」
「‥‥ロシアだけど」
「‥‥マジで？　どこ行ってんだよう！」などという会話が何度もされていた。

電話してくる友人の多くは、自分が外国バカということはよく知っているので、
「気を付けてね。おみやげは等身大のマトリョーシカでいいから（笑）‥‥」 などの会話で済む。

半月近くも国を離れる今回。職場の上司にも確認をとり日程や連絡先も明記しておいた。直接関わってくださる仕事先の方々には「何かあればこのメールか電話で」と念も押してきた。
そして新規の依頼として直接電話してくる人もいる。

「‥‥頼りにされるのはうれしいけど、どこででも仕事に縛られているようだな‥‥」

深夜のシェレメチェボ空港の風景

しかし不思議と、決して嫌な気持ちにはならなかった。連絡があるということは日常が充実している、という意味でもある。
「外国で歴史や文化に圧倒されている自分」と「日本で業務に忙殺されている自分」‥‥。でも、どちらも間違いなく自分の姿。車の両輪ではないが、両方あっての自分であるとよくわかっていた。

そんなことを漠然と考えながら、依頼されたことができるなら少し挑戦してみよう・・とＰＣを取り出したわけである。

空港待合室の大きくて硬い椅子は、寝るには不適切だったが、静かに PC のキーを叩くのには最適な環境だった。

【4】 深夜の出発

「テルアビブ行き　まもなく搭乗を開始します」
流れてきたアナウンスに顔を上げると、ゲート前にはいつの間にか大勢の人が集まっていた。
「よし、行こう！」
そう声に出すと疲労と眠気を感じていた体が、急に軽くなる。午前 1 時ではあるが、未知なる世界に踏み出す緊張感はいろいろをリセットするようだ。
「 Добрый вечер ドーブライ ヴェーチェル（こんばんは）」
CA さんと挨拶を交わしながら、ロシア語ともしばらくお別れかな、と思う。

テルアビブ行きの機体はエアバス A321ceo。片側 3 席の短通路、計 6 席が約 35 列ほど並ぶ 200 人乗りの中型双発ジェット機。ベストセラーハイテク小型機の A320 の胴体延長型で、世界中で使われており ANA も 15 機所有している。搭乗率は 8 割ほど。乗客はロシア系、中東系、そしてキッパをつけたユダヤ人。（キッパとはユダ

ヤの男性が頭に薄いお皿のような帽子。詳しくはまた後述する。そうそう、そもそもなぜロシアからイスラエルへの航空路線があるかというと、実はロシアにはユダヤ人が多く居住しており、イスラエルの建国以来、ロシア系のユダヤ人の移民や往来が多い、というのが理由だと思う。一例だが、初代イスラエル首相のダヴィド・ベングリオンと大統領（名誉職）のハイム・ワイツマンの二人ともロシア帝国の出身である。）

東洋系の客も数人いたが、日本人とわかる人はだれもいなかった。

「そっか、日本人に会わないなぁ」

機内だけではない。考えてみれば、ロシア滞在中、一人の日本人にも会わなかった。

日本人が恋しいわけではない。でも誰にも会わないとなると、少し寂しい気にもなる。

我ながら身勝手なものである。

1 時 40 分。定刻通りに機体は動き出した。

急加速、離陸、そして上昇・・・。

「バイバイ‥モスクワ･･･」

「ちょっとしか見ていないけど･･･いい街だったな‥」

窓外の急速に遠ざかっていくモスクワのオレンジ色の明かりに、懐かしいような、寂しいような気持ちを感じていた。

エアバス A321 の安全のしおり

【5】丑三つ時の機内食

「ポーン」

機内照明が明るくなり、シートベルト着用サインが消え、上昇姿勢から水平安定飛行に入った。

この路線、フライトスケジュールを考えて、この真夜中運航の 4 時間のフライトに機内食はないだろう、と考えていた。LLC(格安航空会社)なら絶対に何も出ないが、ロシアを代表するフラッグシップであるので、Full Service Carrier(または Legacy Carrier)のプライドは、ウエルカムドリンクは出すかも？と考えていた。

もし、飲み物サービス等があれば、上昇完了後すぐに動きがあるはずである。
しかし、しばらくしても動きはない。

「よかった･･･。機内食は出ない感じだね」

普段なら大いに喜ぶ機内食だが、真夜中のフライト、しかも宿泊を兼ねているのに 4 時間しか飛ばないフライトでは「食べる」より「寝たい」。

よしよしと、睡眠体制に入ったときである。機体後方のギャレーから、ガチャガチャと食器を用意するような音が聞こえてきた。

「わぁ、やっぱり出るんだ」

ロシア美人の CA のお姉さんたちはカートに食品を満載し、手早く配り始めた。

モスクワ―テルアビブ線の機内食

航空業界の慣例に「機内食のタイミングなどは到着地の日程に合わせる」というものがある。今回で言えば朝に到着するイスラエルの日程に合わせてフライトが組まれている。つまり、これは翌日の「朝食」なのである。

しかし、真夜中に「朝食をどうぞ」と言われても素直に頷けない。もちろん、「断る」という選択もある。しかし、アエロフロート・イスラエル線の機内食を食べる機会はもう二度とない、なんて考えると、卑しい自分は断ることはできなかった。

時計を見ると午前２時半。
「まぁ･･･。日本なら朝の8時半か。」
そう思うと、まんざら、おかしな気も薄れるから不思議。
ただし、「徹夜で起きていて一睡もせずに朝食を食べている」という事実は考えないことにした。
丑三つ時に食べる、ロシアの機内食は、意外なほどおいしかった。

手早く食事を終え、今度こそ睡眠をとらなくては・・・と、すぐに睡眠準備を始めた。
普段、夜中まで起きて仕事をしているなど、非常に不摂生な生活をしている自分はこういう時に強い。すぐに眠れる、少なくとも休眠体制は取れるからである。

「ウクライナから、黒海･･･。今はトルコ上空あたりかな･･･」
いろいろ考えれば考えるほどワクワクが止まらなくなってしまう。

「･･･明日も間違いなくハードスケジュールになる。だから今は眠らなきゃ･･･」
そう思い、どこかの飛行機でもらったアイマスクと耳栓を取り出し、無理矢理に暗闇と静寂を作った。最初は大げさに感じたこれらだが、つけてみると意外なほど快適で、以来、フライトには持参することにしていた。

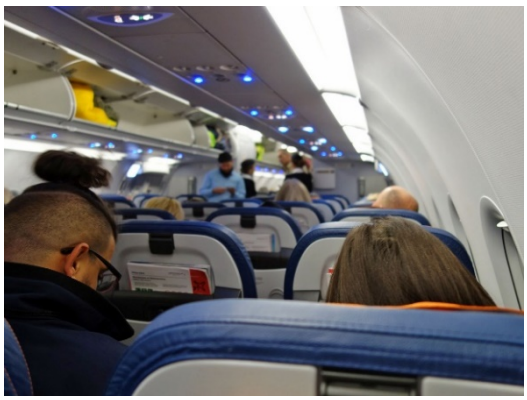
耳栓を通しても、「ゴー」と低い風切り音と、CF56 エンジンの唸りが聞こえるエアバス A321 の暗い機内。
狭いエコノミーの座席。足も腰も十分に伸ばせない窮屈な空間は苦手な人も多いだろう。
でも、自分にとってはどんな高級ホテルのベッドの上よりも快適な場所だった。

夢に見た未知なる地へ眠っている間に運んでくれる魔法の絨毯のような、魅惑に満ちた素晴らしい空間だった。

シェレメチェボ空港にあった自動販売機。ロシアで自販機はかなり珍しい
クレジットカードも使える、ある意味日本より進んでいる機械

シェレメチェボ空港の壁のコンセント。形状は B 型の 220V
（こういう時のために変換アダプターはいつも持参）

エコノミーでは非常に珍しい機内電源コンセントが近くに
DC5V の USB と AC110V.60Hz が A 型、C 型、BF 型で使える形


様々な人がイスラエルに向かって搭乗

イスラエル　ベングリオン空港にて

第11章　イスラエルへ

לישראל

Israel Tel Aviv ישראל תל אביב イスラエル テルアビブ

第11章 イスラエルへ

【1】 到着

着陸 10 分前、テルアビブ上空にて

「ポーン」

朝 4 時半。暗い機内が一気に明るくなる。アナウンスが、着陸体制に入ったことを告げていた。

機体は徐々に高度を下げ、光のある場所をめがけて降下していった。

眼下に目をやれば漆黒の中にまぶしいばかりの光。

光源の多さ、道路の太さ、理路整然とした街並みに

「ああ、これは先進国の光だ」

おもわず、そう呟いていた。

そして機体は、テルアビブ上空をかすめ、イスラエルの中心空港となるベングリオン空港に着陸した。

【2】テルアビブ空港乱射事件

「・・・ああ、本当に着いてしまった」

空港に降り立った時、ドキドキしてきた。

「世界で一番入国審査が厳しい空港」

「常にテロを警戒し続けている空港」と言われるここ。

とにかく入国が厳しいとの前評判だった。

朝 5 時のベングリオン空港

世界で入国審査が厳しい空港は数あるが、そんな時でも

「日本人だから信用されているから大丈夫」

なんて言葉を耳にする。確かに日本人は諸外国で信頼されていることが多い。ビザなしで入国できる国の多さを競う「世界で最も信頼されているパスポート」の第一位に日本が選ばれたのは、日本の先人が地道に信用と信頼を築き上げてくれてきたに他ならない。(英 The Henley Passport Index.2020)

しかしこれが通用しない国もある。「日本人だから心配」という例すらある。それがここイスラエル。その理由を「テルアビブ空港乱射事件」の顛末から語りたい。

1972 年 5 月 30 日。3 人の日本人がパリ発ローマ経由のエールフランス機からこの空港（旧称ロッド空港）に降り立った。岡本、奥平、安田というごく普通の旅行者に見えた彼らだが、到着後いきなりスーツケースから Vz 58 型自動小銃を取り出し、旅客ターミナル内の乗降客や空港内の警備隊に向けて無差別に乱射し始めた。結果、26 人死亡、73 人が重軽傷を負うという大惨事となった。

1972 年といえばイスラエル軍が圧倒的軍事力で近隣中東諸国を打ち破り、武力的に完全掌握した第三次中東戦争から 5 年しかたっていない時。つまりイスラエルが武力で周辺のアラブ諸国をぎゅうぎゅうに押さえつけている時期である。横暴なイスラエルの武力支配に世界は非難の嵐で、アラブ諸国はもちろん、国連安保理でさえ満場一致で非難決議案が可決するなど対立と緊張が高まっていた。それに対し、敵対するパレスチナ組織の中でも特に過激派のパレスチナ解放人民戦線(PFLP)と、日本の左翼過激派組織「日本赤軍」が共謀し起こしたのがこの事件だった。特筆すべきことは、アラブ-イスラエル間の問題にも拘らず、実行犯が日本人であったこと。直接抗争に関わらない日本人が、無差別に一般市民を襲撃するという前代未聞の事件に世界は震撼した。犯人の 3 人のうち、奥平と安田はその場で射殺。事件後唯一生存した岡本公三はイスラエルで裁判を受け、終身刑で受刑し

た後に捕虜交換でレバノンに居住と伝えられている。既に半世紀前となったこの事件。おそらく多くの日本人はこんなことが起こったことすら知らないと思う。しかしこの事件の重要な支援者であった「重信房子」が 2000 年に大阪で逮捕されるなど、過激派組織は存続され、今でも時折表舞台に出てくる。そして当然、被害を受けたイスラエル側は、何年たってもこのことは決して忘れていない。つまり、このことは過去の昔話ではなく今も生きているストーリーである。

【3】入国

こんな背景もあり、イスラエル入国は、かなりドキドキだった。
いまだに「イスラエルという国の存在を認めない」「イスラエルに入国すること自体が重罪」と考える隣国レバノンのように、軍事的にも政治的にも民族的にも絶対に受け入れない敵国に囲まれているこの国。

だから「パスポートにイスラエル渡航の履歴があれば、アラブ諸国への入国はできないので、スタンプは押さないように依頼する」ということは、かなり前から個人旅行者の中では常識として認識されていた。

個人旅行者にはかなり突っ込んだ話をしてくるらしいとも聞いたが、それも覚悟の上。
「何かあれば丁寧に誠実に説明しよう」と入国審査に並んだ。

窓口は若いお兄さん。笑顔なく淡々と業務をこなしている。

「次の人！」

自分の番が来た。緊張が外にでないように、平然とした姿で挨拶をし、パスポートを出す。
「おお、日本人だねっ」 窓口兄は、急に弾んだ声で言った。
「オレ、日本行ったことあるよ。大好きなんだ」

ベングリオン空港　到着ロビー

彼は陽気にいろいろ話しかけてくる。
「観光？　エルサレムは行く？」
「日本のどこ？　東京？」
「ほら、今食べているのも日本のお菓子。一緒に食べる？」
差し出されたのは日本の駄菓子「キャベツ太郎」。とても食べる気にならなかったが、拒否するのはもっと怪しいと思い、そっと手を出し、一粒いただいた。

あまりに弾む会話に、背後で入国審査を待つ人々の「あいつらは何なんだ？」という謎の視線が少々痛かった。

「ハイ、OK。」「楽しんでね。バイバイ！」
え？それだけ？
彼は雑談をしただけで、重要な話は何もしなかった。しかし、お菓子を食べながらも、手早く写真入りの入国カードを作成し、パスポートに挟んでくれてあった。

駄菓子、キャベツ太郎(20 円)

到着ロビーの雑踏の中で、あまりにも予想と違う入国審査に、「夢を見ているのかな？」と思ったが口内に残るほのかな塩味と、かなり湿気ていた食感が、現実であることを語っていた。

【4】イスラエルの通貨

イスラエルの通貨はシュケル。新シュケル、イスラエルシュケルとも言い、ISO 記号で ILS、ヘブライ語では₪（シャハ）と表記される。通貨記号の₪もヘブライ文字のשとחが組み合わさっている。 1 シュケル＝約 30 円。

「よし、30 倍すればいいんだな」

両替所で新シュケル札を手にそれだけを覚えた。

この国の通貨は、建国から 70 年しかたっていないのに 4 回も変わっている。

第一次世界大戦後、イギリスの庇護により世界中からユダヤ人入植者が増えてきた英国委任統治領時代の通貨はパレスチナ・ポンド。1948 年 5 月のイスラエル国成立宣言後の 1952 年からはイスラエル・ポンド。そして 1969 年にはシェケルへ移行した。さらに 1985 年。インフレが進み使いにくくなったシュケルに対し、デノミを行い 1,000 分の一の表記に変えた「新シェケル」が成立して現在に至っている。

100 イスラエルシュケル札(約 3000 円)

ちなみにこのシュケル（shekel. שקל）はもともと重さの単位であったらしく、旧約聖書の中の有名なダビデとゴリアテの戦闘のエピソードの中に、1 シュケル＝約 11g の単位として出てくる。

実は、通貨オタクでもある自分（オタクが多すぎるのだが、注意散漫な性格なので許していただきたい）。

世界中を旅する過程で、各国の通貨に興味を持ち、収集・研究し続けている。

イスラエルが 70 年ほどの間に 4 回も行った「通貨切り替え」は、実は世界中でかなり頻繁に行われている経済対策で、様々な意図により通貨を一新する施策である。中でもよくあるのが、日本でデノミ、またはデノミネーションと呼ばれる通貨のゼロを 1/100 とか 1/1,000 に切り下げる施策。近いところでは 2018 年 8 月にベネズエラが 10 万分の 1 のデノミを実施している。もっと有名な例では 2009 年 2 月のジンバブエで行った 1 兆分の 1 のデノミだろうか。ちなみにデノミネーション denomination という言葉は本来「通貨単位」という言葉しかなく、切り下げなどの意味は入っていない。よって日本語のニュアンスを考えると通貨切り下げはリデノミネーション redenomination、またはチェンジ・オブ・デノミネーション change of denomination いいのかなぁ・・と思う。

日本円はかなり安定した通貨で、国際通貨基金（IMF）の SDR（特別引出権）で考えると米ドル、ユーロ、人民元、英ポンドと共に主要通貨とされており、インフレに伴うデノミなどには無縁のように見えるが、過去にそれに近い措置は行われている。終戦直後の 1946 年（昭和 21 年）2 月 16 日に発表された通貨切替政策がそれで、新紙幣（新円）の発行、それに伴う従来の紙幣流通の停止などが行われた。本来の目的であるインフレ抑制にも一定の効果はあったが、最大の影響は富裕層の現金資産が無効となり、財閥解体や農地改革などの影響もあり、戦前の富裕層の壊滅につながったこと、とされる。

2012 年にジンバブエを訪れた際、既にジンバブエドルの流通は禁止され米ドル決済になっていた。これは道端で土産として売っていた 200 億ジンバブエドル紙幣で 5 枚セットで 10USD。

世界的にも珍しい縦型のベネズエラの紙幣。ベネズエラは 2008 年にベネズエラ・ボリバルを 1/1,000 にしたボリバル・フエルテに変更したが、ハイパーインフレは止まらず、2018 年には更に 1/100,000 にしたボリバル・ソベラノにした。つまり 1 ソベラノは 100,000,000 ボリバル。この 20 ボリバル紙幣は 0.0000002 ソベラノの価値しかない。

新シュケル札を手に入れた後、レンタカーオフィスを目指した。こう書くと

「なに？お前、またレンタカーかよ」

と思われるが、今回は事前に、レンタカーを予約しておいた。いや、もっと言えば、イスラエルだけでなく、このあとの日程全てで、レンタカーを予約してある。つまり「フライト」→「レンタカー」→「フライト」→「レンタカー」・・・と、今後は飛行機と車を交互に乗り継いでいくことになる。

かつて正統派バックパッカーだった時は公共交通機関を使っていたが、やはり短時間で確実に行動するためには、自動車が一番。行きたいときにどこへでも行ける自由。すべての荷物を抱えて移動しても重くなく、それなりに安全も確保される気軽さ。そして地元の様子を、地元目線で見られる素晴らしさなど、今の自分の旅のスタイルにはこれがベストだと思っている。費用を見ても自分の移動距離を考えれば決して高くない。

もちろん、事故の危険性などはあるがそれも含めての経験と思い、車で走り回ることに決めていた。

なぜか大人気のヨーロッパカーの窓口

加えて、ネットで全世界のレンタカー情報も全て管理できるため、出発前でもかなりの準備ができた。借り出し地の場所や営業時間。希望車種やオプションの有無など、いままで現地の窓口でしかできなかったことがみんなできる。より心配なことがあればメールをして、事前に確認をすることもできる。

更に加えると、自分は自動車が大好き。車自体も車のエンジンも歴史も構造もみんな大好きだが、何よりも車の運転が好きである。長距離運転も超大好きで 1 日に 100km,200km いや 500km でも 800km の運転でも気にならない大馬鹿野郎である。まとめると、「見たことがないものを見たい」「いったことがない場所に行きたい」「外国が好き」「車も好き」「車の運転も大好き」となれば、旅のスタイルとして「フライト＆ドライブ」に落ち着くのも仕方ない、とわかっていただけるだろうか？

そんなわけで、すっかりバックパッカーでなく、単なる「ドライバー」である自分は、空港内のレンタカーオフィスを探していた。

【6】Europe Car

ベングリオン空港は早朝 6 時というのに大勢の人でにぎわっていた。
中でも、今回借りるヨーロッパカーオフィスは、長蛇の列。10 組以上が車の借り出しを待っていた。

「そっか、みんなイスラエルを車で旅するんだな」

日本では、外国人が車を借りて旅をする、というのは一般的ではない。しかしそれが当たり前になっている国もある。イスラエルもある意味、外国人が車で旅をするのに適した地で、多くの人が車を借りようとしている。

「シャローム(שלום ：ヘブライ語でこんにちは)」

待ち時間に覚えたヘブライ語で挨拶をすると、窓口嬢はニコっとして、何かをヘブライ語で言いかけたが、「ん？全然わからない」という僕の表情を見て、すぐに英語で言いなおしてくれた。
事前に web で詳細まで予約してあるので、手続きはスムーズであっという間に終了。

「じゃあ、あちら側に歩いて行ってね。続きの建物の１階に駐車場があるわ。そこにもオフィスがあるから」
「ありがとう。‥ああそうだ、返却場所はどこですか？」
「それも向こうで教えてくれるから聞いてね」
　彼女はそう言ってほほ笑んだ。

それにしてもきれいな発音の英語だったな・・・。そんなことを思いながら、説明された駐車場に向かう。

「えーっと、ここかな？」

空港併設の駐車場入り口

　表示通り進んでいくと、それは非常に分かりやすい場所にあった。

「こんにちは！」
　駐車場横の Europe Car オフィスに行き先ほどの書類を出す。

「おお、はいよ」　　妙にノリのいい２人組の若い兄ちゃんが対応してくれた。
「‥‥えっと‥おお！」　突然大きな声が聞こえた。
「あんた、ラッキーだね」
「え？どうしてですか？」
「貸す車は、新車だよ」「うん、全くの新車」
「ホントですか？ありがとうございます！」
「そうそう、これ、デーゼンだから気を付けて」
「ん？デーゼン？」
「そう、デーゼン」

　一瞬なんのことかわからなったが、いろいろ話しているうちに「ディーゼルエンジンだから燃料は軽油で」ということだと分かった。（ちなみに軽油を英語では Light oil となるが、多くの国では diesel fuel または単に diesel と称することが多い）彼らは鍵と書類を渡すと「あっちだよ」と指さしただけでまた雑談を始めてしまった。
　「なんだ、どこにあるのか教えてくれないのか」と思いながら指さされた方向に歩くと、車はすぐに見つかった。

「‥‥確かに新車だ！！」

　今回の車はプジョー3008。
　イスラエルの旅の友となるフランス製中型 SUV は
　新車のオーラと光沢がまぶしい。

　駐車場内であっても濃緑の美しい輝きを放っていた。

おおおおお！　本当に新車の PEUGEOT 3008

モーセが超えてきたであろうイスラエルの荒野

第12章　イスラエルとパレスチナを考える　前編

לחשוב על ישראל ופלסטין　　חלק 1

Israel　　ישראל　　イスラエル

第12章　イスラエルとパレスチナを考える　前編

【1】パレスチナ問題とはそもそも何なのか

「エルサレム」と書かれた公道１号線の道路標識

「･･･Jerusalem」とスマホのナビに入力して、早朝のイスラエルを走り始めた。

Jerusalem（エルサレム）。今回の旅の最大の目的は、ここを含むパレスチナやイスラエルをこの目で見てみることである。いまだに争いが絶えないこの地を実際に見たいという思いだけでここまで来てしまった。

しかし見ただけでは何にも理解できない。やはり、ここが歩んできた歴史を知らずには何も語れない。

現在の「イスラエル・パレスチナ問題」の直接的な原因は、第一次世界大戦前後のイギリスの動きによるものである。しかし正確に理解するためには有史以来の理解が必要になる。かなり長くなってしまうが、第一世界大戦あたりを境に前後に分けて、パレスチナとイスラエル、エルサレムの歴史をざっくり振り返ってみたい。

【2】3つの宗教と神

まずは、イスラム教の話題から入ろう。ニュースなどで「IS:イスラム国」「ビンラディン」「タリバン」などと聞くと、とにかく「テロ組織」「怖い集団」と感じ「イスラムってなんか怖い」って印象を持つ人が多いだろう。でも、本来のイスラムは全く違う。平和を愛し人々の平等を説く宗教である。そうでなければ世界で 22 億人（世界の 1/4）が信仰する世界宗教にはなっていないはずである。

もともと、イスラーム(سلام ,islām）とは「(神に）すべてをゆだねる人」という意味を持ち、アッラーの神に全てをゆだねる・ささげる人を意味している。だからどんな幸福も神のおかげとして感謝し、どんな苦難も神の思し召しとして耐えしのぶ教えである。

実は「アッラー」と呼ばれる神を同じように信仰している宗教がある。それはキリスト教とユダヤ教。実はイスラム教の神アッラー(الله, Allāh)は、キリスト教で神(The God)、ヘブライ語でヤハウェ(יהוה)と称されている。

「え？あの過激派組織で有名なイスラム教とキリスト教が同じ神様を信じているの？」と疑問を感じるが、これが事実である。しかもホロコーストで有名になってしまったユダヤ教の神も同じ、ということも含め、この３つの宗教が、“同じ神”,“同じ聖地”を持つということが、世界の歴史を考える上で非常に重要な視点となることはお分かりいただけるだろう。

この三宗教の成立時期は、一番最初がユダヤ教。この時、神から啓示を受けたのが預言者モーセ。モーセはシナイ山で十戒を授かり、ユダヤ人のためのユダヤ教の始祖の一人になった人物である。

そして、そのユダヤ教をもとにユダヤ人以外の人でも「神を信じる者は救われる」と説いたのがイエス・キリスト。彼は神の子であり、救世主（ヘブライ語でメシア、ギリシャ語でキリスト）として存在する。そしてイスラム教のムハンマドは神の言葉を預かった預言者であり、最終的かつ最高の預言者とのことである。

【3】ユダヤ教と創世記

３つの宗教の概要に触れたが、やはり、最初から語る必要があろう。そこでまず「ユダヤ教」から始めたい。

「ユダヤ教」と聞いても、何も知らないと思われるが、ユダヤ教の聖書（日本の一般的な言い方では「旧約聖書」）の内容を聞けば知っている内容も多く、ちょっとびっくりしてしまう。

旧約聖書の最初は「創世記」。ここには大きく３つの内容が書かれている。

まずは「天地創造」に関わる「アダムとイブ」「ノアの方舟」「バベルの塔」などの話。

次にノアの子孫で、最初の預言者「アブラハム」の話。

そして最後に、アブラハムの子孫でイスラエル人を飢餓から救った「ヨセフ」の話である。

その「創世記」にほんの少し触れてみたい（旧約聖書だけでも 39 巻もあるので本当にごく一部だけであるのはご容赦願いたい）

創世記の「天地創造」の逸話が現在も引き継がれている内容もある。例えば1週間は7日間だが、これは「神が天地を6日間で創造して7日目＝Sabbathサバットに休まれた」という故事をもとにしている。

また「アダムとイブ」の話はご存じだろう。

「神は天地創造の終わりにアダムを創り、そのあばらからイブを創った。そして、ヘビにそそのかされて知恵の実（禁断の実）を食べて、お互いが裸であることを知り、恥ずかしくなって楽園を追い出された・・」

ちなみに創世記には何の実であるかは書いていないが、絵画ではよくリンゴが描かれている。さらに言うと、MacやiPhoneのApple社のリンゴマークは、禁断の実がモチーフという噂もある（だだしJobsは否定している）が、この話も旧約聖書・創世記の中の話である。

また「ノアの箱舟」の話もご存じだろう。堕落した人間が増えたことを怒った神が、洪水を起こし滅ぼそうとすると同時に、ノアに方舟の建設を命じ、ノアの家族とすべての動物のつがいをのせ、大洪水を生き延びた、という話である。

ほかにも「バベルの塔（人が天にも昇る高い塔をつくるなど驕り高ぶったので、お互いが意思疎通できないように多くの言語を作った)」など、どこかで聞いたことがある話も創世記の中の話である。

次は、アダムとイブの子孫であるノア。そしてそのノアの子孫であるアブラハムの話をしたい。

【4】最初の預言者アブラハム

かつて地中海と死海とヨルダン川にはさまれた地域は、ペリシテ人の地、パレスチナと呼ばれ、様々な人々が住んでいた。あるとき、ここにいたアブラハムAbrahamという老人は、神から命令を受けた。それは

「息子のイサクをモリヤの丘の岩で、焼いて神に捧げなさい（いけにえにしなさい）」という信仰心を試す究極の命令だった。しかし神を心から信仰していたアブラハムは神に従おうと息子イサクをモリヤ山へ連れて行った。

そしてアブラハムがイサクを殺そうとしたその瞬間に、天使が現れその手を止め、神は息子の代わりに、生贄用の羊をアブラハムに渡し、「お前とお前の子孫にこの地を与える」と告げた（旧約聖書第一記『創世記』22章)。

この神から与えられた土地というのが「カナンの地」、いわゆる現在のイスラエル・パレスチナ地方であり、「アブラハムとその子孫は神からカナンの地を与えられた」という根拠になっている。

そして、このアブラハムの子孫たちがユダヤ人である。具体的にはアブラハムの子、ヤコブが、4人の妻との間に12人の息子をもうけ、その息子たちがイスラエル十二部族の祖と言われている。

ユダヤの聖典によれば、このアブラハムこそ、唯一神ヤハウェと最初に契約した人間、つまり神の言葉を預かった「最初の預言者」ということになる。

ちなみに現在もこの「アブラハム」を名乗る人も多い。アメリカの第16代大統領リンカーンのファーストネームはアブラハム（英語読みではエイブラハム）であるし、イスラム圏でもイブラーヒムという名は非常に一般的である。また、この神ヤハウェ（Jehovah. יהוה）は古代ヘブライ語では「YHVH」と表記する。古代ヘブライ語には母音がない（表記されない）ため、母音のつけ方で発音が変わり「ヤハウェ」「ヤハベ」「エホバ」など現在でもどこかで聞いたことがある名称の語源はこれである。

【5】モーセと、モーセの脱エジプト

つぎは創世記の後半にでてくる「ヨセフ」について書こう。

起源前17世紀、ユダヤ人たちはカナンの地で大飢餓を経験した。この難を逃れるため移住を指揮したのがアブラハムのひ孫ヨセフである。ヨセフが率いた古代イスラエル人達は、パレスチナを出て、古代エジプトに集団移住。そしてエジプトの地で勢力を拡大しつつ、エジプト王家ともうまくやっていたイスラエル人だが、ヨセフの死後は、勢力拡大を恐れた古代エジプト王朝の王（ファラオ）から危険視され、奴隷となり苦難の日々を送っていた。

紀元前13世紀、苦境の中でも多産のユダヤ人が増えていくことに脅威を感じたファラオは「生まれたばかり

のユダヤの男の子はすべてナイル川に投げ込んで殺せ」と命じた。しかし、あるユダヤ人の男の子を生んだ母はどうしても殺すことができず、ナイルの岸辺の葦の茂みに赤ん坊を隠しておいた。すると水浴びに来たエジプト王女がそれを見つけ、自分の息子として育てることにした。

その男の子がモーセ(Moyses,Moses, מֹשֶׁה) である。

成長したモーセは、ミディアンの地で神に「ユダヤ人を約束の地へと導け」と啓示を受けたのをきっかけに、ユダヤ人のエジプト脱出を決意し、指導する立場となっていた。

モーセはエジプト王にユダヤ人の解放を求めた。しかし、エジプト王はユダヤ人の奴隷解放を認めない。そこで神はユダヤ人のエジプト脱出を促すため、エジプト王に 10 の災いを与えた。最初は奴隷解放に消極的だった王も、数々の災い、特に自らの長男が殺されてしまうという神の力に恐れをなし、モーセらユダヤ人にエジプト脱出を許可した。エジプト王から許しを得て、民を率いて脱出を始めたモーセは、40 年にわたり荒野をさまよう。途中で気が変わったファラオが放ったエジプト軍に追いかけられ、逃げ場がなくなった時、海を割って進んだり、シナイ山で神のお告げ（十戒）を授かったりしながら、ユダヤ人たちを導いて、ついに「約束の土地、カナン」に到着する。こうしてユダヤ人たちはパレスチナにいた人々を平定して、定住していく。

エジプトとシナイ半島の位置関係

この様子を描いているのが、「創世記」に続く「出エジプト記」である。そしてエジプト脱出に関わる神の災いを避けられた喜びは今も過越祭（ペサハ）として、今もユダヤ人の大切な祭祀となっている。

このときモーセがシナイ山で神から授かった「十戒」は「偶像崇拝禁止」「父母を敬え」などユダヤ教のみならず、キリスト教世界にも多大な影響を与えている。つまり現在の欧米諸国の精神的根幹をなす原典となっている。

なお非常に有名な「海が割れる」場面。この海は「紅海」のことだと言われてきたが、最新の科学研究によるとどうやら内陸の、それも葦の茂る湖だったのでは？との説もある。また「海が割れる」という現象はどうやら地震による地殻変動の一種ではないかとの説も出てきた。いずれにせよ今から 3000 年以上前の、それも神が関わる話ではあるが、それを史実と考え、科学的根拠を探す研究が今も盛んに行われていることは非常に興味深い。

【6】ユダヤ民族の絶頂期の王　ダビデ王

ユダヤ人がカナンの地に戻り、定住をはじめた紀元前 1000 年ころ、ダビデという英雄があらわれた。彼はその時 12 部族にわかれていたユダヤ人たちを統一し、パレスチナ一帯に王国をつくりあげた。

ダビデは羊飼いから身をおこして初代イスラエル王サウルに仕え、その後、全イスラエルの王となり 40 年間君臨した。ダビデ王は首都をエルサレムに定め、エルサレムは王国の首都として繁栄した。まさに、ユダヤ民族の絶頂期・・といっても良い時代である。

ダビデで有名なエピソードが、王になる前のペリシテ人ゴリアト（ゴリアテ）との戦いである。ゴリアトは勇猛果敢な巨人だったが、ダビデは手に持った布と石で手製の投石器をつくり、ゴリアトの額に命中させ勝利した。

なおこのダビデ。ルネッサンスで有名なイタリア・フィレンツェにあるミケランジェロ作のダビデ像のダビデである。あの像の手には石を持っている。つまり、あのダビデ像は、このゴリアトとの戦いに臨む瞬間のダビデの姿、と言われている。また英語名でよく聞く男性名デイヴィッド David　は、このダビデにちなんでつけられている名前である。アメリカの有名な大型バイクメーカー、ハーレーダビッドソン　Harley-Davidson のダビットソンも、創設者のひとりダビッドソンから名づけられているが、この名前もダビデからきていると思われる（ついでにいうと David + son でダビデさんの息子という意味というのは前述した通り）。

また「エルサレム」が歴史の表舞台に立つのは、このころからである。
なおエルサレムの語源については諸説あって定まっていないが代表的なものとして

① 夜明けと薄暮の女神であるサレム神を守護神としたウルの町、から”サレム神を祀る町”という意味での“ウルサレム”から来たのだという説
② ユダヤ人たちが、アブラハムが息子をささげようとした地を「(神が) 準備したサラム」、かれらの言葉で「イルエ・サラム」と呼んだなど、諸説ある。

いずれにせよユダヤ人がパレスチナに王国をつくり、エルサレムを首都として繁栄したのは紀元前 10 世紀のダビデ王の時代、というのが重要なポイントである。

イタリア・フィレンツェのシニョーリア広場にあるダビデ像

【7】古代イスラエルの絶頂期　最後の王　ソロモン王

そしてダビデの息子、ソロモン王の時代に、古代イスラエル王国は最盛期をむかえる。ソロモン王はエジプトとも良好な関係を築き、内政にも優れ、そして知恵者でもあった（江戸時代有名なの大岡裁き「子どもで争う二人の女の話」もルーツは、ソロモン王の裁きにあるという説もある)。

ソロモン王は、紀元前 10 世紀にエルサレムの丘に「ソロモン神殿」(第一神殿)」と呼ばれる神殿を築いた。ここはかつてアブラハムが息子を神にささげようとした丘である。

しかし、ソロモン王の死後、内乱が起こり、王国は南北に分裂してしまう。そして北の王国（イスラエル王国）は前 722 年に滅亡、そして南のユダ王国も前 586 年、バビロニアによって滅ぼされてしまった。こうして古代イスラエルの絶頂期が終わりを迎えた。

【8】バビロン捕囚、そしてユダヤ教の誕生へ

ソロモン王亡きあと、古代バビロニア国王のネブカドネザル 2 世は、エルサレムをはじめ多くのユダヤ人都市を攻略し、生き残ったユダヤ人たちをバビロニア（現代のイラク南部）の首都バビロン（現在のバグダードの南方約 90km）に連行した。これがいわゆる「バビロン捕囚」。紀元前 597 年のこと。

異国の地で捕らわれの身となったユダヤ人たちは、異文化に触れ、文字や名称など、様々な影響を受けた。しかし異国に住んだからこそ、自らのアイデンティティを再考し、そしてそれを保つため、自分たちの宗教や生活様式を改めて考え始め、結果的にこれがユダヤ教の誕生につながった。

【9】ユダヤ教団の誕生　聖典とオリーブ山

ユダヤ教を整備するにあたって、ユダヤ人たちはまず「タナハ תנ"ך」とよばれる聖典を作った（Torah（モーセ五書)、Nevi'im（預言者)、Ketubim（諸書）の 3 部の頭文字をとった名がタナハという)。ここにアブラハムやモーセなど神と契約した者（預言者）の言行を記したり、ユダヤ人のルーツをまとめたりした。

紀元前 538 年、バビロンから解放されたユダヤ人たちはパレスチナにもどり、破壊されていたエルサレムの神殿を再建する。これが第二神殿と呼ばれるもので、紀元前 516 年から紀元後 70 年までの間エルサレムの神殿の丘に建っていた。そしてこの神殿を中心として、ユダヤ教団がつくられた。

ユダヤ教団はユダヤ人が守るべき戒律(トーラーと呼ばれる律法) を細かく定めた。ユダヤ教の信仰の中核は、モーセの十戒を遵守することによって、神から選ばれた民となるという選民思想がある。そして「神ヤハウェを信じ、ユダヤの戒律を守る人だけが、最後の審判(Last Judgement)の日に、救世主（メシア）によって救われる」と説いていった。

【10】ハスモン朝によるユダヤ人自治の回復

その後、ユダヤ人たちはいろいろな王朝に支配されるが、自分たちの民族に誇りを持ち、アイデンティティを

守るため、自分たちだけの生活習慣と律法を厳密に守った。そして異国にいても、その地の神を信じず、風習にも染まらず、ひたすらユダヤ教だけを信じ、ユダヤ人だけのコミュニティを作って暮らした。

起源前 167 年。当時エルサレムの支配者だった、セレウコス朝シリアの王、アンティオコス 4 世は自ら「現人神」と称し、ユダヤ神殿をゼウス神殿と呼ばせ、違反者を死刑にすると命じた。これに対しユダヤ人は反旗を翻し戦いとなった。「マカベア戦争」というユダヤ人の自立を目指す戦いは 21 年間続き、前 142 年にユダヤ教国家ハスモン朝（ハスモン王国）が成立した。

ここに再びユダヤ人の国家が成立したわけだが、この状態は長くは続かなかった。地中海諸国を絶大なる力で支配し始めていた巨大帝国、ローマ帝国が迫ってきていたからである。

【11】ローマによるエルサレム支配とヘロデ王

ハスモン朝は起源前 166 年～前 37 年の約 130 年間続いたユダヤ人の王朝だが、実際には内紛が続き、ローマ帝国の介入を受けてしまう。前 63 年にはローマのポンペイウスによってエルサレムが占領され、ハスモン家の王位は剥奪され事実上滅亡。その後はローマから派遣されるシリア総督の支配を受けることになった。前 40 年、ローマ元老院はイドマヤ人ヘロデをユダヤ人の王とし、ヘロデはハスモン王家の当主を殺害。ここにハスモン朝は完全に終焉した。これにより古代のユダヤ人国家は完全に歴史の表舞台からは消えてしまった。

古代世界の絶対的強国だったローマ帝国。その影響力は甚大なるものがあるが、ローマ帝国が繁栄した理由の一つとして「他民族への寛容性」があると思う。それはパレスチナでも同様で、ユダヤ人にもユダヤ教の信仰や、ローマ法よりもユダヤ教の戒律を優先することや、軍務の免除まで許した。（ここらへんは寛容性を持たなかったユダヤ人王朝との決定的な差だと個人的に感じる）。

こうしてパレスチナはローマの属州となったものの、戦いが終わったことで情勢は安定し、エルサレムはユダヤ教の中心地として発展していく。そしてヘロデ王のもと、エルサレムは今に通じる多くの建造物が作られた。ユダヤ神殿も大規模改修をされ、ダビデの塔や大規模な城壁も作られた。

この時のユダヤ神殿は現在も見ることができる。今、エルサレム行って見られるユダヤ教徒が祈りをささげているあの壁は、このヘロデ王が作ったユダヤ神殿の外壁と言われている。ローマ支配下であっても、エルサレムのユダヤ民族の立場向上のために様々な施策をした王であったようだ。

ただし、そんなヘロデ王だが、猜疑心が強く身内を含む多くの人間を殺害したとも言われている。有名なエピソードが、新約聖書マタイ福音書第 2 章に残っている以下の話である。

「イエスはヘロデ王の時代にベツレヘムで産まれたとされている。そのとき東方から来た占星術の博士たちが「ユダヤの王が生まれた」と言っているのを聞き、恐れたヘロデ王は、ベツレヘムとその周辺で産まれた2歳以下の男の子を、一人残さず殺した。イエスの父ヨセフは、夢に天使が現れ「エジプトに逃れなさい」と告げたので、幼子イエスとその母マリアを伴ってエジプトに逃れていたので難を逃れた。ヘロデが死んだ後にイスラエルの地に戻ったヨセフは、やはり天使の声に導かれてナザレの町に住み、イエスを育てた」。

しかし、ここでもまた問題が起こる。やはり、ユダヤ人たちは自分たちの宗教、生活を大切にするばかりで、ローマの社会に溶け込もうとしなかったのである。結果的に支配者であるローマに、ユダヤ人を差別する雰囲気が醸し出された。同時にユダヤ人たちもローマ社会に対し、反発を強めていく。確かに多神教文化であった地中海世界の中で、一神教を奉ずるユダヤは特殊なもの、とする見方が強くなってしまったようである。確執はやがて戦いになっていった。

【12】ユダヤの反乱と鎮圧。そして離散へ

66 年、ユダヤ教徒の過激派が反乱をおこした。それに対しローマは大軍を率いて鎮圧した。（第一次）ユダヤ戦争と呼ばれる戦いである。

そして70年。ローマ軍ティトゥスの指揮する軍によってユダヤ側の本拠地、エルサレムは陥落し、エルサレムの神殿は燃えてしまった。正確にいうと“西壁”だけを残して。そう、現在「嘆きの壁」と呼ばれる城壁以外、全焼してしまったのである。

現在のエルサレムにある“嘆きの壁“

その後もユダヤ教徒はたびたび反乱をおこす。有名なのはバル・コクバの乱（第二次ユダヤ戦争）。シメオン・バル・コクバという男が自らを救世主と自称し、対ローマ反乱に踏み切ったが、ローマ側も強大な軍事力を使ってこれを敗退させ、そして着実にユダヤの地を再征服していった。

そしてユダヤの地をほぼ平定したローマ帝国のハドリアヌス帝は、この地の不安定要因は「ユダヤ教とその文化自身」にあると考え、ユダヤ教の徹底的な根絶を計った。ユダヤ教指導者を殺し、ユダヤ暦の廃止し、そして「エルサレム」の名ですら「アエリア・カピトリナ(Aelia Capitolina)」とし、ここへのユダヤ人の立ち入りも禁じた。こうしてユダヤ人たちは、国を失い、世界中に離散させられた。これをディアスポラ(Diaspora.גלות）といい、現在まで続くイスラエル・パレスチナ問題の遠因となっている。

【13】イエス・キリストの生誕

キリスト生誕の地とされるベツレヘムにある降誕教会

では、今度はキリスト教についてみていこう。

時間を少しさかのぼって、紀元前1世紀のエルサレムから考える。ここに暮らすアンナというユダヤ人からマリアという娘が生まれた。やがて成長したマリアはある青年と婚約するが、マリアは処女のまま子を宿す。それを告知したのが大天使ガブリエル Gabriel, גַּבְרִיאֵל, جِبْرِيل （このシーンは「受胎告知」として多くの絵画のモチーフとなっており、ボッティチェッリやダビンチの作品も非常に有名である）。

そして生まれた子どもはイエスと名づけられた。（ちなみにイエスとは、日本で言えば「太郎」のように当時としてはありふれた名前だった。このイエスを中世ギリシア語Ἰ η σ ο ῦ ς またはロマンス語の音からイエズスと発音する場合もある。そうあの「イエズス会」の語源である。またマリアだけでなく祖母にあたるアンナも聖人として崇敬され、スペイン語では「聖アンナ」、つまりサンタアナ、転じてサンタナとなる。）

聖書によるとイエスが生まれたのがエルサレム近郊の（現在のパレスチナ自治区にある）ベツレヘム。そして、イエスが生まれた年が西暦0年であり、生まれた日が12月25日のクリスマス、ということになっている。（ただし、実際の誕生年・日は正確にはわかっておらず諸説ある。誕生年も紀元前六年～四年頃であったらしいとか、誕生日も10月ごろと言われたりしている。また12月25日を言い出したのは4世紀半ば頃のローマ、教皇ユリウス1世らしい）

今、世界中で23億人の信者がいると言われるキリスト教。

その信仰の中心、イエス・キリストはあまりにも有名だが、彼の生涯は実は多くの謎に包まれている。歴史的には34歳ごろに処刑されるまでに、数々の奇跡を起こし、弟子と共に精力的に布教活動を行ったと考えられがちだが、彼の実際の布教活動は、なんと3年にも満たない。

そんなイエス・キリストの生い立ちを、弟子が書いたマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる4つの福音書から要点的に紐解いていきたい。

イエスは母マリアからベツレヘムで生まれた。父ヨセフと母マリアの7人兄弟の長男としてナザレ（現在のイスラエル北部）で聡明な子として育った。父は大工であり、イエスも早くから大工仕事を手伝っていたという。しかし、ほどなくして父を亡くして、仕事を兼ね各地を旅する。そしてその過程において、人々に神の福音を伝える指導者となっていったといわれている。ヨルダン川で洗礼者ヨハネの洗礼を受け、誘惑の山(Mount of

Temptation)で悪魔と対立し、弟子を引き連れながら神の愛を説き、病人を癒すなど数々の奇跡をおこなった。

決して支配者・権力者に逆らったわけでもない彼が、捕らえられ、処刑されてしまったのは、当時の中心の宗教、ユダヤ教とその司祭との確執にあった。

人々に神の愛を広めていった彼は、既存のユダヤ教の考え方に疑問を持つ。前述した通り、ユダヤ教はユダヤ人によるユダヤ人のための宗教であり、他教徒に対し非常に排他的な考えを持っていた。加えて、ユダヤ教は「穢れ」つまり犯罪者など社会的弱者や重度の病人、身体障碍者を忌み嫌った。これに真っ向から対立したイエスはユダヤ教の律法主義を否定し、ユダヤ教団のエリート層を強く非難。犯罪者や徴税人、身体障害者や貧しい人々こそ救われると説いた。人々はその考えに共鳴し、やがてイエスの考え方は多くの支持を得て、「救世主（ギリシャ語でキリスト(Χριστός)）」と呼ばれるようになった。

しかし、イエスを良く思わない人たち、特に批判されたユダヤ教団は、目障りな存在として排除をたくらんだ。

【14】 死刑判決を受けるイエス・キリスト

イエスの動きに対し、ローマ総督ポンティオ＝ピラト、そして領主ヘロデ＝アンティパスは、預言者ヨハネとその洗礼を受けたイエスが、民衆を扇動して暴動を起こしローマに対する反乱に及ぶことを潜在的に恐れていた。そう、この時代、統治者はヘロデ王だったが、ローマ帝国の支配下だったので、最高責任者はローマ総督であったのである。

[最後の晩餐]があるイタリア・ミラノの寺院の中庭

そんな中、３０年春。ユダヤのお祭り「過越祭」にイエスが信者を率いてエルサレムに上京するという話が流れた。民衆は救世主の到来と受け取ったが、ユダヤ教の指導者や保守派は危険な動きとして領主ヘロデとローマの総督ピラトに訴えた。

この時「エルサレムに行けば捕らえられる」と認識しながらもイエスはエルサレムへ行き、弟子たちと「最後の晩餐」をし、それからオリーブ山のふもと、ゲッセマネの園で最後の祈りをささげる。（この「最後の晩餐」の場面は、イエスが「この中に私を裏切るものがいる」と伝えたときの弟子たちの動揺を表現したレオナルドダヴィンチの絵画であまりにも有名である）

そして、深夜。弟子のイスカリオテのユダの裏切りにより、イエスは捕らえられてしまう。ユダは銀貨３０枚と引き換えに居場所をユダヤ教の祭司長に教えたからである。しかし裏切ったのは彼だけではない。大勢の軍勢の勢いに恐れをなし、結局残りの弟子も一人残らず逃げてしまったのだ。つまりイエスは弟子たち全員に裏切られ、捕らえられてしまう。

翌朝、ユダヤ祭司そしてローマ提督ピラトのもとへ連行されて、裁判をうける。しかしピラトも迷いがあった。直接的な罪状・証拠がないからである。よっていったんは無罪を宣言したが、民衆は「イエスを十字架につけろ」とその処刑を要求、結果的にピラトは死刑の判決を出した。

なお、イエスを裏切ったイスカリオテのユダは自らの行為を恥じて、神殿に銀貨を投げつけ、首を吊ったとマタイの福音書は伝えている。

【15】 キリストの処刑とキリスト教の成立

エルサレム旧市街「悲しみの道」にて

死刑判決をうけたイエスは、ローマの刑法にしたがい、エルサレムの中心を処刑場所まで十字架を背負って歩かされた。そして都の外れの「ゴルゴタの丘」につくと、両手を釘で十字架に打ち付けられ、左右から槍で突かれるという、長い苦しみの果てに殺された。

なお、この残忍な刑の執行方法だがローマ支配下の当時は一般的な方法であり、イエスは盗みを働いた二人と共に処刑された。この時イエスが歩いた道はヴィア・ドロローサ（悲しみの道）と呼ばれ、今もエルサレムの中心にあり、

多くのキリスト教徒の聖地となっている。

イエスの死後まもなく、イエスを見たという弟子たちが現れる。復活したイエスは、数々の奇跡を起こした後、オリーブ山より昇天した、とされている。

イエスが処刑されたとき弟子たちは逃げてしまったが、イエスの「復活」を裏切ったことへの赦しととらえ、そこに原始的な信者の団体（原始教会）が生まれた。特にユダヤ人の離散以後には、イエスの教えを信じる者たちが地中海各地で教えを広めたため、しだいに浸透していった。

こうして、ユダヤ教を端に発したイエスの教えは、キリスト教として成立した。 そう、キリスト教の成立はイエス・キリストが「キリスト教を始める！」といって始めたのではなく、イエスの死後、彼の教えを弟子が各地に説いていった結果、キリスト教が成立した、というわけである。

最初のキリスト教徒の布教も苦難続きだった。というのも地中海世界では多神教が中心で、一神教であるキリスト教を受け入れる素地がなかったからである。よってネロやディオクレティアヌスといったローマ皇帝たちもキリスト教徒を追いつめ、拷問し、殺したりした。特にネロは、キリスト教徒を最初に迫害した皇帝として”暴君ネロ”と呼ばれるようになった。それでもキリスト教徒は信仰を捨てず布教活動を行ったため、4 世紀には地中海中に教徒がいるようになった。

301 年、黒海の南東にあるアルメニア王国が史上はじめてキリスト教を国教とした。そして 313 年には、ローマ皇帝コンスタンティヌスが帝国内でのキリスト教を公認した(ミラノ勅令)。最初は迫害されていたキリスト教徒だが、気が付くとローマ帝国内の勢力は無視できないほどに膨れ上がって、公認せざるをえないほどだったからである。そして 380 年にはキリスト教を国教にすると宣言 (テオドシウス帝の三帝勅令)。こうしてキリスト教徒が名実ともにローマ帝国の中心宗教となっていった。なお、コンスタンティヌスの母は熱心なキリスト教徒で 320 年にはエルサレムを訪れて、イエスの墓を見つけだしたといわれている。そして、このイエスの墓がもとになり、「聖墳墓教会」が建てられた。

かつてのゴルゴダの丘に建つエルサレムの聖墳墓教会

ヴィア・ドロローサ、ゴルゴダの丘、そして聖墳墓教会があるエルサレムは、キリスト教徒にとっても聖地となった。

【16】新約聖書の成立

以上がイエス・キリストの生涯の概略だが、今度は宗教としての側面を見ていこう。先にも述べたが、イエス・キリストはユダヤ教徒だった。しかし「ユダヤ教を信じるユダヤ人＝ユダヤ教徒だけが救われる」という選民思想に疑問を持ち「神を信じる者はだれでも救われる」という考えに至った。またユダヤ教には非常に細かい戒律がある（律法（ミツヴァ）が 613、そのうち「してはならない」というのが 365 以上ある)。しかしキリスト教の戒律は、ユダヤ教と比べるとはるかに緩やかで、それも信仰が広がる原因になったようだ。

しかし、信者が増えていくと、その教えをまとめるためのものが必要になった。特にキリストが生誕して以降の彼の言行をもとにした新しい聖典が必要。そこで誕生したのが「新約聖書 New Testament」(新”訳”ではなくイエス・キリストが神と新しく“契約”したという意味である)。

では「旧約聖書　Old Testament」 とは何かというと、イエス・キリストよりも前の契約、つまりアブラハムやモーセたちの契約を記したものを指す。ユダヤ教の聖書「タナハ」がそうである。ここでのポイントは「旧約聖書」「新約聖書」というのは、キリスト教での言いかたであり、ユダヤ教徒は決して「旧約」とは言わない。ユダヤ教からすれば「古くないよ。今使っているよ」「そもそも、勝手に新しいもの出してんじゃないよ」となるわけである。

そんな新約聖書だが、最初は様々な解釈があり、内容にブレがあった（神学論争)。有名なのは「イエスは神か人間か」という問題だが、多数決で神と決まった。こうしたいくつかの会議（ローマ皇帝による公会議開催やニ

ケーア公会議など）を経て、現在の聖書が形づくられていった（非常に大きな議論になったのは、「三位一体説」と「単性説」。「父と子と聖霊」は本質において同一であるというのが三位一体説であり、イエスは唯一、神性のみを本性とするというのが単性説。結局「三位一体説」が優勢となったが、エジプトのコプト教会、アルメニア教会、エチオピア教会などは単性説を捨てず、異端とされたが辺境にあったため干渉されず、信仰が守られて現在に続いている）。

【17】ローマ帝国の分裂と、キリスト教宗派の分裂

このころエルサレムはローマ帝国の支配下に置かれていた。しかしやがてそのローマ帝国ですら、莫大な戦費による国力の低下、後継者争いなどの結果、西暦 395 年に東西に分裂し、事実上終わりを迎えた。

東西分裂後、東ローマ帝国はやがて、ビザンツ帝国あるいはビザンティン帝国と呼ばれる国となり、1453 年にオスマン帝国によって滅ぼされるまで盤石な 1,000 年国家となる。しかし、西ローマ帝国はゲルマン民族の大移動の中、476 年に滅亡してしまう。

また時を経て、キリスト教自体もいろいろな宗派が生まれ、そしてその宗派ごとに争いも起こりはじめた。395 年のローマ帝国東西分裂のあと、西はローマ、東はコンスタンティノープルの教会がそれぞれ正統性を主張し対立し、エルサレムのあるパレスチナ一帯は、東ローマ帝国の領地となった。しかしどの宗派であっても、象徴的な聖地である聖墳墓教会は、非常に大切なものとしていたので、ここをめぐってもさらに争いは続いた。現在、聖墳墓教会の祭壇が二つあるのも、それぞれの宗派が覇権を競い、争った結果それぞれがそれぞれを管理することになっている。実際の祭壇には様々なランプなど装飾品が飾られているが、その一つ一つに宗派の違いが表現されている。

そして現在に至っても、宗派争いは絶えない。有名なところでは、2008 年 4 月 20 日。聖墳墓教会の中で礼拝に出席していたギリシャ人とアルメニア人数十人の間で乱闘が起こり、警官隊が仲裁のために教会内になだれ込む騒ぎとなった。この日は正教会の「聖枝祭（Orthodox Palm Sunday）」で、ギリシャ正教の司祭をアルメニア人の礼拝出席者らが教会から追い出したことから始まった。そして礼拝者が儀式で手に持っていたヤシの枝葉で警官を殴りつけたところ騒ぎが大きくなったようだ。

また、キリスト教徒とユダヤ教徒とのあいだでも争いは常に起こっていた。キリスト教徒からすれば、イエスキリストを殺したのはユダヤ教徒だと考えていたし、ユダヤ教徒からすれば、イエス・キリストたるものは、ユダヤ教の考えをもとに、ユダヤ教に反旗を翻した一信者。しかもその弟子は勝手に「新約聖書」とかいう、聖書の続編を勝手に作った許せないやつら、と感じていた。しかし、すでにキリスト教はローマ帝国の国教となり、ヨーロッパ各地に信者を劇的に増やしていたこともあり、結果的にユダヤ教徒は迫害を受けた。

しかし、戦いは「ユダヤ教 vs キリスト教」だけではなかった。ユダヤ教が一番最初に神からの啓示を受けた宗教だとすると、キリスト教が 2 番目。そして同じ神はまたもや別の預言者に言葉を託したとする新しい宗教が生まれていた。そうイスラムである。そして最新の宗教であるイスラムは、エルサレムにも迫っていた。

【18】イスラムの誕生

時は流れて 6 世紀。中東あたりは、東ローマ帝国の流れをくむビザンツ帝国と、ペルシア人の帝国ササン朝との間で激しい対立が起こっていた。インド・中国から絹や香辛料を取引したくともササン朝ペルシアを通らなければ欧州とアジアで行き来ができず、結果的にその陸路を避けるような形でアラビア半島沿岸の海路を使った交易ルートが活発化。結果、西と東を結ぶ中継貿易の拠点、「自由都市」と呼ばれる都市がいくつか生まれた。

西暦 570 年ごろ、そんな自由都市のひとつ、メッカ مكة Makkah という都市に、ムハンマドという男の子が生まれた。幼くして家族を亡くし、叔父のもとで成長した彼は、25 歳で裕福な未亡人ハディージャと結婚し商人

として活躍した。ところが 40 歳のころ、思うところあって、メッカ北東のヒラー山近くの洞窟で瞑想を始めた。そしてある日のこと、突然何者かに体を押さえつけられた。そして「私の言うことを唱えなさい」という声を聴いた。声の主は、大天使ガブリエル（ジブリール）。そう、あのイエス・キリストの母マリアに受胎告知をした、あの天使がムハンマドのところにも現れ、神の言葉を預けたのである。

彼ははじめ自分の置かれた位置を理解していなかったが、妻の助言もあり、自分は神の言葉を預けられた「預言者である」と考えるようになった。これがイスラムのはじまりである。しかし、彼の教えはなかなか理解されなかった。というのも、このころアラブは「多神教」の世界だった。古代ギリシャも古代エジプトも様々な神々が存在する多神教。それに対し、一切の偶像崇拝を禁止するムハンマドの教えは、異端とされ、圧力をかけられ、迫害されてしまった。

転機がおとずれたのが、庇護してくれた伯父アブー・ターリブと、妻ハディージャが相次いで亡くなったとき。メッカでの活動に限界を感じ、攻撃を受け始めていた彼はメッカを離れ、ヤスリブ（現在のマディーナ、メディナ)という街に逃れた。このムハンマドがヤスリブに逃れた事を「ヒジュラ：聖遷（هِجْرَة Hijra)」と言い、イスラム世界では「イスラムの歴史が始まった日」として非常に大切な出来事になっている。よってこの 622 年 7 月 16 日をイスラムの暦、「ヒジュラ暦（ التقويم الهجري Hijri calendar)」の元年と定めている。

【19】ミウラージュの奇跡（ムハンマドとエルサレム）

イスラムの預言者ムハンマドとエルサレムが結びつくエピソードが「ミウラージュの奇跡」と呼ばれる出来事。上記のヒジュラの前年の出来事である。

これはムハンマドが一夜にしてメッカからエルサレムへ飛び、さらに天の世界にのぼり、そしてアラーの御前に招かれた、とされる出来事。この時期ムハンマドは、異教徒の攻撃に苦しんでいたことに加え、最大の理解者だった妻のハディージャと伯父のアブー・ターリブが続けて亡くなるなど困難を抱えていた。神は、自らの存在を示し、彼に強い意志を持つようにとこの旅をさせた、と伝えられている。

預言から 11 年目のレジェブの月の 27 回目の夜。ムハンマドは、メッカのマスジド・ハラームにて天使ジブリエールの訪問を受けた。天使は旅の準備として、ムハンマドの胸を切断し、ザムザムの泉で洗われて、知恵と信仰で満たした（いきなり胸を切断？と思うのは、現代の日本人だからであって伝承の話からするとそれほど違和感を覚えない流れらしい)。そしてムハンマドを天馬ブラークにのせ、エルサレムにあるかつてのソロモンの神殿跡、アル＝アクサー・モスクに連れていった。それから空にのぼり、7 階あるといわれている空の各階で、過去の預言者たちと出会った。 第 1 天ではアダムに迎えられた。アダムは人類の祖だが、イスラムの教えでは「最初の予言者」でもある。第 2 天では洗礼者ヨハネとイエス・キリスト。第 3 天には「旧約聖書」のヨセフ。第 4 天にはイドリース（「旧約聖書」のエノクと考えられる）がいた。第 5 天には「旧約聖書」のモーセの兄がいて、第 6 天にはモーセがいた。そして最後の第 7 天に上るとそこではアブラハムが待っていた。そして第 7 天の先には天使がアラーを讃える「館」があり、ムハンマドはさらに「スィドラの樹」に至った。こうして 7 層の天を進んでいく度に預言者同士が面会しあい、一神教の信者がより一つにまとまることが重要だと指摘されたと記されている。旅の終わりに預言者ムハンマドは、マナの世界でアラーの御前に向かった。そして偉大なアラーの神から伝えられたいくつかの命令を受け、一組の褒美と共に御前から立ち去った・・・。
これがいわゆる「昇天の旅　Mi'raj والمعراج」と呼ばれるもので、この昇天体験の翌年、ムハンマドはメッカをすてて北の都市メディナへ移り住み、そこでイスラム共同体をつくりあげることになる。

政治と宗教が一体となったイスラム共同体はやがてメディナの街を支配し、630 年にはメッカも征服する。そ

の後イスラムはアラビア半島の大部分を支配していった。

632 年、ムハンマドが亡くなると、彼の親戚たちが跡をつぎ、支配をさらに広げていく。第 2 代のカリフのウマルは、シリアに進出し、ビザンツ帝国軍を撃退しながらエルサレムに侵攻していく。長い包囲戦の結果、ビザンツ軍は撤退、エルサレムはウマルに講和を申し入れた。

エルサレム、神殿の丘にたつ岩のドーム。下には嘆きの壁がある

638 年 2 月、エルサレムに入ったウマルは住民の安全を保障し、キリスト教の聖墳墓教会の存在も認めるという寛大な措置をとり、エルサレムは両宗教の併存する都市となったが、エルサレムはキリスト教からイスラム教が支配する町へと変わっていった。

イスラム教徒たちはエルサレムを、ムハンマドの昇天体験の地として崇め、天に昇った場所、つまりかつてユダヤの神殿があった丘に「岩のドーム」という会堂を築いた。また「岩のドーム」の近くには、昇天を記念してアル＝アクサー＝モスクも建てた。この場所はアブラハムが息子を神にささげようとした場所でもあり、ユダヤ教にとっても聖地である。こうしてエルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教にとっても大切な聖地となった。

ということで、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の 3 つの宗教の概略をまとめてみた。

繰り返すが、同じ神を持つのに、3 宗教の関係性は微妙である。

イスラム教徒にとって、キリスト教もユダヤ教も存在は認めるが、イスラム教はそれらを超えた最終的な教えということになる。ユダヤ教徒にとっては、キリスト教もイスラム教も認められない宗教。イエスでさえも、ユダヤ教に反旗を翻したユダヤ教の一信者でしかない。キリスト教徒にとっては、ユダヤ教は信仰のもとになった宗教であり認めるが、イスラム教は自分たちの教えに勝手に加えられた続編と考えている。

聖書に関してもお互いの関係性は複雑。

ユダヤ教にとって聖書はユダヤ教の教えが書いてある一番最初のものだけが聖書であり、それ以外は存在しない。しかし、キリスト教徒にとって、最初の聖書は大切だし、尊重するが、その聖書以降に登場したキリストの動きを記した「新しい聖書」の方が大切である。よってキリスト教徒にとってユダヤ教の聖書は、元となった古いもの、そう「旧約聖書」となる。そして主にイエス・キリストについて書かれている新しいものを「新約聖書」と呼んでいる。当然ながらユダヤ教徒にとって聖書と言えば最初のものだけであり、“新約聖書”などというものは認めていない。

そして、アッラーがムハンマドに語った言葉がコーラン（ران Quran）（最近の表記ではクルアーン）。イスラム教にとっては、旧約聖書も新約聖書も認めるが、それよりも最新そして最終の教えが書かれているコーランが何より大切、となるわけである。

ムハンマド自身は文字の読み書きができず、彼が語った言葉を弟子たちがまとめたのがコーラン。全部で 114 章もあり、ニュースなどでイスラム教徒の戒律として「豚肉を食べてはならない」「酒を飲んではならない」「女性の肌を見せてはならない」などを聞いたこともあるかと思うが、実はイスラム教の戒律は、キリスト教よりも緩く、より現代に対応できるようになっていることも多くある。例えば、結婚・離婚についてカトリックでは「絶対に離婚してはならない」ということも多いが、イスラムでは、離婚してもいいように、結婚時に離婚時の慰謝料を定めておき、嫁の実家に事前に婚資（マフル）を支払うなどより現代に即した内容になっている。

イスラムの戒律は「六信と五行」、つまり 6 つの信仰箇条と、5 つの信仰行為でできている。五行とは、信仰告白（シャハーダ）、礼拝（サラー）、喜捨（ザカート）、断食（サウム）、巡礼（ハッジ）からなる信仰の行動だが、言い換えるとこの行為を行うだけで、「アッラーの下ではみんな仲間」「みんな平等」という信仰を得られるイスラムの教えはかなり明確でわかりやすく、様々な文化的背景を持つ人々にも違和感なく信仰できる宗教である。

結果的にはじめはアラブ人だけが信仰していたが、やがてペルシア人はじめ多くの民族がイスラム教徒になり、世界宗教となっていった。（なお、近年、「イスラムは社会生活すべてを表すものであって、宗教的側面だけでないので、「イスラム教」と記述せずに「イスラームと記述する方がよい」との学説を唱える方もいるが、この稿ではイスラム教として記述した。）

【20】 世界を混乱に陥れた「十字軍」

話をエルサレムに戻そう。３つの宗教の聖地、エルサレムはイスラム教徒が支配する町だったが、キリスト教の聖地、聖墳墓教会の存続は認められ、不十分な形ではあったが、ある程度の和平を保っていた。

イスラム教は、一神教の流れから自らをユダヤ教やキリスト教の後継者だと考えていた。ムハンマドによると、「モーセもイエスも唯一神アッラーから啓示を受けた預言者ではある。よってユダヤ教徒もキリスト教徒も同じ神を信じる仲間ともいえるが（啓典の民）が、その教えが正しくない部分がある。自分もまた神から言葉を預かった預言者だが、最後の預言者でもある。だからコーランこそが正しい教えを伝えているのだ」と。

こうして、イスラム教も着実に人々の中に浸透し、信者を増やしていったが、それぞれの宗教はお互いを深く理解しようとはせず、それぞれの思惑の中で発展をしていった。

このころ、ヨーロッパでは、ローマ帝国のキリスト教の国教化に伴って、やはり勢力がどんどんと増していた。そして、いつしかキリスト教トップである教皇の権威は、皇帝よりもはるかに上回る力を持ち始めていた。

それを象徴する事件が「カノッサの屈辱」である。1077 年に聖職者を任命する人事権（聖職叙任権）をめぐってローマ教皇グレゴリウス 7 世とローマ王ハインリヒ 4 世が対立した際、教皇は皇帝を破門を宣告した。当時、破門は「他のキリスト教徒との付き合いを一切禁じる」という、いわば社会的な死に等しい処罰だった。この状況に敗北を認めた皇帝は、雪の降りきるカノッサ城門にて、裸足のまま断食と祈りを 3 日間続け、教皇による破門の解除、赦しを願った、という事件である。つまり皇帝よりも教皇の方がはるかに強い権力を持っていたことを象徴する事件であり、キリスト教の持つ強大な力が分かるだろう。

そして、そんな絶大なる権利を手にしたキリスト教教皇は、自分の権威をさらに高める目的もあり、ある企てを考える。「聖地エルサレム」の奪還、つまりそう「十字軍」（ラテン語: cruciata、英語: crusade）の結成である。1099 年、ローマ教皇ウルバヌス 2 世は、「キリスト教の聖地を異教徒から取り戻せ」という掛け声をかけ聖地奪還の戦いへの参加を呼び掛けた。すると西欧諸国の騎士や一般の民衆は巨大な軍隊を結成。一路エルサレムの地を目指した。騎士団は各地のイスラム都市を破壊しながら、1099 年 7 月 15 日にエルサレムを占領した。この軍事行動は、キリスト教徒がイスラム教徒に勝利したということだけでなく、西欧諸国が初めて連携して共通の目標に取り組んだという点で、欧州史における重大な転換点となったといわれている。

ただし、その戦闘行為はすさまじいものだった。エルサレムへの道中、イスラム教徒配下の都市で散々な虐殺・陵辱・略奪を働きながら、エルサレムになだれこんだ十字軍は、そこでもイスラム教徒とユダヤ教徒を虐殺。ダビデ・ソロモン王時代の遺跡、嘆きの壁、ヴィア＝ドロローサ、聖墳墓教会、岩のドーム、アル＝アクサー＝モスクなど、エルサレムのあらゆる場所が血で染まり、7 万人以上の犠牲者が出たと伝えられている。イスラム教徒にとっての聖地、神殿の丘のモスクも破壊し、そこに教会をたてた。そして、十字軍はエルサレム王国など「十字軍国家」と呼ばれる一群の国家群をパレスチナに建国し、イスラム教徒とユダヤ教徒を市内から追放した。

しかし 88 年後の 1187 年。イスラムの武将サラディンによって、エルサレムはふたたびイスラムのものになる。サラディンは、アイユーブ朝の創始者で、軍事に長け、寛容な人物として今も語り継がれている英雄である。若年時から文武共に誉れが高く、出世して職責が高まるとともに贅沢を辞めるなど、機を読むことに長けていた。戦闘時こそキリスト教徒と死闘を重ねたサラディンだが、一度エルサレムを占領したサラディンはキリスト教徒を殺さずに退去を命じ、捕虜となったキリスト教徒たちもみずから買い上げて解放してやった。

また、キリスト教徒の最大の聖地、聖墳墓教会の存続を認めたのもサラディンだった。この時、「聖墳墓教会入口の鍵の管理はイスラム教徒が行うこと」を交換条件に教会の存続を認めたのだが、なんと 800 年たった現在も、

毎朝、サラディンの命令通りイスラム教徒が鍵開けの儀式を行っている。

その後、十字軍は、すぐに負けてしまった第2回十字軍（1147年）、敵将サラディンに全く歯が立たなかった第3回十字軍(1189年)、敵の本拠地エジプトを狙ったがうまくいかず、同じキリスト強国のコンスタンチノープルを征服してしまった第4回十字軍（1202年）、モンゴルが来襲してきてしまいエルサレムどころではなくなった第5回十字軍（1218年）と続くが、どれもうまくいかない。結局、軍事的行動ではエルサレムは奪回できず、ここから700年あまり、エルサレムの街はイスラム支配下でほぼ安定した時代が続いた。

かつてのコンスタンチノープル、現イスタンブールの街並み

十字軍の失敗は200年にも続いた。それは教皇の地位の低下や諸侯の力が強くなるなど支配者の力関係の変化ももたらした。キリスト教教皇の力が低下したことを象徴する事件を紹介する。「アナーニ事件」という、1303年フランス国王フィリップ4世がローマ教皇ボニファティウス8世をイタリアのアナーニで捕らえた事件である。これはローマ教皇と対立したフランス国王が、破門を宣告されながらも、それを無視し、ローマ教皇を拘束、退位させようとした結果、その扱いに怒った皇帝が精神錯乱状態のまま死すという「憤死」する事件である。これは前述の「カノッサの屈辱」の対になるような出来事であり、皇帝と教皇の力関係が完全に逆転した事象として非常に興味深い。

【21】十字軍時代の無血での和平

200年続いた十字軍の攻防は、イスラム世界にとっては「悪魔の所業」といえるほど理不尽な戦闘であったが、キリスト教世界においてもその弊害は大きく結果的に諸国を疲弊させ、教皇の地位を落下させた所業、ともいえると思う。しかもこの時期、イスラムの人々も、キリスト教徒もお互いの文化や宗教を全く理解せず、キリスト教徒の多くは「いくら罪を重ねてもイスラム教徒を殺しさえすれば天国へ行ける」と真剣に本気で信じていたほど、お互いを忌み嫌っていた。

そんな両者はただひたすら対決していたが、そんな血で血を洗う十字軍の時代にあっても、実際の戦闘をしなくても両者が和平条約を結びエルサレムが平和に訪れた時期があった。この話は様々な事情があり、歴史の狭間に埋もれてしまい、あまり語り継がれて来なかった内容だが、ここでは簡単に触れたい。

和平を成し遂げたのは、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世(Friedrich II）と、イスラム・アイユーブ朝の第5代スルターン、アル＝カーミル（al-Malik al-Kāmil)。200年続く十字軍の歴史の中で、130年ほどたった十字軍遠征期の中間のやや後の時代の話である。

フェデリーコ2世（Federico II）とも呼ばれるフリードリヒ2世は、イタリアのシチリアの王子で20歳の若さで神聖ローマ帝国皇帝に選出される。当時シチリア王国は、交易上イスラムやギリシャ世界ともつながりも深く、彼は幼少期から多彩な文化の中で生きて、アラビア語をはじめ7か国語を操れる多彩な人物であった。特に自然科学には深い造形を持ち、イスラム世界の自然科学には敬意を払い、アラブ社会の科学や知識を吸収しながら成長していった。皇帝就任後、宿敵であるはずのアラブの盟主アル=カーミルの使節を受け入れた時、使節団は、新皇帝のイスラム世界への深い理解に驚き、そこからアル＝カーミルとの文通が始まった、と言われている。二人は天文学や自然科学の話題をアラビア語で交わし、友情を育んでいった。

しかし、二人は十字軍で考えると敵味方の関係。しかも、この神聖ローマ帝国皇帝は「十字軍で、聖地エルサレムを奪回すること」を誓って就任したもの。よって、なかなか十字軍を招集しない彼にローマ皇帝からは破門をちらつかせられながら、十字軍遠征の要請が何度も来ていた。そして1228年、フリードリヒは150隻、40,000人の軍を率いてエルサレムに向かった。第6回十字軍である。しかし、この道中、船内でチフスが流行。フリードリヒ自身も病にかかり、引き返してきたところ、教皇グレゴリウス9世は、エルサレムの地を踏まず逃げてきたものとして、フリードリヒを破門した。当時、破門された人間は、キリスト教信者と一切関われないなど一切

の社会生活を奪われることを意味する。落胆したフリードリヒは、教皇に反発する手段として、とんでもない方法をとる。

十字軍の前線基地であった現イスラエルのアッコーに行き、そこを拠点として、アル＝カーミルと直接交渉に乗り出した。「エルサレムをキリスト教徒に渡してほしい」と。

当然、アル＝カーミルは反対し、交渉は難航。フリードリヒは拠点をエルサレムに近いヤッファにうつし、結果的に半年にわたる激しい交渉の末、今まで誰もが成し遂げなかった、無血での和平条約締結を成し遂げた。1229年2月11日のことである。「ヤッファ条約」と呼ばれるこの条約は、10年間の期限付きではあったが、キリスト教徒、そしてイスラムの人々にも互いに配慮した非常に優れたものだった。

フリードリッヒが上陸したイスラエル・アッコーの現在の街並み

1　エルサレムはキリスト教徒が管理をする。

2　（イスラムの聖地である）神殿の丘はイスラム教徒が管理をする。

3　皇帝はこの条約に反対する勢力に物資を補給しない

4　もし、キリスト教徒の一部が、この条約に違反し、イスラム教徒を攻撃することがあれば、皇帝はイスラム教徒側につく。

なんと、それぞれの聖地はそれぞれが管理できるだけでなく、フリードリヒは、十字軍が攻めてきた場合はイスラム教徒側につくことも明記した。

こんな画期的な条約を結んだフリードリヒだが、母国へ帰ると「悪魔と契約を交わしたもの」として教皇側の軍隊に取り囲まれ、そしてその後も不遇な人生を送った。アル＝カーミルもキリスト教徒と契約を結んだものとして強い非難を浴び、バクダッドのモスクではアル＝カーミルの糾弾集会が開かれたとの記録も残っている。

しかし、この和平条約によりエルサレム及び地中海周辺は平和になり、商業や交易が盛んになった。ただし10年後、条約は破棄され、エルサレムは再びイスラムの手の中に。キリスト教徒側も十字軍を編成して攻撃するが、二度とキリスト教徒の手にエルサレムが入ることはなかった。アル＝カーミルは条約締結の9年後、つまりまだエルサレムが平和な時代に亡くなったが、フリードリヒは生涯、教皇から敵とみなされ、いまだに破門は解かれていない。

しかし、現代でさえ、どうやって解決していけばいいのか先が見えないエルサレムに関わる争いのなかで、お互いを尊重し、話し合いだけに寄って和平を成し遂げた二人のリーダーの偉業は、もっともっと評価されてもいいエピソードだと思う。

こんなエピソードもある「十字軍」であるが、基本的に、キリスト教徒が神の名のもとに異教徒を200年も攻撃し続けた略奪行為であり、世界史をみてもこの悪影響は甚大である。啓典の民（أهل الكتاب:アフル・アル・キターブ.People of the Book）とも呼ばれる、もともと同じ神から発展してきたはずのキリスト教とイスラム教の間に大きな溝を作ってしまったことは確かである。

バチカン・聖ピエトロ大聖堂の屋上よりみたバチカン市国

さらに物語は続く。900年後の2000年3月12日。この“十字軍“に関して歴史的な動きがあった。第264代ローマ教皇であるヨハネ・パウロ二世が、バチカンにおいて、過去2千年間にキリスト教会が犯した罪を認め神の許しを請うミサを行ったのである。恐らくローマカトリック教会が自らの誤りを認め懺悔をしたのは歴史上これが初めてだと思う。80歳近い法王が震える手で、しかし一言一句丁寧に、しっかりと過去の反

省を述べたニュースは当時、非常に大きな話題となった。

しかし言い換えると、明らかな誤りであっても、謝罪をするのに 1000 年近い年月がかかったということでもある。この問題の真の奥深さも感じる。

【22】ビザンツ帝国の滅亡とオスマン帝国の勃興

軍事的にも、宗教的にも大失敗だった十字軍。しかしこの戦いによってプラスに作用したこともある。東西交流は盛んになり、東方より香辛料や絹、宝石が、ヨーロッパから鉱物資源や毛織物が交易されるようになったのだ。加えてイスラム世界の高度な科学や、古代ギリシャの哲学なども着目されるようになった。しかも、十字軍失敗により教皇の権威が失墜し、その宗教観に疑問を持った中から、ルネッサンスの芽も生まれ始めた。

そして、15 世紀。世界最大の領地を誇ったモンゴル帝国が衰退すると、1453 年に強力な軍事態勢をもつオスマン帝国がビザンツ帝国を滅ぼした。東ローマ帝国から発展したビザンツ帝国は 330 年から 1453 年まで 1000 年続いた強大な国家だったが、オスマン帝国も 1299 年から 1922 年まで 600 年も存在した大帝国である。小アジアからバルカン半島など広大な領地と地中海の制海権もあったので地中海交易に関税をかけ潤沢な資金を手にした。イスラム教スンナ派の国で、君主であるスルタンが教主カリフの地位を兼ねる形をとり、イスラム教世界の盟主としてキリスト教世界に大きな脅威を与えていた。

そしてこのオスマン帝国の存在が、パレスチナ問題をより複雑にする要因となる。

【23】オスマン帝国の衰退

オスマン帝国は 14 世紀から 20 世紀初頭まで、現在のトルコを中心に、北は現在のハンガリーあたりから、黒海周辺、紅海周辺、地中海南東部全てを支配したという大帝国である。余談だが、現在も残る中東・近東という言葉の「近東」。これはヨーロッパにほど近い東の地域を指しているが、語源としてはオスマン帝国の領域とヨーロッパからの距離感とのこと。よって「近東」＝「オスマン帝国領土」ともいえる。しかしあまりの巨大さゆえ、17 世紀ごろから徐々に衰退していった。これは同時に、この地のアラブ人たちにオスマン帝国のトルコ人支配に反発し、独立の機運を高めていくことになった。

そして、ヨーロッパ社会はより大きな変革を迎えていた。それは 14 世紀にイタリアから始まったルネサンス（「文芸復興」と訳すことが多かったが最近は「文化・芸術の運動」などと称される）や、15 世紀半ばスペイン・ポルトガルから始まった大航海時代、そして 18 世紀半ばイギリスで興った産業革命など、まさに世界の文化と歴史をひっくり返す大きなうねりがあったからである。そして強大な国家が生まれ、オスマン帝国でいえばイギリス、フランス、ロシアが領土を少しずつ奪っていく。よってオスマン帝国はますます弱体化していった。そんな状態のパレスチナに、戻ってこようとする民族が現れた。そう 2000 年前にこの地を追われたユダヤ人である。

チェコ･プラハにあるシナゴーグ

【24】ユダヤ人の生活とシオニズム運動

ユダヤ人は 134 年のディアスポラ：離散から、まさに世界各地に散らばり個々にコミュニティをつくって暮らしていた。前述したように、パレスチナでは常に他教徒に土地を奪われてきた経緯などから、自己のアイデンティティを、土地や地域ではなく、自らの律法や暮らし方に求めていた彼らは、結果的にどの地に行ってもその土地の風習になじまず、独自の集団、独自の世界を築いて生活をしていた。世界各地に離散した彼らは、その地でシナゴーグ（בית כנסת）とよばれるユダヤ教の会堂をコミュニティの中心とし、聖書を読んだり、礼拝したり、結婚式を挙げたりと、固有の宗教・文化を大切にしてきた。しかし、その土地の文化や宗教になじま

ず、結果的に異端視され迫害を受ける・・ということが繰り返されてきた。そんな中、ユダヤ人の中には科学技術や商才に長けた人物も現れてきた。特にキリスト教やイスラム教では禁じられてきた金融業（要するにお金を貸す商売）で財産を蓄える人物も出始めた。

そして時は流れ 19 世紀。

世界中に離散していたユダヤ人の中から「パレスチナに祖国をつくろう。約束の地シオンの丘に戻ろう」という運動がおこる。「シオニズム運動」である。1896 年ハンガリーの新聞記者だったヘルツルの『ユダヤ人国家』という著作をきっかけとして、各地で差別されたり、異端視されたりしていたユダヤ人が数十万人単位でパレスチナに自分たちの生活基盤を移し始めた。しかしこれは大きな問題も引き起こす。パレスチナの土地は、2000 年前の聖書の時代にはユダヤ人の土地だったかもしれないが、その後アラブ人がやってきて、やはりそこに生活の基盤をつくっていたからである。

こうしてパレスチナという土地を巡り、「2000 年前の聖書で所有が約束された」と考えるユダヤ人と、長年生活をしてきたアラブ人の間で対立が生まれる。はじめはそれなりに共存していたが、やがて血で血を洗う恐ろしい衝突へと発展していく。列強の思惑に全世界が翻弄されていく、激動の時代がやってきてしまったからである。

シオニズム運動の発祥地、ハンガリー。

写真は首都ブタペストにある国会議事堂（Országház）。手前を流れるのはドナウ川。

シオニズム運動（Zionism）とは、「シオンの丘」に戻ろう、という運動。

実際のシオンの丘は、エルサレム旧市街の近くにある丘を指す、と言われている。

写真は、その「シオンの丘」付近の様子。

荒野が続く空から見たパレスチナ自治区

第13章　イスラエルとパレスチナを考える　後編

לחשוב על ישראל ופלסטי　חלק 2

Israel　ישראל　イスラエル

第13章　イスラエルとパレスチナを考える　後編

ここからは、パレスチナとイスラエルの実際の近現代史に触れていく。

ロンドン。ウエストミンスター橋から見た英国議会とビックベン

【1】 悲劇のきっかけは、イギリスの三枚舌外交

世界史が好きな仲間との会話で「世界史上において一番悪事を働いた国はどこ？」という話題になると、ほぼ間違いなくあの国を挙げる人が多い。強き、悪き大帝国、イギリスである。

そして近代のパレスチナ問題でも諸悪の根源はイギリスにあった。

大航海時代はスペイン・ポルトガルが世界を席巻したが、スペインの無敵艦隊を撃破し、産業革命で力をつけ、奴隷取引と武器輸出という三角貿易の莫大な富などで、世界の覇権を握り始めたのがイギリスである。

1914 年。第一次世界大戦がサラエボでのオーストリア皇太子暗殺事件をきっかけに勃発した。ヨーロッパ勢力の対立だった争いが、瞬く間に全世界を引きずり込んだ大戦争になってしまった。この地政学的にも経済的にも文化的にも大きな禍根を残した戦いを、イスラエル・パレスチナに視点を定め見ていこう。

フランス共和国、ロシア帝国、イギリス帝国などの連合国と、ドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国そしてオスマン帝国からなる同盟国との対決だったが、ここでイギリスは驚くべき外交戦略に出た。それはフサイン＝マクマホン協定、バルフォア宣言、サイクス・ピコ協定という、同じ場所の割譲を三者に別々に持ち掛ける極悪の“三枚舌外交”であった。少し説明をしよう。

① **フサイン＝マクマホン協定**とは、イギリスの敵国であるオスマン帝国を弱体化させようと、当時、オスマンに支配されているアラブ人たちに「反乱を起こしたら、アラブ人国家をつくってもいい」とした約束である。オスマン帝国は「オスマン・トルコ」とも呼ばれていたようにトルコ人を主体とする国だが、パレスチナ・アラブの地には 2000 年前からアラブ人が暮らしていた。よってトルコ人支配に不満を持っていたアラブ人の独立心を利用し、内乱・内部からの弱体化を企んだのがこの協定である。正確に言えば 1915 年 10 月、イギリスの駐エジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンが、メッカの太守であるフサイン・イブン・アリーと、対トルコ戦協力を条件にアラブ人居住地の独立支持を約束した。ちなみにこの時に活躍したのが、“アラビアのロレンス”。映画でも有名な彼は実在の人物で、「アラブ軍の独立に向けて協力したイギリス人」という設定に間違いはないが、実際にはイギリスの姑息な外交戦略を助長した活動をしていたことになる。

② **バルフォア宣言**とは「金融業で成功したユダヤ人に戦争の資金援助してもらう代わりに、パレスチナへのユダヤ人国家建設を支持する」というもの。1917 年、イギリス外相バルフォアがユダヤ系イギリス人の銀行家のロスチャイルド卿にあてた手紙の中で表明した内容である。ロスチャイルドといえば、現在ですら大資本家として有名な大財閥でだが、もともとは 18 世紀、ドイツ・フランクフルトで古銭商を始めたマイヤー・アムシェル Meyer Amschel R.（1743―1812）の息子たちがヨーロッパ各地に居を構え、ナポレオン戦争の混乱期にヨーロッパ最大の金融王国を築いた一家である。一族は幾多の革命、戦乱、恐慌を乗り切って今日現在も地球規模で金融業務だけでなく、石油や金、ダイヤモンド、ワインなど多くの事業を展開している。先にも書いたが、古代ローマとの戦いに敗れ、世界各地に離散（ディアスポラ）していったユダヤ人は生きていくために、他宗教が禁止していた金融業で成功を収めているものもいた。ロスチャイルドはその代表格で、天才的な手法と戦争期という時

早朝のフランクフルト中央駅（Frankfurt Hauptbahnhof）

代背景で莫大な富を手にしていた。しかし“経済的に成長しているユダヤ人”というイメージが、ヒトラーの反ユダヤ主義を生む遠因になってしまっている。

バルフォアは「勝利後は“ユダヤ人のナショナルホーム”の成立を支持する」と表明した。この“ナショナルホーム”という表現が絶妙であるが、「神に約束されたシオンの丘に帰ろう」というシオニズム運動が盛んになってきた時期にもあたり、シオニスト連盟会長である卿へのイギリス外務大臣からの提案はユダヤ人を大いに刺激してしまった。

③ **サイクス・ピコ協定**とは、「戦勝後、連合国でオスマン帝国領を分割する」という秘密協定で、1916 年にイギリスの中東専門家マーク・サイクス、フランスの外交官フランソワ・ジョルジュ＝ピコ、ロシア帝国外相サゾノフとの間で結ばれたもの。ちなみにこれが世間に知られてしまったのは、1917 年にロシア革命によって政権を取ったレーニンが「前政権の密約」として暴露したためである。

イギリスはこの“三枚舌外交”により、三者に甘言を呈し協力を求めた。その後の歴史を知っている現代から見るとあまりに無謀な外交施策だが、当時のイギリスの勢い、そして世界観からすれば“なんとかなる”と考えていたのだろうか・・・。

【2】 第一次世界大戦で勝利したイギリスが行ったこと

第一世界大戦はイギリスを含めた連合国が勝利した。そしてパリ講和会議、いわゆるベルサイユ条約で天文学的な賠償金をドイツに課し、戦争は終結した。しかし戦勝国と言えども戦争の痛手はあまりにも大きく国内は疲弊。どの国の民衆は不満を持ち、各国はあまりにも大きな負債を負っていた。

三枚舌外交をしていたイギリスは、結局どれも守らず、パレスチナを含むアラブ地域を自分の統治下においた。しかし当然ながらアラブ人からも、ユダヤ人からも不満の声が高まり、それぞれが主権を主張。これが衝突を生み、不穏な空気が充満していったが、そうこうしているうちに不幸はさらに続く。

1929 年。世界で唯一好景気に沸き、この世の春を謳歌していたアメリカの経済が奈落の底へ落ちた。“世界恐慌”である。

【3】 第二次世界大戦

アメリカのニューヨーク・ウォール街の株式取引所での株価暴落に始まり、銀行・企業の倒産、大量失業など、世界恐慌はあっという間に全世界を混乱に陥れた。ヨーロッパ経済も大混乱。巨額な賠償金に困っていたドイツにアメリカが金を貸し、それをフランス・イギリスへの賠償金として支払っていたためである。困窮した列強各国は植民地からの搾取で乗り越えようとしたが、植民地を持たない国はなすすべもなく、街は失業者であふれた。

そして困窮した民衆は強い指導者を求めた。そんな混乱の中で、第一次世界大戦で戦勝国となりながら、賠償金の恩恵にあずかれなかったイタリア、そして内輪もめばかりしている政党政治ではなく経済を力強く立て直してくれるリーダーを求めていたドイツに非常に強い政治家が現れた。イタリアのベニート・ムッソリーニ、ドイツのアドルフ・ヒトラーである。特にヒトラーは、アウトバーン建設など画期的な経済政策を次々に打ち出し、経済と生活を確実に立て直し、民衆の熱狂的な支持を得ていった。自信と実力をつけたナチス・ドイツは、ベルサイユ条約で課せられた軍備禁止条約を一方的に破棄。大規模な再軍備を開始した。

そして、1939 年 9 月。ドイツのポーランド侵攻をきっかけとして、第二次世界大戦がはじまってしまった。第一次世界大戦の終結からわずか 21 年後のことである。

第二次世界大戦は・・・・。語り始めるときりがないので詳細は割譲するが、最新科学技術が軍事に使われ、桁違いの犠牲者を生んだ史上最悪の大戦争となった。犠牲者はロシア 1500 万人、日本 300 万人、ドイツ 280 万人。中国でも 130 万人など、どの国にとっても筆舌に尽くしがたい被害が出た戦いであった。

そして、ユダヤ人にとって最大の悲劇が起きる。ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺である。民衆の不満の矛先をユダヤ人に向けさせ、結果的に 600 万人ものユダヤ人を虐殺してしまった。

三枚舌外交でパレスチナの自治権をさりげなく奪ったイギリスだが、混乱のうちに第二次世界大戦に突入し、ようやく終戦を迎えた時には、パレスチナ支配どころでなく、本国の財政も軍備もボロボロになっていた。

【4】ナチス・ドイツとユダヤ人

「働けば自由になる」と掲げてあるアウシュヴィッツ強制収容所入り口

少し話題はそれるがナチス・ドイツのユダヤ人迫害に関して自分が見聞きしたことに触れたい。

かつて自分がポーランドを旅していた時、地図を見て近くにオシフィエンチム(Oświęcim)という町があることに気づいた。

「あ、オシフィエンチムって、ドイツ語で言う、アウシュビッツだよな。今は博物館になっているらしいね。せっかくだから行ってみるか」とふらっと寄ることにした。例によって計画もなくポーランド国内をいろいろ動いていた時だったので、特段強い思いがあるわけでもなく、「近くに来たので寄っていこう」程度にほんの軽い気持ちで行ってみることにした。すると・・・。

博物館となったその場所に入った瞬間、戦慄が走った。見るもの、聞くもの、その全てが“死”につながるものばかりだったからである。本当に、実際に数百万人のユダヤ人が虐殺された現場は、圧倒的かつ絶対的なメッセージを強くは放っていた。自分の中の、息、血液の流れ、思考すらも完全に停止してしまうほど。絶対に超えられない有刺鉄線、大量の毒薬の空缶、無数の犠牲者の方の義手・義足、処刑台、そしてガス室・・・。本当に「呼吸ができない」「全身の血が凍りつく」「一言も発することができない」状態で半日が過ぎていた。

博物館となっているアンネの家 Frank Huis

またある時、オランダを訪れ、首都アムステルダムを自転車で走りまわっていたのだが、この時も「そうだ、アンネフランクの家があったはず」と思い、気軽な気持ちでその場所を訪ねてみた。自分が「アンネの日記」を読んだのは多分中学生ぐらいだったと思うが、自分と同じ年端の少女が、ユダヤ人というだけで、息を殺しながら隠れ住み、そして連行されていく様子に衝撃を受けたことを覚えていたからである。

現在は博物館という形で見学者を受け入れていたその場所には、彼女の日記に出てきた「本棚の形をした隠し扉」から隠し部屋がそのまま見学でき、あの日記の中の空間が、そこに実在していた。

運河に面した穏やかな美しい街並みと、戦時中、連行を恐れながら息を殺して生活していた空間のギャップに、「これは本当のことなのか」と頭が混乱し、しばし運河を呆然と眺めていたことを思い出す。

・・・・自分は思想的に、何か特別なものあるわけでもない。いわゆる右や左の思想を持っているわけでもない。また特別に何かの宗教を強く進行しているわけでもない。いわゆる、普通の一般的な思考を持つ日本人、だと思っている。よってナチス・ドイツやユダヤ人に特定の思い入れを持っているわけではない。

しかし、世界を旅することが好きなので、結果的にいろいろな“実物”に触れる機会が多くなっている。

そして、実際に行ってみると、いままで書籍の中、教科書の中だけだった世界の本物が、圧倒的迫力を持って語り掛けてくる。アウシュビッツならば、収容所に向かう引き込み線の線路が確かにすり減っていて、膨大な車両がここを行き来していた事実や、アンネフランクの家の前では華やかな光の中聞こえていた鳥のさえずりが、隠れ家の中では何も聞こえなかったことの一つ一つにものすごい衝撃を受けた。

使い込んだ線路が事実を語るビルケナウ(アウシュビッツ第二)強制収容所

こんな経験を積み重ねてくると、「やはり、本物の持つ力は何物にも代えがたい」「本物だからこそ見えてくる

世界がある」と強く思う。

今回のイスラエル・パレスチナにしても、どんなにネットや書籍で情報を集めても、本物を見なくてはわからない世界がある、と感じ、ここまでやってきてしまっている・・・。

【5】第二次世界大戦後のパレスチナの混乱

閑話休題、話題を戻そう。

第二次大戦後、まだイギリスはパレスチナの実質支配を続けていた。しかし、ユダヤ人たちからは、

「ユダヤ人への迫害が続くのはそもそも帰る国がないからだ」

「自分たちには神から約束されたカナンの地がある」

「今、このときこそカナンの地に帰るべきだ」というシオニズム運動がさらに高まっていた。ナチスの迫害に対する同情から世論も味方し、パレスチナには続々とユダヤ人が入植してきた。

しかし、今そこに住んでいるアラブ人にとっては「2000 年以上前の“神との約束“があるから、お前の土地をよこせ」といわれたところで住み慣れた土地を差し出せるはずもない。しかも統治者であるイギリスだってアラブ人の国をつくることに同意しているはず‥。とのことでパレスチナは非常に混沌とした状態になってしまった。

結局、混乱の原因を作った上に統治を続けるイギリスに対しユダヤ人・アラブ人たちの怒りが爆発する。特にユダヤ人の過激派はテロ行為に出て、エルサレムにあるイギリスの統治機関の建物を爆破する（1946 年 7 月、イギリスの統治機関があったキングデイビットホテルを爆破し 91 名の死者が出た事件）など、混乱の極みを迎えた。実は、イギリス国民の多くはアラブ・パレスチナにおける自国の動きを知らなかったという。しかし大量にイギリス将校が殺害される事件が報道されてから“パレスチナ撤退論”が湧き上がってくる。結果的に、国が疲弊し、統治能力もないことを認めたイギリスは統治権を放棄し、あとを国連に丸投げして、逃げてしまった。

【6】国際連合の功罪

発足したばかりの国連は、早速調査団を現地に派遣する。新たな枠組みを望んでいたユダヤ人はこれを大歓迎し調査の手助けをした。しかしアラブ人にとっては、そもそもユダヤ人の入植がありえないことであり、国連の調査すら大反対。よって調査団にはユダヤ人だけが協力をした。

ご存じの通り国連（国際連合 United Nations）は大戦の教訓を生かし、国家間の争いが起きないように、主に第二次大戦の戦勝国が中心になり発足したもの（そもそも名前からして二次大戦の“連合国”と同じである）。そして、国連の中心はアメリカ合衆国。しかし、米国にはユダヤ系の実力者も多く、やはりユダヤ寄りの政策をとっていく機関となっていた。

そんな背景もあり、パレスチナを調査し終わった国連は、パレスチナのイギリス委任統治を終わらせ、アラブ人とユダヤ人の国家を創出する「パレスチナ分割案(United Nations Partition Plan for Palestine)」をまとめた。

加盟国の国旗が翻る夕暮れのニューヨークの国連本部

1947 年 11 月の国連総会においてこの案が審議されたが、会議は冒頭から紛糾。というのもどう考えてもユダヤに有利な内容だったからである。人口ではアラブ人の方が 2 倍も多いのに面積ではユダヤ人が 57%、アラブ人は 43%に割譲。しかも、ユダヤ人の土地がひとつながりになっているのに対し、アラブ側は複数エリアに分断されていて、互いの行き来もできない。激論は続いたが結局 11 月 29 日の採決において、賛成 33、反対 13、棄権 10 で分割案は成立してしまった。

【7】第１次中東戦争へ

イスラエル国内でよく見かけるイスラエル国旗

国連での可決から半年後、1948 年 5 月 14 日にユダヤ人は新国家“イスラエル”の建国を宣言した。ローマ皇帝ハドリアヌスに離散（ディアスポラ）させられて以降 1800 年後の国家設立にユダヤ人は沸きに沸いた。

しかし、これはアラブ世界においては絶対に許せないことである。怒り狂った彼らは、なんとイスラエル建国宣言の“翌日”、5 月 15 日に１５万人の大群でイスラエルを攻撃してきた！
いわゆる第１次中東戦争の始まりである。

エジプト、サウジアラビア、イラク、トランスヨルダン、シリア、レバノンからなるアラブ連合軍はパレスチナへ進軍し、パレスチナ人側に立ってイスラエルと戦闘を始めた。

対するイスラエルは前日に国家が成立したばかり。軍隊などはあるはずもなく、急ごしらえの民兵３万人の勢力で戦った。当然イスラエルは劣勢でアラブ軍にどんどんと追い詰められた。

転機が起こったのは、アメリカの仲介により１か月ほどの休戦があったこと。イスラエルはこれを利用し世界中から中古兵器を買い集めた。そして再び戦闘が始まると猛烈に反撃。なんと破竹の勢いでアラブ軍を撃破し、戦いに勝ってしまった。そしてパレスチナの８割以上を占領。エルサレムは西半分を得たが、東半分はヨルダン領へと東西に分裂。また 200 以上のアラブ人の村が焼かれ、70 万人以上のパレスチナ難民が発生した。この結果、イスラエルは開戦前よりも広い領土を確保することになった。

【8】スエズ運河を巡る争い、第二次中東戦争

中東戦争は現在まで４回を数えているが、この第二次中東戦争は他と少し様相が異なる。イスラエル vs アラブ諸国という対立ではなく、イギリス・フランス・イスラエルがエジプトを攻撃するという不思議な構図である。

ことの始まりは、1956 年にエジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化をしたこと。中東と欧州を直接結ぶスエズ運河は貿易の要衝でその領有権は非常に重い意味を持っていた。

スエズ運河ではないが、もう一つの大動脈パナマ運河

スエズ運河はフランス人レセップスが、エジプト太守から開削権を認められ、１０年かけて開通させたもの。しかしほどなく運河会社は経営難に陥りイギリスに売却された。それ以降はイギリスが植民地支配の要として占有したが、イギリスは利益を自国やフランスに分配し、エジプトにはごくわずかしか支払いをしなかった。この現状にエジプト大統領になったばかりのナセルは、スエズ運河の国有化によって資金を調達し、ダムを建設し、農業の近代化を図ろうとしたのである。

エジプトの突然の国有化に怒ったのは、既得利権を持っていたイギリスとフランス。しかし、さすがに既得権のために戦争を仕掛けるのは国際世論が気になるため、エジプトと敵対関係にあるイスラエルをけしかけてエジプトを攻めよう、という手段を取ったのだ。

イギリスとフランスはイスラエルに武力援助をし、エジプトを攻撃させたのが、いわゆる第二次中東戦争。先の第一次中東戦争からわずか８年しかたっていないのに、かつての敵国に近いイギリスとイスラエルが手を組んだのである。

戦闘はイスラエルの奇襲などにより、英仏・イスラエル連合軍が有利に進んだ。イスラエルはシナイ半島を占領、さらに領土を拡大しようとしたところで、アメリカの仲介により停戦となった。というのもこの大義なきエジプト侵攻は国際世論が許さず、三国の軍事侵攻を支持する国はなかったためである。

【9】第三次中東戦争

エジプト　カイロタワーから見たナイル川とカイロ市内

第二次中東戦争から 11 年後の 1967 年 6 月。また戦争が起こる。イスラエル軍がエジプトなどを侵攻し、わずか 6 日間でシナイ半島、ガザ地区、ゴラン高原など 4 倍もの領地を占領した第三次中東戦争である。

第二次中東戦争以降、国際世論はイスラエルに対し非常に否定的になっていた。建国以来、これほど世界世論を敵に回したのは初めてだったと言っても良いほどイスラエルの対外姿勢に疑問を持つ国が多くなっていた。劣勢に立ったイスラエルは、情勢打開を狙い、エジプトやアラブ諸国に対する攻勢の機会を狙っていた。

またやられっぱなしだったアラブの人々、いわゆるパレスチナ難民の中からイスラエルへ対抗する勢力も次々生まれていた。1964 年 5 月に結成されたパレスチナ解放機構（Palestine Liberation Organization：PLO）などがその代表である。PLO は最初、和平交渉など話し合いによる解決を目指していたが、武力闘争を掲げるヤセル・アラファトが主導して以来、反イスラエルのゲリラ活動を頻発させるようになった。

1967 年 6 月 5 日。イスラエル軍はエジプト軍による紅海(アカバ湾)の封鎖に対する反撃を口実として、エジプトに侵攻。エジプト空軍基地をわずか 3 時間で壊滅させた。エジプト空軍を無力化したあとは陸軍がシナイ半島・ガザ地区を制圧、スエズ運河地帯まで進撃。北方ではシリア領ゴラン高原と、ヨルダン領ヨルダン川西岸地域と東エルサレムを一気に占領した。

6 月 10 日。イスラエルとエジプトは国連の停戦決議を受諾。戦闘はわずか 6 日間で終結した。戦死者はアラブ側の 3 万人に対し、イスラエルは 670 人。イスラエルの電撃的・一方的・圧倒的な勝利だった。

東西に分割していたエルサレムを手に入れたイスラエルは、ここを「首都」と宣言。当然イスラムの聖地「神殿の丘」も手に入れた。ここはハラム＝アッシャリーフ（高貴な聖域）ともいわれ、1187 年にサラディンに率いられたイスラム教徒軍が十字軍から奪回した場所で、以来７８０年もの間、イスラム教徒の手にあった場所である。第三次中東戦争でパレスチナ難民が 100 万人以上発生した上、聖地まで取られたとなることはイスラム教徒のさらなる怒りを買い、反イスラエル意識をさらに強める要因ともなった。

ちなみに、この時以来、イスラエルは「首都はエルサレム」と主張しているが、日本をはじめ他国はそれを認めておらず、海沿いの「テルアビブ」を首都とし、大使館をここに置いている。

【10】ミュンヘンオリンピック事件

こんな様々な出来事が起こっていた中東だが、世界の人々がその実情を十分理解していたとは思えない。ほとんどの欧米人にとって中東問題は縁遠い、遠くの出来事だったからである。

転機となったのが、パレスチナ武装組織「黒い九月」により行われたミュンヘンオリンピック事件であろう。

1972 年 9 月 5 日、西ドイツのミュンヘンで行われていたオリンピックの選手村にパレスチナのテロリスト組織「黒い九月　منظمة أيلول الأسود」の武装したメンバー8 名がイスラエル選手団宿舎へ突入した。

テロリストは、まず 2 名を殺害し、収監されているメンバーの解放などを要求した。しかし当時の西ドイツにはテロに対する部隊がなく、加えて外国軍の活動を制限する法律もあり、いわゆる普通の警察が対応するしかなかった。加えて TV の生中継で警察の動きが筒抜けだった不手際も重なり、イスラエル選手団 11 名全員と警察官 1 名、そして犯人グループ 5 名が死亡してしまった。オリンピックという世界中が注目するイベント中のテロ事件は世界中に深刻な「パレスチナ問題」を認識させる契機となった（ちなみにこの「黒い九月」はこの稿の前章で挙げた「テルアビブ空港乱射事件」の実行犯、岡本公三の解放も要求している)。この事件により「テロを起こせば国際世論に訴えられる」という認識がテロ組織に広まってしまったのは不幸としか言いようがないが、テロにしか訴えられないパレスチナ側の思いも分からなくはないと感じてしまう。

【11】第4次中東戦争とオイルショック

第三次中東戦争の 6 年後の 1973 年 10 月 6 日、エジプト・シリア両軍がイスラエル国防軍に対して攻撃を開始した。イスラエルにやられっぱなしだったアラブ諸国が攻勢にでた、いわゆる第四次中東戦争である。

第三次中東戦争で電撃的に大勝したイスラエルは、アラブ国家の戦争能力を軽視していた。またユダヤ暦で一切の労働が禁止されている神聖な日「ヨム・キプール（贖罪の日）」の奇襲だったため、イスラエルが初めて劣勢となった戦いだった。しかし予備役部隊が展開を完了すると形勢は逆転。というのも予備役が実は軍本体であり、そしてバックにはアメリカがいる。本格戦闘態勢をとれば、軍事的に大変有利なのである。よって最初こそアラブ優位で進んだが、10 月 24 日国際連合による停戦決議をうける頃には逆にエジプト・シリア領に侵入するなどイスラエル軍が勝利、という形になっていた。

軍事的にみればイスラエル軍の逆転勝利だったが、戦争初期にとはいえ第一次、第二次、第三次中東戦争で負け続けたアラブ側がイスラエルを圧倒したという事実は「イスラエル不敗神話」を崩壊させ相対的にアラブの地位が向上。これにより 1979 年にはエジプト・イスラエル平和条約を締結され、1982 年にシナイ半島はエジプトに返還されるなど、アラブ地域の安定の兆しが見えた戦いであった。

そして同時に、この第四次中東戦争は世界経済を大きく揺るがす事件も引き起こした。アラブ諸国は、敵国イスラエルに近い国々を追い詰めるため“ある資源”を武器に持ち出してきたのである。それは「石油」。産油国が多いアラブの国々は、アラブ石油輸出国機構（OAPEC）を結成し親イスラエル国に対する石油禁輸措置を表明し、連動して石油輸出国機構（OPEC）も石油価格引き上げを表明した。これが（第 1 次）オイルショックである。これによりそれまで中東の安価な原油で成長を遂げていた欧米諸国は大混乱し、経済構造、産業構造の変革を求められた。

なお日本経済も大混乱だった。OAPEC が出した「親イスラエル国」への禁輸リストに日本も入っていたためである。時の田中角栄内閣は即座に防衛策を講じた。まず官房長官が「イスラエル軍の撤退とパレスチナ人への人権への配慮の求める」声明を発表。12 月には三木副総理がアラブ諸国へ赴き禁輸リストからの除外を求めた。これら外交努力により日本はリストから外されたが、国内は「トイレットペーパーがなくなる」という噂が広まり、店頭からトイレットペーパーが消えてしまった。また国民挙げて「省エネルギー」の意識が高まり、ガソリンスタンドの休日休業やテレビの深夜放送停止など、様々な改革が始まるきっかけとなった。実は原油の供給は、翌 1973 年には通常に戻ったのだが、日本の省エネ機運は収まらず、エネルギーを高効率の利用する技術開発などが進められ、今後の環境対策などにも対応する技術革新への契機だった。ただしオイルショックを境に日本の高度経済成長は終わり、低成長期にはいることとなった。

【12】オスロ合意

終わりのないイスラエルとパレスチナの争いを何とかしようと動き出した国があった。ノルウェーである。首都オスロはノーベル平和賞の授与が行われる都市であり、かつ両国と関係が良好なノルウェーは、世界平和へ寄与したいと秘密裏にイスラエルとパレスチナの代表をオスロに呼び、和平案を練っていた。

そして 1993 年 8 月 20 日。画期的な和平案、いわゆるオスロ合意（Oslo Accords）が、イスラエルのラビン首相と PLO のアラファト議長との間で取り交わされた。正式には「暫定自治政府原則の宣言」という合意は 2 つの内容から成り立っている。

①イスラエルを国家として、PLO をパレスチナの自治政府として相互に承認する。

②イスラエルが占領した地域から暫定的に撤退し、5 年にわたって自治政府による自治を認める。その 5 年の間に今後の詳細を協議する。

この合意成立の立役者は当然ノルウェー政府だったが、最後の最後になってアメリカが出しゃばり、ワシントンのホワイトハウス前でクリントン大統領立ち合いの下に調印式が行われた。この時イスラエルの代表イツハク・ラビンは、第一次中東戦争でエルサレム防衛の指揮を取りエジプト軍と交戦した人物である。その後

軍の最高司令官（参謀総長）となり第三次中東戦争で勝利を収め、第６・11 代の首相になった人物。ラビン首相はこのオスロ合意の翌1994 年にヨルダンとの平和条約にも調印し、地域の安定に寄与。この功績によりヤセル・アラファト PLO 議長、第９・12 代イスラエル首相のシモン・ペレスと共にノーベル平和賞を受賞した。

ノルウェー･オスロ　オスロ港を望む公園より

しかし、ここで悲劇が起こる。

ラビン首相は、オスロ合意から２年２か月後の 1995 年 11 月４日。テルアビブで催された平和集会中に、和平反対派のユダヤ人青年に銃撃され、死亡してしまった。これによりオスロ合意は事実上破棄。

その後は大規模な戦争はないものの、小規模な軍事衝突は絶えず、和平への道は断絶されてしまった。その後イスラエル内の言論は右傾化の流れを強め、強権派のシャロン、ネタニヤフなどが首相となり現在に至っている。

以上、パレスチナ問題を歴史から現代までざっくり書いてみた。

・・・本当はこのあと、ソ連のアフガニスタン侵攻からなるイスラム vs 共産主義、イスラム vs アメリカ、湾岸戦争、イラク戦争、タリバン政権、シーア派とスンニ派、アメリカ同時多発テロ、アルカイダ、フセイン、アラブの春、イスラミックステート、シリア情勢、難民問題、トランプ大統領の親イスラエル政策、イスラエルを承認した UAE とバーレーンと「アラブの大義」・・・など、諸問題が続いているがそれはまたどこかで書きたい。

でもなぜ、要点だけとはいえ、こんなに長く書いてみたかというと、過去を知らないと現在のことが分からないと思ったからである。過去のストーリーも知らず、この地を訪れても、「なんだかわからないけど危険な地域」「人と物がごみごみしている古い町と、何もない砂漠の国」しか感じないかもしれない。でも人が争うのはやはり意味がある。何かの思いがあって争っているとすれば、その思いに寄り添うためには、そこに至るまでの経緯を知っている必要があると思う。

話は変わるが、日本を代表する巨大銀行のトップの方が、何かのエッセイで、

「自分は毎日移動する車の中で「NHK 高校講座　日本史」の録画を２倍速で見ている」

「過去を知らないと先を読むことができないからだ」と書いていた。

かなり高齢の方で、失礼ながらそれほど長くその職についていないかも、という年齢の方だったが、いまだに「毎日、歴史を勉強している」という事実に、自分は衝撃を受けた。

考えてみれば、弓道で矢を射る所作で、矢の進む方向は後方の弦の位置に大きく左右される。陸上の投てき種目も投げる前の動作がその後の動きを大きく左右するのもやはり同じ。

歴史を知ることは、現在を知り、そして未来を考えるための重要な視点だと改めて強く思う。

今、この稿は日本と全く関係のなさそうなパレスチナのことを書いているが、よく考えると実は日本の、私たちの生活に関わってきていることもすごく多い。しかも情勢は今も動いている。

この大きなストーリーの中に自分たちも生きている。

だからそれを知り、考えることは決して無駄ではないと自分は思う。

分離壁の建設が続くパレスチナ自治区

第14章　パレスチナへ行こう

لنذهب إلى فلسطين

Palestine Bethlehem　فلسطين بيت لحم　パレスチナ　ベツレヘム

第14章　パレスチナ行こう

【1】　イスラエルの概要とヘブライ語

「なんて走りやすい道なんだ！」

早朝の高速道路をそう呟きながら地元FM局の軽快なトークを BGM に、プジョー3008 は軽いディーゼルエンジン音を響かせながら、力強くエルサレムへ向けて疾走していた。

広くまっすぐな国道1号

ここで、イスラエルという国を紹介したい

まずイスラエル(ヘブライ語 מדינת ישראל、アラビア語 دولة اسرائيل、英語 State of Israel)という国名は、旧約聖書、創世記の中のアブラハムの孫、ヤコブに与えられた人名由来と伝えられる。面積は 22,140 ㎢。日本の四国の面積が 18,800 ㎢なので、四国を一回り大きくした広さと考えればよい。人口は約 888 万人。神奈川県とほぼ同じ。よって「四国の土地に神奈川県人が住んでいる」状態である。

北部や沿岸部は緑も多く淡水湖もあるが、南部にはネゲブ砂漠という巨大な砂漠エリアがあり、人口は都市部に集中している。国民の内訳はユダヤ人が 75%、アラブ人が 20%、その他が 5%。「ユダヤ人＝ユダヤ教を信仰する人」であるので、宗教も 7 割強がユダヤ教、2 割がイスラム教である。ちなみにユダヤ人とアラブ人との交流だが、ほぼ「断絶」状態。ビジネス上での付き合いはするが、例えば 2015 年の婚姻の統計例でみれば、結婚した 58,000 組のうちユダヤ系とアラブ系のカップルはわずか 23 組だったという。

イスラエル国旗

国旗は白地に上下の青帯と六芒星。帯はユダヤ教の男性が礼拝の際に用いるタリートと呼ばれる肩掛けを表しており、六芒星は通称「ダビデの星」と呼ばれているが、史実上のダビデ王には直接関係なく、後世に考案されたものといわれる。

言語はヘブライ語、アラビア語、英語、ロシア語、イーディッシュ語などが使われている。中でも特筆すべきはヘブライ語 עִבְרִית だろう。

アフロアジア語族のセム語派に属するヘブライ語は、かつて古代語として使われていたが、ユダヤ人の離散と共に話し言葉としての役割を終え、文章上のみに残る言語として細々と存在していた。それを 19 世紀後半、ベンイェフダーというユダヤ人が 1800 年ぶりに話し言葉として現代に蘇らせた。消えかかった古代語が復活したのは世界で唯一であり、イスラエルが「世の中の例外の集まり」といわれる所以の一つである。

そして人口の 2 割のアラブ人はアラビア語 عربى を話す。よってアラブ人が多い東エルサレムや北部の都市ではアラビア語が日常的に使われているが、やはりユダヤとアラブの断絶はここにも顔を出す。2018 年 7 月、イスラエル議会はイスラエルの公用語をヘブライ語のみと決定し、アラビア語を否定する決議をした。2 割の話者がいる言語を公用語から外したのである。

このヘブライ語とアラビア語。水と油に感じるが、言語的には大きな共通点がある。それはどちらも RTL(Right-To-Left script)言語、つまり「右から左」に横書きする言語であるということ。RTL 言語は現代において絶対的に少数派。加えて数字表記は「左から右」なので、同じ行を読んでいても何度も前後するなど独自のルールも多く、欧米人のみならず多くの人にとって難易度は高いと感じる。

現在、RTL 系はアラビア語、ヘブライ語、ペルシア語　فارسى　（イラン周辺の言語）、ウルドゥー語　اردو　（パキスタンの国語でインドのヒンディー語に近い）、パシュトゥー語　پښتو　（ウルドゥー語と同系）、シンド語　سنڌي　（パキスタンにあるシンド州の公用語）などにとどまっているが、かつて古代の中国語、韓国語、そして日本語もそうであったように過去には一定の勢力もあった。

なお「右から左に書く」ということは、パソコン上でも逆の動きになり複雑なしくみになる。確か windows xp あたりで RTL 系言語の使用をする際は、コントロールパネルから言語オプションをインストールしないと表示すらできなかったと思う。しかし最近の OS、アプリは賢くて、アラビア語も、ヘブライ語など RTL 系文字が出てくるとちゃんとそこだけ左右逆の動きをする。また全世界で展開する web サービスの RTL への配慮も進み、世界的な多言語サイトはちゃんと左右逆表示になっている。

でもわれらが日本語もかなり特殊な言語で、かつて右から左書きをしていただけでなく、横書きも縦書きもでき、しかも縦書きは右から左に行が進んでいくなど、なんでもアリの不思議な言語であるのはまちがいない。

ではなぜ「右から左」が古代語に多くて、「左から右」が現代語に多いのか。それはかつての言語が石に文字を刻んでいたため、右手は文字を掘る石、左手は打ち付ける石とするとき、支える右手前から文字を刻んでいったからという説がある。(ちなみに「古代言語は石に刻んでいた」ことは文字の成立を考えるうえで大切で例えば、アルファベットの「大文字」の歴史は古く「小文字」は後に誕生したのだが、これは最初、文字は石で掘りやすいように直線が多く、その後、紙が出てきてから省スペースで書きやすい曲線を多用した小文字が生まれた。)

ヘブライ語が大書してある救急車

そして現代は左からの文字が多いというのもまた理由がある。もちろん、右利きが圧倒的に多いので、左から右への手の動きが自然、ということは重要だが、ある学者によると「私たちの脳は左から右への動きを好む傾向にある」のだそうだ。どうやら脳自体が「左から右への動き」が自然と感じるらしい。これがゲームの「スーパーマリオ」が世界的ヒットした理由にもなっていて、左から右へのスクロールが、心理的に安心するとのこと。だから、ヘブライ語の斜体（イタリック）が　נטוי בעברית　→　*נטוי בעברית*　右に傾くのは脳の好みで説明がつくらしい・・・。

【2】いざエルサレムへ

安心･快適な国道1号を疾走中

話を戻そう。イスラエルの中心空港、ベングリオン空港からエルサレムまで約 60km。高速道路 1 号線で 1 時間で着く距離である。

道は広くとても走りやすい。しかも路面、標識、ガードレールや信号に至るまで全てのインフラがお金をかけて丁寧に作ってある。これは、間違いなく先進国の道路である。

一般的に、先進国と新興国（発展途上国）の区別は、経済協力開発機構（Organisation for Economic Co-operation and Development：OECD）に加盟しているか否かで分類されることが多いが、イスラエルは中東で唯一、OECD の加盟国であり、名実ともに先進国である。(ただし現在の OECD 加盟国 37 か国の中には、メキシコやチリ、トルコといった新興国も入っているのですべてが先進国と一概には言えない部分もある。)

「うーーん、完全に普通の国だなぁ・・・。」

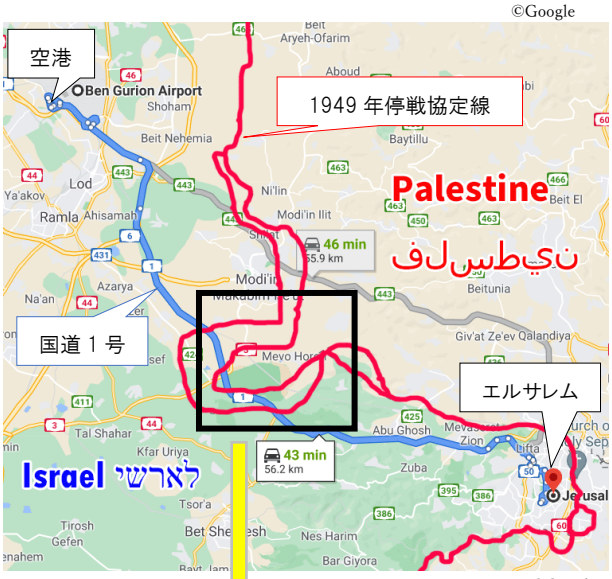
あまりの快適さに何かしらの違和感を感じていた。ここはアラブの人々を追い出して 4 度の中東戦争を戦って作った国のはず。アラブの国々はいまだに納得しておらず今だ武力衝突は頻発している・・。頭の中で山川出版の世界史の教科書の内容を思い出しているが、目の前はあまりにも普通の「危険を全く感じない」景色だった。おかげざまで多くの国を歩いていると、その場所の治安や、危険度は肌で感じるようになっている。国が栄えているか、貧しいか、上向きの発展を遂げているか、下向きなのか・・・ある程度は読めるようになっている。しかし、この風景からは紛争地帯であることは読み取れなかった。砂漠がベースとなっている土地ではあるが、人工的な灌漑によって緑は茂り、畑もあり、工業エリアも、商業エリアもありとかなり発展していることがわかる。あえて言えばヨーロッパの東部や南部、またはアメリカの郊外のような印象さえ感じた。

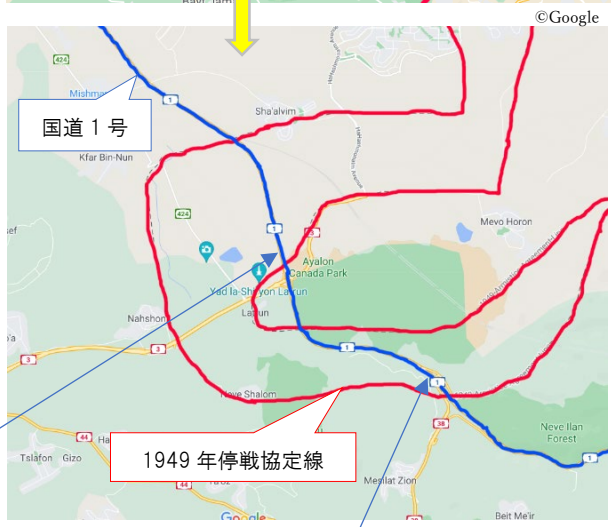
「なーんだ。どこにも危険な場所はないじゃんか・・」
どう考えても快適・安心な道路に見えた。

しかし、そこはイスラエル。この安全に見える道路にも、軍事的緊張は潜んでいた。

地図を見てもらうと分かるが、テルアビブからエルサレムまでは国道１号線で 56km、ほぼ南東に一直線である。だがそれとほぼ並行して 1949 年停戦協定線(Armistice Agreements Line)が走っている。これはイスラエル－アラブ戦争、いわゆる第一次中東戦争時の休戦協定線で、いわば暫定的な国境線である。第三次中東戦争後に変更・破棄された場所も多いが、この場所では現在でも軍事的緊張の最前線である。

イスラエルが建設する道路は、本来ならば軍事的境界線の内側に作るはずだが、なんとこの国道１号、その休戦協定線の一部をぶち破ってパレスチナ側に侵入して建設されている。ここだけがイスラエル側に一部飛び出して見えるが、イスラエルとすれば、２大都市を結ぶ高速道路にはじゃまな部分に感じたのかもしれない。





それで、実際に現地に行ってみた感想だが・・・。

なんと他と変わらないごく普通の高速道路だった。ちょうど森林・丘陵地帯の始まりで自然の起伏があるためかもしれないが、軍事境界線、国境線という感じは全くしなかった。途中に出てきた分岐点、道路標識なども単純に分岐を示すのみであり、特段緊張を示すものが何もなかった。

装甲軍団と旧跡の標識

パレスチナエリアだが、標識上何の変化もない

「え？これでいいの？」と思う暇もなく、巡航速度 100km/h で全く問題なく過ぎてしまった。

ただし、一つだけ、気になった小さ目な茶色の標識があった。上段には「Armored Corps」、下段は「Latrun」。上段の Armored Corps は日本語で言えば「装甲軍団」。簡単に言えば陸軍の中枢を占める戦車機動軍団である。

そして下段の「Latrun」ラトゥルンとは地名で、あの十字軍時代からの要塞の遺跡。オスマン軍との戦いにも使われた場所である。

地図で確認すると、ちょうど停戦協定線上に装甲軍団の大規模駐屯地を置き、隣には「戦車博物館」も併設されていた。このエリアが安定しているように見えるのは、この場所はイスラエルが強く実効支配しているから・・・というだけだということが分かった。

完全に領域を侵犯し、立派な高速道路という既成事実を作ったうえで、侵犯した軍事境界線の上に、さりげなく陸軍の基地を置き、常時戦力を見せつけるあたり、イスラエルの思惑が透けて見えた気がした・・・。

そうこうしているうちに、車は市街地へ。
時折、雨がぱらつく。
「どうしよう、雨具は何もない・・・」
と思ったが青空が見える瞬間もあり、あまり気にしなくて良いと判断。

エルサレム市内に入ってきた

車は様々な建物のそばを抜けていく。中には歴史あるものも多数で、趣のある街並みである。

さらに中心部に進むと巨大な城壁が見えてきた。
それは、1平方キロ四方にユダヤ教、キリスト教、イスラームの3つの聖地を抱える場所、12世紀から200年間にわたってキリスト教徒が攻め続けた場所、1947年に国連が“国連の管理地”と決めたのに、1967年の第三次中東戦争後イスラエルが占領をしてしまっている場所・・・。エルサレム旧市街、そのものであった。

おおお、エルサレム旧市街の城壁だ！

【1】　駐車したいけど、どこに停めればいいの？
「わ、満車だ！」
「どうしよう、どこに駐車場はあるんだろう？」
「路上駐車なんで絶対にできないし・・・」

エルサレム旧市街。駐車場を探していた。ここまでは問題なく来られたものの駐車場情報は得ていなかったためである。ようやく見つけたものも満車。日本に限らず観光地ならば、駐車場があるのは当たり前。しかし政情不安定で旧跡だらけのエルサレムに、車で遊びに来るバカは少ないらしく車がとめられそうな場所はなかった。それでもようやく「地方裁判所」の横に有料駐車場があるのを発見。おじさんに営業時間と料金を確認してとめることができた。
貴重品とカメラとパスポートを街歩き用バックに詰める。なぜ「パスポート」かというと、これからさらに別の国に入ろうと思っていたからである。
せっかく憧れのエルサレムに着いたというのにどこに行こうとしているのかと言えば、
その別の国とは「パレスチナ」。
ここと領有権を争っている自治政府支配地域である。

ようやく見つけた駐車場は満車・・・

イスラエルに着いたらまず「エルサレム」を見たいと思った。
しかし、いろいろ調べていくとエルサレムから、パレスチナ自治区へのバスが出ているとあった。しかも治安的に比較的安定していて、外国人観光客も多く訪れている場所らしい。
「あの戦争と対立のパレスチナに入れるの？」
「エルサレムは見たいけど、パレスチナに行けるならそちらも見たい！」。
詳しく調べると、イエスキリスト生誕の地とされるパレスチナの「ベツレヘム」はエルサレムから10kmしか離れておらず、30分程度バスに揺られていけばいいらしい。もちろん、途中に検問はあるが、パスポートをしっかり提示すれば大丈夫らしいという。
エルサレムはしっかり見たい。しかし、訪問の難易度とすればパレスチナ自治区の方が上であろう。パレスチ

ナに先に行ってみて、帰ってきてからエルサレムを見学すれば問題はないだろう。
よってまずパレスチナに行くことに決めた。

【3】バスに乗ろう

「すみません。ベツレヘム行きのバスがあると聞いたんですけど」
「ああ、それは 231 番だ。」
「え？ああそうなんですね。どこから乗れますか」
「ほら、そっちにあるよ。看板に番号が書いてあるから確認しな」
「わかりました！ありがとうございました」
そう言って、詰所のおじさんに礼を言ってその場を去り、231 番と書いてあるバスを探した・・。

アラブバス車内より。奥に見えるのがバスの事務所。

「ベツレヘム行きのバスがダマスカス門近くから出るらしい」という情報だけを頼りにバス停を探していると、門の前の広場に、小さな詰所と 5～6 台のバスが停まれる停留所を発見した。しかし何の看板もない。小さな事務室らしきものはあるが、例えは悪いが公園の公衆トイレのような小さく・シンプルなものだった。

状況から考えて、これが多分ベツレヘム行きのアラブ・バス乗り場なんだよな、とは思ったが、あまりの情報のなさに右往左往しながら教えられた方向に歩いていくと、確かに 231 番のバスがある。乗りながら若い運転手さんに声をかけた。

中古観光バスを使っているベツレヘム行きのバス車内

「ベツレヘム行きですか？」
「そうだよ」
「いくらですか？」
「21 シュケルだ」

そしてぶっきらぼうにレシートのようなチケットをもらった。

中国製の中古バスの車内はガラガラであった。

【4】アラブバス

はじめ空席ばかりだった車内は、あれよあれよという間に人が増え、8 割ほどですぐ発車。アナウンスもない。
少し不安になり、近くのおじさんに「このバス、ベツレヘム行きですよね」と聞くと「そうだよ」と返ってきた。そして「行くときは国境チェックはないけど、帰ってくるときはチェックされるよ」
「パスポートと入国カードは持ってきたかい？」などといろいろなことを教えてくれた。

バスはエルサレム旧市街の外壁沿いを進む。生活路線なので、停留所にも丁寧に止まりながら進んでいった。おばあさんがちょっとした荷物を抱え乗り込む姿、おしゃれな学生が荷物を抱え元気に乗る姿。当たり前だが、エルサレムの普通の人々の普通の毎日がそこにあった。

窓の外は、先ほどぽつぽつとだけ降っていた雨が強くなり始めた。
「・・・こんな雨の中、歩けないよな・・・・」

雨具を何一つ用意してこなかった自分は、雨が降りやむことを祈りながら窓外を見つめた。日本を出るとき、雨具を入れようと迷ったのだが、個人旅行の鉄則の“1 個でも荷物は少なく、重さは 1g でも軽く”と考え「どうしても必要ならば現地で買えばいいや」と、結局何も持参してこなかった。

「　パレスチナでも・・傘ぐらい売っているだろう・・・・」
基本的に楽天的な性格な自分はそう信じてみることにした。

バスは低い音を立ててゆっくりと進む。
イスラエルは基本的に砂漠地帯なので、人工的な建物や道路以外は岩肌が露出しているが、地面の高低差が激しく、丘や坂を上り下りしながらバスはゆっくりと進んでいった。

雨で見にくいが、ここが検問所。実質的な国境である

そして、突然。開けた場所に出た。
広い道路。周辺になにもない広い空間。そしてその先にそびえる巨大で威圧的な施設群。一見料金所にも見えるこれは、そうボーダー、実質的な国境検問所である。雨の中だが、ライフルを背負った若い兵士が検問をしている姿が見えた。
しかしこのバスは止まるそぶりも見せず、むしろ勢いをつけて、そこの側道を通過していった。隣席のおじさんが教えてくれたように、検問をするのは反対車線、つまりパレスチナからイスラエルに入るときだけであり、イスラエルから脱出する際はノーチェックなのだろう。

【5】パレスチナ入国？
パレスチナに入ったら風景が一変する・・・と思ったがそうでもなかった。車窓からは同じような建物や道が見えていた。しかし、よく見るとやはり細かなところはみんな違っていることに気づいた。最大の違いはヘブライ語の看板が消え、目に入る文字は全てアラビア語であること。そして家も車もインフラも、やや質が落ち、数段ランク下がったようなものが多くなった。

文字の持つ力は偉大である。自然の景色は大きく変わらないのに目に入る文字が全てアラビア語になっているインパクトは大きく、確実に“異国”に入ったことを訴えかける。

「あ、車のナンバーが違う！」
パレスチナが全く別の政府なんだと認識させられたのは、車のナンバープレートである。車好きの自分はナンバーもすぐ気になってしまうが、黄色のイスラエルナンバーとは違い、パレスチナを走っている車は白地にアラビア語のパレスチナナンバーだった。ということは法律、登録、税金など車に関する行政的な扱いが全て変わっている、つまり政府が違うことを明確に意味している。

パレスチナ自治区の車のナンバープレート

ふと、手にしたチケットを見つめた。通称「アラブバス」と呼ばれるこのバス。英語で書かれていたのは「South Buses Co.」と 1 語だけであとは全てアラビア語である。イスラエル国内にあるはずの会社なのに、公用語でもない言葉だけで書くことに、この会社の強い意志と思いを感じてしまった。同時にこのバスの出発地に看板や説明版がないかも理解した気がした。イスラエル当局に気を使っているか、または禁止されているかまたは反発して

あえて何も書かないか・・。そもそもこのバスの外観は白地に青の線のストライプ。完全にイスラエル国旗と同じ塗装だが、通称名は“アラブバス”。外見だけはイスラエルを装っているが、実質はヘブライ語を一切使わないアラブ世界のバスである。ユダヤとアラブの争いがこんなところにも表れているのだろう。

ほぼアラビア語のみのベツレヘム行きバスチケット

バスの外の雨はさらに激しくなる。
外がぼんやりしか見えないほどの土砂降りになっていた。
「うわー。やだなぁ」
日本の気象庁の表現を用いれば、「強い雨」（1 時間当たりの雨量が 20mm 以上、30mm 未満）ではなく、その一段上の「激しい雨」（1 時間当たりの雨量が 30mm 以上、50mm 未満）、いわゆる「バケツをひっくり返したような雨」であり、傘を持っていてもすぐにずぶぬれになるほどの雨。

沿道には荒廃した土地や住宅が多い中で、商店や飲食店もあるが、その数は少ない。そして、まだ朝 9 時前である。時折ある商店も開いている店は皆無である。つまり、傘を買おうにもそのチャンスはゼロに等しかった。

大雨のパレスチナ･ベツレヘムの街並み

「・・・こんな時に外に出るのは絶対に嫌だな」
「・・・まだ、着きませんように・・・」
あれほど、「パレスチナ問題」だの「アラブの大義」だの「歴史問題」だの気にしていたはずなのに、雨しか気にしていない自分がいた。

大きな通りで唐突にバスは停まった。
乗客が一斉に降り始める。

「え？ここ？」
「ここでいいの？」
「帰りはどこから乗ればいいの？」
戸惑っていたのは、自分と同じ外国人観光客たち。
その疑問の矛先は運転手へむかった。

「ここが終着だって言っているだろ！」
「エルサレム行のバスはここから出るよ！」
「中心部はここからまっすぐ歩いて左だよ！」
運転手は少し怒りながらそう叫んでいた。でもおかげで帰りの方法も中心部の方角も分かった。
雨の勢いは少し収まったが、相変わらず雨具なしで歩けないほどの強さである。しかしないものはないので持っていたタオルを巻き、少しでも雨宿りができる場所へ行こうと歩き出したとき、突然、
「ベツレヘムの中心部、行くよね？」
「聖誕教会まですぐだよ」

市内各所でみられるタクシー軍団の車列

「大雨だから大変だよ」
大雨の中、そんな声を一斉に掛けられた。何事かと思ったら、黄色いタクシー運転手の強引な客引きであった。タクシー運転手は傘を片手にバスを降りた外国人観光客に徹底的に声をかけ続けていた。
　少し前の途上国ではよく見られた観光客相手の客引きだが、当然ながら彼らは 1000%ボッタくる。自分も旅人生の中でこうした強引な勧誘に負けてしまったことが、100 回中 10 回ほどあるが、毎回必ず大金を要求され、後悔ばかりしている。そういえば、外国の方が書いていたベツレヘムのブログで「史上最悪のタクシー勧誘」「絶対にボッタくるから乗ってはいけない」と書いてあったことを思い出した。こういうのは国が落ち着いてくると評判の悪化を避け、規制がかかり減少するのだが、政情不安な途上国の観光地にはこうした悪質な客引きが存在する。そして、ベツレヘムのタクシーの客引きは、今時珍しいほど強引で、陰湿で、強力なものだった。

「結構です」
「イヤです」
「歩いてきます」
「そこには行きません」
　どんなにきっぱり断っても、彼らは食い下がってくる。

あの手この手で外国人観光客を勧誘するタクシードライバーたち

「こんな雨の中、歩くの大変だぞ」
「オレのいうことは絶対安心だ、間違いない」
「オレを信用しろよ」
「なんでお前は、俺を信用しないのか？」
こちらの口調も厳しくなると、相手も厳しくなる。そしていつの間にか大声で罵りあっていた。
　彼らにとってはどんな話術を使っても、どんな嫌われ方をしても、カモが捕まれば確実に生活の足しになるので、必死なのはよくわかる。でもだからと言って、自分がカモになるのはやはり嫌だった。

　でも・・・。
　日本の日常では絶対にぶつけ合わない感情の衝突に、久しぶりに心が揺れ動いたことを感じた。大の大人同士が、本気で文句を言いあい、感情をぶつけ合う幼稚な口喧嘩である。
　しかし、好き放題に言い合っていると、不思議と一種の爽快さも感じ始めていた。「ベールに包むことなく感情的に戦う気持ちよさ」というべきか。それはもしかして動物的な感情なのかもしれない。

ふいに何かが吹っ切れたような気がした。
「おいおい、待て待て」
「雨の中だぞ！」
悪質勧誘タクシー軍団の声を背に、僕は走り出した。

「濡れたっていいや」
「雨に濡れるのも、楽しいかも」

「相手に遠慮することなく、好きなことを好きに怒鳴る」ことが心の鎖を少し解き、軽くしてくれた。
ベツレヘムの激しい雨の中。大粒の雨は止む気配がなかったが、自分の心は爽やかに晴れていた。

朝の活動が始まった雨上がりのベツレヘムの街

第15章　雨のパレスチナ

فلسطين في المطر

Palestine Bethlehem　فلسطين بيت لحم　パレスチナ　ベツレヘム

第 15 章　雨のパレスチナ

【1】 大雨と靴

大雨で路面も歩道も、滝のような勢いで水が迫ってくる

大雨の中を生身の体で本気で走ったのはいつぶりだろうか？カメラやパスポートは何重もの内袋の中で無傷だが、全身ずぶぬれである。

特に不快だったのは、ごみが浮いている泥水にどっぷり突っ込んでしまった靴の感触だった。

日本の大雨と海外の大雨の最大の違いは“足元”だと思う。日本人は普通意識しないが、日本の道はとにかく清潔。もともとゴミのない環境に加え、排水の仕組みがあるなど構造的に優れており、歩道と車道の間のグレーチング（鉄製の網のようなフタ）や地中の排水桝、透水舗装などによって路上や路肩に大量に水が溜まることはない。しかし海外、特に途上国は排水機能がゼロのため大雨で路面が川になる。歩道も壊れていて土や基盤が露出し、ゴミや生活排水とともに「いろいろなものが、たくさん混ざっている汚水」が流れて更に歩行は困難になる。

ベツレヘムの道路もそれなりに荒れていた。よって大雨の中を走った際、バランスを崩し「バシャン」と、汚水の中に勢いよく、そしてどっぷりと両足を浸けてしまったのだ。

坂が多いベツレヘム。階段になっている歩道には様々な漂流物や水たまりがある

ただし、今履いているのは靴擦れの心配や強盗に襲われる可能性も低く、現地で捨てても良いものという「捨てる寸前の旅行用スニーカー」なので、どこかで替えの靴を購入すればいいだけだが、この状態ではどうしようもない。

泥水にどっぷりハマった足元は、靴下を履いているのに中でヌルヌルし、いかにも汚く、すぐにでも脱ぎたかったが、どうしようもない。

ようやく軒先に屋根がある商店を見つけ、雨宿りをさせてもらった。ふと我に返ると聞こえるのは雨音だけ。まだ 9 時前の街は静まり返っており、空いている店はなかった。

「・・・しばらくここにいるしかないかな・・・」

「せめて傘でもあれば・・・」

豪雨の音を聞きながら降りしきる雨を見ていた。

「ガンガン・・・」

突然、近くの路地から、若い青年が何かを持ち出して準備を始めた。露天商らしい。

「・・・こんにちは・・。この近くに傘を売っている店はありますか？」

誰かと話したかった自分は、彼に声をかけていた。

「まだ早いからね。どこも空いてないよ」と

ひげもじゃの笑顔は答えた。そして

「多分・・すぐ晴れるよ」

そう言い残してまたどこかに行ってしまった。

雨脚は強く、止みそうな雰囲気はなかったが、彼の言葉を信じ、ちょっとずつ雨の中を進むことにした。

「あ・・・。ホントに遠くの空が明るくなってきたかも・・」

起伏が激しいベツレヘムの街中を歩いていく中、空が明るくなっていることを感じた。

彼の言う通り、確かに空模様は晴れに向かっていた。

雨が上がり始めたベツレヘムの商業地域。雨でゴミもさらに散乱

【2】パレスチナ概要

ここでパレスチナの紹介をしたい。ここを国家と言って良いのかかなり微妙だが、それも含め少し書いてみたい。

赤がパレスチナ支配地域。均一に見えるが実際は虫食い状態

パレスチナ自治区（دولة فلسطين：アラビア語, State of Palestine：英語）は、中東パレスチナ地域のうち、ヨルダンに接するヨルダン川西岸地区(West Bank)とエジプトに接するガザ地区(GIZA Strip)、及び東エルサレムからなるパレスチナ人の自治エリアである。面積は 6,020 km²で 三重県とほぼ同じ。国土の 94%がヨルダン川西岸地区で、残り 6%がガザ地区である。人口は約 500 万人弱で西岸地区が約 300 万人、ガザ地区が約 200 万人弱と言われている。

ガザ地区はエジプトに国境を接し、地中海にも面している。長さ 50km、幅 5～8km という種子島と同じ大きさの土地だが、そこに 200 万人が住んでいる。土地が狭い上に人が多く生活は過酷だそうだ。せめてインフラが整っていればいいが、イスラエルの武力攻撃によりかなりの機能を失っており、例えば発電所不足で電力の供給は 1 日 4 時間程度。地下水の塩水化や下水処理施設の機能不全で、ガザで供給される水の 95%が汚染されており、病気の 3 割は水が原因だとされる。海にも面しているが下水処理ができていないので、ガザ沿岸は遊泳禁止レベルに汚染されている。そもそもパレスチナ人には基本的に移動の自由はない。別名「天井がない監獄」とも呼ばれている所以である。

それに対し、ヨルダン川西岸エリアはまだ十分な土地がある・・ように見えるが、実際はイスラエルが勝手に街と大きな道路をつくり土地を奪っている。地図上で見るとヨルダン川西岸地区にはパレスチナ人のための広い土地があるように見えるが、イスラエルが「入植地」と称し、都市と道路をつくっているのでパレスチナ人が住める場所は虫食いのまだら模様になってしまっている。

国連人権理事会で 2021 年に報告されたデータでは東エルサレムとヨルダン川西岸地区に３００近くの入植地があり、６８万人を超えるイスラエル人の入植者が住んでいるという・・・。

政府機関は、パレスチナ解放機構（PLO）が母体となって設立された「パレスチナ自治政府」で、1995 年の暫定自治拡大合意、1996 年に行われた立法評議会選挙によって正式に発足したものである。首都は、公式上、東エルサレム(East Jerusalem. القدس الشرقية)だがイスラエルが支配しているため、実質はラマッラ（Ramallah. رام الله)になっている（日本の外交窓口、対パレスチナ暫定自治政府日本国政府代表事務所もラマッラにある）。

パレスチナの国旗

問題だらけのパレスチナだが、まず最大の問題は、「国なのかどうか」であろう。「国家」という定義は多数あるが、「それを国家として承認する国があるか」が大切。お互いを国家として承認し、条約を結び、大使を交換し、大使館を設ける・・・。こういう国が増えていけば“国家”と言えるのだが、当初パレスチナを国家として承認する国はなかった。しかし 1988 年にパレスチナの独立宣言に端を発し、承認国が増えてきた。近いところは 2010 年 12 月にはブラジル、アルゼンチン、ウルグアイが承認。2012 年 11 月 29 日には国連総会において「オブザーバー組織」から「オブザーバー国家」に格上され、国連では「国家」の扱いを受けることになった。そして 2013 年 1 月 3 日。この国の政府は“パレスチナ国”への改名を宣言。2019 年現在、国際連合加盟国 193 ヶ国中、137 ヶ国が国家として承認をしている。

こうやってみると、この地域は着実に国として歩んでいるが、実は大きな落とし穴がある。なんと日本を含む G7 はパレスチナを国として承認していない。正確に言えばスウェーデンを除く EU 諸国ですら承認していない。世界経済を仕切っている先進主要国は非承認のままなのである。その理由は簡単でパレスチナの最大敵対国はイスラエル。このイスラエルの背後にいるのがアメリカ。そしてアメリカの影響を大きく受ける（旧西側）先進国はパレスチナの対立国になってしまっている、という構図である。世界の潮流はパレスチナ承認に向かっている

のに、力のある国々はそれを認めない。こんなところにも一筋縄でいかないこの問題の根深さを感じる。

【3】ユネスコとパレスチナ

そして自分がライフワークとしている世界遺産に絡んでも特殊な事情があった。先述したようにイスラエル、そしてアメリカの影響を受けた先進国はパレスチナの承認には非常に消極的だが 2011 年秋、事態が動いた。

9 月 23 日。パレスチナは国際連合への加盟を申請したが、なんと 10 月 31 日には国際連合教育科学文化機関(UNESCO：United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)の加盟国として承認されたのである。これは非常に大きな第一歩であった。

この時ユネスコでは、パレスチナの加盟が激論と共に審議されたという。しかし当然のごとくイスラエルを先鋒として、アメリカは強く反対。しかしアラブ諸国をはじめ、反イスラエル、反アメリカ勢力の国々が強く推した。そして採択の結果、加盟賛成が 107 票、反対 14 票、棄権 52 票で、国としての正式加盟を承認したという。すると、アメリカはこの決議案に強く反対し、その対抗措置として、ユネスコの分担金負担拒否、そして 2017 年 10 月にはユネスコ脱退表明をし、2018 年に脱退後、オブザーバー参加国になっている。それまで分担金を２０％以上負担する最大拠出国だったが、その後、日本が最大拠出国になった。ちなみにアメリカがユネスコを脱退するのは 2 回目。1984 年にジャーナリズムに関する意見の衝突で脱退したが 2003 年には復帰した。今回はパレスチナ問題に絡んでの脱退であるので、イスラエルも 2017 年 10 月に脱退を表明している。

ちなみにわが日本だが、2011 年のパレスチナのユネスコ加盟投票は、「棄権」をした 52 国に入っている。アラブの国との関係から賛成した方がいいけど、アメリカの手前、反対へも無視できない。結果的に両者の顔を立てて「棄権」という判断を下した。アメリカの意を汲みたいが、アラブ諸国も大切にしたいというある意味日本らしいが、少々ズルい気もするのは自分だけか。

街中で見かけたパレスチナの国旗。緑・黒・白・赤の汎アラブ色

【3】通貨と経済力

パレスチナの苦境を表している別の指標が経済力。わかりやすいように通貨で見ていく。国連加盟国の 2/3 が承認しているのにここには独自通貨がない。正確に言えば中央銀行がない。パレスチナ通貨局 Palestine Monetary Authority は置かれているが、公定歩合の自主権がなく、為替相場にも介入できないなど権限が限られている。またパレスチナの銀行はイスラエルの手形交換所に直接アクセスできず、イスラエルの銀行に代行依頼するしかないなど、まともな経済活動のための基盤がない。日本に住んでいれば「中央銀行がない」＝「日本円が存在しない」なんてことは想像すらつかないが、経済が破綻している国では、ままある話で、例えばエクアドルやジンバブエ、そしてアメリカの影響が強すぎるパナマも国内通貨は「アメリカドル」になっている。よって仮にパレスチナの通貨がアメリカドルになれば経済活動範囲は格段に広がるが、宿敵イスラエルの背後にいるアメリカがパレスチナを経済的に支える事態は絶対にありえない。

米ドルに対抗できる通貨としてユーロを採用するという方法もある。実際に非 EU 加盟国であってもモナコ、アンドラ、モンテネグロ、コソボなどの法定通貨はユーロだが、ここと EU は縁が薄く、ほとんどの EU 諸国がパレスチナを承認すらしていないのでこれも無理であろう。

ではかつての宗主国イギリスのポンドで国を回すという方法もあるかもしれない。実際に以前はパレスチナ・ポンドを用いていたうえ、現在もイギリス海外県ではフォークランド諸島ポンド、セントヘレナ・ポンドを発行するなど自国絡みの通貨を使うのはお手の物。しかしイギリスが統治していたのははるか昔で第二次世界大戦、4 度の中東戦争を経た現在のパレスチナと経済関係を構築するのは困難だろう。

多分、一番現実的な解決方法は、隣国であり多数のパレスチナ難民が流れ込んでいるヨルダンの援助を受けヨルダン・ディナールで経済を回していく方法ではないだろうか。これならば民族的にも地理的にも最適解だろう。

しかしヨルダンはアラブの国でありながら非産油国で、経済基盤が弱い。わずかな農産物や、鉱物輸出以外に主産業がなく自身も援助に頼っているぐらいなので他国を支える余力はない。ましてやパレスチナに加勢するということは、経済大国イスラエルに歯向かうことになり、デメリットは計り知れず、そのリスクを冒してまでもパレスチナを助けないだろう。

もっと斬新的な手法もある。新しい時代・新しい技術のアプローチとして、例えばビットコインのような暗号通貨（仮想通貨）を使う方法もある。「暗号通貨を国の法定通貨にするなんて荒唐無稽だ！」と思うかもしれないが現実はちがう。なんと 2021 年 6 月、中米エルサルバドルは「法定通貨をビットコインにする」と発表し、経済界の大きな話題になった。

これならばしがらみは一切なくなる。でも暗号通貨は投機的な資産運用の手段として用いられることも多く、安定性は最悪で経済政策としては博打に近い。実際、2021 年前半はコロナ禍で余剰になった資金がビットコイン市場に流れ込み高値を付けていたが、アメリカのテスラが「ビットコインでの支払いは受け付けない」と表明した途端に暴落してしまった。

・・と、いろいろ考えてきたが、何をとってもパレスチナにとっては前途多難であることは間違いない。

加えて散発的に起こる軍事衝突を理由としたイスラエルの経済封鎖や移動制限など、マイナスの材料だらけで失業率は 30%を超えているという（2010）。よって、あのタクシー運転手も必死だったわけである・・・。

「だったら運転手に高額なチップだと思って払ってあげればいいじゃん」とも思う。しかし、彼に多額のお金を払ったところで、この問題が解決するわけでもない。むしろ彼は味をしめて次の旅行者を被害者にしてしまう。

・・・結局、何をどう行動すればいいのか、いつも悩みに悩んでしまうダメな自分である。

国が存在しないのに先に紙幣を作った「アルツァフ共和国ドラム紙幣」

そうそう、話のついでに「国の独立と通貨」に関して、別の話題を一つしたい。

世界には「国」として認められなくても、先に通貨を発行し、独立の既成事実をつくろうとしている地域もある。ナゴルノ・カラバフ（アルメニア語: Լեռնային Ղարաբաղ Leṙnayin Ġarabaġ，アゼルバイジャン語: Dağlıq Qarabağ）がそれで、このカスピ海に近いコーカサス地方の土地はアゼルバイジャンとアルメニアで領有権を争ってきた。ナゴルノ・カラバフは所属としてはアゼルバイジャン内にあるが、その住民の 9 割がアルメニア系であり、アゼルバイジャンからの分離独立を求め争っている。ここも「イスラエルーパレスチナ問題」のように、民族と歴史と、背後にいる大国の思惑が絡んで、かねてから揺れに揺れている地域で 1991 年 9 月に「アルツァフ共和国」としてアゼルバイジャンからの独立を宣言したり、アルツァフドラム通貨 rtsakh dram を発行したりした。しかし結局 2020 年 9 月～10 月にかけて大規模な軍事衝突（2020 年ナゴルノ・カラバフ紛争）が勃発。

「アルメニア軍（背後にはロシア+クルド人）」vs「アゼルバイジャン軍(背後にはトルコ+シリア+イスラエル)」の軍事衝突の結果、アゼルバイジャン側が勝利し、アルツァフ共和国も事実上消滅してしまった。このアルツァフドラム紙幣も手に入れてみたが、アゼルバイジャン軍に破壊されてしまったというガザンチェツォツ大聖堂の印刷された紙幣を見ると、彼らの独立への思いの強さと、その困難さを感じなんとも言えない気持ちになる。

雨が上がり始めた異国情緒抜群なベツレヘム市街。アラビア語の看板と落書きも良い雰囲気

【4】ベツレヘムの街

話をパレスチナに戻そう。今回訪問している都市はベツレヘム(بيت لحم,Bethlehem)。キリスト教徒ならもちろん、そうでない人も一度は耳にしたことがあるかもしれない。「イエス・キリストの生誕地」とされる街である。例えば、クリスマスツリーの頂点に星を飾るが、あれの一般名詞は「ベツレヘムの星」である。

人口は３万人。エルサレムから 10km しか離れていない砂漠の丘にある小都市だが、その位置関係と歴史的価値により、支配者は現近代だけでも、オスマン帝国→イギリス（第一世界大戦）→ヨルダン（第一次中東戦争）→イスラエル（第三次中東戦争）→パレスチナ自治政府と変遷していった。そうそう、ここは、ユダヤの聖書によるとヘブライ王国第２代の王ダビデに生誕地にもなっており、ユダヤ人にとっても大切な街なのである。現在は観光が主産業になっている。軍事的緊張がなければ、歴史的情緒あふれる素敵な田舎町である。バスを降りたのはヘブロン通り Hebron Road というらしい。

雨脚が弱くなってきた頃合いを見計らって、中心部を目指していった。

それにしても・・。

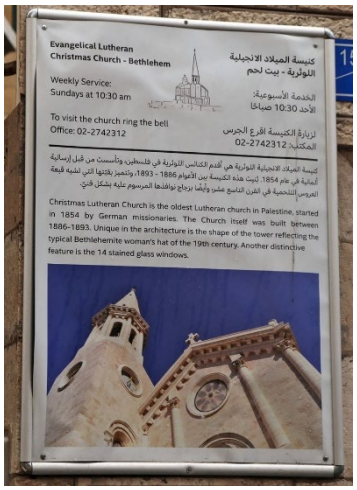
見るもの全てを写真に切り取りたいほど魅惑な風景だった。

「こういう風景をフォトジェニックっていうんだろうな・・・」

そう呟きながら大きなカメラを出して、写真を撮りながら歩いて行った。

商業地区にある、大きな塔が目立つ福音ルーテルクリスマス教会

細い路地を歩いていくと、Evangelical Lutheran Christmas Church　という教会が出てきた。日本語で「福音ルーテル クリスマス教会」とでもいえようか？「Lutheran：ルーテル」とは、世界史の教科書的に言うと「ルター派」のこと。いわゆるプロテスタントの教会である。カトリックとプロテスタントの違いについて語るとまた長くなるが、簡単に言えばローマ教皇を特別な存在とするカトリックと、「神とそれを信じる自分」を信仰の中心にするプロテスタントと、言えようか。立派なステンドグラスも、豪華な教会も、聖母マリアすら必要なく、ただ「聖書の言葉とそれを信仰している自分」を大切にしている。聖職者も地位がある神父さんではなく、私たちと同じ立場の牧師さんになる。教会建物も祭壇も祭壇の十字架もシンプルで、そこにイエス・キリストが一緒に掘られていることもない。



アラビア語のみならず英語の解説がうれしい

「ミサは　日曜日 10：30 です。クリスマス教会はパレスチナで最も古いルター派の教会です。1854 年、ドイツ人修道士によってこの地にひらかれました。この教会自体の実際の建設は 1886 年から 1893 年にかけてです。特徴的な建築としては、19 世紀のベツレヘム様式の女性帽子型の塔があることと、14 枚のステンドグラスがあることです。」

そんなイメージのあるプロテスタントなのに、こんなに立派な教会があることにちょっと驚きを覚えた。

掲げられている看板にはこう書いてあった。

なるほど。確かにステンドグラスや高い塔があるのは非常に珍しいと思う。この教会の設立の1854年と言えばオスマン帝国占領下の時代である。スエズ運河の開通が1869年だからかなり現代に近くなってからできた歴史の浅い教会なのだろう。

クリスマスのお知らせ

別の張り紙にはこうあった。

「12月24日　午後5時　地域の方向けのクリスマスサービス（招待券が必要）
午後7時30分　平和のための吹奏楽ミュージカル”来て聴いて歌おう”「どなたでも歓迎」
午後10時　クリスマスイブサービス「英語で賛美歌とキャロル」「どなたでも歓迎」
25日　午前10時30分　アラブのクリスマスモーニングサービス「どなたでも歓迎」

・・・普通過ぎる内容に拍子抜けをすると同時にほっこりもする。

どんな場所であろうが、人々の日常はやはりいつもの通り過ぎていくのだろう。

【5】路地をいく

いろいろとツッコみたい落書きと配電盤

「パウロ6世通り」という名の細い路地を進む。雨はどんどん小降りになっており、もう心配はしなくてもよさそうだ。

とにかく見るものすべてが新鮮で、急に異世界に放り込まれたような気になる。壁に書かれたアラビア語で書かれた落書きも、壊れた看板も、汚いドアもみんな興味深い。おまけに表面の埃を雨で洗い流してもらったので、汚れながらもキラキラ輝いている姿が美しかった。社会的インフラの適当さもおもしろい。例えば電気配線だが、家庭用への引き込み口も素人の配線そのものである。イスラエルと同じならば220V 50Hzが来ているはずだが、「こんな適当な工事では停電が頻発するぞ」と思わせるいい加減さも、途上国のよくある姿である。

走っている車も面白い。ドイツのフォルクスワーゲン、フランスのプジョーやシトロエン、スペインのシュコダなどのヨーロッパ勢がほとんどだが、新しいものは韓国のヒュンダイもあった。日本車はトヨタ、マツダなどもあったがかなり少ない。ここでのポイントは以上の全自動車メーカーの国籍がパレスチナを非承認ということである。アジアはほとんど承認国で非承認はシンガポール、ミャンマー、韓国、そして日本だけであるのにその非承認の2国だけが車を輸出していることになる。自動車のメーカーは非承認であっても、自動車輸入は流通の話であり問題にはならない・・ということか。

プジョー505とヒュンダイ Tucson

天気はさらに回復してくる。空には青空も見え始めた。降り出したときも急だったが、雨上がりも急速である。そして人々の動きも始まった。路地に人が出てくると同時に、商店は開店準備をはじめている。

街は急速に目覚めたようだ。

石の球体と、星をかたどった街中のオブジェ

路地が広くなっている広場の真ん中に球体の石のオブジェがあった。詳しくは不明だがポイントは下の星だと感じた。

「ベツレヘムの星かなぁ・・・」

少し立ち止まってその謎を解こうとしていたら香ばしい香

美味しそうな香りが漂う･･･

りが立ち込めてきた。

振り向くと、店先でローストチキンを焼き始めていた。世界どこにいってもチキンを禁止している国・宗教はなく、それぞれの調理法で食べられているが、ここのものもとても美味しそうである。その隣には、パンが入ったケースも出ていた。アラブ世界で欠かせないパン、ホブズخبز عرب Hobz である。アラブの薄パンといったら、これ、というくらい定番中の定番で、レストランでてくるだけでなく、スーパーでも露店でもどこでも売っている。場所によって多少異なるが、外はカチカチで中は柔らかめのが基本らしい。日本のパンとはちがいこれ自身がそれほど美味で食感が良いわけではないので、初めて食べた時は、あまり好まなかった。しかし、ムタバル(冷製デッィップ)やフムス（豆のペースト）といったアラブの伝統的な料理にディップして食べると実においしい。

アラブの薄いパン　ホブス Hobz خبز عرب

それらの香りで

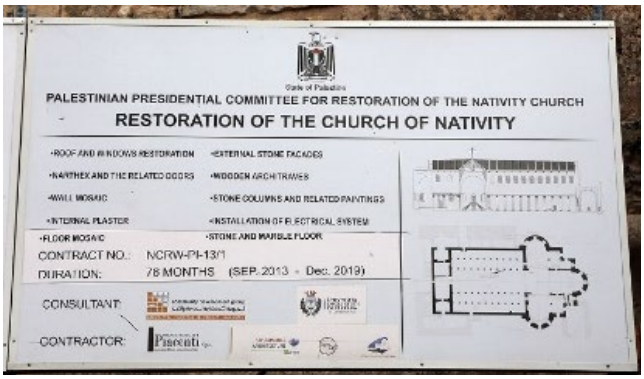
「そういえば、朝食を食べてないや」

昨晩の夜中の２時に無理やり食べた機内食依頼、何も口にしていないことを思い出し、店のおじさんに声をかけてみたが、まだ開店準備中とのことで、先を急ぐことにした。

【6】聖誕教会

世界最古の教会といわれる聖誕教会

「現在のベツレヘムは観光が主産業」と先述したが、世界中から人々を集める存在がここ、聖誕教会(降誕教会) Church of the Nativity كنيسة المهد である。ここを訪れる旅行者の最終目的地はこの場所！と断言できるほど歴史的価値の非常に高い施設である。ここはなんとイエス・キリストの生誕の地、そして世界最古の教会である。現在はカトリック、ギリシャ正教会、アルメニア使徒教会の共同管理下にあるが、およそキリスト教に興味がある人ならば必ず知っているあの、“ベツレヘムのイエス・キリストが生まれた飼い葉桶があった場所”がここである。建立は 325 年ローマ帝国のコンスタンティヌス大帝（在位 306～310 副帝、310～337 正帝)。そしてその 200 年後のユスティニアヌス帝が大規模改修をしているとのこと。ざっくり言って 1700 年前の教会である。



解説版が英語。外国人の訪問を前提にしているようである

「謙虚の門」といわれる、メインエントランス

チケットオフィスを探したが、そんなものはない。案内板はあったが、値段のことは何も書いていない。無料のようである。では入り口は？と探したが、それが分からない。ただし、人々の動きをみていたらみんな小さなドアを目指しそこ

に入っていった。どうやらその小さなドアが入り口のようである。

聞くと、高さ 120cm ほどの小さな入り口は通称「謙虚の門」と呼ばれ、「神の前で参拝者は謙虚な気持ちになって・・・」との意味があるとのこと。確かに・・頭を物理的に下げることにより、神の世界を感じさせることは意味があるかもしれない。しかし、よく見ると周りの石壁には大きな入り口のあともあり、外敵に備えて後日あえて小さな入り口をつくったのかもしれないと感じた。

独特な雰囲気の教会内部

内部は今まで見てきたどんな教会とも違う独特な感じである。古さももちろんあるが、不思議なのはその内部構造だった。高い天井の細く長い身廊には立派な柱が並ぶが、天井は木造の梁がむき出しであり、一見木造にも見える。そして天井からは長いワイヤーがぶら下がってその下には様々なランプがぶら下がっている。きっと何かの意味があるのだろう。例えば確かキリスト教、特にカトリックでは聖体が安置されている場所に、昼夜を問わず「聖体ランプ」と呼ばれる赤い光が灯されている。聖書（確か「出エジプト記」）の中で神がモーセに自身の存在を常に伝えるために、赤い灯火をともすように指示し、それをカトリックの教会は今も守っていると聞いた気がする。特にここは 1700 年も続いている教会。探っていけば、他にいくらでもトピックがあるに違いない。

一人旅の気楽さは自由に、好きなように動けるという良さはあるが、こういった名所旧跡となると、だれかから解説を聞きたいと思う。自分は自分で情報を調べることが好きな人間だが、やはり地元のガイドさんの知識にはかなわない。

「解説を聞きたいな・・・」　そんなことを考えながら周りを見回すと、いくつかのグループがガイドの説明を聞いていた。思わず、そっと混ざって、聞き耳を立てた。

「このモザイク画は、歴史上、非常に貴重なもので、ローマ帝国コンスタンティヌス大帝のころ、つまりこの教会の創建当時のものと考えられています。この緻密な絵柄をぜひよく見てください」

「イスラム勢力に支配されたこともあるのですが、イエスはイスラム教徒にとっても預言者であり、また、このモザイクに中東の賢者である東方三博士が描かれていたことから破壊を免れた、と言われています」

2000 年近く前なのに保存状態最高の床のモザイク画

・・と、若いガイドは熱っぽく語っていた。聴いていたのはフランス人らしい集団。フランスもカトリックが強い国なので、みんなで来たのかもしれない。

ふと、教会の先を見ると、別のグループが何かに並んでいた。今度はその集団に近寄るとインド人らしいグループだった。皆、何か待っている様子である。先頭を見ると地下への階段が見えた。

イエス・キリスト生誕の「生誕の洞窟」に向かう人々

「そうか、地下に何かあるんだな」

と、自分も最後尾に並んだ。

ここでもガイドが大きな声を張り上げ説明をしていた。

「いよいよキリスト生誕の場所、生誕の洞窟へ行きます」

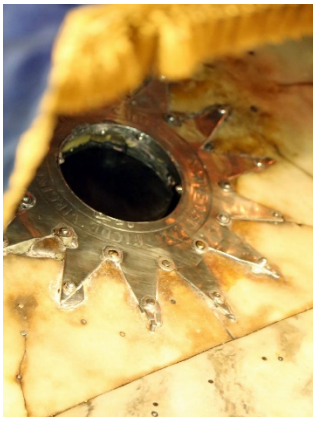
「『新約聖書』にある『マリアはベツレヘムの馬小屋に一夜の宿を借り、早朝イエスを産み布に包んで飼葉桶に寝かせた』と言われている場所です。現在はその場所に星の装飾があります」

「なるほど。ここがあのイエス・キリスト生誕の場所なのか」

ベツレヘムを訪れる観光客全員がこの場所を目指してくるため、2～3時間待ちになるのもざらだそうだ。商店すら空いていない早い時間だったため、ほぼ待ち時間なしだったのはラッキーである。

地下に降りていくと、そこには十四芒星で示されている場所があった。近くには“HIC DE VIRGINE MARIA JESUS CHRISTUS NATUS EST”（ラテン語でここでイエス・キリストは聖母マリアから生まれた）とある。このシンボルがなぜ星なのかというと、イエス生誕の際に、東方三博士を導いた星を模したものらしい。

そしてここの銀の星は 1717 年にフランスから献上されたものとのこと。この時期のフランスというと、太陽王ルイ 14 世が死去し、ブルボン王朝の絶対王政に陰りが見えてきた時。この時なぜパレスチナに？というのも調べていけば面白そうだが、どこにもそんな解説もなかった。。


ここがイエス・キリスト生誕の地

「ここが・・・イエスキリストの生誕の地なのか・・・」

周りのインド人グループは歓喜の声を上げ、写真を撮りまくっている。自分ももちろん写真を撮りまくっていたのだが、その一方で、少し冷ややかな思いを持っているイヤな自分もいた。

というのも、ある本の記述を思い出していたからである。

「イエスの生誕地は聖書によると間違いなくベツレヘムだが、考古学的に言えば、多分違うと思う」

「ベツレヘム周辺には、イエスが生まれた時の実際の逸話を持った場所がなさすぎる」

「考古学的には、両親が住んでいたナザレ周辺で生まれ、育ったと考えるのが妥当である」と。

もちろん 2 千年前の話なので、史実と文献が違うことも十分に理解できる。しかしこれだけ「キリスト生誕の地」と世界に周知し、東方三博士のエピソードなどサイドストーリーも十分にあり、実際に立派な教会や生まれた場所まであるのに、「考古学的に見れば異なる場所が生誕地」となると、キリストに関わるこれらすべてが否定されてしまう気がしたからである。イエスの起こした奇跡はもちろん、様々な逸話も、どこまでが想像で、どこまでが真実なのか、急に疑問を持ってしまった。すると人々の信仰や築き上げてきたものを否定してしまっているようで、すごく複雑な感情が湧いてくる。例えれば、「サンタクロースは架空の人物」と初めて知らされた子どものように、「薄々感じていたけど知りたくなかった」「知らなくてもいいことってあるね」という感情だろうか？

同じ敷地内にはフランシスコ会が管理する聖カテリナ教会（St. Catherine's Church）もある。中庭にはヘブライ語で書かれていた聖書を初めてラテン語に翻訳した聖書学者ヒエロニムスの像がある。彼の翻訳した「ブルガタ版ラテン語聖書」はカトリックの公認聖書で、その後のカトリック普及に重要な役割を果たしたとされる。

「翻訳したことがそんなにすごいのか？」と思うが、特に宗教界においては大事件。例えば「今までラテン語版しかなかった聖書をドイツ語に翻訳し、誰でも読めるようにしたこと」がルターの宗教改革の原動力になったように、大きな変革のきっかけになるほどの大事業なのだろう。

聖書学者ヒエロニムスの像のある中庭

ふと気が付くと、雨はすっかり上がっていた。太陽の光がまぶしい。植物の緑に鳥のさえずりも聞こえ、平和そのものの風景に感じた。光を浴びた聖誕教会の建物はとても輝いていたが、しかしこの地にある以上、ここも悲惨な歴史も刻んできた。近いところで言えば、2002 年にはここにパレスチナ・ゲリラが立てこもり、イスラエル軍に包囲された。1993 年のオスロ合意のあと、しばらくの平和を謳歌したあとの衝突の一つであるが、この時の包囲は約 1 か月続きゲリラを匿った聖職者たちにも、水や食糧の必要物資の供給が十分でなく、大きな国際問題にもなった。

「パチパチ・・」

中庭でヒエロニムスの像を眺めていると急に拍手が聞こえた。見るとさっきとは別のグループが、やはり若いガイドに拍手をしていた。教会を解説してくれたガイドとの別れに、感謝のあいさつをしているのだろう。

「パレスチナには他にも、見てほしい場所がたくさんあります」「また、ぜひ来てください」

聞き耳を立てていると、彼は去り際にもそんなことを情熱的に語っていた。

「よほど伝えたいことがあるんだろうな・・」と感じさせる熱量がほとばしる語りだった。

【7】ミルク・グロット教会

ミルクグロッド教会の入り口

聖誕教会から歩いて5分の場所にミルク・グロット教会（Chapel of the Milk Grotto)があった。ここは、

「イエスを生んだばかりの母マリアがこの洞窟にこもっていると、天使より父ヨセフに「子どもをエジプトに逃がさなくてはならない」とお告げがあった。」「母マリアがあわただしくその準備をしていると、床にいくつかの母乳がこぼれた・すると赤茶色だった地面は白と乳白色のものに変わった。それ以来、この場所にある白い岩石を「聖遺物」として各地であがめるようになった・・・」との伝承がある教会である。

聖母マリアが隠れたという洞窟への階段

前述したように、イエスキリストが生まれた時代、この場所の支配者はヘロデ王。猜疑心が強い彼は「ユダヤの王が生まれた」との噂を聞きつけ、ベツレヘムとその周辺で生まれた2歳以下の男児を殺すように命令したが、その時、聖母マリアがエジプト脱出の準備を行った洞窟、というのがこの場所なのだそうだ。脱出の準備の際、こぼれた母乳に触れた地面が白くなったのでこの名があるという。

静かな･･･静かな･･･祈りの空間でした

入場無料とのことなので、挨拶をしてそっと足を踏み入れると、多くの人が静寂の中に祈りを込めている地下空間が広がっていた。3つあるという地下空間にはそれぞれの場所で静かに祈りを込めている人々がいた。現在、ここは不妊に悩む夫婦の祈りの場にもなっているとのことで、他とは異なり「母」や「子」を第一に考える人々の聖地になっているようだった。

「それにしても・・・」

最高の歴史的価値を持つ聖誕教会やミルク・グロットですら、入場料無料。うれしいことはうれしいが、せめてここでお金を取ればいいのに、と思う。

世界の有名観光地ではメインとなる観光地の入場料を高くし財政を潤すというのは世界の基本である。例えば、ペルーのマチュピチュに20年近く前に初めて行ったときは確か千円程だった入場料が、その10年後に再訪したら八千円ほどになっていて驚愕した記憶がある。エジプトの王家の谷の見学でもツタンカーメン王の墓の見学料だけが別額になるなど、こういった例は枚挙に暇がない。まして財政的に非常に厳しいパレスチナ。ここを訪れる観光客は全てを承知で訪れているはずであり、いくら高くても納得すると思うのだが、あえて「無料」にしているのには何か強い意志があることを感じる。途上国では写真撮影すら有料のところもあるが、それも無料で、撮影禁止の場所がなく撮り放題である。そして教会のガイドのお兄さんのように情熱的なガイドも多数いる。

・・・いろいろ考えると、少しの料金収入を得るよりも、「自分たちの国を知ってほしい」「わかってほしい」という強いがあると感じる。時間と費用をかけてここを訪れてくれた人たちに、「自分たちの存在を知ってほしい」、「世界に発信してほしい」、という強い意志を感じた。そう考えると街中で言葉を交わした人が、親切で優しく接してくれている理由がわかるような気がした。

まあ、あのタクシードライバー達は例外、ということだろうか。

美しい石造りの街　ベツレヘム

第16章　アラブの世界、ベツレヘム

بيت لحم الوطن العربي

Palestine Bethlehem　فلسطين بيت لحم　パレスチナ　ベツレヘム

第16章　アラブの世界、ベツレヘム

【1】メンジャー広場

巨大なミナレットが美しいオマール・モスク。礼拝の時を告げるアサーンが流れていた

ベツレヘムの真ん中はメンジャー広場（Manger Square）。名実ともに街の中心で、周辺都市へ行く際もここが起点になっているが、実際は単なる駐車場として使われていた。

広場正面にはイスラームのモスク（礼拝堂）の大きなミナレット（尖塔）がそびえる。1860 年建設のオマールモスク（Omar bin al khattab Mosque .مسجد عمر بن الخطاب）である。オマールとはウマル、つまり最初の世襲制イスラーム王朝ウマイヤ朝のことだろう。そしてウマイヤ・モスクと言えば、隣国シリアの首都ダマスクス、そしてアレッポにも同名のものがある。ダマスクスのものは世界最古の美しいモスクだが、アレッポのウマイヤ・モスクは長引く内戦により大きく損壊してしまったと聞いた。シリアなんて遠い話と思っていたが、ここからシリア国境まで 300km 弱。シリア内戦、イスラム国・・・。それらがすぐそこにあると思うだけで胸騒ぎを感じる。

それにしても、ここにはキリスト生誕地の隣にイスラーム最古の王朝名のモスクがあることになる。

「イスラムとキリスト教・・・・きっと昔から仲が悪かったんだろうな・・・」

とつい思ってしまうのだが、全く違うらしい。なんとこのモスクの土地は、エルサレムのギリシャ正教会から寄付されたものだそうだ。しかも電球が登場する以前は、イスラム教徒とキリスト教徒が共にオリーブオイルを提供し、この広場周辺を照らしていたとのこと。つまり両者は非常に協力的な関係だった。

奥がオマールモスク。中心部がメンジャー広場。右が平和センター

だからこのウマイヤ・モスクの存在自体が両者の友好の証とも言えることになる。

「イスラームとキリスト教って最初から対立していたわけではないんだ」

「お互いを尊重し、仲良くやっていたんだ・・・」

そんな思いがこみ上げてくる。

【2】平和センター Bethlehem Peace Center

ベツレヘム平和センターの堂々たる建物

メンジャー広場には別の建物もあった。パレスチナ政府が 1999 年に設置した文化施設、ピースセンターである。「子どもや地域、旅行者のための図書館や文化施設」とのことなので入ってみることにした。

ベツレヘム平和センター入り口

「こんにちは・・・」

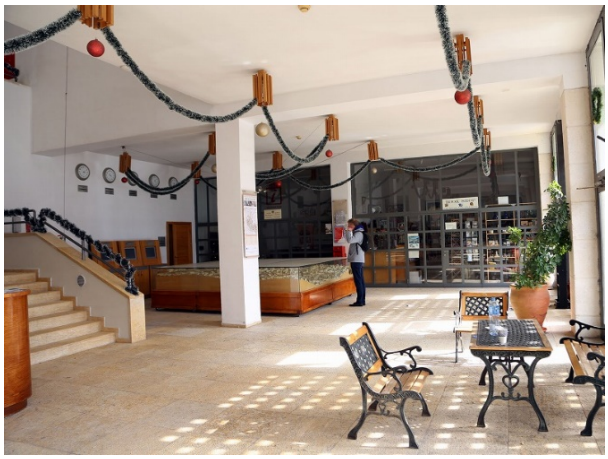
恐る恐る開けて入ってみたが、入場料をとるわけでもなく、フロアにはだれ

もいない。外観は立派だが内部は質素で、日本でいえば地方のさびれた公民館のような空虚な大きな室内が広がっていた。ベツレヘム街を表した巨大な模型もあったが、解説もなく、いつのどの様子を表現したのかもわからない。

奥には「ツーリストインフォメーション」があった。ネットが発達してしまった今は相対的に地位が低下してしまったが、かつて個人旅行者にとって最強のオアシスで、様々な場所への行き方を教えてくれたり、街の地図を無料でくれたりするだけでなく、宿の紹介や予約までしてくれる夢の場所であった。

「ここでも、きっと、地図ぐらいはくれるだろう・・」

と思ったがドアには鍵がかかり、中にはだれもいなかった。



ベツレヘム平和センターの何もない室内。奥が観光案内所。その手前にある巨大な四角い箱がベツレヘムの模型。左の壁には国際時計が5つ

「何も・・・無いなぁ・・・」

開店休業状態の平和センター。そこにあのもので唯一心ひかれたものは壁面の時計の文字である。そこには一流ホテルのフロントのような、世界各地の地名つきの５個の時計が掲げられていた。都市名は「ニューヨーク」、「ストックホルム」、「ベツレヘム」、「モスクワ」、そして･･･「TOKYO」。国交もないのに、日本を挙げてくれるとは驚きである。そういえば、パレスチナ人は親日の人も多いという。それは先述のテルアビブ空港乱射事件の犯人「岡本公三」が日本人だから、だそうだ。イスラエルの空港で 26 名の罪のない命を奪ったテロリストは、パレスチナの窮地を世界に示してくれた“英雄”なんだそうだ。実際、あの事件後、パレスチナ人では「オカモト」や「コウゾー」と我が子に名づける親が多数いたのだという。同じ事件が、見方・立場が変わると全く違って見える、という例なのかもしれない。

と、東京だ！

【3】聖母マリアのシリア正教会

街の中心部からバス停方面に向けゆっくり歩いていた。雨はすっかり上がり、街角には人が繰り出し、本来の賑わいを取り戻している。

空に目をやると美しい青空が広がっていた。

まだ濡れているが、雨上がりの艶やかな、古（いにしえ）の石の街と青空はうっとりするほど美しい。

雨上がりの美しい石造りの街。武力紛争さえなければ、こんなにきれいで素敵な街なのに･･･

「ああ、キレイだ・・・・」

ふと足を止め、そう呟く。

路傍にいたおばあさんと目が合う。

同じように青空を見つめていた。

「サラーム」（سلام:こんにちは）

というと笑顔でなにか返事を返してくれた。

紛争だの抗争だのと聞いていると忘れてしまうが、どこであろうとも、そこに住んでいる人々は、私たちと同じ青空の下、当たり前の生活を粛々と過ごしている。

心の拠り所にしている神は違うかもしれないが、美しいと感じるもの、心が落ち着くものは変わらない、と思う。

先には美しい鐘楼もある素敵な雰囲気の教会があった。「Virgin Mary's church for the Syrian Orthodox」つまり「聖母マリアのシリア正教会」であろう。Orthodox Church(オーソドックスチャーチ)、つまり正教会とは、キリスト教がカトリックとプロテスタント分離の前（11 世紀ごろ）に、分裂した宗派。先述したがここでも触れるともともとは古代ローマ帝国が弱体化し東西に分裂した時、新規信者獲得のために偶像崇拝を導入したかった西ローマ帝国側（これがカトリックになる）と、ユダヤ教の流れから偶像崇拝禁止を守りたい東ローマ帝国（これが正教会になる）との対立から生まれているものである。両者の違いはいろいろあるが、細かな例を言えば十字の切り方も違う。カトリックやプロテスタントでは、手を額から胸におろし、そのあと左肩から右肩に手を動かして十字にするが、正教会では右肩から左肩に手を動かす。司祭は両方とも左から右へ手を動かすのだが、カトリックやプロテスタントの信徒は司祭と同じにするのに対して、正教会では向かい合わせで同じ方向になるように手を動かす。

カトリックでもプロテスタントでもない祭壇

いろいろな部屋を案内していただいた

「へぇー。第一次世界大戦直後に作られたシリアの正教会かぁ。」

そう思いながら、扉から中をのぞいていたら、中からおじさんが「おいで！」と手招きしたのでお邪魔した。ここの「シリア」というのは巡礼者、難民としてパレスチナに移住し始めたシリア人が、ここアルフライザ地区に住み始めたからだという。ただしシリア人専用の教会ではなく、トルコ南部とイラク北部も含むクリスチャン用の教会らしい。今、内戦で揺れるシリアはイスラームを信じるアラブの国、という印象が強いが、人口の 1 割がキリスト教徒なのだという。トルコにもイラクにもキリスト教徒はいるのでその人たち向けということだろうか。内部はやはり他とは違う装飾に満ちていた。正教会の特徴の一つがイコンと呼ばれる平面の聖像で要するに立体ではない聖人の絵画なのだが、それが壁面各所に描かれていた（ちなみにイコンとはギリシア語で ε ι κ ώ ν だが英語では Icon、そうデジタル業界おなじみの“アイコン”になる）。おじさんは他にもいろいろ説明してくれたが、アラビア語のため全然わからない。ただし「ぜひお前のそのカメラで撮っていけ」と示されたのが聖書だった。分厚く重厚な、宝石付きの華麗な本を少し緊張しながら撮っているとページを開いてこちらも撮っていけという仕草をした。しかし内容が全くわからない。というよりも何の言語なのかすらわからない。

“教会の宝”だと思われる豪華絢爛な聖書

「古い聖書といえばカトリックならラテン語だが、正教会ならギリシャ語？」と思ったが、ギリシャ語ではない。しかし丁寧な手書きで書かれた聖書は、何とも言えない威厳を放っていた。　それにしても静かで、穏やかな空間である。人々が大切にしてきた祈りの場所は、やはりこういった静寂の中にあるのだろう。

何語で書いてあるかすらわからず･･･

帰り際に、多めにドネーション（寄付）を献金箱に入れていると、おじさんが「ジャパニーズ？」と聞いてきた。「はい」と答えつつ、なぜわかったのか不思議だった。東洋人と見るとチャイニーズ？と言われるが多くなっているからである。「どうして、そう思ったんですか？」と聞いてみたかったが、そんな語学力はなく、笑顔で礼だけ言って外に出た。

起伏が激しいベツレヘムの街並み

【4】街の風景

ベツレヘムの旧市街は様々な建物が立ち並んでいるが、本来は砂漠の中の街。一歩郊外に出れば荒涼とした丘が続いている。開けた所から見ると丁度、虹がかかっていた。緑は圧倒的に少ないが、大変美しい街である。

きっとこの風景をイエス・キリストゆかりの多くの人が愛でていったと思う。政治的衝突さえなければ、歴史や文化あふれる、穏やかで住みやすい土地なのだろう。

消えかかっている UNRWA の看板

バス停のあったヘブロン大通りに向かって歩いていたら、薄汚れた青い看板が出ている変哲もない建物があった。しかし、その看板をよく見てびっくり。「UNRWA」である。UNRWA とは United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East（国連パレスチナ難民救済事業機関）、つまりパレスチナ難民を救う国連機関である。この UNRWA の近頃のトピックとしてはパレスチナ問題で常にイスラエル寄りの政策をとるアメリカのトランプ政権が 2017 年から UNRWA への拠出金を減らしていき、2019 年には完全に資金停止をしたことだろうか。UNRWA 自体も内部汚職とかあったらしいのだが、アメリカの決定でかなりの難民が困窮したとの話題を何かで読んだ。「国連の機関」と聞くと何やら立派な施設をイメージしてしまうが、ここは窓もドアも閉じていて、人気もない。閉鎖されているのだろうか。これもパレスチナ国際援助の“素”の姿の一つかもしれない。

パレスチナの国際援助機関の最前線の一つ、の現在の様子

さらに歩みを進めていくと大通りに戻った。朝は大雨で風景を見る余裕はなかったが、晴天となった今は艶やかな街の表情が美しい。

大きな交差点に派手な巨大広告があった。携帯電話会社の「3G」の宣伝である。電子系の話はつい専門的に書きたくなってしまい恐縮だが、移動通信の「G」とは generation つまり「世代」を表す。よって「3G」通信方式と言えば、現行の4Gや5Gの二世代前の規格。日本では 2001 年から始まった第3世代の通信方式で、その前の2G時代と比べ、「符号分割多元接続（Code Division Multiple Access）/CDMA」やソフトハンドオーバー方式の基地局切り替えなどにより高音質で切れにくい通話を実現した、当時としては画期的な規格であった。具体的にはドコモの「FOMA」、au の「CDMA 1X」「CDMA1X WIN」など、ショートメールが打てただけのガラケーから、i-mode や写メができる「いろいろできるガラケー」の世代になる。移動通信の世代(Generation)の更新は、個人端末だけでなく、通信インフラそのものの刷新も要求する。だから携帯料金が高いのは、インフラ施設

刷新も踏まえてものなのだが、その更新には莫大な資金がかかるので途上国では古いものを使わざるを得ない。だからここでは 20 年前のシステムが堂々と宣伝されているわけだが、こんな政情不安な国でも少しずつ通信インフラが更新されつつあることを感じる。

バンクシー作品を掲げた屋台

さらに歩いていくとバンクシーの代表作「花束を投げる少年」を描いた屋台があった。バンクシーとは世界的に有名な覆面アーティストで芸術作品を生むだけでなく社会に対してあらゆるメッセージを発しており社会政治家、映画監督とも評される謎の人物である。巨大な力を持つ政府や、横暴な大企業に対し強烈な皮肉を浴びさせる作品が多く、パレスチナ人を迫害するイスラエルなどはその最たる攻撃対象である。ベツレヘムは彼と非常にゆかりが深い場所で、この「花束を投げる少年」はイスラエルに対し抵抗するパレスチナ人が石や火炎瓶の代わりに花束を投げる図になっており、この本物もここから数キロ離れたガソリンスタンドの壁面にある。彼はこの近くで「世界一景観が悪いホテル」という分離壁を真ん前にした“眺望ゼロ”のホテルの運営も行ってもしている。この街は沢山の作品が一堂に見られる場所で、このまま離れるのは非常に惜しいが、ここでこれ以上時間を使うのも難しいと判断。今回は見送ることにした。

【5】エルサレム行のバス

エルサレムに戻ろうと、バスを降りた場所まで歩いていくと、半分壊れた赤い看板があった。例の黄色のタクシー軍団がたむろしている中を進み、「ここかな？」と看板を眺めていると、

「エルサレム行きはここよ」とおばちゃんに教えてもらった（調べてみると P の下にあるアラビア語は القدس （エルサレム）だった）。

「エルサレム行き」と書かれたバス停。そしておなじみ黄色いタクシー軍団

「よしよし、あとはここでバスを待てばいいだけだ・・」
と安堵していると
「エルサレムに行くの？」と声をかけられた。
「むむむ、来たな」と思って振り向くと、やはりタクシー運転手。
「結構です」「バスでいくからいいです」と言ったが
「バスは滅多に来ないぞ」「時間がかかるぞ」と重ねてくる。
「バスに乗りたいから結構です」と言いながら、ふと興味を持って、
「そもそも、エルサレムまでいけるの？」「国境を越えられるの？」と聞いてみたら
ちょっと小声で「・・・ボーダーまでだ」という。
「じゃあそこから先が困るじゃないか」というと
「大丈夫だ。そこにもタクシーがいる」とのこと。

その後も
「いいから、とにかく乗れ」
「いやだ、乗らない」と押し問答は続いたが、バスが見えた瞬間、彼はすっと離れていった。
見込みのない客を相手にするより、バスから降りて来る客を探しに出かけるのだろう。
「やれやれ・・」とバスに乗り、座席に座りほっと一息つくと、ある異変に気付いた。

「・・・何か臭うな」

何か非常に嫌な臭いがした。言うなれば人の排せつ物のような臭い・・・。
そして次の瞬間、その原因と結果を悟り、衝撃が走った。
臭いの元は足元。しかもそれは、ほかでもない自分の靴、自分の足からだった！

朝、大雨の中、汚れた水たまりにどっぷりとつけた両足。その靴と靴下から臭く強烈なにおいが出ていたのである！　歩いているときは気が付かなかったのだが、汚れた水を大量に含んだ靴と靴下は、そこに汗と汚れを加え雑菌の繁殖に最適な温度を半日も与え続けられ、最高の細菌培養地になっていたのだ。

「や、ヤバイ・・・恥ずかしい・・・・」。
穴があったら即座に入りたいほどの羞恥心を感じたが、もうどうしようもない。
幸い、バスは混んでいない。なるべく他人に迷惑をかけないように一番後ろの一番隅の席に移動し、
「だれも隣に来ませんように・・・」と祈った。

ちなみに、洗濯ものの生乾きや足の嫌な臭いの原因が「細菌」であることはわかっていたが、長年、直接の物質は不明だったというが、最近相次いでそれが特定された。生乾きの悪臭は「モラクセラ菌」という常在菌が増殖する際に「4-メチル-3-ヘキセン酸」という物質を作ることが原因であるとのこと。そして「足のにおい」は皮膚にある常在菌が「イソ吉草酸アルデヒド」を作り出すことが原因で、これらの菌の排せつ物が、あのイヤ～な臭いを発するのだという。興味深いのはこれらを発見したのが日本の企業で、生乾きのモラクセラ菌は 2011 年に花王が、足のにおいのイソ吉草酸アルデヒドは 2015 年にロート製薬がそれぞれ発見した。こんなところに日本人の清潔意識・臭いへのこだわりを感じる。

満員になってしまったバスの車内。みなさんごめんなさい。

しかし、そんな、においに敏感なはずの日本人なのに、自分が悪臭の発生源である事実は、恥ずかしくてたまらない。

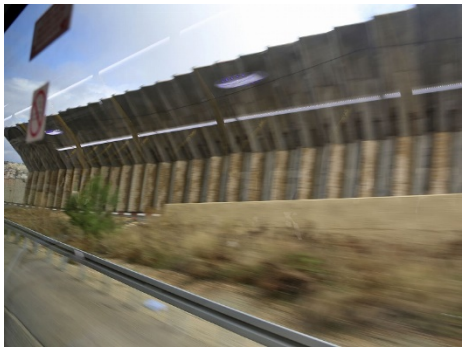
バスはまだ発車しない。そこにどんどんと乗客が乗り込んでくる。そしてついに自分の前も隣も誰かが座ってしまった。そしてほぼ満員となったバスは、そこでようやく動き出した。

「・・・す、すみません・・・」
自分で自分の悪臭を感じるたびにそんな思いを抱いていた。揺れ動くバスの車内。強烈な悪臭は絶対に周囲の人も感じているはずだが、だれも知らないふりをしてくれる。単に無視しているだけではあるが、そんな雰囲気が今の自分にはうれしかった。

【6】分離壁

バスはゆっくりと起伏の激しい岩の街を抜けていく。往路は土砂降りだったため見えなかった景色が見えるのが嬉しい。最初は商店街や住宅地を進んでいたが、すぐに荒涼とした黄色い砂色が目立つようになった。

そんな中、異様な大きさで見えてきたのは“巨大な壁“。パレスチナ人が入ってこないようにとイスラエル軍が勝手に作った”分離壁“である。まるで要塞の城壁だが、イスラエルに言わせると「フェンス」とのことらしい。


イスラエルが「フェンス」と呼ぶ巨大で威圧的な“分離壁”

正確にはイスラエル政府の言葉だと 「分けるためのフェンス： separation fence」「分けるための壁：separation wall」「 安全のためのフェンス：security fence」だが、パレスチナ人に言わせると「人種差別の壁 racial segregation」「アパルトヘイトの壁 apartheid wall」。確かにこれが分断したのは土地だけではなく、パレスチナ人の行き来も、パレスチナ人の農地も、そして文化も民族もみんなである。噂には聞いていたが総延長 500km 以上、高さ約 7 m、有刺鉄線・電気フェンス、警備システム完備の多重構造壁は、まるで”進撃の巨人”の壁のように、想像以上に大きく厚くそして威圧的だった。しかもこの壁は全て停戦暫定合意ラインよりも、パレスチナ側に入り込んで設置されているとのこと。

こんなあまりにもわがままなイスラエルの行為に、国際連合総会で非難決議(2003 年)されたり、国際司法裁判所が「国際法に反し違法である」と勧告的意見を出したり(2004 年)しているが、イスラエル政府はあくまでも自爆テロを防ぐためのもので”完全に合法“と主張。そうやっている間にも着々と壁は建設され続けている・・・。

イスラエルとパレスチナを物理的に分ける“分離壁”。この巨大な建造物が 500km 以上続くのだからエライことである。

そんな壁を見ていた時、あることをひらめいた。そして

「そ、そうか！反対だった！　イスラエルに入るのが密入国なんだ」と、思わず声に出してしまった。

自分はパレスチナという怪しく特別なエリアに秘密裏に忍び込んだ気になっていた。実際、パレスチナへ出入する人間にイスラエルは神経を尖らせており、イスラエルの空港の出入国の際パレスチナへの入国履歴がバレれば、面倒で大変なことになるとは聞いている。

しかし・・・。それはあくまでもイスラエル側から見た考え方。2000 年前からこの土地に住んでいたアラブ人にとってはイスラエルの存在がおかしいのである。ずっと前からここはアラブ人のものであり、ここのアラブ人が愛着を持って、土地を耕して、文化を育んできた場所。そこに 70 年ほど前にいきなり「ここは俺たちの土地だ」「聖書に約束の地と書いてある」と現れて、経済力と武力と超大国の威光をバックに強引に占領してしまった土地・・・。少なくともアラブ人からはこう見えるはずである。あの時、ユダヤ人の入植、つまりイスラエルの成立がなければ、ここら辺は全てパレスチナであり、全部がアラブ人のためのアラビア語の世界だった。

よって「パレスチナからイスラエルに入る方が密入国にあたる」ことになる。「反対」と言ったのはそのためで、自分もいつの間にかユダヤ人ベースの思考になっており、しかもそれに対して何の疑問を感じなかったことに、強いショックを受けた。

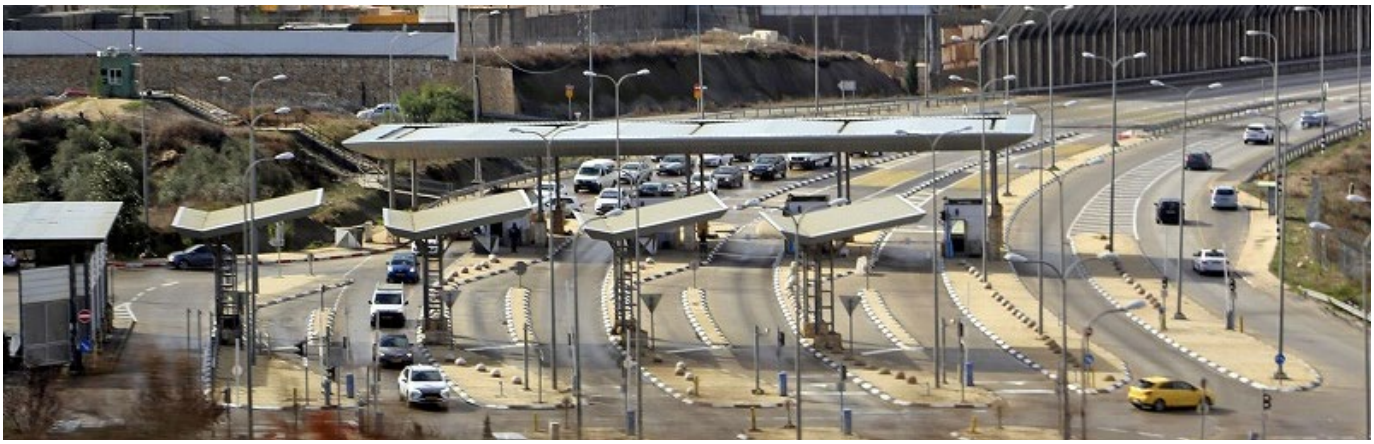
「パレスチナに密入国した気持ちになっていたけど」
「2000 年もここに住んでいたパレスチナ人の土地だと考えると、パレスチナが本来の所有者とも言える」
「それを『聖書に書いてあるから』と金と権力と武力で奪っていったイスラエルに入る方が密入国かも」。

パレスチナ人の決死の抵抗を見て、頭では理解していたはずだが、いつの間にか思考が固まり、パレスチナ人の気持ちを、全く慮れずなかったことになる。「他人の立場に立って」「他人の気持ちを思いやって」ということが、いかに難しいか、ということを改めて感じた。

突然、バスが速度を緩めた。先を見るとかなり車が詰まっている。
でも工事ではない。国境に着いたのである。

【7】検問所 Border

国境審査のための停止しているバス内はとても静かだった。これから起こることへの各自の緊張が空気のように伝播し、まるで水を打ったような静けさが支配していた。



ベツレヘムとエルサレムの間の国境検問所。右端の何もないところがイスラエルからベツレヘムに向かう道。左の車が詰まっているところがベツレヘムからイスラエルに入る道

検問所は、一見、高速道路の巨大な料金所にも見える。4 本のレーンがあるが、そのうちの 1 本しか使わず、そこに全ての車を停めている。それでも少しずつ車が進んでいるところを見ると、それなりの効率を持って検問をしているのだろう。つまり超厳重なチェックはしていない、と思えた。

「ここがボーダーだよ」「バスに、兵士が乗り込んできてチェックするからパスポートは出しておきな」
近くの席の人が、周りの旅行者に小声でアドバイスする声が聞こえてくる。自分は
「公共バスでも一度バスを降りて検査を受け、国境を歩いて超えて再度バスに乗り込む」と聞いていたので
「あれ？　バスを降りるのかな？　降りないのかな？」と思ったが、とにかく受けてみるしかない。

待つこと１０分。わがアラブバスに迷彩の軍服を着た二人のイスラエル兵が乗り込んできた。それぞれ大きな銃を携えている。しかもまだ少年兵のようなあどけなさがある若い兵士である。しかし彼らは完全に戦闘態勢の軍人だった。決してにこりとせず、乗客たちに非常に厳しい視線を投げかけ、バスの車内を一瞥した。バスの中の空気がさらに張り詰める。そして不審者はいないか全員の顔をしばらく凝視したあと、網棚、座席の下などに不審物がないか手際よく調べた。そして、おもむろに乗客一人一人を確認していく。席を立たせるわけではなく、乗客はそのままで、彼らがやってきてチェックするようである。乗客はパスポートや身分証明書を大きく突き出し、兵士の眼前に差し出していった。

兵士たちは一言も発しなかった。しかし、一人一人を写真と人物に相違がないか確実にチェックしていく。自分もパスポートと入国カードをしっかりと提示した。彼は無表情に書類と自分の顔を凝視し、そして何も言わず帰っていった。

全員をチェックすると、彼らは来た時と同じ機敏な態度でバスから飛び降り「行け！」と合図。バスはゆっくりとゲートを通過しイスラエル領内に入った。

「ふぅ・・・」
車内の緊張が一気に解ける。多分大丈夫だと思っていても、無事国境を抜けられたことに安堵の息をついた。

「それにしても・・・」

自分が気になったのは、兵士の目の鋭さだけではなかった。彼の持っていたライフルである。銃器の知識が乏しく詳しくはわからないがかれらの持つ大型の銃は、塗装がすり減るほどとてもとても使い込んであった。つまり、塗装が剥げるほど日常的に使用しているということになる。発射しているのは模擬弾や空砲かもしれない。でも、ここの兵器は飾り物ではなく、常用されていることは間違いない。そういえばイスラエルは軍需産業が盛んで銃器だけでも IWI、TAVOR、GALIL、UZI など名だたる大企業が世界中に武器を販売している。そしてそ

れらの最大の売り文句が「性能は実戦で証明済み」なのだそうだ・・・・・・・・・・。

車窓より。真ん中に見えるのがパレスチナ領内のユダヤ人入植地。そこだけ、きれいで整った最新住宅が並ぶ

「ブゥゥゥン・・」
バスのスピードがあがった。イスラエル領内に入り道路インフラが格段に良くなったためだろう。

窓外には荒涼とした土地の中に、点々とまるでレジャーランドのような最新の新興住宅街がギュッと密集しているエリアが見える。

「なるほど、あれが、『パレスチナ領内のユダヤ人入植都市』ってやつだな」

周りの牧歌的な風景に比べそのエリアだけ、整然と美しい住宅が並んでいる。イスラエル政府がオスロ合意をはじめとする和平交渉を無視して、パレスチナ領土内に侵食し続けている現場の一つである。しかも、これらを建設する作業員のほとんどは、仕事に困っているパレスチナ人だという。難民生活を強いられている中、自分たちの国を侵食してくる敵国の仕事を低賃金で行っている人々は、忸怩（じくじ）たる思いをどこにぶつけているのだろうか・・・・。

気が付くとバスはエルサレム周辺に戻ってきていた。ここは確かに 100 年前まではアラブの地だったかもしれないが、一次大戦でオスマン帝国が破れイギリス統治領となり、70 年前にイスラエルとなったこの地に、もはやアラブ世界の雰囲気はなかった。イスラエルから見ればやはりパレスチナが異質であり、「パレスチナに密入国してきた」という気持ちになってしまう。

エルサレムに到着した231番のアラブバス

「ユダヤとアラブ、イスラエルとパレスチナ。泥沼と化してしまった両者の確執はすぐには解決しそうもない。でもなんとか和を保って、協力していた時期もたくさんあった。恐らく日本はアメリカに引きずられイスラエル寄りになりやすいと思うが、だからこそアラブも大切にし、むしろ両者の仲を取り持つ国になればいいのではないか。大切なことは、世界中のみんながこの問題を共有し、叡智を出し合い、お互いを尊重し、解決の方法を探り続けるしかないのではないだろうか・・・」。

そんなことを考えながらアラブバスを降りようとすると運転手のおじさんと目が合った。

「そっか、このバスも両者をつないでいる大切なものだ」
「外見はイスラエルを纏っているけど、このバス内はアラブ世界だった」と思い出し、

「シュクラン (شكرا ありがとう)」とアラビア語でいうと
無表情なおじさんは、その瞬間だけちょっとだけほほ笑んだ。

エルサレム　旧市街を歩く

第17章　エルサレムのキリストの足跡

עקבות המשיח בירושלים

Israel Jerusalem .ישראל ירושלים.　イスラエル　エルサレム

第17章　エルサレムのキリストの足跡

【1】歴史と緊張の旧市街はどこ？

「なんなんだ、この品ぞろえは」

「食料や香辛料ならわかる。でも衣料品や日用品も売っているなんて」

巨大な牛肉や野菜、スパイスに加え、婦人服、洗剤、電気ポット、ガスコンロ、子ども用の靴やおもちゃ・・・・。本当に様々なものが売られている細い路地を驚きながら歩いた。

ここはエルサレム（יְרוּשָׁלַיִם . القُدس . Jerusalem）旧市街。3宗教の聖地があり、オスマン帝国が築いた城壁の内側である。

中東の市場で必ず見かける香辛料屋さん

おもちゃ、日用雑貨を扱うお店

この街の特異性には何度も触れてきたが、それでも語りきれないほどの弩級の特殊事情がある。例えば1981年に世界遺産に登録されたのに周辺の不安定さから翌年には「危機遺産」に指定。しかも推薦した国はイスラエルでなくパレスチナでもなく、第三次中東戦争前までは支配力が強かったヨルダンによる申請である。

現在の都市の管轄はエルサレム西側がイスラエル、東側はパレスチナ、旧市街は国連管理地となっているが、歴史的にはユダヤ王国→ローマ帝国→ビザンツ帝国→イスラム勢力→キリスト勢力→イスラム勢力→イギリス統治→国連管理→イスラエルの実効支配・・・と目まぐるしく変わっていった。

ガスコンロ、電気ポットも売っていた

エルサレム全市の人口は約100万人。複雑に分断されているが、エリア内に広大な面積に商業地、住宅地などを有す中東有数の大都市になっている。しかし核心は「旧市街」だろう。オスマン帝国時代に築かれた城壁に囲まれたわずか1km 四方に満たない場所を巡り、数多の血が流れてきた。

旧市街地は①北東のイスラム教徒地区、②北西のキリスト教徒地区、③南東のユダヤ人地区、④南西のアルメニア人地区の4地区に分かれている。アルメニアは史上最初のキリスト国教国なので、実質的にはイスラム地区、キリスト教地区、ユダヤ人地区の3つに分けられる。

エルサレム旧市街の城壁内とは思えない、お洒落な婦人服の店

そしてそれぞれが超重要な聖地を抱えている。これらが東京ディズニーリゾートにも満たない0.9 k m^2の空間にあるということを考えると「ここには聖堂や歴史建造物しかないのでは？」と漠然と考えていた。

ところが現実は全く違っていた。市民の日常生活を支える様々な店が並んでいたのである。

【2】アラブ地区

旧市街は538年にオスマン帝国の皇帝スレイマン1世によって建造された長さ約4.5 km、高さ5 ～ 15 m、厚さ3mの城壁に囲まれている。そこに見張り塔 が43、そして城門が11ある。解放されている城門は7つあるが、アラブバスから一番近いダマスカス門（Damascus Gate.שער שכם. باب العامود）から旧市街に入った。この名はシリアのダマスカスに向かう街道がここからかにここから国道 60 号が北方へ向かっている。入り口にはライフルを抱えたイスラエル軍兵士が監視していたが、治安部隊と理解し、気にしないで中に入った。

先ほどの圧倒的な物量を誇る商店が並んでいたのは、アラブ人の住むムスリム地区（ حي مسلم מחוז מוסלמי）。食料品や生活用品を売る店が立ち並ぶ市場（スーク）となっており、各種商店が軒を連ねていた。アラブ圏のスークでよく見かける牛肉をそのまま吊るして販売している精肉店や新鮮な海産物店（エルサレムは海から 60km）、そしてお洒落な服を売る店まで並んでいた。「この白いワンピース、エルサレム旧市街で買ったのよ」なんて微笑ましいな、と思いながら歩いた。靴屋もあった。今、履いている悪臭放つ靴のことは頭の片隅を離れていないが、実際に購入するとなれば、試し履きをする必要もあろう。腐った臭いの靴下で試し履きはいくら何でも失礼だと思い、あきらめた。

堂々とした構えのダマスカス門。ここを入るとすぐイスラム人の市場街になる

中東の市場の定番、店頭に牛肉をつるしたままの精肉店

おお靴屋だ！　手前には子ども靴、奥には革靴やスニーカーが。

【3】 悲しみの道にて

ヘブライ語、アラビア語、ラテン語でのビア･ドローサの表示と、案内標識

旧市街には“世界で最も有名な道”の一つ、と言われる小路がある。ラテン語で「ヴィア・ドローサ Via Dolorosa」（悲しみの道）と称されるイエス・キリストが十字架を背負って丘の上の磔刑場まで歩いたとされるわずか 600m の道のりである。十字架の道「ヴィア・クルキス via crucis」とも呼ばれ、旧市街北東ライオン門付近を起点とし、北西の聖墳墓教会内にあるイエスの墓まで 14 か所の留（りゅう：英語では station）が紹介されている。新約聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの 4 つの福音書（Evangelium）にはここのエピソードが多数あり、非常に難解だが私なりにまとめると以下のようになる。

第 1 留　「ピラトに裁かれた場所」・・・総督ピラト官邸だった場所で現在はアラブ人の学校
第 2 留　「有罪に定められ、鞭で打たれた場所」・・・現在は「鞭打ちの修道院」「有罪判決の教会」
第 3 留　「最初に倒れた場所」・・・十字架の重さで倒れた場所で現在は「アルメニアカトリック教会」
第 4 留　「悲しむ母マリアと出会った場所」・・・現在は「苦悩の母マリア教会」
第 5 留　「キレーネ人シモンが十字架を担ぐのを助けた場所」・・・現在はくぼみのある古い石
第 6 留　「ベロニカがイエスの顔を拭いた場所」・・・壁に埋め込まれた石柱
第 7 留　「二度目に倒れた場所」かつての「裁きの門」・・・現在のコプト正教会の礼拝堂
第 8 留　「イエスがエルサレムの婦人たちに語りかけた場所」・・・ギリシア正教の聖カラランボス教会
第 9 留　「三度目に倒れた場所」・・・コプト正教の聖アンソニー教会入り口
第 10 留　「ローマ兵に衣服を剥ぎ取られた場所」・・・聖墳墓教会の外側の聖堂周辺
第 11 留　「十字架が立てられた場所」・・・かつてのゴルゴダの丘。聖墳墓教会内の右側の祭壇
第 12 留　「イエスがなくなった場所」・・・聖墳墓教会内の左側の祭壇の位置
第 13 留　「十字架の下の母マリア」・・・イエスの亡骸に聖油を塗った場所。聖墳墓教会内の塗油の石。
第 14 留　「イエスの墓」・・・聖墳墓教会の聖堂

ここは絶対に訪れてみたいと思っていた場所。2000 年前のものが現代に実物として存在しているなんてなんと不思議なことだろう。日本ならば、成立を神話と現実世界で語っている古事記の実物、といったところだろうか。第 9 留までが旧市街の路地の途中に、残りの五つが聖墳墓教会の内にある。よってとりあえず第 1 留から歩き始め聖墳墓教会に向かえばいいと考え、足を向けた。

旧総督ピラトの邸宅といわれる第1留

「あれ、どこなんだろう・・・」

実際に歩き始めて、いかに認識が適当だったのかを痛感した。

「現地にいけばカンタンにわかるだろう」と漠然と考えていたが、世界最高の文化と史跡、名跡がありすぎて何が何だかわからない。あふれる情報洪水の中をグルグルと歩き回った。街角には数か国語で書かれた案内板もあるが、基本位置が分かっていないと的確に動けなかった。でも何度も往復していると少しずつ 14 ステーションの全貌と共に、イエス・キリストが辿った道が見えてきた。

第2留　現在の「むち打ちの修道院」「有罪判決の教会」

イエス・キリストについて、再度軽く触れたい。

神への絶対的信仰と愛を説きながら信者を増やしていった彼は、ユダヤ教の指導者達に危険視され、捕らえて処刑されてしまった。彼はつかまれば有罪に、そして死刑になると承知でここに来て、最後の晩餐後に捕まった。そして忠誠を誓っていたはずの弟子は全員が逃げてしまい、彼一人で裁判を受け、辱めを受け、そして自分で刑のための十字架を背負い、刑場に向かっていった、と福音書は語る。彼は何も悪いことをしていないはずである。大工の息子のユダヤ人として、ユダヤの律法も丁寧に学ぶ賢い青年だった。しかし父の跡を継ぎ、各地を回りながら大工仕事をしていく中で、ユダヤ教の「(神に選ばれた) ユダヤ人のみが救われる」「ユダヤの律法（トーラー）はなにものにも優先する」という教えに疑問を持ち、山での修行、洗礼者ヨハネとの出会いなどを通して「神を信じているものは（ユダヤ人でなくても）救われる」「優先すべきは神への信仰であり、律法ではない」と、ユダヤ教の教えとは違う内容ことを説き始めた。これがユダヤの指導者には「自分たちに歯向かうもの」「自分たちの地位を揺るがすもの」とみなされ、「民衆を扇動した」として処刑されてしまった。

左が最初に倒れてしまった場所の第3留　右が母に会った第4留

第4留。母マリアの姿を見かけた場所。アーチ形の中にマリアの装飾もある

ビア・ドロローサの出発点の第 1 留は神殿の丘の北側になり、イエスはここで裁判を受けたと言われている。現在も金曜日の午後には、カトリック系の修道士の先導のもと多くの巡礼者や観光客がここに集まり、木製の十字架を担ぎヴィア・ドロローサを歩く、という行進が行われている。

判決を受けたあと、強烈なむち打ちにあったのが第 2 留。現在は「鞭打ちの教会」がある場所になる。

第 1 留と第 2 留でのエピソードが興味深い。現代にも禍根を残すキリスト教社会の反ユダヤ主義を助長した大きな要因、と言われているからである。

それはピラトがイエスを裁く場面である。

祭りの度に総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしていた。丁度その時、バラバという囚人もいた。ピラトは群衆に「釈放してほしいのはバラバか。それともメシアといわれるイエスか。」と尋ねた。群衆は「バラバを」と叫んだ。ピラトが「では、メシアといわれているイエスはどうしたらよいか」と言うと「十字架につけ

ろ」と言った。ピラトは「どんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群集はますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトはそれ以上言っても無駄で騒動すら起こりそうなのを見て、水を持ってこさせ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。（マタイによる福音書）

第5留　キレーネ人のシモンに十字架を背負うのを助けてもらった場所

ユダヤ人はこの記述を根拠に「メシア殺し」とキリスト教徒に責められ続けた。「イエスの死についてユダヤ人に責任はない」とカトリック教会が公式に宣言したのは、二千年後 1962 年の第 2 バチカン公会議においてである。

この“聖書の記述”はユダヤ人を迫害し、苦しめたはずだが、現在イスラエルがパレスチナに入植している根拠も“聖書の記述”である。多くの日本人にとっては身近でない聖書だが、世界史・世界情勢を考える際、必須の知識と言われるのも納得である。

第5留　倒れかけたイエスが、手をついたといわれる石

虐待を受けたイエスは、自分が磔刑になる重い十字架を自分で背負いながら、エルサレムの繁華街の群衆の中を歩いた。しかしあまりにも重い十字架に倒れこんでしまったのが第 3 留。ここにはかつてトルコ式公衆浴場の入り口があったが、18 世紀に閉鎖され 1856 年にアルメニア使徒教会が建てられた。

そしてその近くで、母マリアの姿を見たのが第 4 留。いまは 1881 年に建てられた「苦悩の母マリア教会」（Chapel of the Fainting）があり、壁面に母マリアとイエスのレリーフが刻まれている。

再び歩き始めたイエスだが、しばらく歩くと壁に手をつき再び止まってしまった。遅々として進まぬ足取りに見かねたローマ兵は、近くにいたキレーネ人のシモンという男に十字架を共に運ぶように命じる。それが第 5 留。ここにはイエスが手をついたと言われる不思議な形の石も残っている。教会ができる前はこの石が第 5 留のシンボルとされ、キリスト教徒に崇められてきたが、同時にビア・ドロローサを嫌悪するイスラム・ユダヤ教徒たちから汚物を塗りつけられてきた、との歴史も持つ。

第5留にある教会。イエスが倒れている図が掲げられている

別の考古学検証によると、本当のビア・ドロローサは現在の路面から 3m 下にあるという。ということは町全体に 3 m もの何かが堆積していることを感じ、寒気を感じてしまった。

そして、血と汗と汚れに満ちてしまったイエスの顔を見かねて拭くベロニカという女性が現れるのが第 6 留。現在は建物の壁の一部になってしまっているが、短い石柱が残っているが、それがかつての建物の一部と言われている。

そして再び倒れこんでしまったのが第 7 留、そしてまた歩き始め、周りにいる女性たちに話しかけたのが第 8 留。ここでなぜ女性が出てくるのかというと、今以上に男尊女卑が強烈に強かった当時の社会は、女性の権利に目をくれるものはいなかったが、イエスは弱きもの虐げられているものこそ尊いと説き、女性たちからも絶大な人気を博していた。よって彼の後ろには嘆き悲しむ大勢の女性がついていったとされている。イエスはこの第 8 留でこう言った。

「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことがない乳房は幸いだ』という日が来る。」～ルカによる福音書～。

第6留　エルサレムの夫人がイエスの顔を布で拭ったといわれる場所

これをある歴史書は「この 40 年後、エルサレムは異教徒に荒らされ、惨殺されることになるのを見越してこのセリフを言ったのかもしれない」と言っているが、真実はわからない。

第8留　嘆く婦人たちにイエスが言葉をかけたといわれる場所

第９留は三度目に倒れた場所と言われる。最初は聖墳墓教会の中庭といわれていたが、現在はコプト正教会のエルサレム総主教座の置かれた聖アンソニー教会の外壁を支える柱のひとつ、という説が有力である。

そして衣服をはぎ取られたという第１０留に続く・・・。

「・・・この場所でイエスは倒れたのか・・・」

ビア・ドロローサの足跡を辿っていると聖書の中のエピソードの一つ一つが色や香りを持って、目前に迫ってくる。旧市街の雑踏の活気。そして大挙して訪れる人々。ここにあるのは生き生きした“生”。でもイエスの足跡が物語っているのは全て“死”である。今のスマホやカメラを持った観光客が押しかけている景色は２千年前と全く違うはずだが、雑踏の中、この路地を絶望の中、死に向かう彼の苦悩は、強烈なメッセージとなって様々なことを問いかけてくる。生とは？死とは？罪とは？そして神とは・・？

自分なんかが考えても答えの出るはずがないことはわかるが、それでも、つい、深く深く考えながら歩いていると、ある場所に到着した。かつての「ゴルゴタの丘」。現在の聖墳墓教会である。

【4】聖墳墓教会へ

「ヨハネによる福音書」では**「ゴルゴタ（Γολγοθα）はヘブライ語で「されこうべの場所」という意味である」**と書かれているが、実際にはアラム語で「頭蓋骨」を意味する「グルガルタ」(gulgaltā`)あるいは「ゴルゴルタ」(golgolta`)が由来だという。いずれにしてもキリスト教徒にとっては最高の聖地であり、教皇が十字軍を使って 200 年間攻撃をしかけ大量殺戮をしてでも手に入れたかった場所がここである。

聖墳墓教会への入り口だ！

聖墳墓教会(Church of the Holy Sepulchre. Ναός του Παναγίου Τάφου)。ビア・ドロローサの終着地。イエス・キリストが十字架に磔にされた「ゴルゴタの丘」、そしてイエスの墓もここにあるとされている。

超弩級の歴史を誇るエルサレム旧市街の中でもここは特段のエピソードだらけである。例えば聖墳墓教会の入り口には、他の教会と同じく重厚な木製の扉があるが、そこについている「鍵」にも深い話がある。錆びた簡単な金属製の鍵だが、実は鍵を管理する権利はキリスト教徒にはない。

そこには十字軍の存在が絡んでいる。

1095 年、ローマ教皇ウルバヌス 2 世の呼びかけにより聖地奪還を目的に結成されたのが第一回十字軍。その軍勢はイスラムのファーティマ朝軍を破り、エルサレムを占拠した。1099 年のことである。当時のキリスト教徒

十字軍時代の名残、聖墳墓聖堂への鍵

はイスラム教徒を「悪魔」「邪悪な存在」と決めつけ、女性も子どもも関係なく徹底的に“虐殺”。イスラムの聖域、神殿も破壊しつくしそこに教会を建てた。

そんな十字軍占領から 88 年後、キリスト教軍を追い出し、再びイスラム勢力が奪い返した人物が、アイユーブ朝のサラーフ＝アッディーン（通称サラディン）である。彼もキリスト教徒と戦ったが、彼は不必要に人を殺めることはしなかった。むしろエルサレム占領後、捕虜となっていたキリスト教徒に金を払い自由にしてやったとの記録も残っている。そしてサラディンは、キリスト教徒にとって聖墳墓教会の存在がいかに大切かを理解し、その存続を認めた。ただし、一つだけつけた条件が**「聖墳墓教会の鍵の管理はイスラム教徒が行う」**ことだった。以来 800 年間、毎朝イスラム教徒による「鍵開けの儀式」が行われている。それは 21 世紀の今も、毎朝必ず行われているという。

「これがあの鍵か・・・」

聖墳墓教会の入り口のドアの前で、十字軍時代の生き証人となっている古い鍵を、感慨深く眺めていた。鍵は古式で簡素な構造で簡単に壊せそうなものだったが、この鍵を実力で壊すことはなく象徴的に守り続けていることに、争いを避けたいという人々の思いを感じる。

しかし、大勢の人が通り過ぎていくが、こんなものに目をくれる人はだれもいなかった。エピソードが多すぎて、それぞれ見たいものが違うのだろう。ここが忘れ去られるということは、800 年間、イスラムとキリストが直接この場所で戦闘を行っていない、という証拠でもありむしろ喜ぶべきことなのだろう。

ゴルゴタの丘への入り口

【5】ゴルゴタの丘へ

「ゴルゴタの丘」。非常に有名な名前であるが、今、その“丘”の姿を見ることはできない。そこに聖墳墓教会が建てられたからである。ここはイエス・キリストが自ら運んだ十字架に貼り付けられ、そして苦しみの中で殺され、埋葬された場所としてビア・ドロローサの最後のステーションになる。

手をひかれておばあさんもゴルゴタの丘を目指す

「・・なんとも不思議な空間だなぁ・・・」

聖墳墓教会に一歩踏み入れた瞬間、形容しがたい不思議な世界観に圧倒された。キリスト教の教会と言えば「まず巨大な身廊（空間）がありその先に祭壇があり、十字架があり・・」ということが多いがここは全く違う。まず入り口にまるでホテルのロビーのような空間があり、その左右に複数の巨大な空間が巨大な柱によって支えられているのが見える。左側の空間は、建物内に一回り小さな古い重厚な建物があり、まるで「教会の中に教会がある」状態である。奥にも何か巨大な空間がある。そして右側は壁全体が数メートル高くなっており、その一段高くなったステージのようなエリアに通じる階段に多くの人が並んでいた。

アーチには GOLGOTHA の文字が刻まれている

「おお、これがゴルゴタの丘か」

左側の階段の入り口には大理石のアーチがあり、GOLGOTHA の文字が

見えた。本当にゴルゴタの丘であることを実感し、緊張しながらすり減っている石の階段を上った。

角度は急だが、20 段ほどしかない。当時は丘だったかもしれないが、今は建物内の二階程度の高さの場所に、聖なる場所はあった。

豪華な装飾品は各宗派からの寄贈品

第11留の祭壇　奥に横たわるイエスの壁画が見える

そこにはまぶしいばかりの様々なランプ・装飾にあふれる場所。左右 2 つの祭壇があった。右側の祭壇が第 11 留、イエスが十字架に手足を打ち付けられた場所である。左側が第 12 留、十字架が立てられイエスが絶命した場所である。なぜ 2 つあるかと言えば、簡単に言えば宗派争いが絶えないのだという。長い歴史的経緯を経て多数の宗派があるキリスト教は内部での争いも多く、ここも第 11 留がカトリック、第 12 留はギリシア正教会が管理しているという。ついでながら周りにある装飾やランプなども各宗派それぞれのものが掲げてある。

イエスはこの場所で 2 名の犯罪人と同時に十字架にはりつけられたと言われる。彼を痛めつけるローマ兵と、刑罰を受けるイエスを罵る市民、そして涙を流す夫人たちなどで騒然とした状態を福音書はこう述べている。

「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」

～『ルカによる福音書』23:33～23:34～

自分を殺せと罵っている群衆すら、救おうとするイエスの姿を描いたこの場面は、イエスが神の子であり、人々を救おうとするイエスの姿を表しているものとして、キリスト教社会では最も象徴的で重要なものである。よってこのエピソードの“現場”であるこここそが、歴代ローマ教皇がどうしても取り返したかった場所になる。

イエスが処刑されて約２０００年後の今。いまだに争いが絶えないが、イスラエルに入国さえできれば、だれでもこの場所を訪れることができるだけでも幸せなのかもしれない・・。

第11留の壁画。打ち付けられるイエスの姿

そんなキリスト教徒の“聖地の中の聖地”である空間は参拝者でいっぱいだった。（以前も書いたがコロナ禍の直前のため、世界中で“密”という概念がない最後の時期だった）。

人々は真剣な表情をして、眼前の祭壇を凝視していた。動くのがやっとの年配の女性も、真剣な祈りの中にここに来られた幸せと感動を表していた。涙を流している若い男性もいた。

「自分のような中途半端な人間が観光目的で来てはいけない場所だ」

そんな敬虔なるキリスト教徒の方々の姿を見ていると、自分のいい加減さにとてつもない申し訳なさを感じた。もちろん、自分なりに最大限に神と信者を敬って、ここに立たせてもらっているつもりである。しかし、やはり大した信仰心も持たず、大型カメラをそっと出し、そのくせバシバシシャッターを切っている自分にはふさわしくない場所とも感じた。

左側の第 12 留、つまり十字架が立てられ、イエスが絶命した場所はもっと多くの人でにぎわっていた。

正教が管理する祭壇の足元には、十字架が立てられたとされるくぼみの場所を示す銀のプレートがある。両側には同時に刑に処せられた罪人の十字架を示す黒いプレートがある。

福音書によると、イエスはお昼ごろに磔にされ、絶命したのは午後３時ごろという。死の瞬間、大地震が来て、イエスの血は地を切り裂き地下まで達した。地下には人類の祖、アダムが葬られており、その骨にまで達した。人類はイエスの血をもって、アダムとイブによってもたらされた原罪から救われた・・・と説いている。

第12留の祭壇。磔刑を受けるイエスの図

「・・・でも・・・アダムとイブまで出てきてしまうと、もうついていけないかな・・・」

ゴルゴタの丘からみた聖墳墓教会入り口

敬虔なキリスト教徒ならともかく、自分のような単なる歴史好きには、イエスの絶命にいたる道程まではなんとか理解できる範疇だったが、天地創生のシーンが関わっているストーリーは咀嚼できそうもないが、それでも、十字架が立っていたという祭壇に向かい、熱心に祈りをささげる人々の姿には心打たれるものがあった。

ゴルゴタの丘の祭壇の場所を下ると、聖墳墓教会の正面入り口の空間に戻るのだが、そこには祭壇と平らな石がある。これが第 13 留。「塗油の石（Anointing Stone)」と呼ばれる、イエスの遺骸に油を塗ったとされる場所である。ここでも多くの人が感慨深く石に触れ、祈りを捧げていた。

自分もそっと触れてみた。多くの人に触られてきた表面は見た目以上に滑らかで、ガッチリと硬い石である。数千年にわたり人々に触られ続けてきた石は考えられないほど平滑だった。

第13留　みんな大切に触れていた塗油の石

【6】イエスの墓へ

ビア・ドロローサの最終ステーション、第 14 留はイエスの墓と言われている。イエス・キリストは十字架にかけられた金曜日に十字架のうえで息を引き取ったと伝えられているが、聖書によると死の３日後復活し、その後オリーブ山から昇天した、とされるので埋葬された墓があるわけではない。しかし聖墳墓教会に墓があるのは、以下のような話があるからである。

ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で…この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。

～「ルカによる福音書」23：33～23：54～

安息日とはユダヤ教において一切の労働をしてはいけない日。よって翌日が安息日ならば、葬儀も行えない。しかし、処刑された遺体をそのままにしておくこともできないと悲嘆に暮れている母マリアに「使っていない墓

があるからどうぞ」と申し出た人（ヨセフ）がいて、彼所有の墓に埋葬しておいたという。マリアたちはヨセフの墓に遺体を安置し、翌日の休息日は皆が休んだ。

そしてその翌日の明け方、マリアたちは準備しておいた香料を持って墓に行ったが、蓋となる石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても遺体が見当たらなかった。

遺体がないことに途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人が現れた。地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」

～「ルカによる福音書」23 章 50 節～24 章 7 節～

南太平洋の絶海の孤島　イースター島にて（チリ領）

ここまでが埋葬から復活までの流れである。これを書いてしまったのは、この処刑から復活までの流れが、キリスト教信仰の要だと思うからである。そしてヨーロッパの文化と歴史は少なからずこのキリスト教成立の影響を受けており、気をつけてみていると、生活のあちこちにこれが生きてくる。例えばこのイエス・キリスト教の復活を祝うのが「復活祭」イースターだが、当然ながらキリスト教徒にとっては重要な催事になっている。

南太平洋にイースター島という島があるが、これはオランダ海軍提督のヤーコプ・ロッヘフェーンが、この付近を航行していた時、ちょうど復活祭の日に島を発見したためこの名を付けたと言われている。また、欧米では復活祭の日に「卵」を復活や生命の象徴とみなし、装飾した卵を贈りあったという習慣もある。

イースターエッグが鈴なりのイースター間近のブラジルのスーパー

カトリック教徒が大部分のブラジルでは、毎年イースターの時期になると、スーパーの一番目立つ場所に、殻をチョコでつくったおもちゃ入りのイースターエッグ Ovo de Páscoa が大量に並べられる。まるで藤棚のようにきらびやかに大量に飾られるそれらに、子どもたちは目を輝かせる・・・という光景が繰り広げられる。宗教的行事の色合いは薄まっていると感じるが、キリスト復活の話題は２１世紀の今もしっかりと生きている。

もっと言えば、敬虔なキリスト教徒の有力者・権力者はこのエルサレムにおけるキリスト受難の道のりを「自分の住んでいる場所でも追体験したい」「再現したい」と考える者が多数いることに気づく。

そもそも教会の大聖堂のステンドグラスや装飾、彫刻、絵画などは、この受難の物語を表現しているものばかりだが、もっと大規模で本格的な「エルサレム」の実物大をつくってしまう支配者もいる。

実際の山や川を使ってエルサレムや、ビアドロローサを再現しそこを聖地として大切に守っている人々

ポーランド　カルヴァリア・ゼブジドフスカの聖堂群

がいる。

例えば、自分が知っていて世界遺産として指定されている場所だけでも

①ポーランド「カルヴァリア・ゼブジドフスカ」

②ブラジル「ボン・ジェズス・ド・コンゴーニャス」

③イタリア「ピエモンテとロンバルディアのサクリ・モンティ」

④エチオピア「ラリベラ岩窟教会群」　　がある。

アレイジャディーニョの彫刻が並ぶブラジル　コンゴーニャスの聖堂内部

実は大変お恥ずかしい話だが、①ポーランドと②ブラジルの場所は実際に訪問したことがある。しかし訪問当時、本当の意味を理解していなかった。「たくさん聖堂があるねぇ」「彫刻もあるねぇ」程度にしか感じていなかったのだ。しかし、エルサレムを歩いてみて、「そうか、あれらの聖堂・彫刻はここでの受難の道のりを、自分の地で追体験するために作ったんだ」と改めて理解できた。

アフリカのエチオピアは古代キリスト教の流れをくむ独自の教え（エチオピア正教）を大切に信仰しているが、1187年エルサレムがムスリムのサラディンに占領されたことを聞いた当時の支配者ラリベラ王は、自分の首都を第二のエルサレムにすることを決め、付近の地名を聖書の名前に変え聖堂も作った。ヨルダン川や 11 の不思議な石の聖堂もその時に作られたという。

それほどまでに、キリスト教徒を引き付ける受難の道の最終地点が第 14 留。聖堂の中の聖堂にみえるが、イエスの墓はそのロトンダ（円形建築物）の中央に納められている。石棺自体は切り石を組み合わせて作られた簡素なものなのだが、ビザンチン時代に大理石製のモニュメントが周囲を囲むようになっているという。ロトンダは 1808 年の火災により損傷を受けたため、1810 年にロシア皇帝アレクサンドル 1 世の資金提供を受けて修繕され、ロシア皇帝の王冠を模した天蓋が設けられている。

イエスの墓自体は大変小さい。そこへの入場のため長時間並んでいる長蛇の列があった。

大勢の人々並ぶ古い聖堂の姿をしみじみ眺めた。

「・・・これがイエスの墓か・・・」

プロテスタントでは「墓地があった場所は現在のダマスカス門の北側」など、真偽すら諸説あるらしいが、黙って真剣に並んでいる方々の表情は真剣である。ほとんどがキリスト教徒だと思われるが、中にはキッパを被ったユダヤ人、ブルカを被ったムスリムの女性も並んでいた。みんな神妙に、でも少し興奮気味に並んでいる。

第14ステーション、ビア･ドロローサ終着点のイエスの墓

「考古学的なことよりも『ここにイエスの墓がある』ってことが重要なんだな」

キリスト教は「信仰の宗教」と言われ、行動に重きを置くイスラムよりも心の中を大切にすると言われる。信仰心とは神を敬う純粋な心なんだと、はじめて理解できたような気がした。